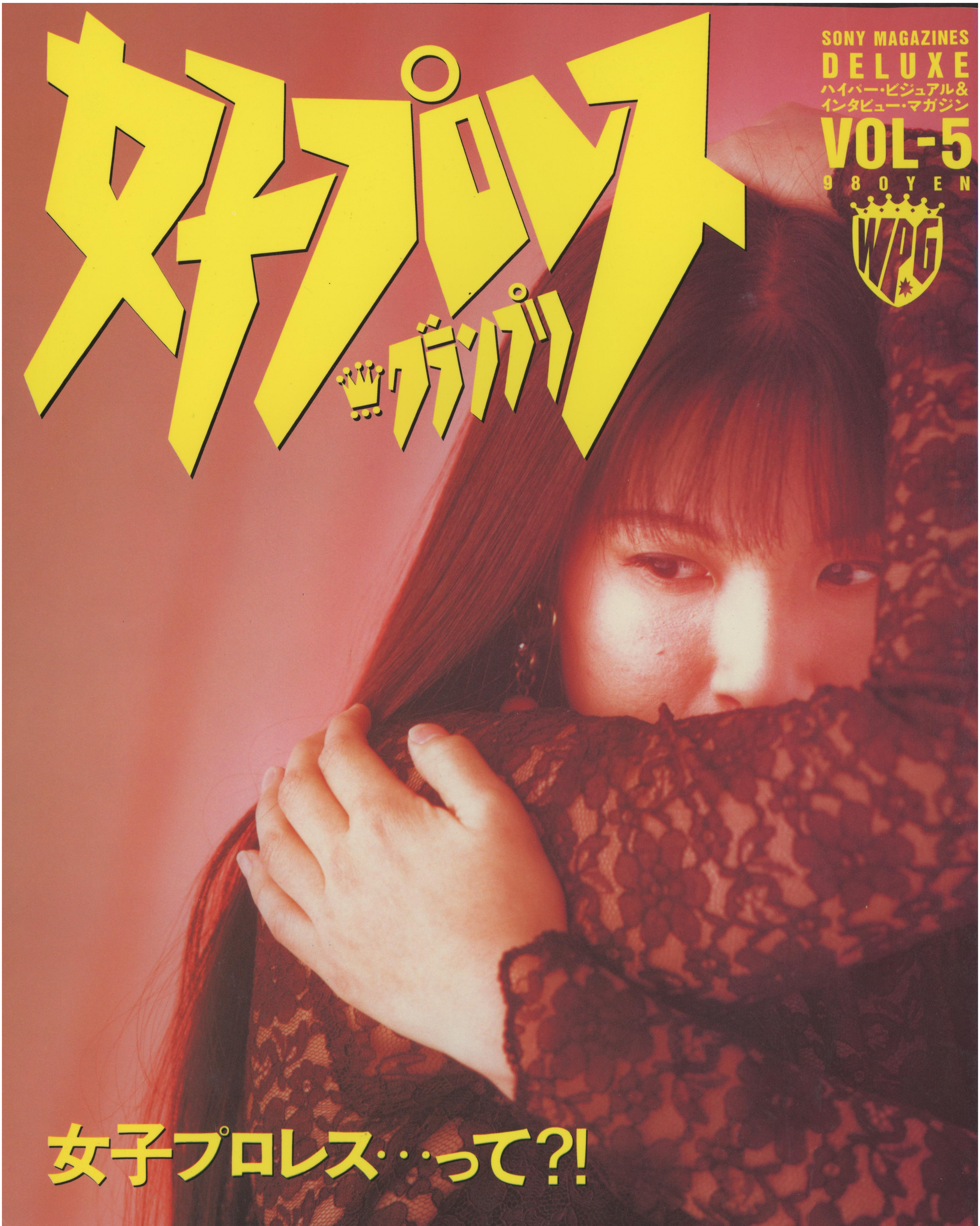

女子プロレス
グランプリ
SONY MAGAZINES
DELUXE
ハイパー・ビジュアル&
インタビュー・マガジン
VOL-5
980YEN
WPG
女子プロレス・・・って?!

大塚ベバレジ／大塚製薬

クイズに答えて「ジャワティ共和国キャンプ」にご招待

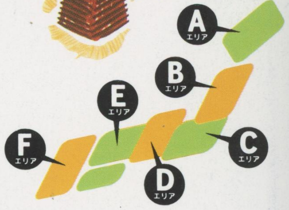
期間：3/15▸5/31

楽しいゲストもやって来る!

とびっきりの体験が待っている、
1泊2日の夏のキャンプに
4名様1組で全国6エリア50組、
合計300組1,200名様をご招待します。

「ジャワティ共和国」キャンプ開催地

開催エリア	開催地	実施日
Aアリア 北海道	石炭の歴史村ファミリーキャンプ場 北海道夕張市	7月8日(土)・9日(日)
Bエリア 北関東・東北	こっこランド那須ファミリーキャンプ場 栃木県那須郡那須町	8月26日(土)・27日(日)
Cエリア 関東・中部	ネイチャーランド　オム 山梨県南都留郡道志村	8月19日(土)・20日(日)
Dエリア 関西	マキノ高原キャンプ場 滋賀県高島郡マキノ町	8月5日(土)・6日(日)
Eエリア 中国・四国	KOA岡山中央(チロリン村) 岡山県御津郡加茂川町	8月12日(土)・13日(日)
Fエリア 九州	くろぎグリーンキャンプ場 福岡県八女郡黒木町	7月29日(土)・30日(日)



QUIZ

○にあてはまるカタカナ3文字をお答えください。

ジャワ茶葉100%、無糖、無添加。だからどんな食べ物にも合うのは、○○○ティ

ヒント　シンビーノジャワティストレートは、ジャワ茶葉100%、無糖、無添加。

●参加予定ゲスト：田中律子、奥菜　恵、三浦雄一郎、清水國明、木村東吉（参加地は未定、参加ゲストは変更になる場合があります。）■応募方法／官製ハガキに、クイズの答えと参加ご希望のエリア、参加者全員(4名分)の氏名・年齢、グループの代表者の郵便番号・住所・氏名・職業・電話番号を明記の上、ご応募ください。 ※エリアは全国どのエリアを選ばれても結構ですが、現地までの交通費はご当選者の負担となりますのでご注意ください。■応募締切／1995年5月31日(水)必着 ■応募先／〒119-77 東京都中央区中央郵便局局留「ジャワティ共和国キャンプご招待」係 ■当選発表／厳正な抽選の上、ご当選者には直接ご連絡いたします。

※ご招待の内容に含まれるもの：キャンプ場施設使用料、キャンプ用品使用料、食費、キャンプ場内でのアトラクションに関する費用。ご招待の内容に含まれないもの：現地までの往復の交通費。 ※ご参加は、ご家族、お友達など4人のグループ参加のみとさせていただきます。個人での参加はできませんのでご了承ください。 ※プログラムの内容上、参加者は3歳以上の方に限らせていただきます。※中学生以下の方のご参加には、18歳以上の保護者の同伴が必要です。※キャンプ会場での実施イベント内容は、会場の都合により異なります。また気象条件によっては、中止する場合があります。

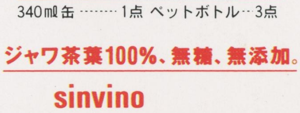
お問い合わせ先：「ジャワティ共和国」キャンペーン事務局
☎03-3219-6961(3/1～6/30)

点数を集めて「ジャワティ共和国グッズ」プレゼント

期間：3/15▸6/10

ジャワティ共和国だけの、とっておきオリジナルグッズが合計13,000名様に当たります。

対象商品(ジャワティ1500mℓペットボトル、340mℓ缶)についている、応募マーク6点分を集めてご応募ください。
詳しくは店頭のポスター、応募ハガキ、商品についている告知等をご覧ください。



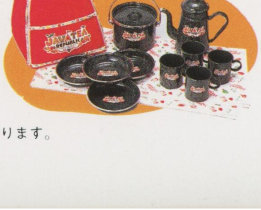
340mℓ缶………1点　ペットボトル…3点

Aコース

シエスタハンモック
1,500名様

Bコース

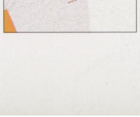
アウトドア
テーブルウェア
1,500名様



Wチャンス

オリジナルTシャツ
10,000名様

A・Bコースにもれた方の中から抽選でプレゼント。



※賞品のデザイン等は変更になる場合があります。

ジャワ茶葉100%、無糖、無添加。

sinvino
ジャワティ
ストレート

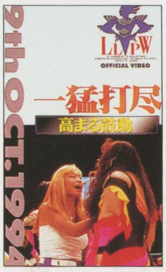
sinvino JAVA TEA is an amber colored, refreshing table drink made of good and fresh JAVA TEA leaves.

LLPWオフィシャルビデオシリーズ

LLPW
LADIES' LEGEND PROFESSIONAL WRESTLING SINCE 1992

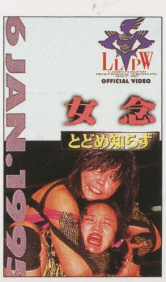
OFFICIAL VIDEO

NOW ON SALE
神取と立野が11.20ドーム決戦に
向け火花を散らす!!
戦国絵巻
～この世はすべて下剋上～
■'94.9.23 後楽園ホールにて
90分¥4,980(税込) ■PCVE-10253 VHS・カラー



NOW ON SALE
女子プロ初の6人タッグ総当りリーグ戦で
死闘が繰り広げられる!!
一猛打尽
～高まる鼓動～
■'94.10.9 後楽園ホールにて
90分¥4,980(税込) ■PCVE-10266 VHS・カラー

NOW ON SALE
ドーム北斗戦に燃えるイーグルが大暴れ!
そのイーグルに紅＆長嶋が再挑戦!!
炎の謝肉祭
～さめやらぬ情熱～
■'94.11.9 後楽園ホールにて
90分¥4,980(税込) ■PCVE-10271 VHS・カラー



NOW ON SALE
若手、ベテラン入り乱れての壮絶初詣バトル!
大向の成長ぶりも必見!
女念～とどめ知らず～
■'95.1.6 後楽園ホールにて
90分¥4,980(税込) ■PCVE-10279 VHS・カラー

●各巻観戦クーポン券付き!

PONY CANYON INC. ■お買い求めは、レコード店・デパート・ビデオ店・書店などで。お近くでお買い求めになれない場合は、ポニーキャニオンショッピングクラブ 0120-111-326へ。お問い合わせ 03(3555)6671

volume
5
女子プロレス
グランプリ
W.P.G
くじけるな!!

"性"を孕んだプロレス。
豊田真奈美 14

"女子プロレス"とはGAEA JAPANである。
長与千種 22

プロレス巧者、女子プロレスを語る。
ハーレー斉藤 25

悩むプロレス。
長谷川咲恵 27

山田敏代 52
キューティー鈴木 57
KAORU 107
矢樹広弓 32
大向美智子 37

LIVE AKTION 46
ガンタツわいど 72
府川由美 42
チャパリータASARI 44
新人さんいらっしゃ〜い♡ 65

田村欣子
渡辺美佐恵
高橋洋子
青野敬子
市来貴代子
新谷朋江
本谷香名子
宮口知子
久住智子
天野理恵子
宮崎有妃
小林智美
倉垣靖子

雷神隊 112

ジャガー横田
バイソン木村
ライオネス飛鳥

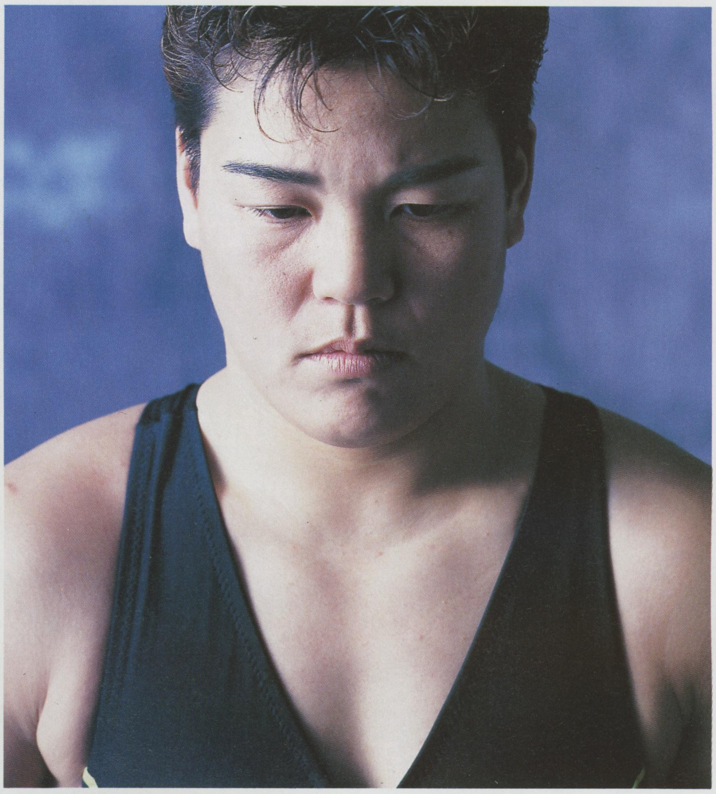
外山寿美代 62
レオ北村 63
石倉由加利 64
紅夜叉&長嶋美智子 75
キャンディー奥津 80
堀田祐美子 84
ダイナマイト関西 88
アジャ・コング 92

プレポラ・グランプリ 98
女子プロレスグランプリ出張所 100
プレゼント&後記 122

contents

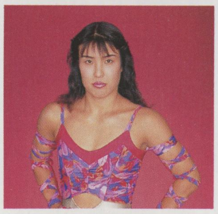
COVER
Art Direction Jun'ichi Someya
Photography Kazuhiro Kitaoka
Styling Chisato Kamiya
Hair&Make-up Akihiko Yasumura
Model Manami Toyota

"女子"プロレス…って!? 6

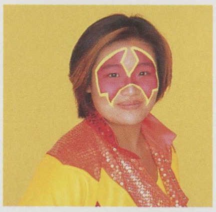


"性"を超えたプロレス。
神取忍 8

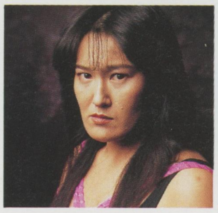
「邪道」での成功。
工藤めぐみ 20



プロレス巧者、女子プロレスを語る。
みなみ鈴香 24



楽しいプロレス。
井上京子 26



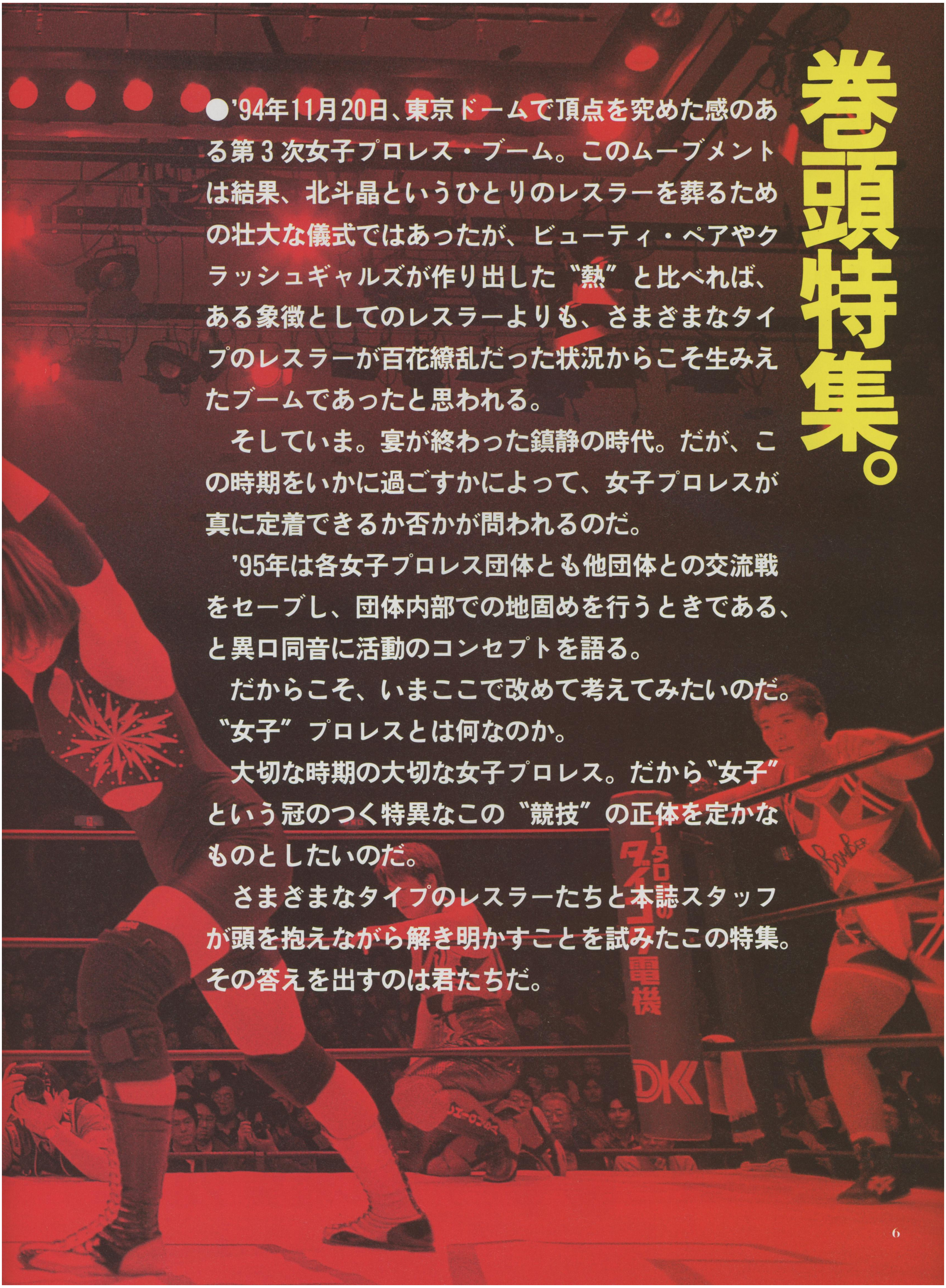
重鎮、かく語りき。
デビル雅美 28

1995年（平成7年）4月20日発行
第5巻第10号通巻第133号
発行人／塚本忠夫
発行所／ソニー・マガジンズ
〒102 東京都千代田区五番町6-2
電話／03-3234-6711〈編集〉

©1995. Sony Magazines Inc. Printed in Japan.
本誌の無断複製・複写・転載を禁じます

STAFF
Art Diretion
染谷淳一〈HEAD BUTT〉
Design
染谷淳一／村井美香／中村慎吾
松藤ひろみ／竹内恵美〈HEAD BUTT〉
Edition
金井覚／安川達也／加古祥子
芳賀崇〈Klavitz〉

巻頭特集。



●'94年11月20日、東京ドームで頂点を究めた感のある第3次女子プロレス・ブーム。このムーブメントは結果、北斗晶というひとりのレスラーを葬るための壮大な儀式ではあったが、ビューティ・ペアやクラッシュギャルズが作り出した“熱”と比べれば、ある象徴としてのレスラーよりも、さまざまなタイプのレスラーが百花繚乱だった状況からこそ生みえたブームであったと思われる。

そしていま。宴が終わった鎮静の時代。だが、この時期をいかに過ごすかによって、女子プロレスが真に定着できるか否かが問われるのだ。

'95年は各女子プロレス団体とも他団体との交流戦をセーブし、団体内部での地固めを行うときである、と異口同音に活動のコンセプトを語る。

だからこそ、いまここで改めて考えてみたいのだ。

“女子”プロレスとは何なのか。

大切な時期の大切な女子プロレス。だから“女子”という冠のつく特異なこの“競技”の正体を定かなものとしたいのだ。

さまざまなタイプのレスラーたちと本誌スタッフが頭を抱えながら解き明かすことを試みたこの特集。その答えを出すのは君たちだ。

〃女子〃プロレス…って!?

私たち女子は試合会場に入ったところからプロレスラーになるんです。男子レスラーはオフのときでも街中をTシャツ1枚の格好で歩いていれば、その体を見て〃あー、この人、プロレスラーだー〃ってわかるじゃないですか。でも、私たちは服を着てしまったら、誰もプロレスラーとは思わないはず。ただしアジャ・コングさんは例外ですけど(笑)。だから男子は会場外でもプロレスラー、私たちは会場内でプロレスラーなんです。

試合コスチュームを例にとっても男子との差はハッキリと出ますよ。男子の場合はコスチュームには決してお金をかけませんよね。〃コスチュームにお金を浪費しないで、ちゃんと試合をやれ!〃って言われたらそれまでですけど、だからって私たちが競技用水着でリング・インしたら変ですよね。華やかなコスチュームをまとって花道を入場し、それを脱いだらまた下に凝ったデザインの水着があらわれる。私たちはプロだから〃見せる〃という意味では、そういうところにも気を使っています。

でも、やっぱり、会場外でもレスラーってわかってもらいたい(笑)。

山田敏代【全日本女子プロレス】

〃どうせ女子でしょ〃とか言う人がいるけど、そこまで言うんだったら、〃そんな女がこんなプロレスやってんだよ〃ってことを見せてやる! 私の場合の見せるものは〃生きざま〃です。

人間というのは普段からみんな闘っているわけです。仕事にプライベートに、その〃形〃は人それぞれで置かれている立場によって違っていても、みんな闘っているんです。私たちの場合は仕事そのものが闘い。ならばその闘いを〃生きざま〃として、常にリングという場で見せていきます。そして、それを観たファンの方には夢や希望を抱いてもらったり、感動してもらったりという目に見えない何かを与えていきたい。

そしてファンの方との闘いの場でもあります。例えば、試合で負けたとします。〃なんだアイツ負けたのか〃って去って行く人もいれば、応援しながら〃一緒に這い上がって行こうよ〃って人もいます。リングの周りにもあらゆる〃生きざま〃が存在しているんです。

私は仕事として、レスラーとして、女として〃生きざま〃を見せ続けます。

風間ルミ【LLPW】

私が言うと説得力に欠けるかもしれないんですけど(笑)〃色気と感情をアピールできたら女子プロレスなのか?〃って思われたら心外ですね。ミミ萩原さん。あの人も一生懸命に努力してたみたいですけど、やっぱり色気のレスラーでしたね。じゃあ、色気にプラス、激しい感情があればOK!なのかと言うと、それも違う。いくら〃おりゃー!〃〃テメー!〃〃んナロー!〃って叫んでも、それがお客さんに伝わらなければダメ。自分だけ気分を高めて満足してたらアマチュアと同じ。アマチュアは自分自身を高めるために相手と戦う。そこで相手にケガをさせても許される世界。派手な演出も皆無。だけど私たちはあくまでもプロレスラー。相手にケガをさせても、もちろん自分自身のケガも許されない。それはプロとして許されない。派手なショー的な要素も多少なりに取り入れながら、自分のため、お客さんのために限界すれすれの試合をしなければいけないんです。

〃アマチュアではなくプロフェッショナルに〃。この言葉は女子プロレスでは特に重要だと思いますね。

井上貴子【全日本女子プロレス】

〃女子プロレスとは?〃ってね。女子がやってるから、女子プロレスなんや(笑)。よく男子と比較されたりするけど、ルールの中のケンカやから根本的に一緒や。

あえて言うなら、ま、そーやな、セックスやな。まあ、セックスにも攻め派と受け派があるやん(笑)。女子プロレスもそれと同じや。リングの上で〃今日は受けに回ってやりたいなぁ〃って思うときもあるんやけど、私のイメージからするとやっぱり攻めなきゃいけない。お客さんの〃関西、攻めて潰してくれ!〃っていう心を読めちゃうからね。だから求められているとおりに、攻めて攻めて、攻めまくるよね。まあ、ウチのセックスと同じやね。オイオイ、なんでや(笑)で、いま男女混合のプロレスやったりするやん。あれは本物の3Pや4Pやな(笑)。

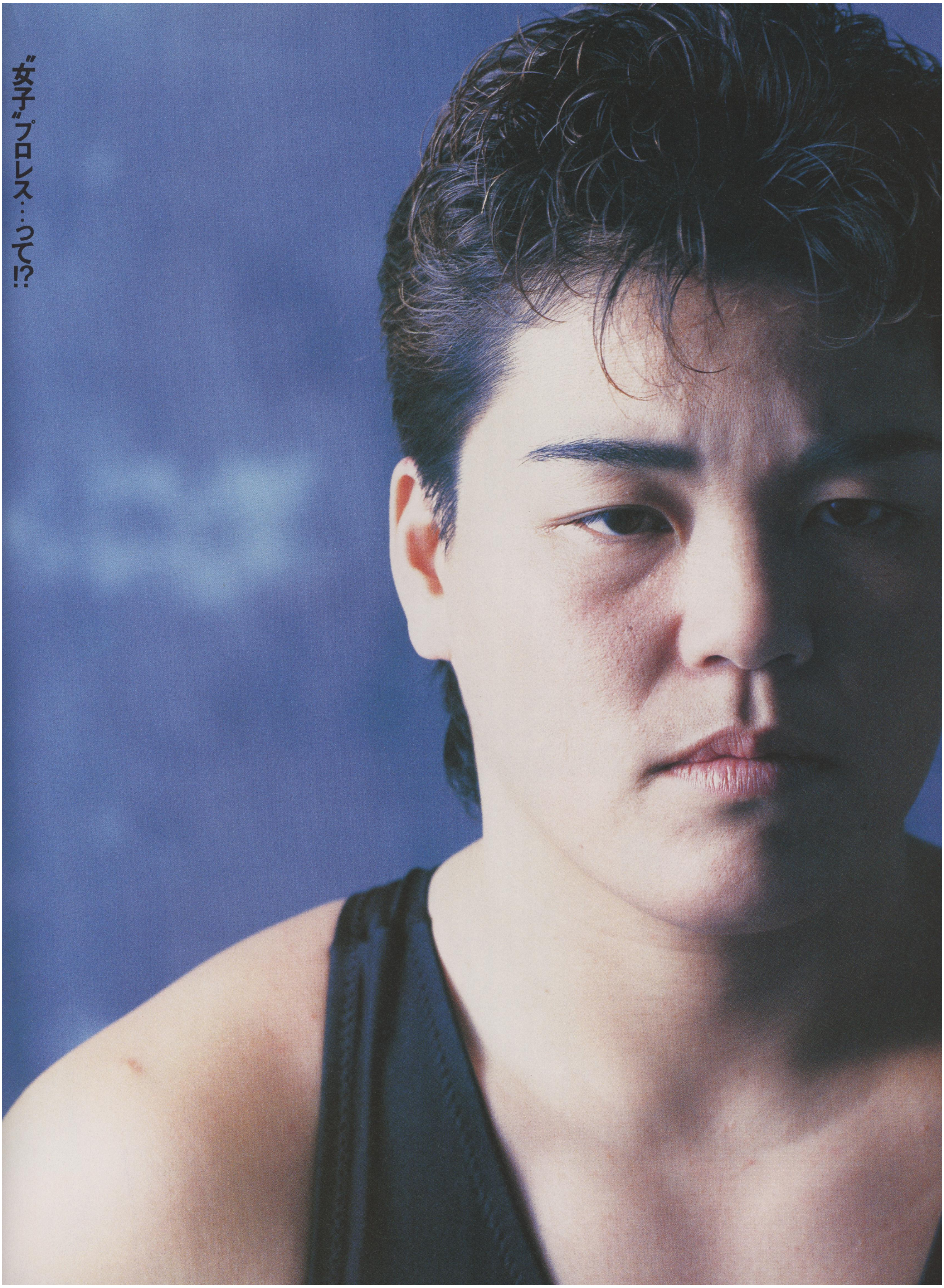
まあ、ホントに女子プロレスは行きつくところセックスやなあ。ウチは自分のキャラクターをよく自覚してるから、あえて女っぽくはしない。まあ、する必要もないけど(笑)。だから、リングの上では戦う相手がウチを男として求めてきたら、ウチはなりますよ、男に。

ダイナマイト関西【JWP】

去年の東京ドームでの工藤・福岡組対貴子・キューティー組の試合は評判が悪かったけど、私は観ててすごく楽しかった。〃あー、工藤、醒めた目しながらやってることエゲツないなー。貴子もやってる、やってる〃って。大半のお客さんは〃何でいまどきこんなドロドロした試合をやってんだ。もっと技を出せ!〃って不満を言ってたらしいけど、いまどきの女子プロレスだからこそ、あの〃女の戦い〃があってもいいと思う。

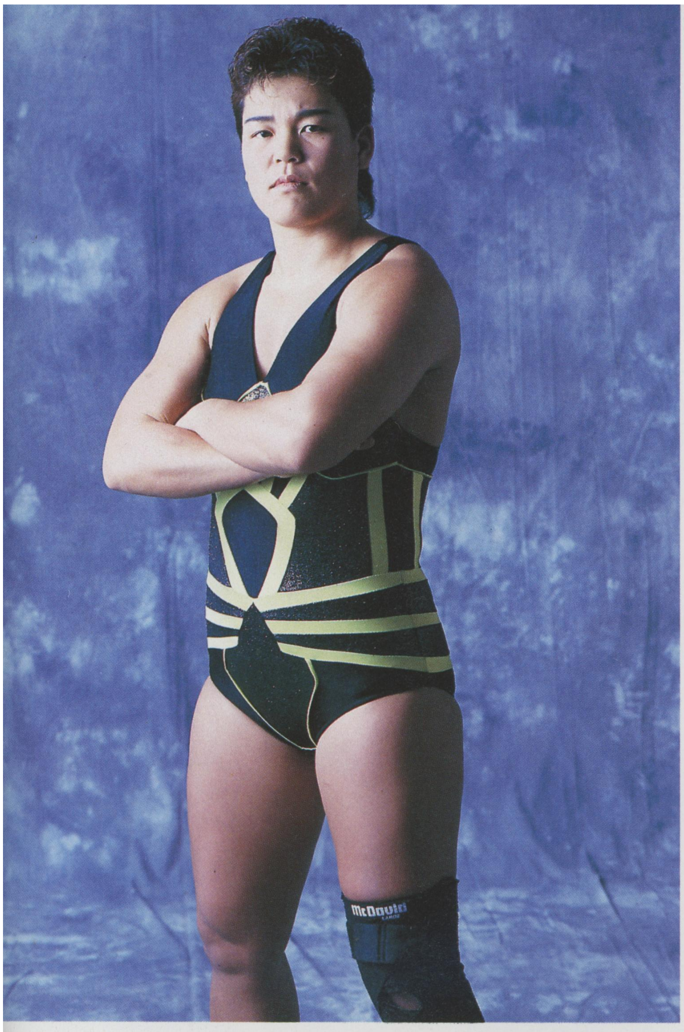
結局、〃男には負けない〃っていうプライドが〃多様な技の使用〃につながって、男子プロレス・ファンを女子に引き込むことに成功したんだと思うんだけど、ここらでちょっと頭を切りかえてみたらどうかと思う。つまりは観方。男子を観る視線と女子を観る視線を同一にしていると、つまらないよね。まぁ、そうは言っても私とダイナマイト関西との試合は大きい同士だから、男子並の迫力があると思うけど(笑)。女の子らしい選手同士がつかみ合いとかすると、〃ゲェー!〃とか思う人はいてもいい。でもね、それが〃女子プロレスなんだ〃って観方ができると、よりおもしろく観ることができるよね。

アジャ・コング【全日本女子プロレス】


“女子”プロレス…って⁉

神取忍。

“性”を超えたプロレス。



●“女子”プロレスの世界に初めて“男子”プロレスのエッセンスを導入した神取忍。女子プロレスというシステムが生まれてから約30年に至ろうという中でさまざまなエポック・メイキングが発生したが、彼女が彗星のごとくプロレス・デビューし、そしていまなお現役であり続けることこそ重大な事件でもある。“異端児”という表現で逃げるのではなく、ひとりのプロレス革命家としての神取忍が考察する“女子”プロレスの正体。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●SATORU KANAI
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA
Back Drop●SET WORK JAPAN SET TWO(03.3555.0664)

神取忍。

—神取忍選手って、女子プロレスの革命児なんですよね。一流の格闘家という看板をひっさげてデビューしたわけだし、関節技を筆頭に男子レスラーの試合運びの方法論を女子に導入した、〝男型女子プロレス〟のパイオニア的な存在でもあるわけですよ。

神取　アハハハ（笑）。それって喜んでいいのやら悲しんでいいのやら。それって誉め言葉（笑）？

—そりゃもう、もちろんですとも。お約束の男ネタじゃないッス（笑）。で、まず神取さんのプロレスがなぜ、そんな〝男型女子プロレス〟になってしまったのかを自己分析していただきたいのですが。

神取　うーん……、まあジャパン女子っていうのはさ、根本的にはジャッキー（佐藤）さんがコーチだったけど、やっぱり新日本の（山本）小鉄さんとかグラン浜田さんという男子（レスラーの指導）がベースになっているところも多いわけだしさ。それと同時に、自分がプロレスをポンって観たとき男子をすごく基本にしてやってたというのがあるから。まあ自分の中では、男子と女子というお互いの枠を超えたプロレスラーを目指そうみたいな部分もあったわけ。

—ああ、そんな性別で枠付けするもんじゃないという。最初の環境からそうだったこそ、考え方も自然にそうなったわけですかね。

神取　そうそう。だから〝女子プロレスとはなんぞや〟って言われても、それはやっぱレスラーそれぞれの持ってる価値観であるしさ。やっぱりお互い、男子には男子のさぁ、ああいう体つきがあって、技ひとつひとつにしたって迫力があるわけじゃない？　で、女子に関しては、そういう身体がない分、柔軟性で補えとか……。

—スピードであるとかね。

神取　そうだね、それでお互いが、良いとこがあってプロレスが成り立ってゆくと思うから、そこで自分は、その両方を取り入れてしまおうと。

—真ん中じゃなく、両方を。

神取　そう、オイシイとこだけ取って。

—いちばんワガママってやつですね、この欲張り野郎（笑）!!

神取　ワハハハハ（笑）。だから別に自分の中ではさ、基本的なベースになってるものは〝闘うこと〟が原点なんだから、その点に関しては男子だからとかさぁ、女子はそんなものやっちゃいけないだとかさぁ、そういうものはないと思うなぁ。だから、ベースは何か男女関係なく、ありえるものが存在したっていいんじゃないかなあって。

—神取選手はレスラーとして育った環境が環境だけに、いまおっしゃった感覚しかわからないわけじゃないですか。それは体験上の話にしかすぎないという面があるわけで。それは、最初に全女からプロレス人生がスタートしてたら、また違う価値観になるかもしれないし。

神取　そうそうそう。だから結局、自分の場合は小鉄先生や浜田さん、それにもちろん藤原（嘉明）さんたちに教わったりしてたわけだし。確かに、女子で先輩っていえる人はジャッキーさんとかナンシー（久美）さんとかいて、実際教わったこともあったけど、やっぱり影響力は男子の方が多いかなって。

—なるほどねえ。さて、あとは昨今の女子プロレスで必ずいわれるところの〝技の過激さ〟という点について。前号で神取さんは〝いまの女子プロレスは技に走りすぎてる。だから私は技を大切にして、むしろ技を使わずに試合を成立させることにテーマを置いてる〟という発言をしていましたよね。いわば神取さんは、技の過激化には否定的なわけだ。そうやって言いきって、ご自身はそういう流れとは違う試合を心がけていれば良いだけなんですけど、じゃあなぜ過激化したのかを考えてみるとですね、要は女子が男子のプロレスと比べて負けてる、もしくは欠けてる要素である〝技の説得力〟を補うためじゃないかと。

神取　ほうほう。どういうこと？

—つまり、それだけ過激な技に走ったり、いっぱい技を出したりしないと、例えば男子のレスラーの一つの技とイコールの説得力を与えられないからではないかと。この考えも、きっと神取さんの先の発言と等しいのでは……と思うのですが。

神取　うん、それはすごくあるね。あとは怪我に対して勲章に思っちゃう？　どっかの団体みたいにさ。

—一般人ならとても社会復帰できない怪我を負っても、それを克服するという。

神取　そうそうそう。それをすごく美化しすぎちゃうっての？　それはプロとして、やっぱりアフターケアもしっかりしてなきゃいけないのがプロっていうの？　だから、そういった勲章にするのがすごくナンセンスな部分だなぁとは……。

—感じる？

神取　あるやね。だからそれって、潔さがないんじゃないの？　ヘンに勝ち負けに関してこだわりすぎるというかさ。怪我して痛くっても我慢しちゃうわけだ。私ゃ、そのときはすぽーんと負けたって良いって思ってるわけ。もう次の考えろよ、みたいな。

—どっちかというと、いまやってる試合そのものよりも、明日を見るって感じですか？

神取　そうそう。それで怪我しちゃって身体が動かなくなったらどうすんだよって。もう次のこと考えないと……。なんか言い回し悪いんだけど、負けても勝っても潔くしてりゃあ、怪我までしないだろう、みたいな？　ヘンなところで踏ん張るなよと。そうすれば、次のもん、次のもんって開発しちゃうわけじゃん。

—ええ。そしたら次の闘うべき目標なりテーマなりがね、フォールを取られた瞬間に生まれて、それで燃えられるわけだし。

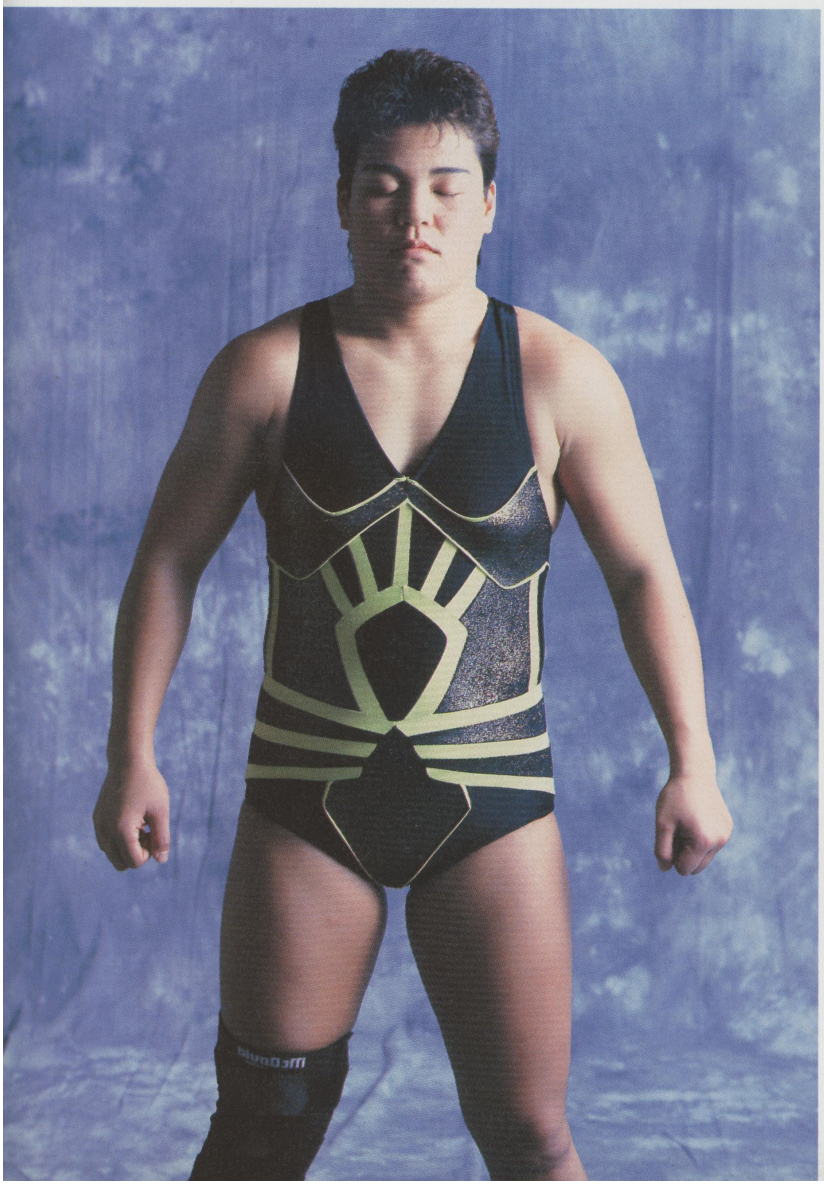
神取　だから、そういった気持ちの内面の部分がぜんぶ技に走っちゃうとかさ。その辺が……ねぇ（笑）!?

—そこまで言うからには、じゃあ神取選手はその〝潔さ〟を持っていると自負していると？

神取　うーん、……そうだね（笑）。

—（笑）じゃあ具体的に例を出すと、それは昨年の7月のブル中野戦での敗北であ

男子・女子ともお互い良い点があってプロレスは成り立つ。そこで自分は両方を取り入れようと。欲張りだよね（笑）。



るとか?

神取　そうそう。あれなんか、まさにその典型だぁね。

——明日につなげるための敗北であったと。右目を怪我してるわけだし、これ以上意地になって片目になるのは嫌だという。

神取　うん。そこでさあ、日本人が好んでんだかしんないけどさあ、やっぱ団体がそういう〝怪我してもどんなことがあってもやってくれ〟っていう風潮を作り上げちゃったのかわかんないけど。やっぱ、そのものに関してはねぇ。

——怪我して2度とできなくなっちゃったら、それで終わりですからねえ。

神取　〝ハイ、お疲れさん〟で終わっちゃうからさあ。

——それで、ふと僕たちの常識で考えてみれば、それっておかしいじゃんってわかりますもんねえ。

神取　やっぱりそんときは、それで負けてしょうがないと。ねぇ、技術的に負けて、そしてそういう怪我を背負ってたことでも負けちゃったんだと。そしたら、もう次のもの。で、今度は勝つんだ、みたいに展開していかなきゃいけないんじゃないかなっていうのはあるやね。

——その一方で、レスラーは超人でなければならないという考えも正論ですよね。男ならともかく、特に女性の殴り合いのケンカというものはめったに見られるもんじゃないでしょ？　そういう意味では、女子プロレスは非日常的な世界の現実化なわけですよ。だからこそ、選ばれた者こそがリングに立つ資格があると。よって観客もレスラーに対して幻想を抱くようになって〝骨折したからって何だ〟と憤るという（笑）。

神取　（笑）まあねぇ。

——そしてレスラー側も、観客のリクエストに応えすぎてしまうという現象が起こるわけですわ。で、神取さんは女子プロレスでもそういうレスラー幻想というか、非常識な部分を持ってしかるべきと思います？

神取　それはやっぱり、プロと名の付く以上はね。

——そのときに出てくる言葉として、〝プロとしての自覚〟というフレーズが出てくるんですけど、さっきの常識とのバランスシートという観点で考えると、ちょっと言い方キツいですけど、意味をはき違えてる場合もあるんじゃないかなあと。

神取　あーそうそうそう。確かにプロレスは、普通の人と比べれば怪我の回復力にしたってさ、筋力の強さもはるかにあるわけだけど、やっぱり生身のカラダなんだから。問題はさ、その怪我したあとの処置の仕方がプロなのか。それこそアマチュアの方がぜんぜん進んでるってなっちゃうのか。次のもの考えていってお金を取ってくんだから、お金を取れるだけの試合を観せられるかって考えなきゃいけないのかなあって。

——こういう怪我の話をしてると、やっぱり豊田真奈美選手に至るんですよね。彼女が何を話したかは、あとのページで出てくるからアレなんですけど、とにかくスゴインですわ、考え方が（笑）。あれだけムチャな技を食らっておきながらもビクともしない。

神取　ハハハ（笑）。でも、あの子の場合ってさあ、また違ったアレなんでしょ?。人の身体よりも、なんか白血球が多いとか。

——白血球が多い（笑）。

神取　（笑）だから怪我しにくいって誰か言ってたよ。

——別名〝ミス・ゾンビ〟って称号もありますしね（笑）。

神取　でも逆にね、そういったものが入り交じって、いろんな考えがあるのがプロレスなんじゃないの？　逆に肯定できないじゃん、女子プロレスとはこれなんだ!!とは。やっぱねぇ、いろんな観る人がいて、いろんなやる人＝レスラーがいて、それに合った、波長の合うものを観ればいいんじゃないの？

——ですよね。NHKばかりじゃないんですもんね。いっぱいの民放のチャンネルとか衛星放送もあるから、テレビはおもしろいわけだし。

神取　そうそう（笑）。だから女子プロレスもさ、選択する時代になってんじゃないの？　私フジテレビのバラエティが観たいとかさぁ、いや私は報道のTBSが好きだよとかあるわけで。それを一緒くたにしようというのが無理なんだよね。

——そういう意味では、女子プロレスもいま、非常に幸福な時代であると言えますよね。

神取　んー、ホントホント。それは観る側ももちろんだけど、やってる側にとってもね。

——で、一連の交流戦／対抗戦ブームも一段落し、今年はどの団体も〝内部の地固めの時期〟というコンセプトで活動していますよね。で、そこでLLPWが選んだのが女子版アルティメット大会という路線であると。

神取　すごいよもう。ウチがやったらハンパじゃないから。ほかがやっても話にならねぇな。あれだよ、ちょっとウチが〝これだ!!〟って本腰入れたらねぇ、もーみんなビビっちゃうよ（笑）。

——ビビっちゃいますか。LLPW恐るべしと。

神取　恐るべし（笑）。

——あなどりがたしって感じで（笑）。でも、そういう大会を開くってことは、やっぱり格闘技になっちゃうわけでしょ？　プロレスじゃなくて。その方向性を、地固めをする時期になぜ選んだかというと……？

神取　なぜっていうよりも、ウチは前からそういうものが……。

——格闘技色の強い団体、っていうコンセプト。

神取　うん、それがもともとあったわけだから、それこそ回り道しただけかな、みたいな。対抗戦で、ちょっと寄り道しちゃったかなあと。でも、やっぱり対抗戦は、ウチとしてはやっていきたいっていう方向性があったわけだから（否定はしない）。

——そうですよね。で、LLPWが立ち上がる当初に掲げた〝格闘技色の強いプロレス〟という路線はどういうものかなあと思ってたんですけど、正直な話、いざフタを開けてみたら、あんまりモロに表出させることがなく、2年過ぎちゃったかなあという印象が強いんですよ。

神取　だから全女ってやっぱ、ずばり〝プロレス〟そのものがコンセプトなわけじゃない。結局、そこの土俵に上がってたら、いつまで経ってたってそれを超えることはできないと気づくわけですよ。

——対抗戦を通じて？

神取　そう。やっぱ全女っつーのは年間250試合やってると。それに対してウチは1年間で40試合。それを観てるだけで違うだろと。その差は愕然として大きいと。だからもう、プロレスってものに関してはアンタたちやってなよ。わかったよ、確かに上手いよ、確かに強い。でも自分たちはその中でもそれなりの対抗はできてたわけじゃない？　ただ、全女のリングという土俵の中でやればそっちは上だし、じゃあウチらもそれなりの土俵を作るから、今度はこっちに来てみなと。やれるもんならやってみろよと。だからこそ、ウチらも対抗できるものを作って、そして対抗しなきゃしょうがないなと。

——そして選んだのがアルティメット。

神取　すごいよぉ（笑）。

——さっきからそればっかかや（笑）。

神取　いやあ、たぶん5月か6月にやるけどさ、ホントすごいから（笑）。どうすごいかはね、いま動いてる最中だから、詳しくは教えられないんだけどさ。

——言っちゃいましょうよ、この際ずばり。

神取　言えないよー。でも、やったらもー大変だよ（笑）。

——ちきしょー、教えやがれこのケチ!!

神取　ワッハッハッハッ（笑）。

SHINOBU KANDORI Profile
神取忍【LLPW】本名・神取しのぶ。S39年11月3日生まれ。神奈川県横浜市出身。S61年8月にデビュー。170センチ、75キロ。

いまのプロレスって潔さがないんじゃん。〝怪我が勲章〟って美化しすぎだよね。

神取忍。

〝女子〟プロレス‥って!?

豊田真奈美。

"性"を孕んだプロレス。

●長髪をなびかせリングを縦横無尽に走り抜ける。トップ・ロープの最上段から華やかに舞う。見事なまでに美しいブリッジ——。現在、ある意味で最も"正統派の女子"プロレスラーとして、多くの者を魅了し続ける豊田真奈美。その彼女が先日、全日本女子プロレスの本流に絶縁宣言を叩きつけた。今回の取材はその"事件"前に行われたが、そこに至るまでの真意はこの中に隠されている。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA Text●HIDENORI KOKUBU Hair & Make-up●AKIHIKO YASUMURA Styling●CHISATO KAMIYA Costume●K-IDÉE INTERNATIONAL CO.
Back Drop●SET WORK JAPAN SET TWO

女子は男子にかなわないと思いたくない。とにかく男子プロレスを食ってやろうと。それしか考えてないんですよ、自分。

初めて彼女の存在が気になったのは、試合ではなかった。そのとき、彼女は肩で息をしながらインタビュアーの質問に答えていた。隣にいる選手が、明らかにカメラの向こうにいる視聴者を意識してるのに対し、彼女はインタビュアーに体を向け、彼の目を真っすぐに見つめ、場違いなところに来てしまった少女のような表情をしながら、ひとつひとつ言葉を選び、いまと同じように反省の弁を述べていた。その姿が心に残り、以来、彼女のことが気になり始めた。

数年後、彼女は黒のコスチュームを身にまとい、ロングヘアをなびかせながら、リング上を疾風のごとく駆け抜け、ポスト、ロープを自由自在に操る。そのスピーディでスリリングな試合は観るものの心を魅了し、いまや女子プロの象徴であるとさえ言われている。豊田真奈美、24歳。ポスト、アジャ・コングに最も近い位置にいる彼女に、女子プロレスについて語ってもらった。

「すごく難しいですよね、プロレスについて話すというのは。なんて言えばいいのかな。やっぱり、華やかですよね、女子プロレスって。あの、自分、島根の本当、田舎で育ったんですね。だから、あまり華やかなものを見たことがなくて。なのに、試合を観に行ったら、自分と同じぐらいかちょっと上ぐらいの年齢の人たちがあんなに輝いてて。もう、観た瞬間、これしかないなって。本当はそれまで、将来は半日は農作業をして、半日をダンプの運転手をやるって言ってたんですよ(笑)。自分、小さいころ、おばあちゃん子だったんですね。で、おばあちゃんとこが農業やってて、親がダンプ関係の仕事をしてて。だから、大きくなったら二つを一緒にやろうって決めてたんです。変わってますよね。普通の女のコが考えるようなことじゃないですよね(笑)」

彼女は、言葉を選びながら話し続ける。

「うーん。もともと、人とは違うことがしたいっていうのはあったんですよ。で、自分はスポーツが好きだったし、タレントとかそういうのじゃなくて。うーん、もしかすると、目立つことが好きだったのかな、私。恥ずかしがり屋で、すごい人見知りするんですけど。うーん、でも、やっぱり、目立つことが好きなんですよね、自分」

恥ずかしがり屋なのに目立ちたがり屋。これに限らず、豊田真奈美はいくつかの矛盾を内包する人である。たとえば、レスラー・豊田真奈美はその試合において、実に多くのことをファンに語りかけてくる。が、リングを下りた彼女は、決して口数が多い方ではない。もしかすると、彼女の持つさまざまなギャップが、レスラー・豊田真奈美を知る上での重要なキーワードになるのかもしれない。なぜなら、私人・豊田真奈美の中にないものは、リング上の彼女にも表われることはないはずだから。

「人見知りは、だいぶ直ってきたんですよ。最近は、私生活だとベラベラベラベラ余計なことまで話すんです。もう〝黙ってろ〟って言われるぐらい喋るんです。だけど、こうやって改まると、全然、ダメなんですよね」

たぶん彼女は言葉の大切さを知っている。そして、言葉が伝わらないもどかしさもわかっている。だから、彼女は自分にとって大切なことを表現するとき、つまりリングの上ではあまり言葉に頼らない。これは、北斗晶と比べるとわかりやすいのかもしれない。たとえば、昨年の11月20日の東京ドーム大会。あの日は、まぎれもなく北斗晶だけの一日であるはずだった。試合、そして彼女特有のマイク・パフォーマンス。一連の北斗ワールドに魅せられたファンのテンションは、試合が始まる前からピークに達していた。構成・北斗晶による北斗晶主演の連続ドラマは、さまざまな試合が終了したのちクライマックスを迎える予定だったのだ。が、そこに思わぬ敵が現われた。豊田真奈美である。彼女の試合は、テレビ番組にたとえるならシリーズものの特番に

“女子”プロレス…って!?

近い。一話一話に関連性はあっても、連続性があまりないのである。なぜなら、彼女の試合には、マイク・パフォーマンスという“続く”がほとんどないから。が、しかし、シリーズものの特番には、初めて観る人にも続けて観る人にも楽しめるメリットがある。そして、あの日の豊田のレスリングは、まさにその特性を十二分に発揮した試合だった。観客は言葉による愛撫がなくとも、彼女の試合を観ることにより、徐々に徐々にオーガズムへと導かれていったのだ。王者、アジャ・コングに果敢に立ち向かい、ファンの“やられた”“もう、ダメだ”と発する言葉をことごとく裏切る彼女の姿を観ることによって。結果、彼女は、この試合により賞を獲得することになる。言葉と試合をミックスすることで一時代を築いた北斗晶と対極をなす豊田の試合。そこには、音声はない。が、内に秘めながらも、熱く燃えさかる彼女の想いがある。そして、観客は彼女の試合を観ることで何かを感じる。蹴られても、投げられても立ち向かっていく彼女の懸命さを観て。

「それから、私生活だと、たとえば、二人いるところに二つものがあったとしますよね。そしたら“こっちがいいなぁ”と思ってても“好きな方選んでいいよ”って言うタイプなんですよ、自分。でも、プロレスになると違うんですね。負けるのが嫌いっていうか、もう、負けず嫌いだけでここまで残ってるようなもんだから。だから、やっぱり、毎日、どの試合よりもお客さんをわかせてやろうと思ってますよ。それから、女子に対する偏見ってまだありますよね。自分は、もう、プロレスをやってるから、絶対、女子の方がすごいやって思うんですけどね。だって、女子は男子より体が柔らかい分、大技やられてもけっこうスクッと起き上がってこれるじゃないですか。それに、やっぱり、体が柔軟だから、試合だってキレイだし。あの、自分、ほとんど男子の試合って観ないんですよ。どうしてかと言うと、やっぱり、男子の試合を観に行くっていうのは、誰かの技を研究するためですよね。でも、自分は人の真似をしたくないっていうのがあるんですよ。まぁ、たまたまテレビをつけたときにやってれば、チラッと観ることはありますけど。でも、それでも目を離さないで観るって感じではないですね。それに自分、男子の試合を観て、キレイだって思ったこともほとんどないし。だけど、雑誌とかでも、やっぱり男子の方

が主ですよね。まだ〝女子は男子にはかなわない〟って、ファンの人だっているし。だから、もう、とにかく、男子を食ってやろうとしか考えてないんですよ、自分」

積極的に自分の主張ができない彼女と、これだけはと思うものに関しては、何があろうと絶対に譲らない彼女。ここにも、まったく違う二人の豊田真奈美がいる。が、どちらも彼女の持つ資質であることは間違いない。

豊田真奈美は女子プロレスに恋をした。が、彼女にはその想いを口にするだけの言葉も、また愛を伝えるための積極性も備わっていない。だから、彼女は自分なりに考えた方法を試合で実践する。やられてもやられても、立ち向かっていくことで。なぜなら、それが彼女にできる唯一の愛情表現なのだから……。

そして、豊田には、たった一つだけ私生活とリング上がクロスすることがある。

「好きな人ができたらですか？　どちらかと言うと、尽くす方なんじゃないかな。少なくとも、ワガママを言うタイプじゃないとは思ってますけど（笑）」

これと、豊田真奈美のファンに対する思いとは相通ずるものがある。

「けっこう、お客さんってアレなんですよね。さっきまですごいほめてたと思ったら、

豊田真奈美。

キレイで華やかじゃないですか。女子プロレスってアートなんです。昔からの良さも崩したくないし。

いきなり怒ったりしますよね。だから、お客さんの喜びそうなことをやりたいんだけど、どうすればいいのかなぁって思うときありますよ。まぁ、自分はパワーのあるレスリングとかはできないから。やっぱり、飛びもの関係だけは、ほかの人にできないようなことをやっていこうと思ってるんですけど。それと、何をやるかわかんない方が観てておもしろいと思うんで、突拍子もないことをやっていこうと考えてるんですよ。実際、試合になるとプッツン切れて、自分。そういうときに、けっこう雑なところとか出ちゃうんで、それをこれから直していかなくちゃいけないなぁとは思うんですけど。でも、落ち着いた選手を観てても、お客さん、楽しくないですよね、やっぱり。それに、キレた方がお客さんが喜ぶときってあるじゃないですか。だから、なんかもっともっとキレるというか……」

彼女は頑ななまでに相手を信じ、愛を得るために、自分自身のすべてを捧げ献身的に尽くす。そして、愛する相手を否定するものに対しては強い態度で拒絶する。そのさまは、なぜだか、一心に教えを守ろうとする宗教者を想像させる。はたして、彼女の恋はどこに向かっているのだろう？

「いま、対抗戦がファンの人にとって見慣れちゃった部分ってありますよね。だから、対抗戦だけに頼らないで、ウチの団体の中だけで、ちょっとおもしろくならないかなと思ってるんですよ。なんか、いまの時点でウチの団体ってワキアイアイとやってるような感じがするんですね。でも、ただ〝みんなで仲良くやってます〟ってプロレスじゃ、観てる人もつまんないと思うんで。だから、なんて言ったらいいんだろう。そうだな、ちょっと抜け出してやってみたいなぁと。なんかいま、けっこう、一人で突っ走ってるようなとこあるんで、誰か自分についてきてくる人がいたらいいなと考えてます。先輩でも後輩でもいいんです。で、その人たちと組んで、おもしろい抗争をつくっていけたらいいんですけど」

2月18日、豊田は動き始めた。博多で行われた、62年組vs63年組プラス伊藤薫の4対4のイリミネーションマッチでキレてしまったのである。伊藤薫、吉田万里子を立て続けに撃破した彼女は、3本目で井上京子にピンフォールを許してしまう。そして、あろうことか、まだ試合が続行されているのにも関わらず、そのまま控え室へと帰ってしまったのだ。たぶん、リングに残された62年組の3人、いや、対戦した4人を含む全女のすべてのレスラーは彼女の行動を許さないであろう。それは〝そんなことやるんだったら、全女辞めれば〟と言った下田美馬の言葉に如実に現われている。

そして2月26日。後楽園ホールで行われた8人タッグマッチは、本来の4・2東京ドームへの出場権を獲得するための試合であったはずだった。が、実際は豊田に対する〝公開私刑(リンチ)〟の部分がクローズアップされるような展開になってしまった。タッグ・パートナーであったはずの井上貴子、堀田祐美子の裏切りの中、彼女は自らの王国を失ったリア王のごとく彷徨しながら、なんとかかつての盟友・山田敏代からフォールを奪い、本来の試合のテーマであったドーム出場権をかちえた。

蜂起したことで、失うものも少なくはなかったが逆に得たものもあった。それが先に記したドーム出場への切符、そして同志である。まずは、当日の試合での〝制裁行為〟にただひとり加わらなかったパートナーの長谷川咲恵。そして、敵対する側にマッチメイクされながら、今後は共闘することを志向した吉田万里子。さらには伊藤薫も、豊田のアクションに賛同した。彼女たちとともに同じ道を歩むことを決める一方で、豊田個人の視線はどこに向けてゆくのか。

「個人的な目標ですか？　やっぱり、とにかくアジャ・コングを倒すこと。これが、今年の一番の目標。たぶん、自分のことなんか足元にも及ばないと思われるかもしれないけど。でも自分、とにかく同じレベルの人をライバルとしてても上には行けないと思うんで。上の人を目標にして。で、絶対倒してやるんだという気持ちで、やってかないとダメなんじゃないかと思うんで……。やっぱり、最終的な目標は赤いベルトですね。だって、それを巻かなかったら何のためにこの会社に入ったかわからないし。レスラーになった意味なんてないじゃないですか。あっ、それから、あとMVP。この二つは、絶対に獲りたいですね」

恋はしばしば、争いを生む。が、恋のためなら彼女は何ものも忘れない。そして、自分の存在を賭けて、あえて闘いを挑む。たとえ、それに勝利したとしても、恋を維持するための何の保証にならないとしても。また、たとえ同僚を敵に回すことになったとしても。私生活では争いを好まない豊田真奈美。そんな彼女を、闘いへと向かわせるプロレスの魅力とは何なのか？

「やっぱり、キレイで華やかじゃないですか、女子プロって。もう、アートなんですよ。だから、自分、昔からの女子プロレスの良さを崩したくないという気持ちが強いんです。最近、技に走りがちだって、言われますよね。でも、自分自身に関して言えば、絶対、ケガしないっていう自信があるんですよ。だから、自分はどんなことをしても怖くないんです。ただ、殺し合いをやってるわけじゃないから、ギリギリの線で闘わなくちゃいけないんですけどね。でも、自分のことは本当に何も考えてないです。例えば、大技をやって、すごい大きなケガをしたり、まぁ、死んじゃったりすることもあるかもしれないですよね。でも、それはそれでいいんですよ、自分は」

豊田真奈美はわき目もふらずに、恋をしている。まるで、女子プロレスがなかったら、生きていけないとでもいうように、熱く深くプロレスを愛し続けている。そして、その生きざまはあまりに切ない。が、それは、レスラーとして将来を嘱望されている彼女ゆえの悲劇なのかもしれない。なぜなら、プロレスから愛されなければ、彼女の恋は成立しないのだから……。そして、プロレスに見向きもされなければ、いくら彼女でもここまで献身的に尽くすことはないはずだから……。

数年前、インタビュアーに真っすぐな視線を向けていた彼女は、いまなお、女子プロレスだけを見続けているようである。

MANAMI TOYOTA Profile
豊田真奈美【全日本女子プロレス】本名：同じ。S46年3月2日生まれ。島根県益田市出身。S62年8月にデビュー。167センチ、65キロ。

Megumi Kudoh

●女子プロレスの“正道”団体での挫折を経て、FMWという男女混合の“邪道”団体で花を咲かせることができた工藤めぐみ。正反対の世界を体験した彼女だからこそ語ることができる、女子プロレス考察。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●SATORU KANAI
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA

プロレスでアピールするものや考え方としては、男女で分けるものではなく、タイプで分けるものだと思うんです。

――というわけですね、毎回適切なお言葉でインタビューのテーマに応えてくださる工藤選手に、“女子プロレス”というものについて定義づけてくだされば、と思うのですが。

工藤　“女子”プロレスは何か、ですか……難しい（笑）。毎度毎度、難しいですね。

――ま、そんなこと言わず（笑）。とりあえず男女混合の団体に属しているということで、男子プロレスと共存している中で、女子プロレスと男子プロレスの違いを言うならば？

工藤　うーんと……やっぱり流れとかね、試合の作りとか、そういう細かい部分を見ていったらやっぱり男子は男子、女子は女子という特徴はあると思うんですけど。でもやっぱり私、プロレスというのは、女の人がやってるから女子プロ、男の人がやってるから男子プロレスっていう部分では分けられないと思う。逆に、そういう部分では男子も女子も一緒だと。大きな観点で見た場合、それは一緒なんじゃないかなと思いますね。

――やはり、性別で分けるものではないと。

工藤　プロレスでアピールするものや考え方としては、何に関しても男女で分けるんじゃなくて、タイプに分けると思うんですよ。レスラーにもタイプ別ってあるじゃないですか。だから一番は、お客さんが求めてる、選手に対して求めるピッタリとした理想ってありますよね。そういうものにハマるっていうか、それに合ったプロレスができるかではないかと。その部分で、もしかしたらそれを補うための要素が、女子の場合は動きであったり技の豊富さであったり、っていうものかもしれない。根本的には何を求めてるかが違うことであって、お客さんが求めてるものへの出し方が違うという。だから、見せる条件が違うだけであって、お客さんがこういうようなものを見たいっていう風に出していくものは共通だと思うし。いかに自分がよりよく、一番光って見えるようにするかっていう部分で違うだけであって。

――パチパチパチ。さすが、取材するテーマに対して、実に的確に答えてくださる。まさにインタビュー・ピンポイント女ですな（笑）。

工藤　アハハハ、そんな（笑）。

――で、そういう考えに至ったのは、やっぱり全女とFMWっていう、恐ろしくかけ離れた団体を両方経験してるからこそ、わかったっていう部分なんじゃないですか？

工藤　そうですね。やっぱり、その団体にはカラーというものがあるから、入った時点で自分の会社はどういうカラーだとか、どういう流れでやってるとか、だいたい頭にあるじゃないですか。それをやっぱり選手は意識して試合をするわけだから、観る人にとってもそれが伝わるわけですよね。観ると、観る方もそういう目で観るし、この団体はこういうところがひとつの観どころ、みたいな感じで、観る側もそういう体制が整ってると思うんですよね。だから、もしある団体ですごく光ってる選手がいても、別の団体に移ったらそう見えない場合もあるし。逆にほかの団体に上がったからこそ、光る選手もいると思うし。だから、それはいかに自分のレスリングと、観る側のお客さんが求めてるものがマッチしてるかっていう部分であると思うんで。

――じゃあ団体というものは、お客さんの側とレスラーの側の意思疎通できるような場にすぎないっていうこととも言えるんでしょうかね。

工藤　場にすぎないと言っても、それがいちばん大切なことだと思うし。例えば関節技を得意としてる団体がいるとしたら、やっぱりそういうのを中心にお客さんは観に来ると思うし。プロレス技っていう部分を期待してる人は、あえてその関節を主にしてる団体は観に行かないと思いますし。

――なるほどね。

工藤　それがひとつの団体の個性になっていくと思うし。難しいけど。

――そういう部分で、工藤選手ご自身はね、結果的に違う場のところに来て光ったわけですよね。

工藤　ええ。

――で、FMWでは工藤選手が目指すプロレスを客サイドが求めてなかったわけじゃないですか。特にいちばん最初の女子の試合なんてそうでしょ？　もう、たぶん観てる方って学生プロレス以下みたいな、ガキのジャレ合いをなんか、酒飲みながらブーブー言って、笑ったりとか、っていう感じのノリがあったわけじゃないですか。それを軌道修正したわけですもんね。工藤さんの場合。

工藤　はい。そうなっちゃいますね。

――だから、その出会う場みたいな環境っていうのが整ってなかったところを作っちゃった、ってことですね。工藤さんの場合。

工藤　そうですよね。それほど大それたことではないけども、やっぱりお客さんの観方っていうのも、最初私来たときバカにされてた部分がすごく強かったっていうのも事実だし。

――そういうナメた観方をされるのが許せないという部分で、工藤選手が出て行って、本当の女子プロレスを教えてあげないと、女子プロレスそのものが崩壊するようなね。そこまで大それたアレでもないにしても、それぐらいの危機感もあって、ああいう行動に走っちゃったんですかね。

工藤　そうですね。だって、そういう野次を飛ばすお客さんっていうのは、うちの女子しか観てない人っていうのが多かったわけじゃないですか。女子プロレス全体という部分を低く見られることだと思ったんで、あのときはやっぱりそれが本当の、いちばんの動機でしたね。

MEGUMI KUDO Profile
工藤めぐみ【FMW】本名：同じ。S44年9月20日生まれ。埼玉県越谷市出身。S61年8月にデビュー。162センチ、60キロ。

工藤めぐみ。
〝女子〟プロレス…って!?

Chigusa Nagayo

●第2次女子プロレス・ブームの最大の功労者である長与千種が、その栄華を経て4月15日、GAEA JAPANを旗揚げする。この新団体が、彼女なりの女子プロレス観の具現化なのか。女子プロレスラーの論客、女子プロレスを説く。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●SATORU KANAI
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA
Back Drop●SET WORK JAPAN SET TWO

全女にトンパチな選手が現われれば、女子プロレスの正体が見える。自分はそのトンパチになれなかったから、ガイアを作ったわけで。

—長与選手に〝女子プロレスとは?〟と聞いた場合〝私の思う女子プロレスはガイアです〟ということになる気がしますけど。

長与　やっぱり、自分の中じゃ団体作ることかなって思ってるのね。限りなく自分が教わったことに対して挑戦していくことですよね。挑戦しながらあくまでも柔軟性を持って——〝撓み〟っていうんですか? そういうものを団体に中和していくことだと思うんですよね。だから結局、……自分の考えの中で女子プロレスをある種毒づいてる部分があるんじゃないですか。それをどう撓みの部分で中和していくかというところを混ぜながら新しい団体を起こしていくことなのかな、なんてことを考えたんですけどね。

—その挑戦する、って、対象とか手段は具体的には何になるんでしょうね。

長与　まず対象に関しては……そうだな、いままで味わってきた毒づくべきものと、あと、とかくレスラーって消耗品的な扱いが強かったじゃないですか。でもそうであっちゃいけないって。磨けば磨くほどいろんな色の玉に変化していってくれるはずだと思ってるんですね。だからこそそういう状態がないような団体を作りたいと。

—それは、団体および選手に絶対的自由を持たせたいってこと?

長与　そう。それと同時に……ひとつすっごい強く感じることがあったの。全女にいて少し自分が感謝したこと、そして私が団体作って、これは勝てないと思ったのは(全女は)超スパルタ、ワンマン的スパルタであると。NOと言わせないで、あくまでもYESと言わせる世界だったと。オーバーワークになろうが何しようが、体を強くするためにはどんなことだってやってたわけですよ。そこで得た地力っていうんですか? あれはいま自分が新人教えてる立場になって、やっとわかったね。だから一番って言えるのだと。

—とどのつまり、全女って結局、空手に例えると極真会館なんですよ。

長与　そうね。

—あと、別の比喩でいえば宗教。

長与　だと思いますね。すごい信者なんだよね、その宗教をとりまく人たちもね。

—自分たちのやってることに絶対的な信頼感や価値観を見いだしてるわけですよ。で、ほかの団体は例えば空手の例だと正道会館とか大道塾であって、例えば正道会館が極真の全国大会に出ても、大会の中にそういう宗教的パワーが潜んでいて上位進出が困難だったりする。

長与　それはあるよね、きっと。その宗教団体を脱けるときにも、それはもう圧力ありますよ。何をされたってわけじゃないけど、それなりの見えない圧力は感じるわけですよ。とにかく全女はワンマンだけど、だからこそいい選手も育つし、それなりの根性持った選手も育つよ。確かにそれは素晴らしいよね。それは自分が肌で感じたわけだからさ。ただ、どう選択するかだよね、今後。やっぱ見たわけじゃん。いっぱい。どこそこまでやらないとチャンスは貰えない、評価してもらえない。それに飽き飽きしちゃったわけさ自分は。だって体壊したってさ、いいことないって!

—(笑)やっぱね。

長与　だからある種ね、可哀相だなって思うときもある。全女の選手に関してはね。ただ自分が選んだことだから、とことん突き止めればいい、ともいいたい。

—やはり、王道を行くのが全女だからこそ、現段階では全女のプロレスこそが女子プロレスってことになりませんか? 主流を歩む者こそが、そのパブリック・イメージとなるって例は、どんなジャンルでもいっぱいあるわけで。

長与　そういう意味で、YESしか言えない世界でNOと言いきれる子が出たときには革命が起こるんだろうね、全女で。だってあそこから女子プロは始まってるわけだし。それって私にも、デビルさんにもジャガーさんにもできなかったわけだから。ましてや北斗選手だってできなかったわけじゃん。誰かワンマンでトンパチな野郎が出てくればいいだけなんです(笑)。本当に女子プロとは何ぞやっていうときは全女の選手が全女に楯突いたときですよ(笑)。そんときにやっと見えるんじゃないかな。いま女子プロ全体で女子プロとは何ぞや?って考えたとき、現状では100パーセントの答えって出ないよね。だって出てないんだもん、答えが。それを私たちが肌や目で感じたことないんだからわかんないよね。でさ、自分がなれるかなと思ったんだ。でも自分はトンパチになれないんだよね。

—そうなんですか。

長与　うん。確かにNOとは言ってるよね、いろんなことで。でも……ここまでが限界だね。あの宗教的な団体を脱けた人間が〝そうじゃないんだよ〟っていって違うことをする、これが限界。トップに立たせてもらって良い待遇をしてもらってもそれじゃ満足してなかった。だから私は違う道行ってんだっていう。誰にも邪魔させないし文句も言わせない。だって自分でやってることなんだもん。それが私に関する女子プロとは? っていうこと。

—やはり結論はガイアとなりますね、長与千種が実践できる女子プロレスの定義は。

長与　だから……レスリングスタイルを語っても仕方ないじゃん。だからといって、「うちの団体はこうだから」っていうことだけ考えても仕方ないのよね。だからさ、まだ本当の意味での女子プロレスになってないのかな。あと、切ったはったは言っちゃいけない世界だと思う。それだけはわかってもらいたいんだよな。だって、レスラーみんなが素晴らしいんだからさ。たとえ下の子であろうと。

CHIGUSA NAGAYO Profile
長与千種【ガイア　ジャパン】本名:同じ。S39年12月8日生まれ。長崎県大村市出身。S55年8月にデビュー。166センチ、80キロ。

長与千種。

〝女子〟プロレス…って!?

みなみ鈴香。

プロレス巧者、女子プロレスを語る。

なんで私、〝教科書〟とか〝先生〟とか言われるんだろう？　って、いつも疑問に思ってて。私は別に先生でも何でもないよ～って感じなんですけどね。まず、女子プロレスの特徴のひとつである〝柔軟性〟に問題があって……。なにせ〝股割り〟がダメですから（笑）。昔からさんざん泣かされて、いまだにくっつきません、ハイ（笑）。あ、自分で弱点をバラしちゃった。

ただ、先輩に昔から教えられたことを確実にキレイにやっているだけで、荒さがないからそう捉えられるのかなって。それで好・不調の波がなくて割と平均的だからじゃないですかね。

だから、荒っぽくできる子の試合を観ると〝あぁ、私もああいう風にやりたいな〟とは思うんですけど、実際やっちゃうと全然できなくて。

こういうこと選手が言っちゃいけないのかもしれないけど、ちゃんと（プロレス）できる子もいるけど、基礎ができてないまんま、会社に上げられちゃってる人もいてまちまちなんですよね。いま、全体的に身体がちっちゃくなってるじゃないですか。だから上の選手と当てると壊れちゃうんじゃないかなって思うんですよ、会社の人は。選手よりも会社の方が怖がっているという（笑）。本当は、新人の子にとっては上の人と当てた方が伸びるし、本人のためにも良いとは思うんですけどね。別に壊したりはしないんで。ハッキリ言って、いまの新人の子って昔と比べると技なり何なりをマスターしてゆくスピードは遅いですし。

あと、技が過激になったとか言うじゃないですか。そういう技をかける方が悪いという点も確かにありますけど、受ける方にも問題があるんじゃないかなあとは思いますよ。それは他人の試合を観てても思う。コーナーポストを思いっきり蹴飛ばせば、あんな頭からは落っこちないだろうなぁ、とか。そういうのはね、巧く自分でかわしていかないと。

あと、男性のお客さんが増えたことで、プロレスをやる側にも影響を与えて、女子プロレスというものが変化している、というのはありますよ。男性の方が反応がシビアな分、会場でも〝今日、お客さんどう？　反応は？〟とか〝今日は男女どっちの方が多い？〟って気にするようになりましたね。

じゃあ、女子プロレスはどうあるべきかというと……、どうあるべきなんでしょうかねぇ（笑）。でも私、女子プロレスのどこに魅かれたかっていうと、やはり〝スピード〟だったんですよ。会社に入ってから何年か経つまで、男子プロレスはいっさい受けつけなかったんですけど、その最大の理由がスピード感だったんですね。観てても、〝行け～!!〟って思うときにレスラーが動いてくれなくて、ワンテンポずれちゃってたから。でも、最近は新日本プロレスとかはテレビで観られるようにはなりましたけどね。だから、スピード感だけは失いたくない。

それと、やっぱりもともと女なんですから、キャラクター的に少しは女らしい私としては（笑）、女のイメージを大切にしたいですよね。ひとことで言うなら、女子プロレスって〝華〟なんですよ。

でもね、それって絶対的なものでもないですよね。例えば神取さんの場合、私にはスピード感がないように見えるんですね。でも、お客さんはそんなところは気にしてないし、関節技という目を引かせる武器があるわけじゃないですか。あと、彼女はプロレスが下手だ、って話があるけど、何やかんや言っても、誰とやってもちゃんと試合として成立させるし、記憶に残るでしょ？　観た人の記憶に残すことも大事だから、違ったスタイルでも良いのかもしれない。

SUZUKA MINAMI Profile
みなみ鈴香【全日本女子プロレス】本名：鈴木美香。S44年4月18日生まれ。千葉県安房郡出身。S60年7月にデビュー。173センチ、62キロ。

●全女のみなみ鈴香、ＬＬＰＷのハーレー斉藤。この2人、もくしは試合内容に対する評価は〝プロレス巧者〟〝プロレスの教科書〟などといった言い回しを誰もが使う。そんな2人が定義する、女子プロレスの理想形。

SUZUKA MINAMI:Photography●KAZUHIRO KITAOKA　Text●SATORU KANAI　Hair&Make-up●YOKO TAMURA
HARLEY SAITOH:Photography●KAZUHIRO KITAOKA　Text●SATORU KANAI　Hair&Make-up●TAKASHI KAMIYA

〝女子〟プロレス…って!?

いやぁ、私がプロレスを語り出したら長いですよ。これでお酒でも入っちゃった日にはもー、朝まで（笑）。普通、選手って仕事から離れたところで仕事の話をするのって嫌がるんですよねぇ。でも自分は大好きで、だから嫌われるんですよ。若手つかまえてグダグダ話し出すから（笑）。

でも、自分もまだわかりきってないし、ちゃんとでききってないからエラそうなことは言えないなとは思うんですけど。とりあえずはいまの女子プロレスって、技の品評会になってるのがどうもねぇ。それでかつ選手生命を奪いかねないと。プロレスっていうのは暗黙のうちの了解みたいなところがあって……ねぇ？　受け身が取れる技を仕掛けて……お互いの体力の消耗勝負みたいなところがあるわけで、そういうところがちょっと欠けてるんじゃないかなと。

あと、ウチのファンには申しわけないけど、団体対抗戦ではイマイチ消化不良みたいな試合が多かった気はするんだけど、それはそれでまた大事なことかなっていうのもすごく感じてるんですよ。いまの女子プロレスの主流に対するアンチテーゼというか、結果論ではあるんだけど、対抗戦での結果がＬＬＰＷなりの回答ということも言えるんじゃないですか？　まあ、それぞれの団体にはいろんなカラーがあるし、目指すところもやり方も違うんで、一概に否定とかはできないとは思いますが。

でも自分としては、いまのメインの流れではダメなんですよね。やはり人間なんだから限界があるんですよ。ルールという枠もあるわけだし。私は、決め技というのは3つぐらい持ってれば十分だと思う。ほかの技を練習するのであれば、その3つを練習して磨いていって、それにこだわりを持つのがプロレスの醍醐味じゃないかなと。

で、自分はやっぱり、顔面蹴りは反則だと思ってるんですね。プロレスはプロレスなんだから、それは含まれないと。例えば試合中に顔面蹴りますよね。そのときのどよめきは全部が全部〝いったれ～〟という声だけじゃないということを勘違いしないでもらいたいです。私はあくまでもルールを超えることじゃなく、ルールという制約の中でどこまで可能かというプロレスがしたいんです。

知り合いで、昔からの流れでずーっとプロレスを観てきて、男子しか観てなかった人で女子を好きになったのが〝スゴイな、女子でもここまでするんかい〟と思ったことがきっかけだっていう人がいっぱいいるんですよ。でも冷静に、男子と並行して観ていく中で、やっぱり女子は行き過ぎだってみんな言うんです。その理由が、女ゆえの体格的なハンデをフォローするための手段だとしたら悲しいですよね。

プロレスって、お客さんが試合できたらいちばんわかりやすいと思うんですけどねぇ（笑）。本当にやってみるとわかるっていう世界なんですよね。でも、お客さんの立場から観た巧いプロレスラーっていうのは、お客さんの心を掴めることですよね。ここであの技をやってほしいなっていうところでボコッとハマるっていう。それを自然に、ナチュラルに出せるのが巧いってことじゃないかなあ。その点で私は、全然そういうのがない（笑）。いやあ、自分じゃわかんないものですよ、そういうのって。本当に、女子も含めてプロレスってタイミングじゃないかな。こっちが期待してる技をジャストに出してくれたり、逆に裏切られたり。そういう微妙な駆け引きこそが醍醐味であり、巧さだと思いますよ。

あと、イスの座り方というのもポイント（笑）。イス半分ぐらいのところに座らせて、身を乗り出させることじゃない？　つまりお客さんを引き込んで、そのリングの中に入れてあげることですよ。

HARLEY SAITOH Profile
ハーレー斉藤【ＬＬＰＷ】本名：斉藤さより。Ｓ42年12月21日生まれ。静岡県焼津市出身。Ｓ61年8月にデビュー。１６５センチ、65キロ。

ハーレー斉藤。

楽しいプロレス、悩むプロレス。

井上京子。

女子プロとは何か？　それは、私のライフワークです。なーんて（笑）。まぁ、たぶん、人によっていろんな考え方があると思うんだけど、やっぱ、私にとってプロレスはすごく大事なもんなんですよ。本当、もし、プロレスがなければいまの井上京子はないと思うし。もし、プロレスでなくて違うものをやってたら、私、こんなに輝けなかったと思う。だから、試合してるときだけじゃなくて、街を歩いてるときでも歯を磨いてるときでも、全部、プロレスラー井上京子なわけ。ただ、家にいるときは、裸でデレーンとしてたりもするけど（笑）。

それとさ、女子プロレスっていったときに、よく男子とどこが違うかって話になるじゃない。まぁ、最近は女子もページ数が増えてきたけど、プロレス雑誌はほとんど男子だし。あと、これ、いま、気づいたんだけど、男子の場合〝男子プロレス〟っていわないよね。となると、この本に〝女子〟がついてなかったら、男子のかと間違われるかもしんない。よく考えると〝女子〟って言葉がすごく大きな意味を持ってる。って、こんなとこで感心してどうする（笑）。

ただね、男女の違いでいえば、私はちょっとみんなと考え方が違うんだよね。よく、〝男子に負けない〟って選手がいるじゃないですか。でも、私は五分と五分だと思う。例えば、チョップ一つにしても、男子はあれだけの体があるから〝スゴイ〟って思えるわけじゃない。でも、逆に女子には、〝こんなに反った逆エビ、男子にはできない〟ってのがあるし。だから、イーブン。それに、私、プロレスにのめり込んだのが男子からなんですよ。だから、もし自分がレスラー辞めて、ただのファンになったら男子しか観に行かないかもしれない。こんなこといったら、怒られちゃうかな（笑）。

あと、男女の違いでもう一つ。以前より減りましたけど、女子の場合、どうしても〝オーッ、股を広げてんなぁ。デヘヘ〟っていうのがありますよね。まぁ、私はタイツ履いてるから恥ずかしくないけど、みんなどうなんだろう？　まぁ、そんなことにかまってらんないか（笑）。ただ、私はね、いやらしい意味じゃなくて、体を見てもらいたいっていうのがあるんですよ。ガウン着て出てきて〝京子ーっ〟ってアナウンスされて、コールが終わったとき、女子でも〝オーッ〟っていわれるような体になりたいと思ってるのね。そのためには、自己管理が大切ですよね。まぁ、見られるってことに関して言えば、みんな嬉しいんじゃないのかな。だって、見てもらいたくてプロレスラーになったんだもん。もう〝この体を見て見て〟って感じだよ、私は（笑）。

それから、よく〝女子は技に走りがち〟っていわれるじゃないですか。私、これ、そのとおりだと思う。そりゃ、確かに私たちはプロだから、一つ一つの技をきちんと見せていかなければならない。でも、プロレスって、技だけじゃないと思うんですよ。いちばん大事なのは、やっぱ、気持ち。〝今日は絶対、コイツに勝ってやるぞ〟って。そういう心構え。大切なのはこれですよ。

もう、みんな、ファンの人の声を気にしすぎ。そりゃ、ファンの意見は大切だし、私がお客さんになったら〝何やってんだよ。てやんでぇ〟とか言うと思うよ（笑）。でも、試合を作るのは私たちじゃないですか。それなのに〝ファンの人の求めてるものがわからない〟なんて。あのさ、私、以前、男のコから貰った手紙で目が覚めたことがあるんですよ。当時、何かの雑誌で、私、弱気な発言をしてたのね。そうしたら〝ファンはそんな弱気なレスラーを観に行くんじゃない〟って。だから〝おう。私が良い試合するから。私に任せろ〟って、そうならなきゃね。だって、ファンは強いレスラーに憧れるんだからさ、やっぱり。

KYOKO INOUE Profile
井上京子【全日本女子プロレス】本名：同じ。Ｓ44年4月22日生まれ。山形県南陽市出身。Ｓ63年10月にデビュー。166センチ、78キロ。

●さしたる悩みも感じさせずにわが〝プロレス道〟を往く井上京子と、観る側にも伝わる苦闘の連続を経て豊田真奈美らとの共闘を選んだ長谷川咲恵。同じ団体に共存する、2人の異なったレスラーの生き方を見る。

KYOKO INOUE:Photography●TAISHIN AOKI Text●HIDENORI KOKUBU Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA
SAKIE HASEGAWA:Photography●TAISHIN AOKI Text●SATORU KANAI Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA

〝女子〟プロレス…って!?

なんで、私って〝次期エース〟とか〝これからの全女を背負って立つ存在〟って言われるんでしょう。私、入門したときから本当に不器用で、受け身も下手だったし、スパーリングやらしちゃ弱いし、プロ・テストには何回も落ちるし。不器用なのは相変わらずですから、そのぶん気持ちでカバーしてるのかなっていうのがいまの状態。だから、なんで私がって思いますよ。

身体があるからかなって思うんですけど、すごく巧いわけでもすごく強いわけでもないんですよ。そうであれば理想的なんですけど、私ってそんなにカッコ良くないから。

みんなが期待する分、その期待に応えてあげなくちゃいけないんだっていう気持ちもすごくあって、それが逆にプレッシャーになっちゃったりとか。それを良いプレッシャーにしなくちゃいけないときもあるんだけど。まあ、ブリザードYUKIのデビュー戦とかねぇ（笑）。

当然、女子プロレスに憧れたからこそいまの自分があるわけなんですけど、どこに魅かれたのかな？ レスラーを目指す最大のきっかけは、やはりクラッシュギャルズだったんですけど、それまでは男子ばかり観てた。タイガーマスクが大好きで。たぶん、女の人のプロレスって表情というか、感情が出るじゃないですか。悔しさとかが伝わってきたり、観てるこっちが頑張って泣けてきたり。だから、感情移入できるほどの何かを与えることができるんじゃないかな、女子プロレスの方が。

プロレスって、気持ちでできると思うんですよ。確かに技も必要だけど、ナックル一発でもただ淡々と殴るのと、本当に感情を込めてやるのとではぜんぜん違うと思うんですよ。いまでも私が覚えてる言葉があって、ユニバーサルのリングに上がったとき、記さん（立野記代）に〝今日はどうでしたか〟って聞きに行ったんですね。そのとき、こう言われたんですよ。「咲ちゃん、技なんて関係ないんだよ。新人のときはエルボーとナックルとストンピングとドロップキックとボディスラム、この5個だけでできるんだよ。それと若さと元気と気持ちでできるんだから」って。

いまだに私、これは守ってるつもり。あとは中野さんに声を出しなさいって言われたことをすごく覚えている。だから、さっき言った5つの技と気持ちを出すこと、それと声を出すこと。この7個だけは絶対に変わらない。

で、私は何のためにレスラーをやってるんだろうと考えたとき、それはあくまでも自分のためなんです。人のためじゃないですよね。私は目標とか形にはこだわらないから。自分がプロレスラーであるということも好き。でもね、年間250試合以上も試合していれば、すっかりプロレスが生活の一部なんですよね。ご飯作るのメンドクサいから外で食べようって思うときあるじゃないですか。それと同じ感じかなあ。プロレスが日常になってるからこそ、将来の目的は？ と聞かれても困るんですよ。

いまでもバットとよく喋るんですけど、いまだに彼女、プロレスが好きなんですよ。で、いちばん悔いの残る辞め方をしてるわけじゃないですか。そういう彼女から聞くと、やっぱりこれ＝プロレス以外のものはないらしいですよ。次のやりたいことを探せばいいんだけど、それがないんだって。だから「咲ちゃん、後悔しないようにやりぃや」って言われるんですけど。

みんなに考えるなって言われるんですよ。最近でも、いま免許が取りたいんですけどみんなに危ないって反対されてて。その意味がわからないんですよ。第三者から見れば私、10人が10人危なっかしいって言いますから。自分で自分のことがわかってないって。すごくしっかりしてると思うのに。

SAKIE HASEGAWA Profile
長谷川咲恵【全日本女子プロレス】本名：同じ。S45年6月17日生まれ。栃木県上都賀郡出身。H元年12月にデビュー。170センチ、70キロ。

長谷川咲恵。

デビル雅美。

Devil Masami

●デビル雅美。'79年8月21日にデビュー。以後、全女〜ジャパン女子〜JWPと、渡り歩いてきたすべての団体で頂点を極め、その比類なき圧倒的なキャリアの中で、ビューティ・ペア〜クラッシュギャルズ〜そして現在と、すべての女子プロレス・ブームを現場で体験しているわけだ。女子プロレスの生き字引が語る、女子プロレスという競技。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA Text●HIDENORI KOKUBU
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA Back Drop ●SET WORK JAPAN SET TWO

重鎮、かく語りき。

“おっぱい大きいな”が観るきっかけでも構わない。私たちは、そんな客を違う意味で興奮させられるかが大切なんです。

「いまの選手と昔の選手を比べると、例えば、プロレスラーの誰々と言ったときに、昔の選手の方がインパクト強いですよね。いまの選手って、たぶん忘れられると思いますよ、引退して5年10年経つと。いま“北斗、北斗”って言ってますよね。でも、彼女がそうなったときに“北斗選手がいた”ってことは覚えていても、どういう技をやっててどんな選手だったかってことは、たぶん……」

デビル雅美、33歳。全女時代はジャガー横田の好敵手として、さまざまな名勝負を展開。WWWA王座にも君臨し、女帝の名を欲しいままにする。以後、ジャパン女子を経て現在JWPに在籍。同団体の大黒柱として、全選手の牽引車的役割を務める。また、女子プロレス界にあった不文律、25歳定年制を初めて破ったパイオニアであるとともに、現役最年長を更新し続ける記録ホルダーでもある。まさに、その存在自体が女子プロレスの歴史の一部であるともいえる彼女に、今回の特集のトリとして登場してもらい、キャリア17年の中で培った女子プロレス観について語ってもらった。

「女子プロの魅力？ 私自身はプロレスのファンになったことがないというか、ファンの目でプロレスを観たことがないじゃないですか。だから、ファンの方々がどういう気持ちを味わいたくて、あるいはどういうものが観たくて会場に足を運んでくださるのかはわからないんですよ。で、私はとっても自分勝手なものですから、自分がおもしろければいいじゃないかと思いながらやってる。というのが正直なところなんですよね、実は（笑）。

ただ、一つだけ言えることは、お客さんの観方が変わってきましたよね。昔のビデオを観ても、選手はいまとそう変わったことはやってないんですよ、男子も女子も。だから、選手が変わってきたというより、ファンの人の観方が変わってきたんじゃないかな。例えば、以前は女子の方ってけっこう、風俗っぽく見られていた時期がありましたよね。“女子のプロレスはスポーツではない”と。たぶん、お客さんもそういう先入観を持って観てたんですよ。でも、世間で女の自立だとかが話題になったり、いろんなことがあって、お客さんの観方が変わってきたんですね。だからいま、選手が触られたりすると、ファンの人がすごく怒るんですよ。で、触った人に対してブーイングや帰れコールが起こったりするんですね。昔の悪役みたいになっちゃうんですよ、触った人が（笑）。もう、ファンの人が女子プロレスラーのことをすごく神聖視してて、そういうスケベ心を持ってるヤツにプロレスを観る資格はないみたいな感じですよ。ただ、はっきり言って、いまでもいますよ、変なオヤジとか小僧とかは（笑）」

ファンのプロレスを観る目の変化。それが下地になり、女子プロレス界は大きな変革期を迎えることになる。そう、ファンが抱き続けた究極の夢、対抗戦の時代へと。

「以前は、女子は全女に行かなければ観られないという形でしたよね。それが4つできて、たまたまどの団体にも全女の出身者がいると。裏で話し合ったりとかそういうことは全然ないんですけどね（笑）。で、ファンの人から“すべての選手が良いとは言えないけれども、各団体に何人かずつ良い選手がいる。そういう人たちが団体の垣根を越えてやってくれるといいんだけど”って声が出始めたんですね。だから、私自身も取材を受けるたびに“おもしろいんじゃないかな。対抗戦をやってみるのも”って答えてたんですよ。そこに全女の25周年記念っていう、各団体に声をかけやすい状況があって。だから、やっぱりタイミングでしょうね。だって、最初に対抗戦がかないそうになったのは長与クン（千種）とカンちゃん（神取忍）だったわけじゃないですか、本当なら。だけど、そのときはタイミングが合わなかった。で、フリーになった私が長与クンより先にカンちゃんとやってしまった。あのときは、けっこう、長与クンにうらまれましたよ（笑）。でも、私自身はそれほど神取選手とやりたいと思っていたわけではないので“そんなものなのよ、決まるときは”って言ったんですけどね。だから、やりたいと思ってやれるものじゃないし、やりたくないと思ってもそれで済むものじゃないし。お客さんの要望と、タイミング、すべてがうまくいかなくちゃダメなんですよ、結局。今回は、そういうものがたまたまうまく合ったんで、グーンときたんでしょうね、女子プロレスが」

ファンの声と言う環境が整い、そこにタイミング良くきっかけが起こって、初めてムーブメントとなりえた対抗戦。それが昨年の東京ドームで一つの形をなした現在、彼女は女子プロの行く先をどのようなものとして捉えているのであろうか。

「ともかく、個人個人がもっとプロになることですね。なんか運だけできてるのに、それが自分の実力だと勘違いしてる人が多いですから。例えば、さっきのファンの人の観方にもつながりますけど、別に女子プロを観るきっかけは“あのコ、おっぱい大きいから観てみたいな”でもいいと思うんですよ、私は。艶やかさは男子にない女の武器で、お客さんの目をパーンと魅きつけられますからね。ただ、スケベ根性で来たお客さんを違う意味で興奮させられるか、つまり、2回目以降、純粋に試合を観にこさせるために良い試合ができるかどうか。それが大切なんです。“デビル雅美”のコールでガウンを脱ぐ。そしたら、ファンの人が“ワーッ”って言ってくれますよね。でも、そのときの私は着せ替え人形と同じなんですよ。単純に言えば、モデルさんが衣装を着て“これキレイでしょ”ってやってるのと同じような感じ。だけど、試合が始まったら素のプロレスラーになっちゃうわけですから。最後にスリーカウントを取るにしろ取られるにしろ、試合でお客さんの目に何かを残せる選手。それが本当の意味でのプロなんですよ。リングに上がってプロレスやれば、プロなわけじゃない。

それから、いまの選手は技に走りがちと言うか、ヘタなくせに技を使いたがり過ぎ。大切なのはいま自分ができる技、確実に使いこなせる技をどれくらい増やせるか。そして、その技でどれくらいお客さんにインパクトを与えられるかなんです。そう考えると、昔の先輩方はすごいですよ、やっぱり。いまみたいな技はやってないし、スピードでもかなわないかもしれない。だけど、インパクトが違うんですよ。だから、私もそういう選手を育てなければいけないと思うし、変えていかなきゃダメですよね。

私自身のことだと、目指していると言うか、こうありたいなって思う試合は個人の戦いじゃないんです。相手、観客、そして私。この3者がきちんとした三角形にならないとダメなんです、私の場合。どれか一つが欠けてもダメなんですよ。で、これがうまくいったなと思うときは、試合が終わったあとビールがウマイ（笑）……。って、いろんなことを言いましたが、私がプロレスのことを考えるようになったのは、全女を辞める半年前ぐらいから。だから、プロレスを考えてるキャリアでは、関西とかと同じだったりするんですけどね、実は（笑）」

まだまだ、デビルは走り続けなければならない。なぜなら、ドームが終わったいまほど、彼女の経験と見識が求められる時期はないのだから。そして、それは運、環境、タイミングのすべてが合って、王者になったものの宿命なのかもしれない。

デビル雅美。

DEVIL MASAMI Profile
デビル雅美【JWP】本名：吉田雅美。S37年1月7日生まれ。福岡県北九州市出身。S53年8月にデビュー。168センチ、70キロ。

“女子”プロレス…って!?

女帝、紐育にて答える。

ブル中野から、女子プロレス界への提言（メッセージ）

――あなたにとっての女子プロレス観を教えてください。

中野　現在、WWFの試合をしている私にとって女子プロレスは仕事であり、“天職”そのものです。これ以上に私を生かせる仕事はありません!!

――女子プロレスとはどうあるべきと思いますか。

中野　女子プロレスとはこうあるべきだ、ということよりも、ブル中野がこれから、どうやっていくことが自分自身にとって重要。

――男子プロレスと女子プロレスとは別のものか否か?

中野　プロフェッショナルな闘いを見せるのがプロレスなら、男も女も分ける必要はない。私はWWFで男性の中に入って頑張っているし、ポジションも上がってきた。

――女性という部分を出すことも、女子プロレスという競技では必要なのでしょうか?

中野　自然の個性としては必要だが、無理に出す必要もない。

（2月28日／東京→アメリカ国際電話インタビューにて収録　協力／小川宏）

●レスラーの数だけ、それぞれの女子プロレス観というものが存在する。性を内包した女子プロレスと性を超えたプロレス、次から次へと繰り広げられる技への耐久性を競うプロレスとひとつの決め技にすべてを賭けるプロレス。王道のプロレスと邪道のプロレス。これらがひとつの世界に同居することに、現在の女子プロレスの意味がある。そして、さまざまな価値観やスタイルを選択できるからこそ、いまほど幸福な時代はない、と断言できるのだ。

もう、幼年期は終わった。これからが、女子プロレスという運動体が成熟に至る段階へと移ったのではないだろうか。そして、そうならなければいけない気がしてならない。

矢樹広弓。

困っちゃうな♡

●〝すぐ困る〟〝最近、試合が終わると子泣きじじぃの体勢で退場する〟などですっかりおなじみの矢樹広弓（どんなじゃ）。今回はプライベートな内容のイヤ〜ン♡インタビューで…………

Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●SATORU KANAI
Hair & Make-up●TAKASHI KAMIYA

——今回は矢樹選手のプライベートについて聞きたいと思います……が、なんとなく無趣味のような気がしますけど（笑）。

矢樹　え、やっぱわかりますか（笑）。最近、特に何もしてないんですよ。もうパチンコにも行かなくなっちゃって。

——何で。

矢樹　先立つものが（笑）。

——そりゃ悲しい（笑）。

矢樹　悲しいですよ。もうほとんどテレビ観てゴロゴロしてます。

——外に行ったりしないんですか？

矢樹　最近寒いんで。

——福島出身のくせに寒さに弱いと（笑）。

矢樹　東北人のくせにすごい寒がり屋なんですよ。もう絶対ダメみたいな感じ。

——じゃあ、もうお休みのときはまさにダメ人間を地で行ってるわけですね（笑）。テレビ観ては寝て、食っちゃ寝。

矢樹　食っちゃ寝の生活してますねぇ。おしゃれも全然しなくなってこれじゃいけない、みたいな。髪もボサボサだし。最近、もう全然美容院らしきものに行ってないんですごいんですよ。一応、寮の近所の一軒だけあるんですけど、この前も新人の子が失敗してて、ホントそこはスゴいんですよ（笑）。あとは電車に乗らなきゃいけないから伸ばし放題で。

——ロングにしたことってあるんですか？

矢樹　オーディションのときが最高だったんです、肩まであって。本当は伸ばしたいんですよ、理想は三つ編み（笑）。

——なんか想像するとスゴイいですが（笑）。

矢樹　だっていままでしたことがないんですもん。必ず刈り上げとかで。柔道のときって髪の毛が邪魔になるし、減量もあったから、少しでも長いとそれも体重になるんじゃないかと。

——よほど長ければの話でしょ、それはやっぱ（笑）。

矢樹　（笑）ええ、気持ちだけだったんですけど。

——このまま伸ばし続けて、昔からの悲願を成就させるというのはどうですかい？

矢樹　でも、この前も関西さんにお会いしたときに、〝髪の毛どうするんだ〟ってブツブツ言われちゃって。

——まあ、いまの髪形のイメージが強いからなあ。

矢樹　そうですか!?　やばいなぁ。

——あと、髪の毛長いと大変じゃないですか。女子プロレスだと、ヘアケアも普通の人以上に気を使ったり。

矢樹　もう、この長さですごく痛んじゃってて、枝毛とかスゴいんですよね。よく引っ張られるから。

——あと、ロングの場合だと、視界の問題もあるんじゃないですか？　マスクマンと同じで。

矢樹　きっと大変だと思いますよ。試合が終わってリングとか掃除するとスゴいですもん、髪の毛の固まりがゴッソリと。

——ところで、テレビ観るってどういうのが好きなんですか。

矢樹　えーと……別に。内容は観なくてもとりあえず部屋に入ったらテレビをつけてから電気をつける、みたいな。ゲームをやってるときでもテレビつけっ放しです。

——ゲームってファミコン？

矢樹　や、ゲームボーイとゲームギア。最近、暇つぶしに始めたの。それまで全然できない人だったんですね。

——どういうので遊ぶんですか？

矢樹　ゲームボーイだとピンボールとかパチスロとか、あと物語になってるヤツ。

——ああ、RPGものね。女の子がいかに好きなテトリス系は？

矢樹　コラムスでしたっけ？　あれをゲームギアでやってますね。

——でも、ゲームボーイとかって小さいでしょ？　スーファミなりプレイステーションにグレードアップしないの？

矢樹　先立つものが（笑）。

——何かにつけ、ソレですか（笑）。

矢樹広弓。

好きな男性のタイプは豊川悦司と加藤茶。

矢樹　あのですね、寮を出られるかもしれないんで、お金を貯めないと大変なことに。

—ついに一人暮らしするわけですか。

矢樹　もしかすると。でもわかんないですけどね。オーディションで入ってきた子が入ってくると、押し出し式で私と菅生が出るかもしれないんです。だから、いざ追い出されたときに備えないと。

—いま新人が7人もデビューしたじゃないですか。寮ってどういう状況？

矢樹　もうスゴいですよ、修羅場化してて。

—押し入れに頭突っ込んで寝てる奴がいたりとか。

矢樹　アハハハ。そこまでヒドくはないですけど。

—いままで、一人暮らしの経験は？

矢樹　高校のときから一人暮らしだったんですよ。柔道の強い高校が実家から離れたところにあったんで。最初は下宿してたんですけど、おばさんが大変な人だったんで自炊して、みたいな。

—どう大変だったんですか（笑）。

矢樹　いい人なんですけど、お弁当のおかずにちょっと不満が（笑）。ま、減量があったから、食事制限とかは自分でやった方が簡単ですし、残しちゃったりすると可哀相だから。

—じゃ、もう料理もバッチリだと。

矢樹　でも東北人の味付けなんで自信ないんですよ。濃いんですね。でも辛いのはダメなんです。普通のカレーの甘口もダメなんですよ。

—星の王子さまカレーぐらいじゃないと食べられないと（笑）。

矢樹　あと、クレヨンしんちゃんのとかですね（笑）。あと、私お豆腐がダメなんですよ。

—何で。

矢樹　マーボー豆腐の甘いのは大丈夫なんですけど、冷や奴とかおみそ汁に入ってるのがダメ。

—だから何で（笑）。23の大人の女性として、なぜ豆腐がダメなのかを深く考えてみては。絹ごしも木綿も両方ダメ？

矢樹　うん、ダメ。

—例えばおみそ汁に入っているときは？

矢樹　汁だけ飲んで残します。

—なんか前回の中山香里インタビューのようになってますが（笑）。でもさ、豆腐なんて味しないじゃん。

矢樹　しないから逆にダメかもしれない。

—じゃあ最後に、殿方のファンが最も聞きたい質問で、好きな男性のタイプを。

矢樹　好きになった人がタイプ。だからスゴいですよ、いままで好きになったタレントの人。

—脈略がないの？　ここ最近で思い出してみるとどんな感じ？

矢樹　えーっと、豊川悦司から加藤茶までって感じですか。

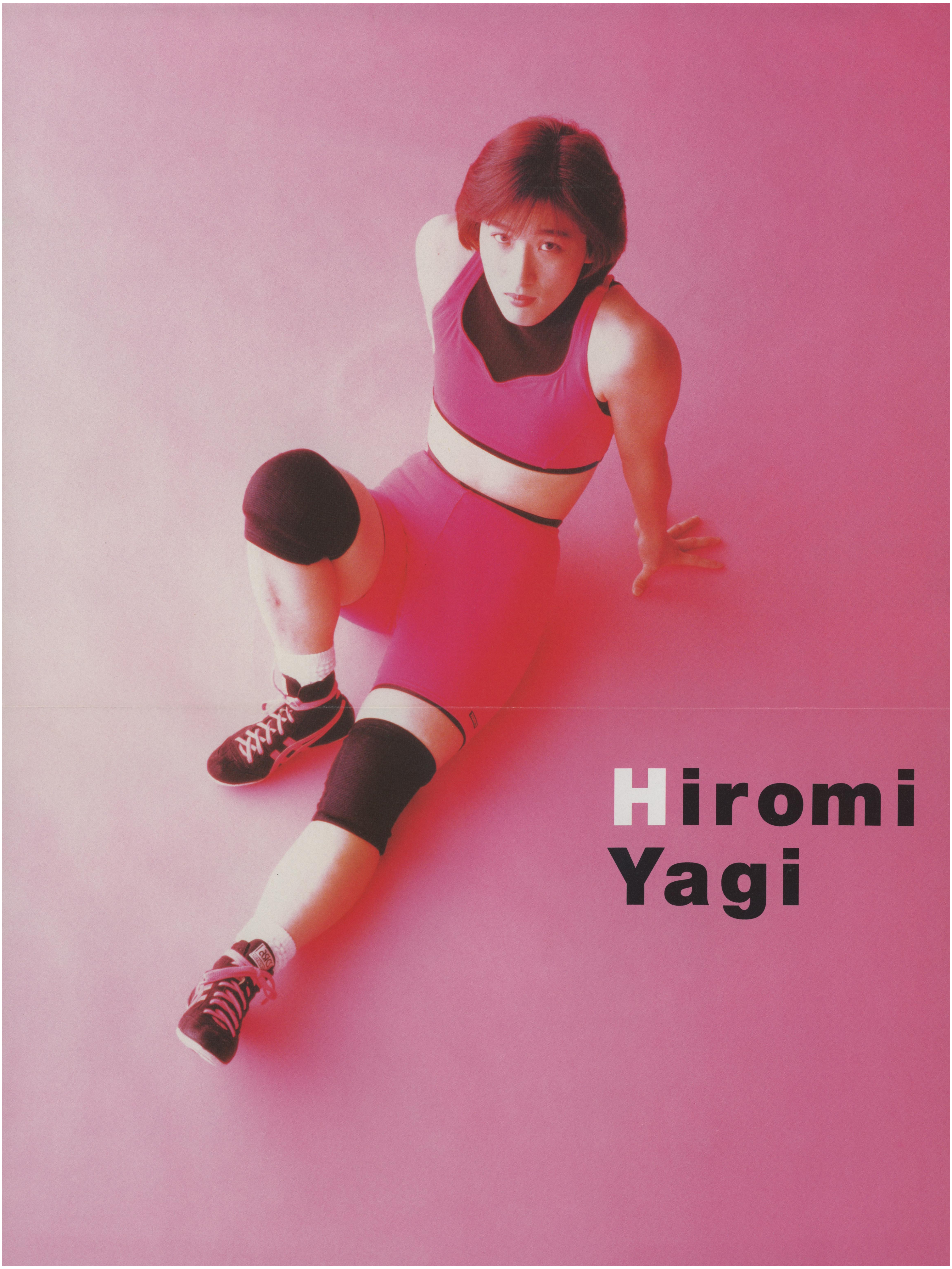
—加藤茶（笑）。いやぁそりゃスゴいわ、バーリ・トゥードって感じで（笑）。なぜ加藤茶が良いのよ!?

矢樹　自分でもよくわかんないんですけど。昔、ドリフってすごく好きだったんですよ。でも小学校が私立で厳しいところだったんでドリフは観ちゃいけないって作文まで書かされちゃった（笑）。

—ところで、ドリフはカトちゃん派と志村派のどっちだった？

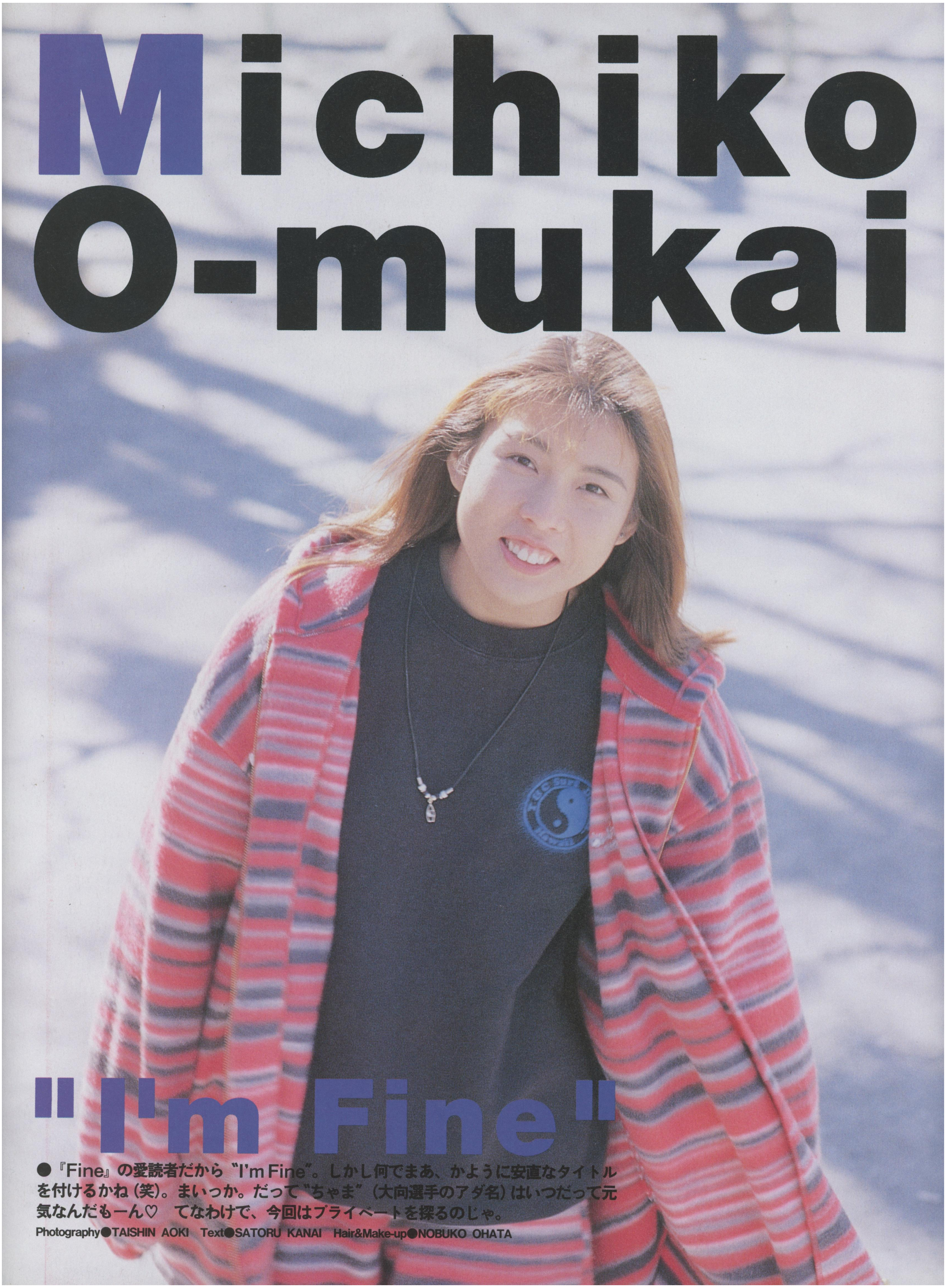
矢樹　カトちゃん。

HIROMI YAGI Profile
矢樹広弓【ＪＷＰ】本名：柳沼広美。Ｓ46年8月5日生まれ。福島県福島市出身。Ｈ6年1月にデビュー。152センチ、53キロ。


Hiromi
Yagi

Michiko
O-mukai

Michiko O-mukai



"I'm Fine"

●『Fine』の愛読者だから“I'm Fine”。しかし何でまあ、かように安直なタイトルを付けるかね（笑）。まいっか。だって“ちゃま”（大向選手のアダ名）はいつだって元気なんだもーん♡　てなわけで、今回はプライベートを探るのじゃ。

Photography●TAISHIN AOKI　Text●SATORU KANAI　Hair&Make-up●NOBUKO OHATA

彼氏にするなら年上で、頭の良い人がいいな♡ だって、両方ともバカだったら困るもの（笑）。

Michiko O-mukai

―『FLASH』見ましたよ、すっごいのを。

大向　すっごいの（笑）。でも、そんなにすごくないですよ、あれは。

―もっとすごいのがあるの？

大向　ないですけど（笑）。

―てなわけで一般週刊誌に載るなど、いまやLLPWの宣伝担当ってな感じですが。

大向　ええ、（穂積）詩子さんもいなくなったいま（笑）。でも自分、そういう仕事って別にイヤじゃないんですよ。プロレスとは別に、いましかできないことだと思ってるから。やっぱヌードとかになるとちょっとできないですけどビキニぐらいだったら、いましか撮れないじゃないですか。いまだったら記念にもなるし、何かねぇ？　いいですよね（笑）。

―〝92㎝の美乳にフォールされたい〟みたいな（笑）男の煩悩がタップリな取り上げられ方はどう思う？

大向　でもまあ、そういう人たちが読む本なんだからしょうがないと思ってます。

―そういうニーズに合わせてると（笑）。

大向　だってペラペラって見たら、AVの人かと思っちゃいますよね（笑）。でもまあ、あれをパネルにしてくれるって言ってたんでラッキー♡　とか思って（笑）。

―ああいう仕事って、会社のためとかって考えたりする？

大向　う～ん、会社のためにもなると思いますよ。あの写真を見て〝あっ、こういう子がいるんだ、この子はどういう試合をするんだろう〟と思って会場に来てチケットを買ってくれれば、会社にお金が入るじゃないですか。そういうつながりを大事にしたいし。会社にできることといったらそれぐらいじゃないですか。

―まだ19歳ですよね。そんな若いのに会社のことを考えるなんて偉いなぁ。

大向　エヘヘヘ。それは、社長が風間さんだから考えられるっていうんですか。社長でもあってレスラーでもあって先輩でもあって。それに自分、風間さんの付き人やってますから、そういう仕事を通じて、すごく恩返ししたいなって。

―で、そういう仕事が入ってくると、お休みの日も減ってゆくことにありますわな。そこで、休日の過ごし方を教えてください。

大向氏　買い物をよくしますねぇ。

―やっぱアレ？　お買い物に行ってお金使ってバンザ～イみたいな（笑）。そういうカタルシスを得られるのが好き、とか？

大向　そう（笑）。気分が発散できるというか、ストレスが溜まってるときに欲しい物をバーンと買ってエヘヘッみたいな。

―やっぱり主に買うのは洋服？

大向　服とか、あと自分、お財布集めるの好きなんですよ。

―お財布？

大向　そうなんです。お財布で欲しいのがあったら、ちょっと高くても〝もう買っちまえ～〟とか思って……。あとで泣くんですけど（笑）。

―中に入れる肝心なものが、ってヤツ？

大向　アハハハ。中身がないとか、カードしか入ってないとかね。

―いまお財布、何個ぐらい持ってるの？

大向　10個以上はあるかもしれない。

―なんで好きなんだろうね、お財布。

大向　う～ん、何か気づいたら、お財布ころころ代えてるんですよ。先輩に〝いつも財布違うね〟って言われて、それで私ってお財布好きなんだなあと思って（笑）。

―他人に言われて、自分の趣味に気づいたという（笑）。じゃあ、いまいちばんお気に入りのお財布は何？

大向　ビトンが好き♡　いま持ってるのはエピの青いヤツでぇ、丸井のローンで買った（笑）。

―あらまあ（笑）。

大向　あと凝ってるのはね〝タオカオ〟のマークが好きなんですよ。なんかすごい前に流行ったらしいんですけど、いま付けてるネックレスも指輪も時計も、ピアスもそうでしょ♡

―あらまあ（笑）。

大向　1回凝りだすと、すっごくハマっちゃうんですよね。

―あと、この前ハーレー選手が言ってたんですけど、大向選手はファイン系の服しか持ってないという話ですが（笑）。

大向　アハハハ。まあクイック・シルバーとか、サーファーの方が着るようなファッションって確かに好きですよ。ま、これもいましか着られないかなって感じで。とにかくいま、できることをいろいろとやっておいた方が良いかなって。何もかも（笑）。

―何もかも（笑）。あ、ところでハイヒールとか履くの？

大向　ヒールはねぇ、背が高いから……。よけい背が高くなっちゃうから、パンプスとかを履いちゃうんです。

―やっぱ、背が高い女の子ってそういうところでコンプレックス持つんだよね。

大向　そうそう。例えばトレーナーでも、普通の女の子が着たらだぼっとして可愛いのに、私の場合だぼだぼしないから困るの。

―なるほどねえ。じゃあ毎月のお給料はどうやって使う？　例えば洋服が50％で食費が2％で、ってそれじゃ人としてマズイよ（笑）。

大向　（笑）う～んと、まず光熱費と……。

―いきなり現実的な（笑）。

大向　エヘヘ（笑）。あとは交通費とか選手会の積立とか、そういうお金をまず抜いて、それから食費と、残ったのをおこずかいにして、封筒に入れて分けるんですよ。それから1か月が始まりますね。

―そうしないと危険なの？

大向　そう。危険。非常に（笑）。すぐに手を出しちゃうから。

―でも寮生活だと、そんなにお金かかんないでしょ？

大向　家賃だけはかからないんですけど、道場に行く交通費がいちばんかかるんですよ。川口だし、電車以外にバスの往復もあるから。あ、あと電話代もだ。

―電話ってよくかけるの？

大向　よくしますね。やっぱり寮で独りぼっちだから電話ばかりしてるんですよね。多いときで月に8千円ぐらいかなあ。

―そんなに多くないじゃん。長電話しないでしょ？

大向　うん、かけてもらうから（笑）。いや、友達にはそう言わないけど、親とかおばあちゃんちだったら。だって岩手だもん（笑）。1～2時間話すこともあるけど、ふだんは用件だけバババッと喋ってバイバイ、みたいな（笑）。

―へえ。じゃあそろそろ、恋愛面の話に行きましょうか。好きなタイプの男性は？

大向　やっぱり年上で、自分のダメなところをいろいろカバーしてくれる人がいい♡　だって自分がバカだからねぇ……。

―両方バカだと困るってか（笑）。

大向　そう、せめて片っぽは頭良くないと（笑）。だって自分があんまり物事知らないじゃないですか、中学卒業してすぐこの世界に入ったわけだし。あとは、そういうことをあまりバカにしない人？　バカバカって言われると、本当にバカにされてるみたいだもん（笑）。

―ところで、なぜアダ名が〝ちゃま〟なの？

大向　あのですねぇ、全女時代にSUN族で働いてても、ホントにボケてばっかりだったんですよ、いまと同じ天然ボケの数々をしてたんですけど（笑）。そのとき〝ボントにもう、お子ちゃまなんだから～〟と言われたのが〝ちゃま〟になったんです（笑）。

―だから大人が好きなのね（笑）。

MICHIKO O-MUKAI Profile
大向美智子【LLPW】本名：同じ。S50年5月30日生まれ。岩手県久慈市出身。H4年1月にデビュー。171センチ、65キロ。

──右鎖骨を骨折したのは'93年11月の試合中でしたから、もう1年4か月が経ちます。長い欠場になってしまいましたね。

府川　こんなに長くなるとは思ってなかったんです。まさか手術までするとは思っていませんでした。

──欠場中はいろいろと考えることもあったんじゃないですか。

府川　何度もプロレスを辞めようと思ったりしました。かなり無気力になったり、投げやりになったりもしました。〝もう辞めよう〟〝いや、やっぱり……〟って、自問自答してました。

──最終的には心の中でプロレスへの愛情が勝ったわけですね。

府川　そんな、自分は愛情といえるほどまだプロレスを知りませんから(笑)。先輩たちからアドバイスを受けたり、ファンの方からの手紙に励まされたりしたおかげだと思います。まだ2試合しか出たことがない未熟な自分に、周囲の方が優しく接してくれたことがすごく嬉しかったです。

──欠場中の1年4か月の間に学んだことはありましたか。

府川　そうですね。もう、なにがあっても〝絶対にプロレスは辞めようと思わない〟強い気持ちだと思います。

──そういった強い意志を持つようになったという点では、この時期は無意味じゃなかったわけですね。

府川　そう思いたいですね(笑)。実は、そういうケガとかがあったから、自分は全女に入門してから〝楽しい〟って思ったことが一度もないんです。だから、これからそういう〝楽しさ〟を見つけていきたいなって思ってます。

──去年の末ぐらいからレフェリーを務めていましたね。

府川　去年の半ばごろまではずっと会場の売店に立ってたんです。それしか仕事がないので、リング・サイドにも付けない、選手控え室にも行けないっていうのが続いたんです。すごく自分がプロレスから遠ざかっていく気がしたんで、思いきってレフェリーをやらしていただきました。

──実際やってみてどうでしたか。

府川　エキシビジョンを含めて30、40試合はやらせてもらったんですが、後楽園ホールでは緊張しました。あそこは、自分がプロ・テストに合格し、デビューした会場ですから、〝あーまたこのリングに立てたんだ〟って気持ちが……。

──同期や先輩の試合を裁くことが多かったと思うんですが、焦りみたいなものを感じたりしませんでしたか。

府川　それは感じました。後輩の成長ぐあいをリングの上で目の当たりにしてたわけですから、やっぱり焦りました。〝自分は何をやってるんだろう〟って思ったり……。

──これからは、1日も早く同期や後輩に追いつかなければいけませんね。

府川　ジャガー（横田）さんに言われたんです。〝府川、お前はゼロからのスタートじゃなくて、マイナスからのスタートだぞ〟って。本当にその通りなんですよ。自分はレスリングの基礎をマスターする前にケガで欠場してしまったんで、人より劣ってるんです。だから、練習も人と同じことをしてちゃダメなんです。欠場前も人に見せられるような筋肉は付いてなかったんですが、そのとき以上の体を作らないとまた同じことを繰り返すことになってしまうと思います。

──後輩には負けられませんね。

府川　後輩には実力の差がつけられているかもしれませんが、気持ちの上では絶対に負けません。やっぱり、意地でも……。

──今、ケガの恐怖はないですか？

府川　自分はないです。それよりも、対戦する相手に〝またケガさせちゃうんじゃないか〟って不安感を与えてしまうことが怖いです。それじゃレスラー失格ですから。そのためにも人一倍がんばらないと。はい。

──試合で心掛けていることは。

府川　自分はまだ技なんか全然ないんです。基礎的な技を雑にではなく、丁寧に出していきたいと思います。

──意識している選手はいますか。

府川　自分はまだそういう段階じゃありません。とにかく自分自身には負けないようにしています。いまは早く試合の流れに着いていかなければということに必死です。それに、自分のことを知らないお客さんもいっぱいいるので、早く覚えてもらいたいですね。

──いまの全女の中での自分の位置を考えたりしたことはありますか。

府川　あー、それはしょっちゅう考えてるんです(笑)。自分は選手としてほとんど試合をしていないし、頼れる同期も一人もいないし、なんなのかなぁって……。

──事実上の同期がいないんですよね。

府川　はい。仕事の上では、玉田（りえ）、前川（久美子）、椎名（由香）が同期なんですが、みなさん本当は先輩ですから。

──悩みを打ち明けたりする相手は？

府川　いないのかもしれません(笑)。

──さて、前回VOL.2のインタビューの最後に〝当面の目標は身長を10センチ伸ばすこと〟って言ってましたけど、どうですか、伸びましたか？

府川　はい。あのときは151センチだったんですけど、今は152センチになりました。1センチだけ伸びたんです。ウフ。

──それはおめでとうございます(笑)。

府川　ありがとうございます(笑)。どうせ伸びるなら、やっぱりあと15センチは伸びてほしいですけどね(笑)。

YUMI FUKAWA Profile
府川由美【全日本女子プロレス】本名：同じ。S51年5月22日生まれ。神奈川県横須賀市出身。H5年11月にデビュー。152センチ、50キロ。

●右鎖骨骨折の治療を経て、この春、約1年半ぶりにリング復帰予定の府川由美。現在、再度プロ・テストの合格印をもらうため連日猛練習中。がんばれよ！　僕らのユミちゃん!!

Photography●TAISHIN AOKI
Text●YOKOHAMA JAMES DEAN
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA

ケガで欠場中は、苦しくて何度もプロレスを辞めようと思いました。でも、先輩やたくさんのファンの励ましのおかげでいま、私はここにいます。

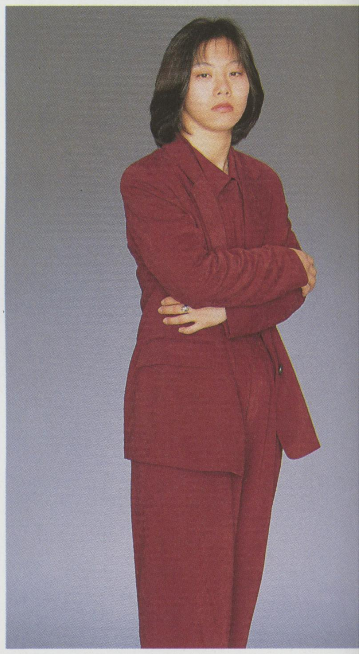
ni Fukawa

負けないぞ。
Yu

CHAPARITA ASARI

“渡辺真美”、21歳。『ハミング』を使って洗濯しているときが、いちばんシアワセです。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA　Text●YOKOHAMA JAMES DEAN　Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA



Myself

●デビュー以来、「ちっちゃくてカワイイ」と支持されてきたASARIもすっかりと大人へと成長したようだ。本人も“女性”としての意識が目覚めてきた!!……のかな!?

—さて、今回はチャパリータASARIではなく素顔の“渡辺真美”の私生活を探ってみたいと思います。まず、余暇の過ごしかたを教えてください。

ASARI　試合がオフのときは、家にいてもやることがないので、いつも全女の事務所に行ってます。事務所の人には“お前はホントに暇なやつだなー”って、先輩には“事務所にいつもいるよね”って言われてます。

—で、事務所で何をしてるんですか。

ASARI　何もしてません。ボーっとしてます。人の仕事の邪魔をしたりしてるかな。小川さんや田中さん（共に広報部）にちょっかい出したりもしてます（笑）。

—友達いないんですか（笑）。

ASARI　そうじゃないんですけど、私たちは普通の人と休日が違うじゃないですか、だからめったに友達とは……。たまにある連休は実家に帰って寝てます。

—買い物しに出かけたりとかは。

ASARI　事務所が6時に閉まっちゃうんで（笑）、それ以降にたまに出かけたりはします。

—お一人で？

ASARI　元同期の椎名（由香）と一緒に行ったりします。彼女とは夜中にカラオケに行ったりもしますね。家にいてもホントにやることないんですよ。

—自宅にテレビがないとか？

ASARI　ありますよ（笑）。でも私はテレビとか映画は観ないんですよ。あんまり興味がないんです。本や雑誌もめったに読みません。あ、『女子プロレスグランプリ』は読みますよ。

—いや、別にそんなところで気を遣ってもらわなくても……。

ASARI　ホントに一番好きな雑誌なんですよ。“へぇ～、あの選手こんなこと考えてるんだ～”って感心しちゃったりして。写真もキレイですしね。

—ありがとうございます。誉めていただいた御礼に“巻頭20ページに抜擢……”ってわけにもいきませんが。

ASARI　（笑）。

—普段は音楽も聴かないんですか。

ASARI　音楽は聴きます。中学1年のときから長渕剛の大ファンなんですよ。彼のCDは全部持ってます。『JEEP』に収録されている「マイセルフ」が私のお気に入りです。曲もそうなんですが、自分を貫く彼の姿勢が好きなんです。

—じゃ、好きな男性のタイプは？

ASARI　長渕剛です（笑）。

—聞くまでもなかったですね（笑）。彼の歌を聴きながら料理をしたりとか？

ASARI　私は料理が何にもできないんですよ。普段は外食で済ますことが多いので、作るのは目玉焼きと即席ラーメンぐらい（笑）。でも、洗濯は好きなんですよ。なんかいいですよね、洗濯って。

—そうですか？　全自動洗濯機だったらポイって汚れ物を突っ込んだら、それで終わりじゃないですか。あとは干すだけ。

ASARI　いや、全自動はダメなんですよ。やっぱり2層式じゃないといけません。洗濯とすすぎが終わったら洗濯物を取り出して、脱水機に入れる。この作業が好きなんですよ。“あ～、いま自分は洗濯してるんだな～”って実感が湧いてくるじゃないですか。

—別に実感湧かなくてもいいと思うんですけど（笑）。

ASARI　自分は仕事上どうしても汚れ物が多く出るじゃないですか、だから余計好きになったのかもしれません。

—それといままで何年も先輩レスラーたちの洗濯物を預かってきたからですかね。

ASARI　えっ、いまでも先輩たちのは洗ってます。洗濯だけはいままで一度も面倒くさいと思ったことないんですよ。付き人をさせてもらっていた宇野（北斗）さんの水着はフリルや細かい物がたくさん付いていたんで、洗濯機に入れるとダメになっちゃうんですよ。だからいつも1枚1枚ていねいに手洗いをしてました。

—そういう自分がまた好きだったり？

ASARI　はい（笑）。あと私、あの『ハミング』の香りも好きなんですよ。やっぱり“あ～、洗濯してるんだな～”って思えて（笑）。だから家に帰ったときに、部屋の中にあの香りが漂っていると何だか嬉しくなっちゃうんですよね。

—そこまで洗濯が好きならば、レスラー引退後はクリーニング店に務めてみたらどうですか。毎日のように洗濯物に囲まれて生活できるんですよ。

ASARI　それはできません。お世話になっている人や自分の物を洗うのは好きなんですけど、全然知らない他人の物は洗いたくはありませんから。

—将来、結婚したときの旦那さまの汚れ物は洗い放題ですね（笑）。

ASARI　そうですね（笑）。あ、そう、私は結婚引退が夢なんですよ。

—夢ですか。

ASARI　はい。私はこのプロレスの世界に入る前は、ほかの人とは違った仕事がしたい、違った生活を送ってみたいって願望が強かったんです。実際に、その夢は叶ったわけですから、今度は普通の平凡な結婚生活がしたいって思ってるんです。

—平凡な結婚生活というのは？

ASARI　外では旦那さんが汗水流して働いて、家の中は自分がしっかりと守る。

—それで、もし泥棒が入ってきたら家を守るために仕方なくカンガルー・キックをブチかましちゃうとか（笑）。

ASARI　いや、そのときは、スカイツイスター・プレスで。（笑）。

CHAPARITA ASARI Profile
チャパリータASARI【全日本女子プロレス】本名：渡辺真美。S48年9月15日生まれ。東京都荒川区出身。H4年11月にデビュー。152センチ、52キロ。

LIVE AKTION 1995 JAN.-FEB.

Long as we got the ring, We fight forever

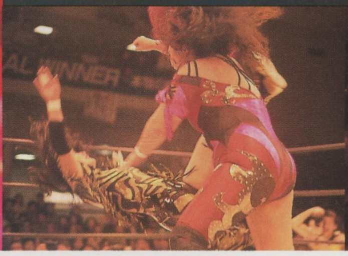
●鍛えあげられた身体を華やかなコスチュームでまとい、さっそうと花道を行く。スポット・ライトが当てられた、その瞬間、すべてのレスラーは眩しいほどに光輝いている。そして、そこにリングがある限り彼女たちは永遠に戦い続ける——。

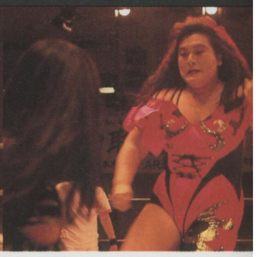
Photography●SYUSUKE NAKAMURA

イーグル沢井

ぶちかましの美学。

SHOOT POINT●10 FEB. KORAKUEN HALL





巨大猛禽イーグル、無敵のぶちかまし。

イーグル沢井といえば、ぶちかましである。"肉弾"という表現が、これほどふさわしいレスラーは、ほかに見当たらない。体重110キロ、アジャ・コングよりもコンバット豊田よりも重い、スーパー・ヘビーウェイトの女王だ。

イーグルのぶちかましが、プロレス・ファンに広く認知されたのは、女子プロレス4団体交流戦の端緒となった'93年4月2日の横浜アリーナ大会だろう。

このとき、イーグル沢井はハーレー斉藤とタッグを組み、全女最強コンビ、いや女子プロレス界の最強の2人ともいえる、ブル中野、アジャ・コング組と闘った。

このマッチ・メークに対して、アジャは記者会見のときから、相手が役不足だとあからさまに不満をとなえていた。実績からいって、アジャの不満は当然といえた。大半のファンの思いも、アジャと同じだったはずだ。これをくつがえすには、リング上の闘いで納得させるほかはない。

ハーレーはダイナマイト・キッド顔負けのスピードと切れ味ある技でブルを攻めこむ。そしてイーグルは、アジャに対して真っ向から肉弾ぶちかましを挑み、一度、二度、三度目に見事アジャを跳ね飛ばし、尻もちをつかせた。もちろん、ブル中野をもはじき飛ばす。イーグルの肉弾の威力をアリーナの観客全員が目の当たりにしたのだ。

94年7月14日、東京体育館で、イーグルはコンバット豊田と対決した。スーパー・ヘビー級同士の重厚な激突。イーグルのぶちかましは巨大な肉の壁・コンバット豊田をも転倒させた。

そして94年11月20日東京ドーム大会、Vトップ・ウーマン・トーナメント初戦。イーグルはデンジャラス・クイーン北斗晶をもサンダーファイアー・パワーボムで叩きつけ、徹底的に肉弾突撃で跳ね飛ばした。

LLPW内の闘いでは、神取忍をも立野記代をもぶちかましの餌食にしている。

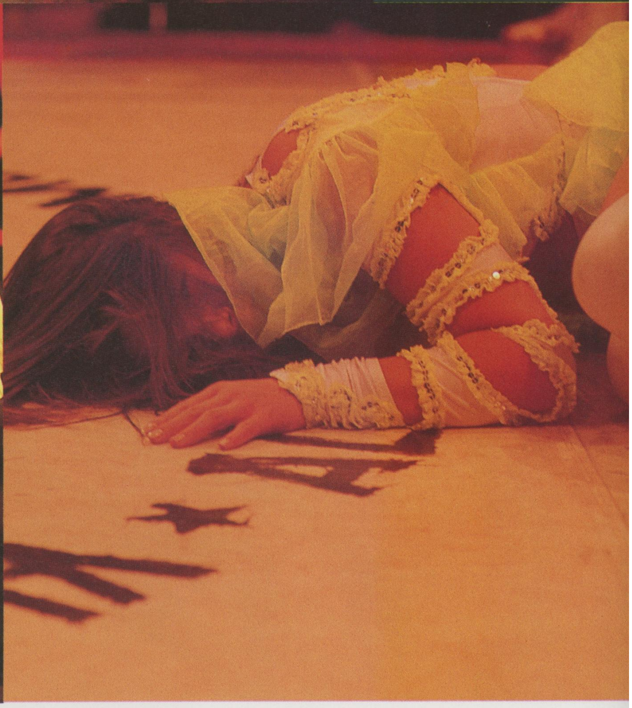
問題点はただひとつ。これだけの強豪をぶちかまし、はじき飛ばしながら、それが勝利につながらない、ということだ。肉弾炸裂後、とどめのメルトダウン技を開発すれば、無敵のイーグルが出現するだろう。

Text●RYUICHIRO FUJIWARA

井上貴子

意地悪お姉さまの笑み。

SHOOT POINT●3 FEB. CHIBA KOUEN TAIIKUKAN



史上最強の〝武器〟を引っさげて……。

井上貴子のいるリングには、華やかな毒がふんわりと漂っている。そしてそれは彼女の柔らかくウェイブした栗色の長い髪の先から、あるいは彼女が動くたびにひらひらと揺れる艶やかなコスチュームのフリルのあたりから、そっと流れてくる。やがてその〝毒〟は彼女の魅力的な〝七色の笑み〟によって完成され、リングを覆い尽くす。

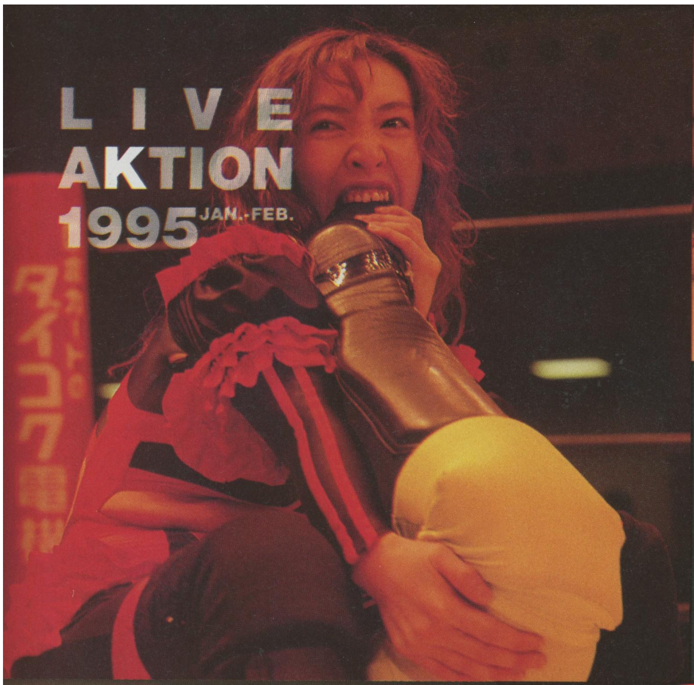
ある試合でこんなシーンがあった。自軍のコーナー近くで、タッグパートナーが押さえている敵の選手に対し、チョッカイを出しにリング内に貴子が入ろうとする。当然、レフェリーは貴子に対し注意を促すのだが、貴子は艶然と微笑み、なんとレフェリーの肩を軽くポンポンと叩きながら、悠々と獲物に近づいていくのだ。なんという図々しさだろう。でも、それが見ていて不快ではないどころか、実に小気味いい。だいたいWWWAタッグ選手権試合で、フォールを取った瞬間にペロリと舌を出して〝エヘヘ〟という笑みを浮かべられる選手など、ほかには絶対いないし、そんな不謹慎な(?)表情は貴子にしか似合わない。

いまや、貴子が見せる、〝七色の笑み〟は彼女の必殺技である。オーロラ・スペシャルより、ダイビング延髄ニードロップより、あの生意気な笑みが見たいと言ったら、彼女は怒るだろうか。

彼女は才能も体力もプロレスラーとして恵まれているとは決して言えない。かの『ラスタとんねるず』では〝私、握力が全然ないの〟と言って、ウンテイにぶら下がったまままったく動けず、無残に真下に落ちた。恵まれた体格や体力を活かしきれないレスラーが多い中、彼女は自分の能力のギリギリのところで勝負している。〝けなげ〟とか〝ひたむき〟とかいう言葉は、すっかり〝意地悪お姉さま〟が板についてしまったいまの彼女には似合わないが、ここまでの道程にはかなりの苦労があったに違いない。そして、そんな陰の努力を微塵も感じさせないのも貴子らしい。

〝笑み〟という名の武器を振りかざし、今日も貴子が魔法をかけにくる。タカコ・マジックに翻弄されることは、女子プロレスを観る者の幸福である。

Text●SHINO HOJOH



LIVE AKTION 1995 JAN.-FEB.

尾崎魔弓

正義の殻に包まれた現在(いま)。

SHOOT POINT●22 JAN. KORAKUEN HALL, 5 FEB. MISATOSHI TAIIKUKAN

いま、再び、ヒールへの勧め。

「文章が汗を流し、熱気を放っている。ぼくは、尾崎魔弓は体で文章を書いている、と思った。決して、手練の文章ではない。だが、彼女のリングにおける白熱ぶりに似て、めりはりがあり、痛快に読ませてくれる。これはすごい、とびっくりした。プロレスを通して、尾崎魔弓というギャルの生き方がビンビンと伝わってくる。いつかぼくの強敵になりそうだし、それを願っている」。――引用がちょっと長くなったが、これは直木賞作家の文豪・志茂田景樹が、尾崎というギャルの自伝『悪役（私はハードに生きたいの）』に寄せた推薦文である。

当然ながら小説版ヒールのテキスト『ヘルキャッツ』（作／尾崎魔弓&ヒールスピリッツ）に寄せられたものではない。

なにしろ『ヘルキャッツ』での尾崎は、『魔弓〝ヘルアロー〟スペシャル』なる技を駆使して、悪人どもをコンクリートに頭から叩きつけて殺害しまくる、とんでもない大悪人として描かれているのだから。

そんな尾崎に〝悪役〟に転向をすすめたのは、小さな巨人・グラン浜田であった。いまや尾崎がダーティー大和やジェンヌらと組んで、〝愚連隊〟を名乗り、大暴れしていた過去を知らないファンも多いことだろう。

かつてキューティー鈴木は、尾崎を「リングの上でも悪い奴だけど、本当に根も悪い奴なんです」と評した。本当に悪い奴とまで言われる〝悪役〟なんてほとんど存在しない（尾崎の著書によると、である）のだが、尾崎は気にもしなかったという。

「もっと強くなってやる、もっと悪くなってやる、そしてもっときれいになってやる」

そんなことばかり考えていた尾崎が、今やピュアハートを掲げる団体の中心人物として活躍中なのだから、不思議なものだ。

しかし、彼女がヒールの殻を破り捨てた結果、〝素顔は小林麻美似の美人〟と評されたり、亀和田武らが〝全関東尾崎魔弓応援団〟を結成したりといった求心力を失ってしまったような気がしてならない。

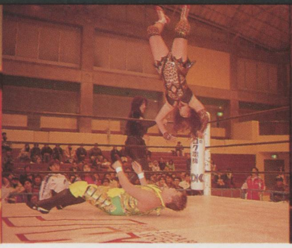
そう、いまこそ尾崎はもっと悪く、きれいになるべきだ。そのためには、とりあえず〝愚連隊〟改め〝愚連シー柔術〟旗揚げなんてのは、どうですかねえ？　ダメ？

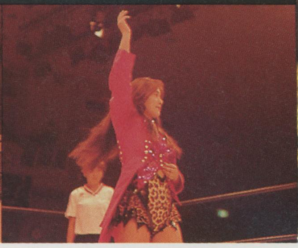
Text●GO YOSHIDA

福岡晶

脱ピュア・ハートの回答？

SHOOT POINT●22 JAN. KORAKUEN HALL, 5 FEB. MISATOSHI TAIIKUKAN





〝えっ⁉ ウソ！ こんなのありかよ〟

福岡晶の〝アレ〟を初めて観た瞬間の私と友人の叫び。

私「うきょ————————っ‼」

友人「え————————っ⁉」

二人とも、かなりの大声をあげていたと記憶している、続く第二声。

私「これは凄いっス‼ イヤ、ホントに‼」

友人「これはマズイだろ……イヤ、マジで」

私は感動と興奮のあまり、コタツの上に置いてあったミカンを握り潰す。そして友人はおもむろに立って雑巾を持ってきた。

私「福岡はこの技で完全に弾けるな‼ いよいよ福岡時代の始まりだよ‼」

友人「ヤバイよなあ……ついにここまで来ちゃったのか……そうかあ……」

私「え？ 感動しなかった？」

友人「俺にはちょっと、エゲツないなあ」

私「でも、頭から落としまくるレスラーよりはずっと健全だぜ。だいたい、そんなことよりもこの発想力だよ‼ ちょっと俺なら思いつかねーぞ、こんなの」

友人「そうは言ってもなあ、受け身の取りようがない必殺技なんて、プロレスでありか？ 俺は支持できねぇな」

私「いいんだって、腹筋鍛えりゃいいじゃねーか」

友人「怒られるぞ、お前」

× × ×

ムーンサルトダブルフットスタンプ‼

福岡晶がついに自らの手で必殺技を手に入れた。

ムーンサルトダブルフットスタンプ‼

これが〝脱・ピュアハート〟の答え？

ムーンサルトダブルフットスタンプ‼

これ、突拍子もない考えなんだけど……。〝脱・ピュアハート〟ってさ、UWFにずいぶん似ていた気がするんだ。もちろん、ファイトスタイルのことを言ってるんじゃないよ。

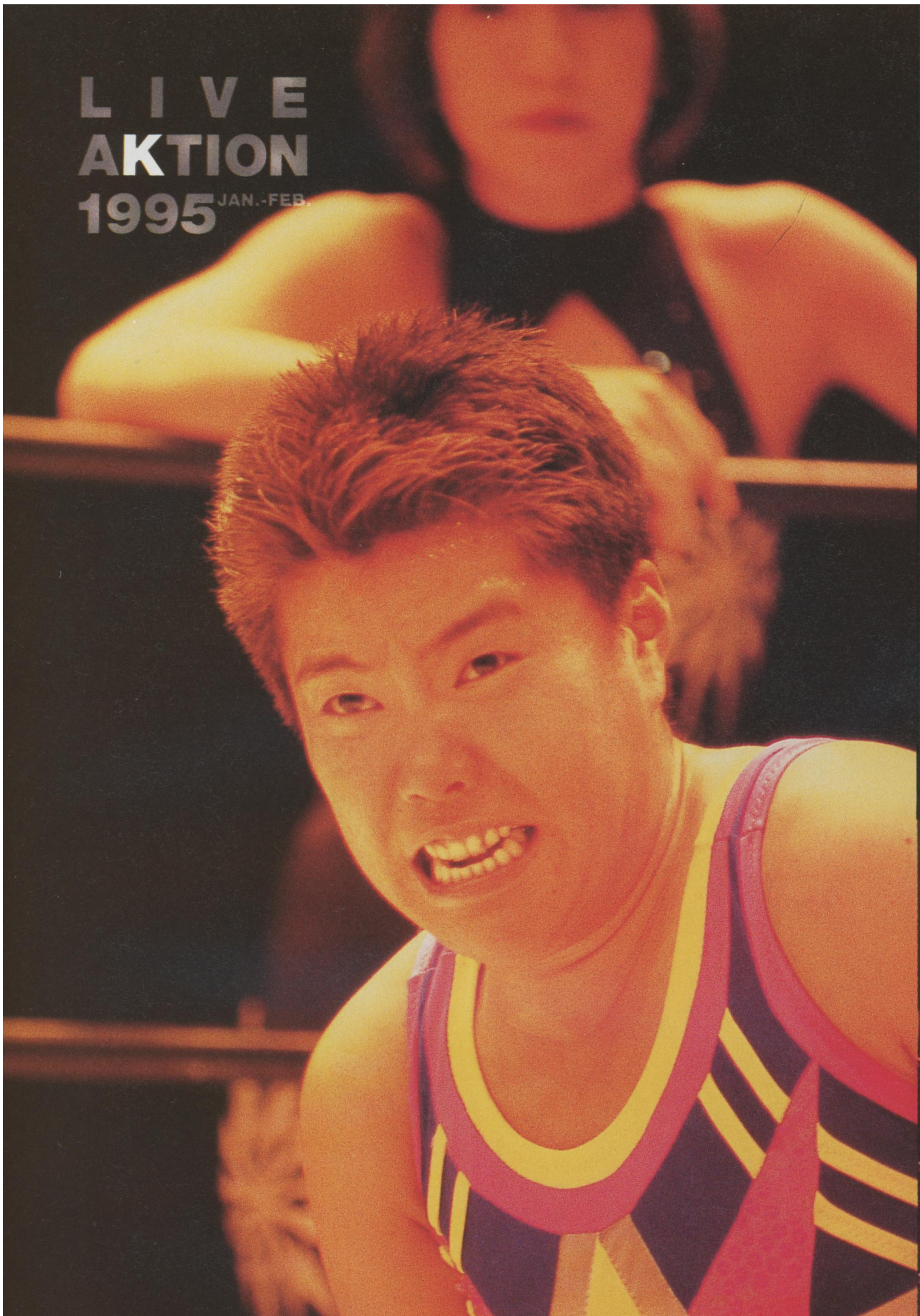
「これが本当に自分のやりたいことなのか」

「ここよりもっと良い場所があるはずだ」

「誰よりも先へ、誰よりも早く」

〜なんていう、鬱屈した青春の悩みってヤツに突き動かされて生まれた〝運動〟という意味においてさ。どう思う？ マトハズレかなあ。

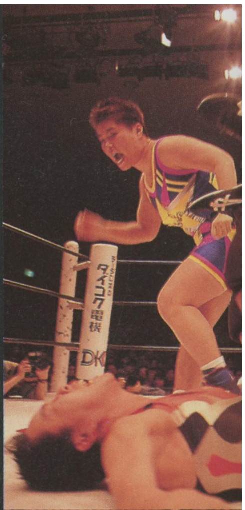
Text●TETSURO SUGANO

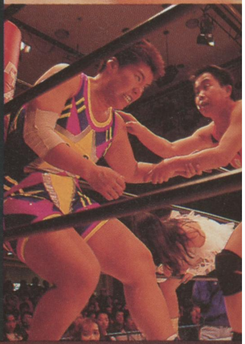


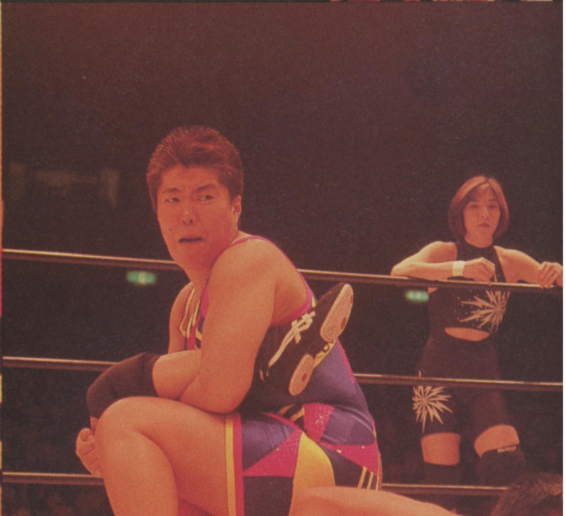
ボンバー光。

不器用だから。

SHOOT POINT●22 JAN. KORAKUEN HALL







リングの〝爆撃機〟目標物体へ突進！

〝おい、トヤマー！　お前、悔しかったらなー、もう1回……〟

あまりにも有名になったボンバー光による前代未聞のマイク・アピールである。なにゆえ未聞かというと前述のコメントは、試合直後の敗者・ボンバーが勝者・外山寿美代に向けられたものであるからだ。会場のあちらこちらから〝なに言ってんだアイツ？〟〝悔しいのは負けたテメエじゃねーかよ〟の声が飛び交い、外山は笑みを浮かべながら呆れていた。しかし、ボンバーは引かなかった。〝で、お前の河津落としはジャイアント馬場さんから教わったのか？〟

'86年、72・5キロ級パワー・リフティング優勝の実績を引っさげてジャパン女子プロレスに入門。デビュー4年目に腰椎損傷のため一度引退。持ち前のパワーを活かして米穀店に就職。その後、第2種運転免許証を取得してタクシー・ドライバーに転身。プロレスの夢を捨てきれずにいたところ、長与千種に見い出されGAEA　JAPANのNO.3として再デビューを図った。再びリングに上がることを実現できたいま、彼女の〝目標〟は、対戦相手に思いっきりぶつかっていくことだ。なりふりかまわずに定めた獲物を目がけてタックル！　向かってくる相手には容赦なくキック！　追いこめられたら反撃のチョップ！　チャンスと思いきや発する叫びのオリャー！

そう、〝ボンバー〟は決して器用なレスラーではない。その名の通り〝爆撃機〟のようにその〝目標〟に向かってひたすら突き進むレスラーだ。爆撃機であるがゆえに、目標物体を粉砕できなかったときはそのインプットされたコンピュータが支障し、誰も想像できない言動をおかしてしまうのだ。〝オイ、お前。悔しかったらなー……〟。

うん、それでいいと思う。

多種多様な高度な技と、スピーディーで華やかな動きが入り乱れる現在の女子マット界。ボンバー光のようにあり余るパワーと飾らない感情、そして予想を裏切る言動で観客を沸かす。ある意味でとても新鮮だ。

ボンバーよ、突進してくれ。暴れてくれ。マイクを持って叫んでくれ。そしてもっともっと悔しがるんだ！　うん、それがいい。

Text●YOKOHAMA JAMES DEAN

I am

Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●YOKOHAMA JAMES DEAN
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA

たまに男性からのファン・レターで、〝結婚してください〟ってあるんですよ(笑)。

——今日のインタビューはプロレスのことにはいっさい触れません。

山田 え!? そうなんですか?

——そうなんです。今日はレスラーではなく、25歳の女性像を探ってみたいと思っていますので、よろしくお願いします。

山田 えー。この世界に入ってから、プロレス以外のそういうインタビューを受けるの、私、初めてですよ。

——それじゃ新鮮な気持ちでいきましょう。やはり、レスラーといえども女性。女性といえば、次にくるのは男性。あ、ちょっと強引でしたね(笑)。

山田 言うんじゃないかと思ってましたよ(笑)。私の場合は誰もそのへんのことは知りたくないんじゃないですかねー。

——いや、きっといま、これを読んでる読者の方は知りたがってると思いますよ。〝ヤマさんはどんな男性がタイプなのかな?〟って。うん、きっと……。

山田 アハハ。あんまり考えたことないですけどね。でも、やっぱり外見の善し悪しは必要だと思いますよ。〝私は容姿にはこだわりません〟って言う人が多いじゃないですか。そんなのウソですよねー。こだわりますよ。一緒に街中を歩いててもやっぱり見てくれが良い人が良いじゃないですか(笑)。やっぱり自分より背の高い男性(ひと)が良いですし。絶対みんなだってどうでもよくはないはずですよ。

——特に第1印象はそうですよね。

山田 そうですよ。第1印象はやっぱり〝顔〟ですよねー(笑)。これは正直な気持ちですもん。

——では、好きな顔のタイプは?

山田 んー、それは〝コレ〟とは言えませんね。ショーユ顔、ソース顔とかの好みもないですし、〝イイ!〟っと思ったらそれが、好きな顔なんでしょうね。

——これは聞きにくいことなんですが……。

山田 わかった! いま、好きな男性(ひと)はいますか? でしょ(笑)。いませんよー(笑)。〝いる〟って言っても信用してくれないと思うし。

——そうですか?

山田 だと、思いますよ。豊田(真奈美)とかが〝いる〟って言ったら、〝誰?〟ってけっこう追求されると思うんですよ。私は、別に、ほら、ネー(笑)。

——なんでしたら、自分がVOL.3で豊田さんに実際に追求したように、山田さんにもそのあたりを追求しましょうか(笑)。

山田 アハハ。いまはそういう出会いの場がまったくないですから、難しいですよ。でも、ここ(全女)に入る前はそれなりに好きな男性はいましたよ。

——おっと、ご本人の口から発せられましたね。聞かせてもらいましょう(笑)。

山田 大したことじゃないですよ。中、高校生のころの〝あの男性(ひと)カッコイイなぁー〟ってやつですよ。バレンタイン・デーにチョコレートをあげたりして。特定の男性と付き合うとかそういうのはなかったですよ。ソフトボール部に入ってたから、男っぽかったし。自分でそう言うのもアレなんですけど、部活の同性の後輩とかから人気があったんですよ。〝交換日記してください〟とか言われちゃったりして。だから女っ気だらけの生活だったのかもしれません。

——で、学校を出たら、また女の世界に入ってしまったと(笑)。現在も全女の後輩たちから人気がありますもんね。特に平成5年組以降の選手たちと話をしてると、よく山田さんの名前は出てきますよ。

山田 悪口でですか(笑)?

——違いますよ(笑)。〝優しく接してくれます〟〝憧れてます〟って。

山田 自分も昔はチコ(長与千種)さんに憧れてましたからね。でも自分がその逆の立場になると、なんか照れちゃいますね。

——ファンの支持も女性が圧倒的なんじゃないですか。

山田 そうですね。ほとんど女性からファン・レターをもらいますからね。中には〝私はどうしても山田さんを女として見られません〟〝抱いてください〟〝好きです〟って内容があるんですよ。

——困っちゃいますね。

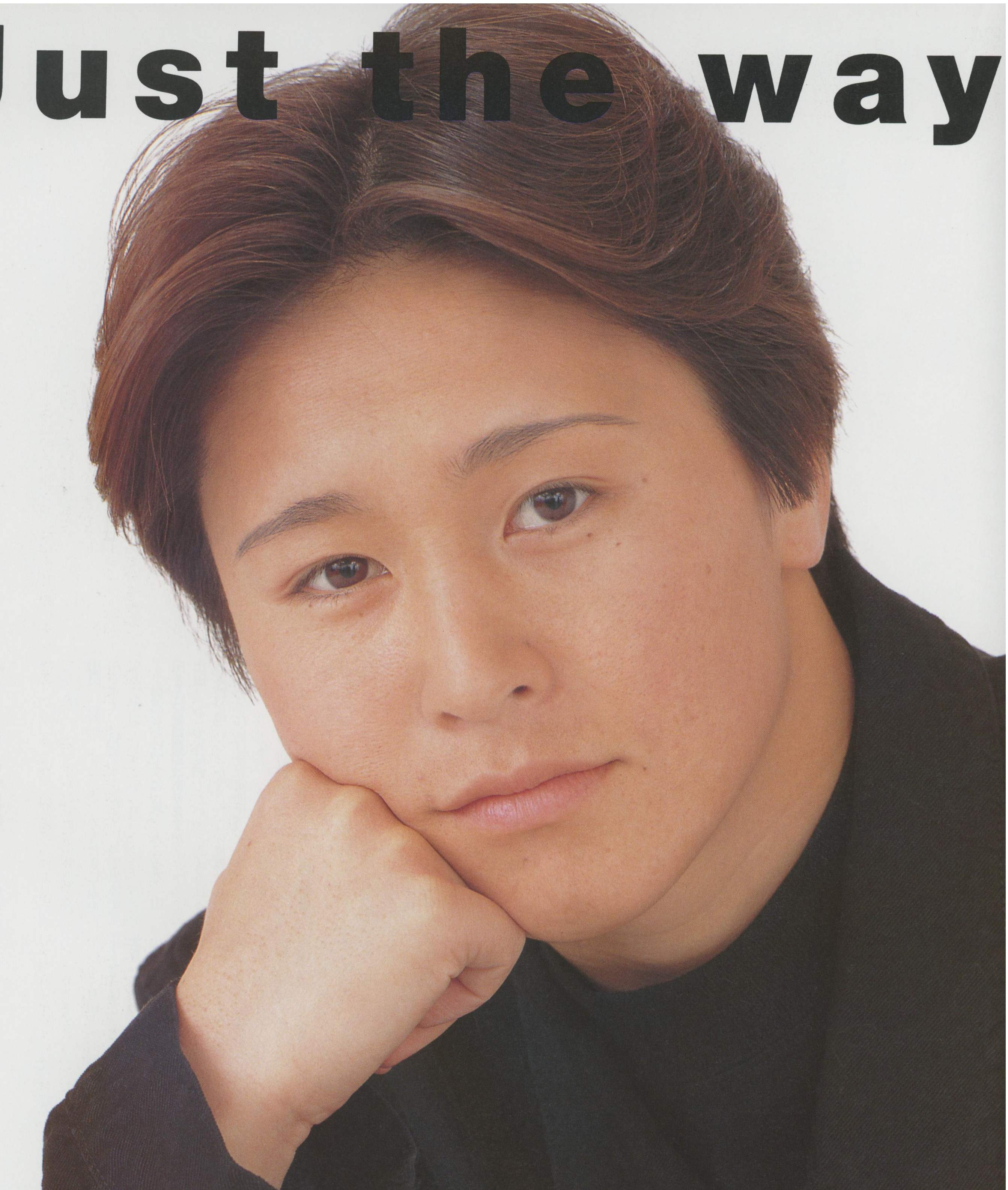
山田 う〜ん、でも、嫌な気にはなりませんよ。応援してくれることはすごく嬉しいし、同性に好かれることは良いことだと思ってますから。

——男女支持比率は1対9ぐらいですか。

・山田敏代"の素顔を覗いてみたのだから。——'95年春。悩める戦士のひとときの休息。

Yamada

Just the way



●「えっ!　こんなインタビュー初めてですよ!!」っとビックリ顔の山田敏代。それもそのはず。プロレスの話題にはいっさい触れずに、〝25歳の女性

Toshiyo

子供は欲しいですけど、大きいお腹も、産むのも絶対ヤダー(笑)。

山田　0.1対9.9ですね(笑)。でもたまにあるんですよ、"結婚してください"って男性からのファン・レターが(笑)。

——貴重なわけですね(笑)。ところで、山田さんは結婚願望はありますか?

山田　"この先結婚したいって思えるほどの男性が現れるのかな?""この世界に入ってなかったら自分も同世代の女性みたく結婚してたのかな?"って考えたりはしますけど、現時点で結婚願望はないですね。

——ファン・レターじゃなくて、直に結婚を迫られたらどうしましょう。

山田　私は、"好きだー"って言われても、自分がその男性のことを好きじゃなきゃ絶対に嫌なんですよ。片思いでもいいから自分が好きじゃないと。だからお見合い結婚もちょっと嫌ですね。結局は婚姻届を出すから、"結婚"なわけじゃないですか。だから好きな人ができたら、一緒に暮らせれば、それで良いんじゃないですかね。

——結婚願望はなくても、理想の相手との生活像は描いているんですね。

山田　休みの日とかにただ一緒に部屋にいるだけで2人でなにしてるってわけじゃなくてもいい。会話がなくても、別々のことをしてても一緒にいるだけでいい、みたい[illegible]性ですか。

——つまりは一緒にいるだけで安心できる男性ですね。

山田　そういう感じです。手をつないで買い物に行って、一緒に夕飯を作っちゃたりして。アレ、なに言ってんだろう(笑)。

——アハハ。

山田　結婚願望がないって言うと、"そういうことを言う人こそ一番最初に結婚して、子供が5人ぐらいできたりするんだよ"って、よく豊田とか同期に言われますね。

——なるほど。ちなみに子供を身ごもった大きいお腹のご自身の姿を想像できます?

山田　……?　できない、できない(笑)。私の妊娠を想像できます?

——……?　できない、できない(笑)。

山田　でも子供は欲しいですね。欲しいけれど、産むのは嫌ですね(笑)。お腹が大きくなるのも考えられないし、苦しそうですから、絶対ヤダー(笑)。でも、こんなこと普段はホントに考えたことないですよー。

——ま、そうでしょうね。では、子供ではなくて(笑)、いまいちばん欲しいものはなんでしょう。

山田　こういう雑誌のインタビューとかで"○○が欲しい"って言うと、ファンの人がプレゼントしてくれるから、なんだか申しわけないんですよ。いまでも洋服とか絵とか高価な物をいただいているんですよ。

——まさか、いままでに車をもらったとかはないでしょうね。

山田　それはないですよ(笑)。あ、いま一番欲しい物は自動車免許証ですね。車はもちろん、バイクにも乗りたいんで。

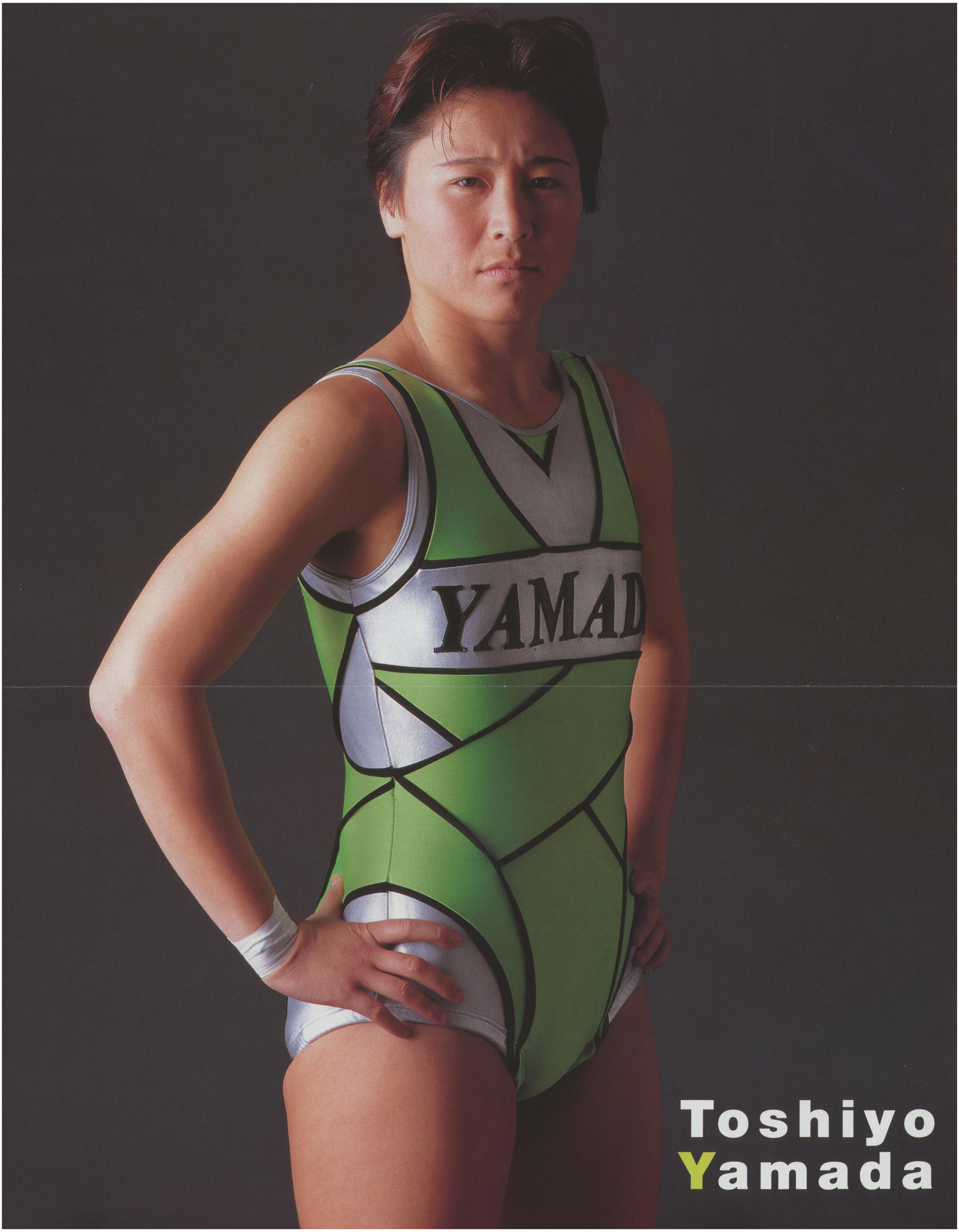
——免許証だけは他人の物をプレゼントされても意味がないですからね。ご自身が取得しないと。

山田　試合数が多いから、通う時間がないんですよ。24時間無休の自動車教習所があれば便利なんですけどね。自分は朝早く起きて通うのはちょっと無理かな、と思いますけど。うん、免許が欲しい!

TOSHIYO YAMADA Profile
山田敏代【全日本女子プロレス】本名:同じ。S45年2月27日生まれ。埼玉県浦和市出身。S62年7月にデビュー。168センチ、70キロ。

Toshiyo Yamada

Cuty Suzuki


Toshiyo
Yamada

●JWP内におけるキューティー鈴木は、何とも難しい位置にある。団体を背負って立つエースでもなく、かといって中堅ランクと括るのも安直すぎる。現在の彼女のポジションを、自身が定義する。

いま、立つところ。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA　Text●TAKAHIKO MITAKE
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA

―JWPの中で自分の役割っていうのはどういうものだと考えています?

鈴木　私の役割は新人を育てるとかよりも、自分が上に行かなくてはいけないと思っています。やっぱり上の層が決まっちゃってるから、そこに一人でも二人でも入っていかないと、全体が変わっていかないと思うんです。いま私は中間的な位置にいるけど、上のクラスに入り込んでいかないといけないと。シングルのベルトを動かせる存在になりたいというか。

―例えばJWPでの二強デビル、関西の牙城を崩したいってことですか?

鈴木　そうです。デビルさんと関西が組んだら最強だって言われますよね。私も最強だと思いますけど、その最強と互角に戦えるもう一つの最強が欲しいなと思います。

―では、もう一つの最強になるための準備は進んでいますか?

鈴木　とにかく、デビルさんにも関西にも一度も勝ったことがないから、シングルでもタッグでもいいから一度勝たないと。そうしないと話が先に進まないじゃないですか。いまは口だけだから。

―じゃあ、いまJWPの中で自分とタッグを組んで最強組と戦うとしたら、誰がパートナーとして考えられますか?

鈴木　やっぱり組んでてやりやすいのは尾崎。あと福岡もすごくおもしろい。人数が少ないからそういうメンバーになっちゃう。奥津とかも頑張ってくれれば組んでやっていきたいと思う。でもいまの段階では尾崎と福岡しか見当たらない。

―なるほど。ところで一昨年から数多くの対抗戦がありました。多くの対抗戦をやってみて、あらためて感じたことというのはありますか?

鈴木　自分の団体が一番いいなというのを確認しましたね。

―では、対抗戦をやる前といまとではJWPの中で自分のやるべきことは変わりましたか?

鈴木　JWPを旗揚げした当時はプロレスに入りたてのころのようにがむしゃらだったんです。だから何をやりたいとかじゃなくて、ただ一生懸命プロレスをやっていた。それが何年か経って落ち着いて、自分のことを考えるようになったのが最近なんです。自分はこれからどうやっていけばいいのかなって、悩み始めたのも最近だし。旗揚げしてがむしゃらにやっていて、対抗戦だとかいろいろなことが重なって、私はこのままでは終わりたくないと思った。私はJWPが最高の団体だと思ってますから、デビルさん・関西を倒さない限り自分が変わっていかないと思う。そして私がその二人を倒せる選手になったら、周りも変わっていくと思うんですよ。いまはとにかくそういう自分を作り上げて行かなくちゃいけない、一番厳しい状態だと思うんです。もちろん下から突き上げてくるのもわかっています。

―そういうことを考えるようになったきっかけというのはあるんですか?

鈴木　それは去年タッグのベルトを取られたとき（3月27日・横浜アリーナでJWPタッグを全女の三田・下田組に奪取される）ですね。悔しいとかいうよりも、ポカーンとしちゃったみたいな。それで自分のこと考えるようになって、考え始めたらイライライライラするようになったんです。

―そうすると、その後の去年のファイトは何か不完全燃焼みたいな部分があったんじゃないですか?

鈴木　だから、調子が悪いわけでもなかったのに、あんまり良くなかったと思う。よく、どこか悪いんですか？　とか言われたんですけど、特別に体調が悪いわけでもなかった。やっぱりどこかで何かが引っかかっていたんでしょうね。去年は最悪とまで言わないけれど、あまりいい年ではなかった。そういうときに、周りからこのまま終わっちゃうような感じで言われて。私はまだプロレスを辞める気ないし、せっかくプロレス界に入っていままでやってきたんだから、何かかき回せるような存在になりたいなと思ったんです。

―そうすると、去年はけっこうジレンマと戦ってきた年であったと。

鈴木　うん。だから試合やったあともスカッとしないというか。勝っても負けても。でもその何かがわからなくって。でもその何かがわからなくても突き抜けないと先にいけないじゃないですか。そういうときにデビルさんと関西に勝ったら、何か見つかるかもしれないと思ったんです。その何かっていうのがもしかしたら闘争心かもしれない。長与選手とやったとき、向こうの執念みたいなものを強く感じた。私も絶対負けたくないと思ったし、長与選手と当たるなんてもう二度とないかもしれないから、このチャンスを活かそうと思ったんですけど、ああいう負け方をして。

―あの秒殺された試合ですね。

鈴木　あのときに向こうは秒殺でいくと言ってたんですけど、私は秒殺でやられるなんて思ってなかった。やっぱり自分の気持ちより長与選手の気持ちの方が強かったからああいう風になったんじゃないかと思う。勝ちたい勝ちたいと強く思ってる方が絶対勝つような気がするんです。だから気合いの入れ方で試合も変わってくるだろうし。一年のうちに大きな試合が何回かあると思うんですよ。そのとき気合が入れば自分に持ってない力を出せると思うんです。闘争心みたいなものをもっと出せるようになったら、もっと勝てると思うですよ。その気持ちをどうやって高めるか、どうやって作っていくか。

―気持ちのモヤモヤが消えていまみたいな気持ちになったのはいつごろですか?

鈴木　去年の終わりくらいかな。普通の試合のあとに8人タッグのときに気合いを入れようと思っても、始めの試合と同じだけの気合いが入らないんです。

―試合での緊張感が切れちゃった?

鈴木　そう。試合が連続していれば緊張感が保てたかもしれないけど、休憩とかが間に入っちゃうと、なかなかもとの緊張感に戻すことができなかった。私、いままで自分で気持ちを高めようとか考えたことなかったんだけど、8人タッグのときに気持ちを高めようと思っても高まらないんですよ。その前の試合で全部使いきっちゃったみたいで。そのとき私は気持ちを高めるのが下手だなって。でも、人にできて私にできないことはないでしょ。だから、いままでは気持ちが足らなかったんじゃないのかって。どの試合をやったときも自分では最高に緊張してても相手に劣ってたんだなぁって。

―いまから思うとそういうのが如実に現れていたのが長与戦じゃないですか?

鈴木　そうですね。あのときの長与選手の殺気というか緊張感というすごかったですね。あのとき私は負けちゃいけない負けちゃいけないって思っていた。でも、いま思えば、思えば思うほど負けてたのかもしれない。そんなこと考えずに、自分のことを信じていれば違った戦いになっていたかもしれませんけど……。

―今年になって何回か試合がありましたが、自分で納得いくものになってますか?

鈴木　そうですね。完全に納得したものではないですけど、いままで考えながらやってたものが、大声をあげるだけで自然に身体が動くというか。前は大声で叫んだあと、何しようかと考えてた時期があったんだけど、いまは自然に身体が動く。ただ本当は髪の毛引っぱってるだけかもしれないけれど、自然に自分のやりたいことが動きに出てきたみたいな感じなんです。

CUTY SUZUKI Profile
キューティー鈴木【JWP】本名：鈴木由美。S44年10月22日生まれ。埼玉県川口市出身。S61年9月にデビュー。155センチ、55キロ。

デビルさんや関西もだけど、
もちろん、下からの突き上げも感じています。

ボンバー光とはトコトンやります。

●じん帯損傷による1年3カ月の長い欠場期間を経て、昨年末リング復帰した外山寿美代。現在、ガイア・ジャパンのボンバー光と熾烈な闘いをくりひろげている。そう、彼女にとっては今が約1年おくれの団体対抗戦なのだ。

Photography●TAISHIN AOKI　Text●YOKOHAMA JAMES DEAN　Hair&Make-up●TAKASHI KAMIYA

外山寿美代

——まずはじめに、これまでの経歴を聞かせていただきますか。

外山　知らない人もいると思うんですけど、自分は全女の練習生だったんですよ。

——そうでしたね。何歳のときでしたか。

外山　17、8のころですね。当時の練習生の同期に、井上貴子さん、渡辺智子さん、長嶋美智子さん、ツッパリ・マック、清水真弓さんたちがいましたね。

——いまでは各団体で活躍している選手たちばかりですね。そのころの思い出は？

外山　そういえば、あのころ自分は貴子さんとすごく仲が悪かったんですよ。何だか知らないんですけどいがみ合ってましたから。で、お互いにオーディションに合格したあと、よりによって同じ寮室になったんですよ（笑）。しかも隣どうしのベッドで。彼女も嫌だったと思いますよ。

——ケンカもしたとか？

外山　しました。それもあとに引くようなやつを。イタズラも。貴子さんがシャワーを浴びているときに外で温度調節機を高温にいじったりして（笑）。ま、時効でしょ。

——いまでも仲が悪いんですか（笑）？

外山　そんなことないです。いまは会場で会ったら、〝元気？〟〝風邪ひいちゃったよ〟なんて普通の会話をしてますから。

——全女ではプロ・デビューしなかったんですよね。

外山　なんかいろいろあって、自分から全女を飛び出しちゃったんです。でもプロレスへの未練は捨て切れず、1年後にジャパン女子に入門したんです。

——ここでもプロにはなれませんでしたね。

外山　入った時期が悪かったんですよね。会社の経営がだんだん傾いてきて、いきなり熊谷（'92年1月26日、ジャパン女子最終試合）ですもん。荷物をまとめて、車を運転しながら、帰るときは泣いちゃいましたよ。〝なんでついてないんだろう〟って。

——3度目の正直が今のJWPですね。

外山　新人として一からのやり直しでした。

——念願だったプロ・デビュー戦は？

外山　5月1日（'93年）の後楽園ホール、相手は福岡（晶）さんでした。もうボコボコにやられました。目は腫れて、両方から鼻血を出して。後にも先にもあんなデビュー戦はないんじゃないですか。

——また順調には行きませんでしたよね。

外山　8月にじん帯の手術をしましたからね。その時は、〝もうプロレス辞めちゃおうかな〟って思いましたね。でも会社は、〝復帰を待ってるよ〟って言ってくれたんで、バスの運転や、売店販売とか自分にできることをやりながら調整することにしました。

——復帰できて本当に良かったですよね。ライバルも出現したことですし。

外山　ボンバー（光）のことですか？

——なんだか、嫌そうですね。

外山　去年の11月の東京ドームでボンバーを見たときは本当に頭にきましたね。〝なんだコイツ、復帰戦でこんな大舞台に出やがって〟って。

——〝コイツ〟って言っても、ジャパン女子時代にはボンバー（当時・村光代）選手は先輩だったんですよね。

外山　もちろん面識はありましたけど、あんまり接しませんでしたから。だから、〝いまさら何だよ、コイツは〟って感じですよ。

——1月8日の後楽園ホールでのボンバー選手のマイク・アピールは強烈でしたね。あなたに負けたボンバー選手が、〝悔しかったらなー〟って挑発してましたからね（笑）。

外山　〝悔しかったらなー〟って、てめえが負けたんじゃねーか、ったく。正しい日本語を教える必要がありますね。まあ、ボンバーには自分に〝わかったもう負けた、もういい、あっち行ってくれ〟って言わせるまではトコトンやりますよ。あー、ホントにむかつく（笑）。

SUMIYO TOYAMA Profile
外山寿美代【JWP】本名：同じ。S44年3月20日生まれ。神奈川県相模原市出身。H4年5月にデビュー。160センチ、65キロ。

レオ北村

正直な話、辞めちゃおうかなって。

●ケガによる試合欠場は数あれど、持病による欠場という誰にも文句がつけることができない理由でリングを離れていたレオ北村。いまは誰に遠慮することなく思いっきりプロレスを楽しんでほしい！ ゴナ・ファイト!!

Photography●TAISHIN AOKI　Text●TETSURO SUGANO　Hair&Make-up●TAKASHI KAMIYA

――何はともあれ復帰おめでとうございます。ただ、長期欠場のわりにはその理由があまり伝わってこなかったんですけど。

北村　ああ、そうですよね。ケガとかじゃなかったですから。あのー、高校生のときに手術したんですけど甲状腺に持病を持ってるんですよ。それの再発だったんです。大田区体育館でアジャ・コングさんたちと試合したころから。動悸、息切れがひどくなって、脈も早くなったりして、日常生活でまともに歩けないぐらいになっちゃってたんです。それでも1年間、何とかダマシダマシやってみたんですけど……。そんな状態じゃファンの人に悪いし、自分の体も悪くなる一方だったんですよね……。

――大変なことになってたんですね。そして風間社長に休場したいと打ち明けたと。

北村　はい。でも風間さんも、私の試合を観てうすうす気づいていたみたいで、"お話があるんですけど"って切り出したら、"うん、そうだね、話さなきゃね"と。

――欠場中はかなり落ち込んだそうですね。ハーレー斉藤選手が「北村は（カラオケの得意レパートリーの）スーダラ節にさえ元気がなかったよ」なんて言ってましたけど。

北村　（笑）そうですねー。だってケガとは違って復帰できるメドっていうのがまったく立たなかったんですから。目の前真っ暗でしたね。正直な話、80パーセントぐらいは辞めちゃおっかな、なんて考えたりもして……。でもハーレーさんとか、先輩の方々が励ましてくださったおかげでずいぶん救われましたね。飲みに連れ出してくれて、スーダラ節を歌わせてくれて（笑）。

――リングから離れている間、今後のプロレス人生についてもいろいろと考えるところがあったわけですよね。

北村　え？　いや、そういうのはあまり（笑）。もちろん、リングに上がるからには上を目指していくしかないんですけど……。あのー、休む前っていろんなことを考える人だったんですよ。誰々と試合をしたいとか、どこで試合がしたいとか、誰よりもスゴイい試合をやってやるぞ、みたいな。でも……今度のことがあって"欲"っていうのがなくなっちゃったんですよ、まったく。いまはもう、リングに立てるだけで幸せなんです。だから……何も考えなくなりましたね。単純になれた、っていうのかな。割と人の目を気にするところがあったんですけど、お客さんの目も先輩のこともういいやって。誤解を招くような言い方ですけど、自分が1試合1試合を楽しめるならそれがいいなと。それがたとえ自己満足になったとしても、しょうがないやねって。それに……やっぱりプロレス、好きですから。リングの上に立っていたいんですよ。

――なにか悟ったような感じですけど。

北村　あのー、穂積（詩子）さんが辞める直前ぐらいになって言ってたんです、"最近プロレスが楽しくってしょうがないの"って。"誰に勝とうが負けようが、そんなことどうでも良かったのよ。自分のやりたいようにやれば良いってようやく気がついた"って。あのころの穂積さんって、急に仕事がグッと良くなったじゃないですか。いま、なんとなくですけどその気持ちがわかる気がするんですよ。休まなきゃ気づかなかったかもしれませんね。

――今後の目標をうかがいたいのですが。

北村　うーん、やっぱり執着がなくなったんで、ってこれ良くないのかな（笑）。まあ、自分が楽しんで、それを観てお客さんも楽しんで。それでお客さんが盛り上がれば私も盛り上がっていくわけで。そんな風になれるように、一生懸命やるだけですね。

――具体的な目標もあるんじゃないですか？

北村　うーん…やっぱり神取さんを……神取さんを怒らせたいですね。勝ちたいとか言わないところが弱気ですけど（笑）。

LEO KITAMURA Profile
レオ北村【ＬＬＰＷ】本名：北村真実。Ｓ44年９月20日生まれ。神奈川県横浜市出身。Ｈ元年１月にデビュー。１６３センチ、63キロ。

石倉由加利

次の日には学校を辞めてたんです。

●'87年に飛行機事故で亡くなった元全日本プロレスのハル薗田の姪、石倉由加利。幼いころからプロレスに囲まれて育った彼女にとって、リングの上で戦うことが天職なのかもしれない。石倉のファイト、天国の叔父さんまで届け!!

Photography●TAISHIN AOKI　Text●TETSURO SUGANO　Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA

――石倉選手は全日本プロレスで活躍されたハル薗田さんの姪にあたるんですよね。

石倉　はい。だから小さいころからプロレスに接する機会は多かったですね。テレビ中継も毎週観てましたし、〝今日はおじさんが来てるからプロレスを観に行くよ〟って感じで全日が地方にやってくれば必ず家族全員で出かけてました。おじさんに、〝大きくなったらプロレスラーになるんだ〟なんて言ってたりして。……ただ、本当にプロレスが好きになったのは事故（注：ハル薗田選手は'87年、アフリカ遠征のために搭乗した飛行機の墜落事故により亡くなった）のあとなんです。

――石倉選手が中学生ぐらいのときですね。

石倉　そうですね。事故の直後はやっぱりプロレスって観なくなっちゃったんですよ。家族全員がなんか……暗い雰囲気になっちゃって……テレビも観ない、観られないって感じで。それでも、やっぱり好きだったんですね。中学生の終わりぐらいから私だけこっそり観るようになったんです。観るとやっぱり〝プロレスっておもしろいなあ〟って感じられたんです。

――そしてFMWに入門と。大仁田厚選手とターザン後藤選手は全日本プロレスでハル薗田さんの同僚だったわけで、入門理由はそのあたりも関係あったんですか？

石倉　選んだというよりも……あのー、母が地元で飲み屋をやってるんですけど、そこに後藤さんが巡業で宮崎に来たときに寄ってくださったんです。そこで私が子供のころプロレスラーになりたかったって話になって、後藤さんが〝そういう気持ちがもしもまだあるのなら、ウチへ来るかい？〟って誘ってくださったんです。高校2年のときですね。で、そのころ憧れてたのがやっぱり全日本プロレスの試合で、プロレスに入門するなら男子と一緒にトレーニングができるFMWがいいなあってちょうど考えてて。だから誘っていただいたときはすごく嬉しくて、その場で〝よろしくお願いします〟って言いました。

――迷いはなかった？

石倉　はい、即決でした。次の日には学校辞めてたんです（笑）。

――学校にはなんて言ったんですか？

石倉　〝自分のやりたいことが見つかりましたから〟って。

――プロレスラー石倉由加利にとって、ハル薗田さんとはどういう存在ですか？

石倉　大きいですね。巡業で地方に行くとおじさんのことを知ってる人とたくさん会うんですよ。おじさんのことをいろいろ話しかけられて、やっぱり凄いレスラーだったんだなって感じてます。あの、私、デビューしてもうすぐ1年になるんですけど、やっぱりプロレスって難しいんです。うまくいかないんですよね。失敗するたびに何だかおじさんに申しわけない気がして……。プレッシャーかかりますね（笑）。

――やっぱりプロレスは難しいですか。

石倉　難しいですね……。いまだに基本の技さえこなせていないですから……。ドロップキックの練習相手を男子がやってくれるときがあるんですけど、そのときは上手に当たるんですよ、胸が広いから（笑）。だけど試合では、まだまだですね。

――得意技はまだ見つかりませんか？

石倉　まだですね……。理想としてはルチャみたいな動きをしたいんですけど、ムーンサルトとか、でも自分……高所恐怖症なんですよね（笑）。

――高所恐怖症のルチャドーラって、なんかいいですね（笑）。薗田選手が得意だったスライディング・キックなんてどうですか？

石倉　ああ、いいですね。ときどき、おじさんの試合のビデオを観て研究することはあるんですよ。やっぱりファイト・スタイルでも意識しているところはあるんですよね。

YUKARI ISHIKURA Profile

石倉由加利【FMW】本名：同じ。S50年5月4日生まれ。宮崎県小林市出身。H6年4月にデビュー。155センチ、55キロ。

新人さん、いらっしゃ〜い♡

WE'RE COMIIIIIINGGGGG!!!!!!!!!!

●すっかりおなじみとなった新人レスラーご紹介のコウナア。専門誌ではミクロなサイズでしかお目にかかれなかった、ぴちぴち・ハツラツ・すべすべ・トキメキを感じさせてくれちゃう、あんなレスラーこんなレスラーを『女子プロレスグランプリ』はナ・ナ・ナ〜ンと!! グッとワイドに掲載するぞ。よッ、この太っ腹って自画自賛してどうするよ。ま、とにかくここに明日の珠玉の原石が隠れているかもよ。なので、いち早く名前と顔を一致させてくれたまえよ。ほだらばGO!!

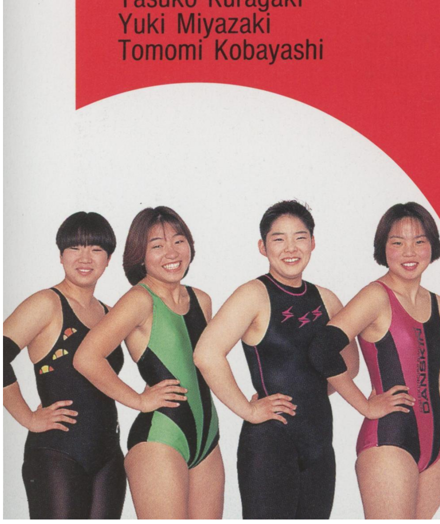
Tomoe Araya
Kiyoko Ichiki

Yoshiko Tamura
Misae Watanabe
Yoko Takahashi

Keiko Aono

Rieko Amano
Tomoko Kuzumi
Tomoko Miyaguchi

Kanako Motoya
Yasuko Kuragaki
Yuki Miyazaki
Tomomi Kobayashi



平成6年組

●昨年、全日本女子プロレスでは7人の新人レスラーがデビューを果たした。近年まれにみる大豊作である。今回はその第1弾として、新人王に輝いた田村欣子、もっとも身体に恵まれた髙橋洋子、『元気が出るテレビ』で有名になった渡辺美佐恵の3人を紹介しよう！ 期待大!!

Yoshiko Tamura
Misae Watanabe
Yoko Takashi

—普段も今日のように同期組で集まって話をしたりするんですか。

渡辺 プロ・デビューしてからはあんまりこういう機会はないです。

髙橋 デビュー前に同期が11人いたころは、よく寮のひと部屋に集まったりしてました。

—悩みを相談したり愚痴をこぼしたり？

髙橋 今はヨッちゃん（田村）と同じ部屋なので、彼女にこぼしたりしてますけど。

田村 （ボソボソ）……そっちがこぼすから、自分も……。

—……。

髙橋 あ、すみません。ヨッちゃんは少し変わってるんです（笑）。

渡辺 行動するのも喋るのも遅いんですけど、なんだか歩くのは早いんですよ（笑）。

—そうなんですか、田村さん？

田村 ……はい。

—……。えーと、田村さん。その長い髪の毛には、なにかポリシーみたいなものがあるのでしょうか。

田村 ……同期はみんな短いので、自分だけ目立って見ようかなって……。

渡辺 こういう性格もヨッちゃんなんです。

髙橋 ヨッちゃんといると楽しくておもしろいから、よくからかったりするんです。

渡辺 髙橋の前は自分がヨッちゃんと同じ部屋だったんです。ヨッちゃんは暗くておとなしかったんで、なにか盛りあげてあげなくちゃと思って、話をしてあげても全然のってこないんです。いつも自分が一方的に話しかけている状態だったんです。

髙橋 でも、最近は話してくれるよ。ね！

田村 ……うん。

—そういえば、試合会場の売店に立っている新人の皆さんは〝どうもーありがとうございましたー〟って愛想がよくて、元気もいいけど、田村さんはけっこう無表情で淡々としてますよね。

髙橋・田村 そうそう（笑）。

—さて、みなさんは本誌初登場ですので、プロレスとの出会いを聞かせてください。

渡辺 小学生のときにタイガーマスクが好きだったので男子プロレスを観てました。いつの間にか女子プロレスも観るようになり、そのころブームだったクラッシュギャルズに惹かれていくようになりました。七夕の短冊に〝プロレスラーになれますように〟って書いてました。

髙橋 自分もやっぱり小学生のときにクラッシュギャルズに魅せられました。それから宇野久子（現・北斗晶）選手のファンになりました。高学年のころには、観てて〝おもしろい〟が、〝私もやりたい〟って気持ちに変わってました。

田村 小学校2年生のときにテレビで観た女子プロレスが出会いでした。ダンプ松本選手にメチャクチャにやられている長与千種選手を観て〝えー、どうしてここまでがんばるんだろうー〟って思ってました。

—レスラーになるために習得したスポーツがあれば教えてください。

渡辺 そのためじゃないんですけど、バスケットボールとかです。

髙橋 将来を意識はしてなかったんですけど、ソフトボール部に入りたかったんです。でも人数不足の理由で、私も中・高校生とバスケットボールをやってました。

田村 ……長刀（なぎなた）です。

髙橋 えー、ウソー。

渡辺 それで、長刀を始めたの？。

田村 違う。私も長刀は別にレスラーになるために始めたんじゃなくて、ほかの人とは違ったことがやりたかったから……。

髙橋 んー、ヨッちゃんらしい（笑）。

—その長刀の腕前のほどは。

田村 初段です。

—んー、すばらしい。

田村 ありがとうございます。

—そんなちょっと変わった（？）田村さんということですけど、去年の新人王トーナメントでは見事に優勝しましたね。おめでとうございます。

田村 ありがとうございます。

渡辺 自分は決勝戦で負けているんですごく悔しいです。今度シングルで対戦するときには絶対に負けません。

髙橋 自分も負けません。

—と、みなさん言っておりますが、新人王の田村選手。

田村 でも、この前の試合では高橋に負けちゃったんです。強引に押さえ込まれて。

髙橋 はい。髙橋は粘りますから（笑）。

—それぞれのライバルは？

渡辺 やっぱり同期全員です。

髙橋 同期もそうなんですけど、自分自身には負けたくないなと思ってます。はい。

田村 あー私がそれ言おうと思ったのに。

髙橋 だってそうなんだもん。

—で、田村さん。ライバルは（笑）？

田村 ……自分自身です。

—さて、話は変わります。ここ2年連続してJWPのレスラーが年末の女子プロレス大賞の新人賞を獲得していますね。今年はあなたたちが対象になるわけです。今年こそ自分の手で全女に新人賞を取り戻してやるという気持ちがあるんじゃないですか。

全員 （それぞれ顔を見合わせて）……。

髙橋 あります。絶対に負けません。

田村 私も負けません。

渡辺 がんばります。

—では、みなさんのレスラーとしての目標を聞かせてください。

田村 渡辺（ASARI）さん、玉田（りえ）さん、前川（久美子）さんに勝って、ジュニアのチャンピオン・ベルトを獲得することです。

髙橋 さすがヨッちゃん、すごい！ 自分はベルトとかの形よりも、はやくお客さんに顔と名前を覚えてもらいたいと思います。

渡辺 当面の目標は、体重を増やすことと身体を柔らかくすることです。自分は身体が固いので股割りができないんです。あと2か月のうちにできないと強引に股を切られちゃうんで（笑）。それと、やっぱり顔と名前を覚えてもらいたいです。

—でも渡辺さんは『元気が出るテレビ』に出てたから、それなりに有名ですよね。先日の千葉の試合会場でも〝ゲンキ～〟って声援が飛んでましたよ。

渡辺 あっ、たまに〝テレビで観てました〟って言われるんです。

—最後に夢を聞かせてください。

髙橋 将来は格闘技戦がやりたいので、バット吉永さんが持っていたWWWA格闘技チャンピオン・ベルトを獲得することです。

渡辺 トップまで昇りつめることです。

田村 10年のうちにすべてのチャンピオン・ベルトを巻くことです。

髙橋・田村 さすがヨッちゃん。すごい！

YOSHIKO TAMURA Profile
田村欣子【全日本女子プロレス】本名：同じ。S51年2月6日生まれ。東京都江戸川区出身。H6年9月にデビュー。165センチ、63キロ。

MISAE WATANABE Profile
渡辺美佐恵【全日本女子プロレス】本名：同じ。S48年2月14日生まれ。埼玉県入間市出身。H6年8月にデビュー。174センチ、65キロ。

YOKO TAKAHASI Profile
髙橋洋子【全日本女子プロレス】本名：同じ。S48年4月20日生まれ。北海道小樽市出身。H6年8月にデビュー。172センチ、72キロ。

Photography●TAISHIN AOKI
Text●YOKOHAMA JAMES DEAN
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA

目標は股割りです（笑）。
強引に切られる前に
なんとか……。（渡辺）

10年のうちにすべての
チャンピオン・ベルトを
巻きたいです。（田村）

ライバルは自分自身。
将来は格闘技戦が
やりたいです。（高橋）

プロレスの魅力を、この体で確かめてみたい。

Photography●TAISHIN AOKI　Text●TETSURO SUGANO　Hair & Make-up●TAKASHI KAMIYA

青野敬子

●大向美智子以降の新人がなかなか思うように育ってくれないLLPW。しかし、ここに大きな財産を持つレスラーがデビューした。その名は青野敬子。とにかくこの写真を見よ。女子としては珍しくパンプアップされた上半身を。彼女の育ち方が今後のLLPWの鍵を握っているのだぞ。

——初登場ですので、まずはプロレスとの出会い、そしてレスラーになろうと思ったきっかけから聞かせてください。

青木　小学校のときに友達に誘われてクラッシュギャルズを観に行ったのが最初の出会いですね。長与千種さんを見て〝これはスゴい〟って思って。自分が小学生のころは全盛期でしたしね。で、レスラーになろうと考えたきっかけは……あの、プロレスって自分は〝観るもの〟だと思ってたんで、自分でやろうなんて思ったことはなかったんですよ、ずっと。でも高校3年になって先生に進路を聞かれたときに〝本当にやりたいことって何だろう〟ってふと考えてみたら、やっぱりプロレスしかなかったんです。

——進路はプロレスです、と。

青野　でも両親の反対が強くって、高校を卒業したときは入門テストを受けられなかったんです。

——厳しい親御さんだったんですね。

青野　厳しかったですね。お父さんなんて、プロレスって言っただけで口も聞いてくれませんでしたから。それでいったん、スポーツ・インストラクターになるための学校に進んだんです。でも、それからしばらくして長与さんが対抗戦とかで復活されたでしょう？　そしたらそれを観て〝ああ、何なんだろうな〟って思ったんですね。〝一度引退したはずの人も帰ってきたくなるプロレスって何なんだろうな〟って思ったんです。そう思い始めちゃったらやっぱり自分で試してみたくなったんですよ。プロレスの魅力って何なのか、確かめてみたくなったんです。

——なるほど、最初はクラッシュの華やかさから入ったプロレスだけど、最終的にプロレスっていう〝生き方〟に魅かれたわけだ。

青野　そうですね。本当にやりたいことをやらなきゃもったいないと気づいたんです。〝好きでサラリーマンやってるわけじゃねぇ〟なんていう人がいるじゃないですか。そんなのおもしろくないですよね。

——そうですよね。とてもよくわかります。さて、いよいよプロレスラー・青野敬子が誕生したわけですが、理想のスタイルはありますか？

青野　LLPWを選んだのは神取さんがいるからっていうのもあったんで、やっぱり関節技を中心にしたいな、と思ってます。

——空中殺法はどうですか？

青野　できるに越したことはないですけど……（笑）。

——そりゃそうですね（笑）。では、青野選手が長与千種から人生を感じたように、お客さんに対して見せたい思い、見てもらいたい部分というと？

青野　いまはまだ、一生懸命やるだけですから……。一生懸命、ですね。それしかまだないです。「今日は来て良かったな」って思ってもらえる試合が1日も早くしたいんで……。応援してください。

——そのためにはファンの厳しいご批判、ご批評をガンガン送ってくださいって感じ？

青野　ガンガン来たら……落ち込んじゃう、かな(笑)。けっこう考え込んじゃう方なんです。精神的に弱いんですね(笑)。例えば遊園地なんかで楽しく遊んでいても〝そういえば上手くいきすぎだ〟みたいに、悪いことばかり空想しちゃうんです（笑)。でも、正直に言ってもらった方がいいですよね。

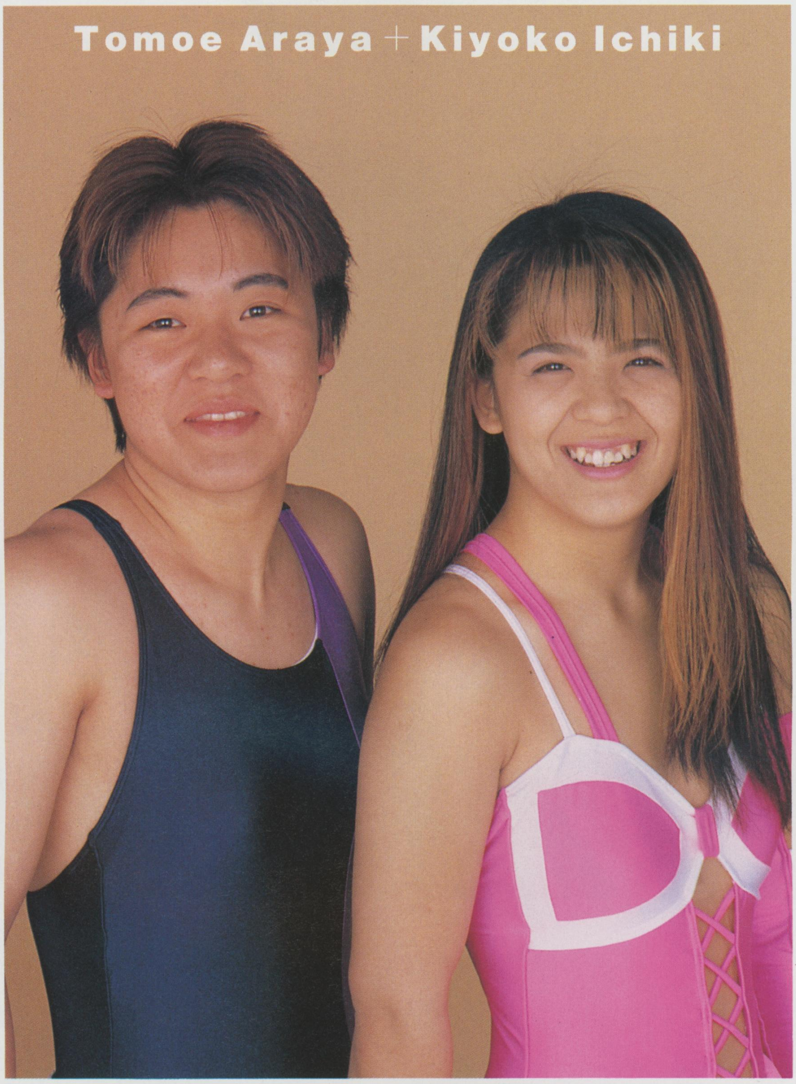
——そりゃあそうですよ、特に新人のうちは。

青野　悪いところを言ってもらえれば気をつけますもんね。じゃあ、ドンドンお手紙ください、楽しみに待ってます（笑)。

KEIKO AONO Profile
青野敬子【LLPW】　本名：同じ。S48年4月8日生まれ。大阪府門真市出身。H7年2月にデビュー。162センチ、63キロ。

私たちはIWAで一から出直します。

Photography●TAISHIN AOKI Text●GO YOSHIDA Hair & Make-up●AKIHIKO YASUMURA



新谷朋江+市来貴代子

●FMWに続き、男女混合のプロレス団体となったIWAジャパン。その女子部を担う2人が、この新谷朋江と市来貴代子だ。ともにかつては既存の団体に所属はしたものの夢破れ、そしてこの新天地に最後の夢を託す。画ビョウデスマッチに負けないような試合を心がけるのだぞ。

——プロレスに入ったきっかけは?

新谷　小学校3年のときにクラッシュギャルズを観て、そのまま(笑)。いちおう全日本女子プロレスの練習生だったんですけど理由があって辞めまして。同期っていうのは府川だけで、いわゆる平成5年組なんです。

——その辞めた理由というのは?

新谷　一身上の都合で(笑)。まあ、怪我ですよね。それが良くなってきたんで、またやってみようかなと。1年ぐらいブランクあったんですけど、市来にここを紹介されまして。

——そういえば市来さんも『元気が出るテレビ』の女子プロレス予備校を経て入門した、LLPWをドロップアウトしてるんですよねえ。

市来　自分が弱かったんです。でも、考えるとプロレスしかなくて。なんか甘えてたところがあったんじゃないかなあと。

——それで2人は、なぜIWAに?

新谷　旗揚げしたばかりだから、一からできますよね。技とかもぜんぜん束縛されずに、自分の好きなようにできるっていうんで、最終的に。

市来　やっぱり、いちばんチャンスがある団体だと思ったんですよ。先輩とかいないし、自分たちで好きなようにやれるって中牧さんとかにおっしゃっていただいて。頑張れば、絶対にどこまででも行ける団体だと思ったから。上に押し潰されないから。すごいファミリー的というか。

新谷　上下関係とかは気にせずって言っちゃアレかもしれないですけど。

市来　男子は男子、女子はお前らが作っていけっていう、そういう感じ。

——プロレスで食べていけます?

新谷　いや自分は実家ですし、テント屋さんでバイトしてますんで。それがけっこう重いんで、大したことないですけど体力作りも兼ねてるって感じですかね。

——ちなみに市来さんも親元で?

市来　いえ、違います。バイトもやらず親のスネをかじってます(笑)。いまは大変なんですけどね。大地震が起きたんで、そうも言ってられなくなって。実家が神戸なんですよ。

——そりゃ大変ですよ(笑)。

市来　家は大丈夫だったんですけど、ヒビとか入ってて。余震が来たら、いつ潰れてもおかしくないっていう。

——そういう状況でも、日々の糧の中から仕送りをしていると(笑)。

市来　だからそれ以来、仕送りの話ができなくて(笑)。どうしよう。

——バイトしようとか思いません?

市来　あっ、思います。今回、初めて思いました(笑)。やります。

——あはは、2人の将来の目標は?

新谷　将来はヒールを目指してるんですけど、いまは全然ヒールになりきれてないんで。体型は違うんですけど、アジャ・コングさんみたいになりたいんです。技とかもすごい巧いし、凶器攻撃ばっかりじゃなくて見せる部分もかなりありますから。

市来　自分もヒール志望なんです。LLPW時代から紅さんに憧れてたんですけど、いまは井上貴子さんみたいに意地悪な感じがいいですね。

——お互い憧れる選手は全女なわけですから、あまりIWAっぽさは意識してないと。でも2人でヒールじゃ、試合になりませんよねえ(笑)。

市来　IWAっていうのは意識してませんけど、ヒール同士で闘うのもおもしろいかもしれませんよ(笑)。

——それもIWAジャパンっぽいですしね。じゃあ「ガラスの中でもやってやる」という思いはあります?

市来　言われれば、できます。

——あっ、できますか(笑)!!

市来　はい。やります。

新谷　はい。守るものないんで。

TOMOE ARAYA Profile
新谷朋江【IWA JAPAN】　本名:同じ。S50年9月12日生まれ。東京都五日市町出身。H6年12月にデビュー。157センチ、63キロ。

KIYOKO ICHIKI Profile
市来貴代子【IWA JAPAN】　本名:同じ。S48年2月21日生まれ。兵庫県神戸市出身。H6年12月にデビュー。153センチ、53キロ。

天野理恵子。

RIEKO AMANO Profile
天野理恵子【ＪＷＰ】本名：同じ。Ｓ51年3月16日生まれ。静岡県出身。Ｈ6年12月にデビュー。１５８センチ、61キロ。

久住智子。

TOMOKO KUZUMI Profile
久住智子【ＪＷＰ】本名：同じ。Ｓ50年1月6日生まれ。千葉県出身。Ｈ6年12月にデビュー。１６０センチ、58キロ。

宮口知子。

TOMOKO MIYAGUCHI Profile
宮口知子【ＪＷＰ】本名：同じ。Ｓ50年8月17日生まれ。大阪府出身。Ｈ6年12月にデビュー。１６１センチ、67キロ。

——雑誌のインタビューは皆さん初体験ということなので、まず皆さんはいったいどんな心意気を持ってプロレスの世界へやってきたのか、から聞きたいと。具体的に言えばプロレスとの出会い、入門のきっかけ、そしてなぜＪＷＰを選んだのかですね。ではさっそく、本谷選手からまいりましょう。

本谷　……質問の意味がよくわからないんですけど……（笑）

——え？　いや、だから動機ってあるじゃないですか。クラッシュに憧れてとか、格闘技でご飯を食べていきたかったとかさ。

本谷　あぁ、はい。私、プロレスってぜんぜん観たことなかったんですよ。中学3年生のときに知人に連れて行ってもらうまで。で、そのとき観たのがＪＷＰで、そのときに……輝きっていうのかな？　何か魅かれるものがあってこれに決めた、と。

——えー!?　だってそれじゃあ入門まで1年もないじゃないですか？

本谷　はい、そうですね。

——なんかいきなり個性的な人に聞いちゃいました（笑）。では続いて宮崎選手。

宮崎　兄がプロレスファンでプロレスのビデオとかいっぱい持っていたんですね。それである日ヒマなときがあって、ちょっとそのビデオを観てみたら、ちょうどそれがＪＷＰの全女の4対4マッチで、それに感動したのがきっかけですね。"ＪＷＰって凄い、自分もやってみたい"って。

——いったいどんな場面でどうＪＷＰに感動したんですか？

宮崎　いや、ＪＷＰが勝った、っていうのが（笑）。

——なるほど（笑）。じゃあ次は倉垣選手。

倉垣　初めは中学1年生のときに男子に連れてってもらったんですけどよくわからなくって「あんまり……アレだったな……」なんて言ったんです。そしたら「お前はプロレスをわかってないよ！」なんて叱られて（笑）。それで私が叱られなきゃいけないほどのプロレスってなんなんだろうって、本とか読みまくって研究するうちにおもしろくなったんですよ。で、そのうち自分も何かを一生懸命にやってみたいなと思い出して、一生は一度きりなんだし、賭けてみようと。ＪＷＰは、デビルさんが基礎の基礎からみっちり教えてくれると聞きましたんで、ここしかないなと。

——ほぉ、倉垣選手は情熱派ですね。口調も熱いものがありますよ。小林選手は？

小林　全日本プロレスを観てレスラーになろうと思ったんです。最初は選手がカッコイイからという感じだったんですけど、だんだんそれよりもレスラーの生き方とかそういうものに感動するようになって。自分もプロレスラーになりたいなと考えて近所の体育館でトレーニングを始めたんです。それで、オーディションを受けようと思って女子プロの研究のために買ったビデオがＪＷＰだったんです。

——なんかあっさりしてますね。でも先ほど話をしてたら「先にデビューできた3人（宮口、天野、久住）には負けたくない」とも言ってたんで、きっと熱い心を隠し持つタイプなんでしょう。では、天野選手。

天野　子供のころから父といつもプロレスごっこしてたんですよ、ハードヒッティングのやつを汗かきながら（笑）。これがきっかけでどんどん好きになっていったんです、父は途中から「まずいな」なんて思ったらしくって遊んでくれなくなったんですけど（笑）。ＪＷＰを選んだ理由は、図書館にプロレスの本を読みに行ってたまたま尾崎さんの本を手に取ったんです。そこには「小さい体の人間も大きな人を倒すことができるんだ」みたいなことが書いてあって、それに凄く感動したんです。

本谷香名子。

KANAKO MOTOYA Profile
本谷香名子【JWP】 本名：同じ。S53年12月19日生まれ。東京都出身。H7年1月にデビュー。164センチ、58キロ。

倉垣靖子。

YASUKO KURAGAKI Profile
倉垣靖子【JWP】 本名：同じ。S50年12月7日生まれ。千葉県出身。H7年1月にデビュー。162センチ、67キロ。

宮崎有妃。

YUKI MIYAZAKI Profile
宮崎有妃【JWP】 本名：同じ。S54年2月2日生まれ。愛知県出身。H7年1月にデビュー。160センチ、57キロ。

小林智美。

TOMOMI KOBAYASHI Profile
小林智美【JWP】 本名：同じ。S54年3月16日生まれ。大阪府出身。H7年1月にデビュー。156センチ、67キロ。

●君はJWPの新人7人を観たことがあるか!! 他団体に比べれば技の制約は少ないかもしれない。だがですよ（なんて言葉じゃ）!! そーゆーんじゃなくって、試合運びであるとか、技のつなぎ方であるとか、それになんたって、新人特有の若々しさでハツラツいきいきとファイトしてるのがイイやね。さぁ、ぜひ、会場で観るのじゃ。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA Text●TETSURO SUGANO Hair & Make-up●AKIHIKO YASUMURA, NOBUKO OHATA

——JWPって体の小さな選手もどんどん活躍してますもんね。さて、宮口選手は？

宮口 はい、えーっと……（顔を伏せて）ウプププププ……。

——どうしたんですか、緊張すると笑っちゃうタイプの人（笑）？

宮口 （笑）ウフフフフ……えー、はい（笑）。クラッシュギャルズに憧れてですね。プロレスファンになったのも、プロレスラーになろうと思ったのも、特に長与さんに。JWPを選んだ理由は……ウフフフフ……すいません（笑）。あの、奥津さんが新人のときも上に行けるチャンスをいっぱいもらっていたじゃないですか。それで、チャンスの多い団体なんじゃないかと……（笑）……スイマセン（笑）。

——大丈夫かなこの人（笑）。では最後に久住選手、お願いします。

久住 あのですねぇ、1年ぐらい前にお姉ちゃんが女子プロのビデオを借りてきたんですよ、そんで小学校のときにクラッシュギャルズが好きだったんで「懐かしいね」なんて観てるうちに……なんとなく、やってみようかなー、……なんて（笑）。

——ええ!? ホントにそれだけで？

久住 ええ（笑）。そんで歳が歳だったんで（入門当時19歳）、JWPならチャンスがいっぱいありそうだなーと。雰囲気も明るそうだったんで……でも、よく知らなかったんですけど（笑）。

——なんか不思議な人……。あー、よくもここまで個性派が揃ったもんですね、感動してますよ（笑）。とりあえず皆さんがかなり変だっていうのはわかったんですけど（笑）、ホントのところどうなのか。本人は答えにくいでしょうから、それぞれ隣に座っている人に教えてもらいましょう。

天野 宮口はひとりでボケてひとりで突っ込んで笑っているおもしろい女の子です。

宮口 久住は実はうるさいです。

久住 小林はさらにうるさい子です。

小林 倉垣もおとなしい人じゃないです。

倉垣 本谷はかなりおっちょこちょい。

本谷 宮崎は優しい女の子。私が寝ていればドアをそっと閉めてくれます。小林は閉めません（笑）。

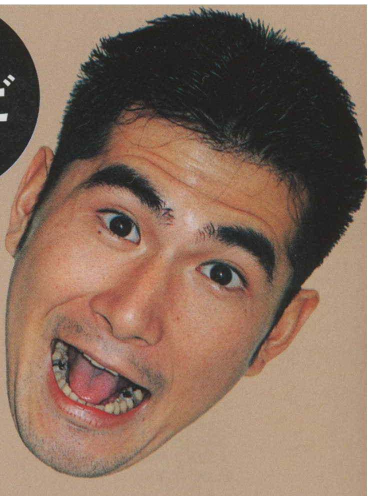
宮崎 天野はとても頼れる女の子、そしてときどき頼れない女の子。

——ああ、なんだかだんだん混乱してきた……（笑）。

『女子プロGP Vol.5』取材テンマツ記

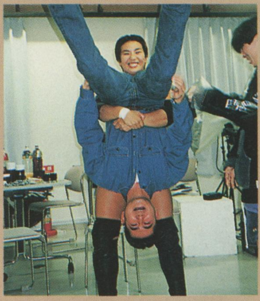
わいど

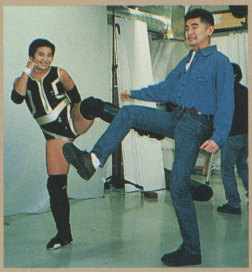
がんばれタツヤ。



●基本的に『女子プロレスグランプリ』のメイキング編として生まれたはずの“ガンタツ”であるが、な～んか安川クンの間抜けぶりをアピールするようなページになっちゃったなあ。

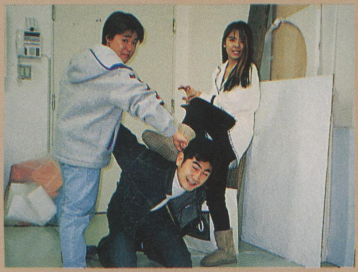
技を食らうタツヤ



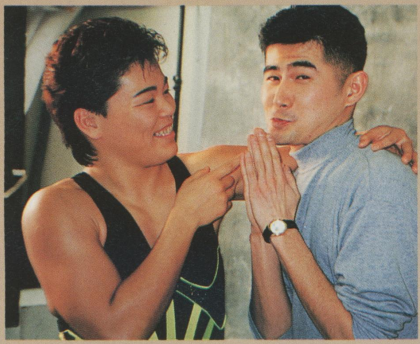


▶▲1／30：つぁっ、あー。堀田祐美子選手にも攻められったッス。何も悪いことしてないのに…

▲1／30：つぁっ、あー。今日の取材は全女ッス。みなみ鈴香選手の鍛え上げられた肉体は芸術的ッス。と思ってたらいきなり襲いかかられたッス…



▲1／27：つぁっ、あー。今日からVol.5の取材がスタートと思ったらいきなり遅刻。IWA JAPANの市来&新谷2選手に制裁されたッス



▶2／1：つぁっ、あー。「ホントの女を教えてやるって。いい夢見せるよ♡」と神取選手に逆セクハラされたッス。助けて真奈美ちゃ～ん

今月のさわやかカップル

▶1／30：つぁっ、あー。アジャ選手の付き人は玉田りえ選手なんスけど、偶然ペアルックだったんで思わずパチリッス

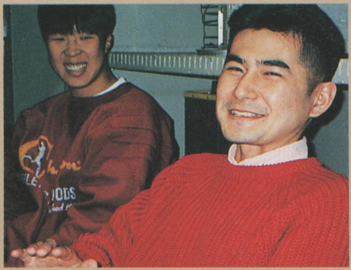
▲1／30：つぁっ、あー。今日のシメはアジャ選手。撮影の手伝いでWWWAのベルトを持つことができたッス。う～ん、何とも言えぬ重みがあったッスよ

そして……タツヤ待望の表紙の撮影日が来た!!

●1／31、安川達也にとって待望の日がついに訪れた。タツヤ最愛のレスラー、豊田真奈美の表紙撮影である。編集者人生最高の日を迎えたタツヤの一日を見てみよう。

▲つぁっ、あー。18ページで使ったアダルティな写真撮影ッス。これって、一応ツーショットッスよね!?

▲つぁっ、あー。豊田選手があまりにもセクシーで美しいため、思わず鼻血ブーしたッス。そんなつぶらな目で見つめないで……ほしいッス



▲つぁっ、あー。最愛の豊田選手の取材ということで、いつになく異常に緊張してしまったッス。止めてくださいよ、ニヤけた顔を撮るのは

いけいけワッキー♡

●レスラーのみならず、スタッフのほとんどが女性というLLPW。そして、飲みに行くのとゲーセン通いが大好きな大野広報の美しさは有名な話だが、もうひとり美人スタッフがいるということをキミは知ってるか？　その名は枠島美佐子。昨年からLLPWで仕事を始めたニューカマー。編集長の出身大学の後輩（日大芸術学部放送学科）ということで、編集長が命名した“ワッキー”なる愛称で、現場では親しまれている。本人は「それってクサそうじゃないですか、勘弁してくださいよぉ」と泣くが。でもってお約束のタツヤ・セクハラ写真を撮ったのだが、撮影前にメイクを直すあたりがタダモノではない。会場で見かけたら、ワッキーをよろぴくね♡

SHOCKS!

▲2／4：っあっ、あー。自慢じゃないスけど自分、ジムで身体を鍛えるのが趣味ッス。あぁ府川選手、胸の筋肉を触らないで…

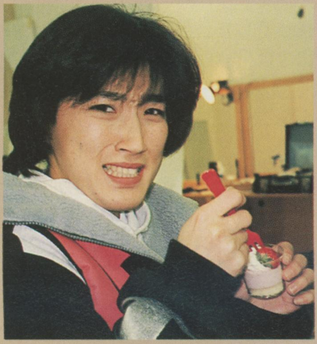
▲2／3：っあっ、あー。くどめは今回の取材時、ペットの犬を連れてきたッス。ひー、動物嫌いなんスから止めてくれッス〜〜!!

SHOCKS!

▲2／2：っあっ、あー。みんながバカにするなら、もう開き直ったッス。山さん&渡辺美佐恵選手とオゲレツ・ポーズでキメたッス

▲2／1：っあっ、あー。大失態を披露したので今後はCOOLにキメてたら、紅の姉御たちにバカにされたッス

▶2／7：っあっ、あー。編集長が誕生日祝いにケーキをもらったので、矢樹選手と食ったッス。で、食べながらも困る矢樹ちゃんッス



▲2／4：っあっ、あー。今日の取材のラストはチャパリータASARI選手ッス。グラビアではアダルト路線だったけど、こんな可愛い感じもいいなあ…

▲2／4：っあっ、あー。いつも元気な長谷川咲恵選手ッス。なぜか往年のディスコ・ヒット『ジンギスカン』話で異様に盛り上がり、最後には2人でジンギスカンの舞いを踊ったッス

▶2／7：っあっ、あー。今号の巻頭特集のトリを飾るのがデビル雅美選手ッス。あの不思議な写真は、こんな小道具を使って撮ったんスよ

▲2／6：っあっ、あー。いつもセクシーなKAORU選手は9日が誕生日だったッス。恒例の花束と、取材当日は風邪を引いてたので栄養ドリンクを差し上げたッス

◀2／10：っあっ、あー。GAEAのドン、長与千種選手の取材でのプレポラ撮影のひとコマッス。長与選手の目が怖いッス〜

SHOCKS!

▲2／8：っあっ、あー。キューティー鈴木選手にパネルをプレゼントしたッス。これは去年のドームの勝利者プレゼント用に作ったもんなんスけど、キューティー選手、喜んでたッスよ〜

◀▼2／9：っあっ、あー。今日はJWPの新人7人の取材ッス。さすがに多人数なだけに、現場は大騒ぎだったッス

▶2／20：取材の最後が、雷神隊の撮影。現場はこんなノリだったッス(ウソッス)。そして飛鳥選手に、自分の秘密を握られたッス…

SHOCKS!

※タツヤって誰？：『女子プロレスグランプリ』副編集長・安川達也のこと。本名／横浜ジェームス・ディーン。生年月日／S45年10月19日生まれ。埼玉生まれの横浜育ち、でも本籍は東京というトンチンカンな男。好きな言葉／BORN IN THE U.S.A.(明日なき暴走)。アメリカとまなまな（タツヤは豊田真奈美をこう呼ぶ）をこよなく愛する、そんな男だ。

アメリカの技術を取り入れた、今、注目の包茎治療。

JAPAN Artificial Plastic Surgery ●美容形成の先進国● from U.S.A U.S.A

傷跡を残さない為の「美容外科的治療」 軽度の包茎には「切らずに治す無切開法」

無料電話相談から予約・受付・アフターケアにいたるまで、誠意をもって対応してくれる
オール男性スタッフ。

★24時間テープ案内★
東京 03(3205)7101
大阪 06(366)0369

21世紀に向かって日本の医療は今、大きな変革期をむかえています。私達は技術の向上だけではなく、心のつながりを大切に考え、努力しております。

東京院長 吉川 優 先生
国立徳島大学医学部卒業

大阪院長 片岡 哲史 先生
国立滋賀医科大学医学部卒業

is the best way for your life.

最近の包茎治療についての相談を分析すると、「手術跡が残ってしまうのでは?」、「シートンカラーになってしまうのでは?」、あるいは、「術後、精力が衰えてしまうのでは?」など、不安をかくしきれないものが多い。男のプライドをかけた一生に一度きりの事だから、それも当然。──そこで、そんな君に、土・日・祝日・夜間でもOK、口コミの患者さんが多いと評判の、ここ山の手形成クリニックを紹介したい。

一人ひとりに最適な治療を…。

山の手形成クリニックでは、より機能的にバランスよく仕上げる為に、誰にでも同じ方法で治療をほどこすのではない。年令、ペニスの形、症状、希望などに合わせて、患者さんと十分な相談の上、一人ひとりに最適な方法で治療をしてくれる。

特に年令が若く、比較的程度の軽い方は、切らずに治療できる場合もあるというから、無料電話相談や無料診察を、気軽に利用してみたら?

世界をリードするアメリカ。それを継承する最新治療。

では、そろそろ山の手形成クリニックでの包茎治療の、核心に迫りたいと思う。なぜ、美しく、自然に、他人が見てもわからない様に、仕上がるのだろうか。それは、最新の美容外科的切開法─『Radiosurgery·Method』─を適用しているからだ。

この『Radiosurgery·Method』は、美容形成外科の分野において、世界で最も進んでいるアメリカで誕生し、本国では、ポピュラーな美容外科的切開法として、そのすばらしい成果と安全性が、すでに実証ずみである。

美容形成手術というのは、まぶたを二重にしたり、鼻を高くしたり……と、主に顔を美しくする為のもの。それだけに、仕上がりの美しさと、機能面での完ペキ度が重視されている。

従来の切開法とはまったく違い、失敗などは一例もなく、手術中の痛みや出血はもちろん、手術跡が残るなどという心配も一切いらない。また、通勤・通学に支障はなく、入院・通院の必要もない。

さらに、他の切開法によって受けた、手術跡の修正手術をも引き受けてくれるというのだから、その技術レベルの高さがおのずと証明される。

万全な24時間アフターケア・システム

ドクターを始めスタッフは、すべて男性。また、個別の待合室が用意されているなど、プライバシーの保護にも、力を入れている。だから、他の患者さんと顔を合わせる心配がなく、恥ずかしい思いもせずに、気軽に治療を受けられる。それに加え、深夜でも術後の不安や心配に応じてくれる専用電話♡完治するまでの無料診療など─"24時間"─アフターケアは万全。

耳よりな話として、男性自身にもっと自信をつけたい君には、亀頭増大手術やシリコンボール挿入手術も、同時に受けられる。包茎というみじめさから抜け出して、より自信に満ちたライフステージを始めようじゃないか。詳しくは、24時間テープ案内 ─── 東京:(03-3205-7101)大阪:(06-366-0369)…………にLet's Call!

…………取材協力 山の手形成クリニック

Artificial Plastic Surgery YAMANOTE

形成外科・泌尿器科

山の手形成クリニック

〈性病のCheckも同時に行えます。〉

予約 お問い合せ
東京 03(3205)9311
大阪 06(366)0466

■診療時間:午前9:30〜午後8:30■年中無休・完全予約制
■土・日・祝日・夜間もOK!!
★金利ナシの分割制度や頭金0(ゼロ)からのローンを御利用できます。

コストパフォーマンスのすぐれた料金設定

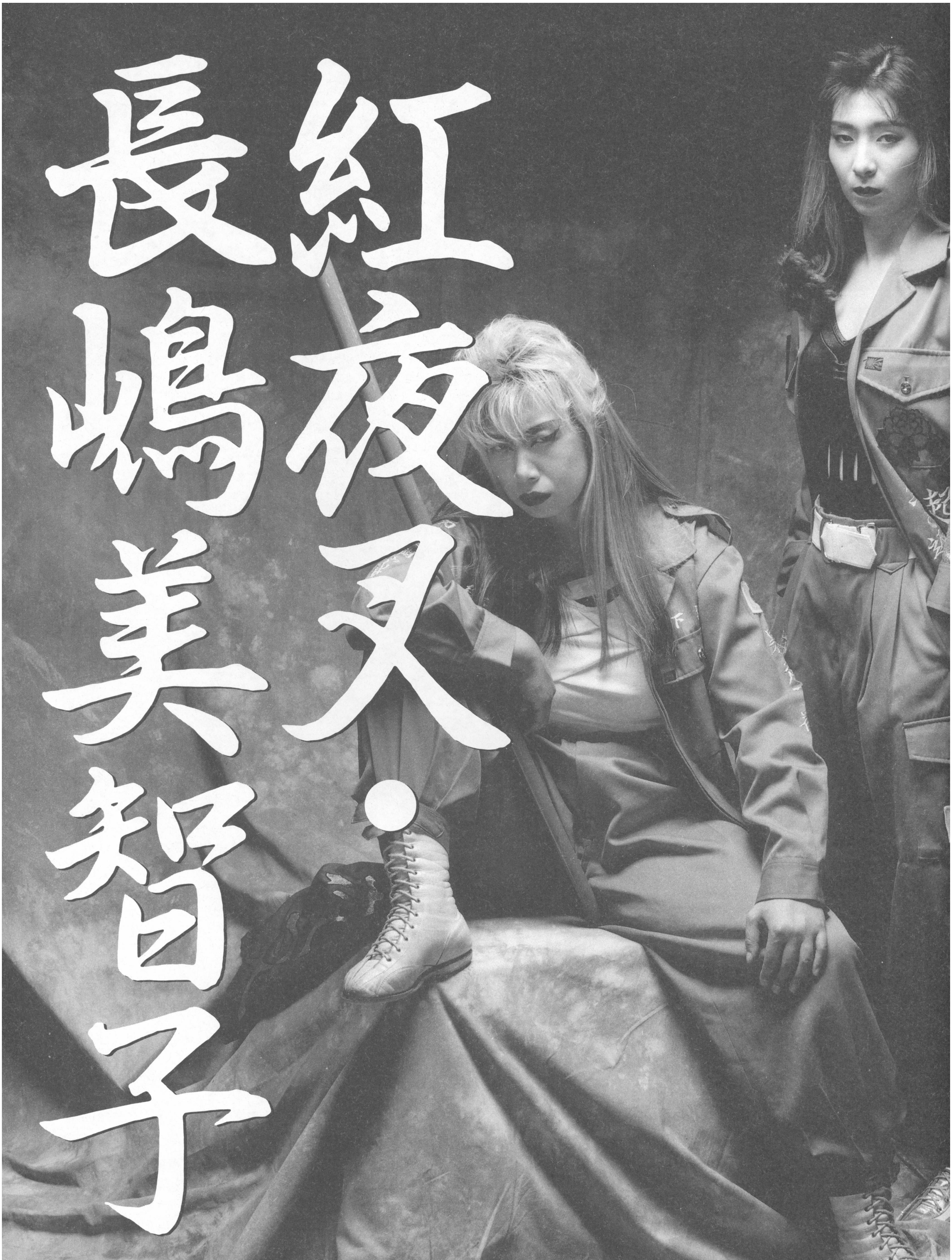
包茎治療費用は、切らずに治した場合には─4万円、手術で治した場合─12万5千円、となっていて、それ以上かかることはない。その他、亀頭増大手術、シリコンボール挿入手術、パイプカット、ワキガ治療、二重まぶたなども引き受けてくれる。

東京(高田馬場)

新宿区高田馬場1−22−7
富士高田馬場ビル4F

大阪(梅 田)

大阪市北区太融寺町8−2
エーワンビル9F(902)


紅夜叉・
長嶋美智子

紅夜叉・

やっぱお互いがもう一段落おいて、そっからタッグの頂点、目指してぇ。

[天下獲り計画其ノ四]

●ファイト・スタイルからコスチュームまで、女子プロレスでは珍しく確固たるコンセプトを持つチーム。この2人に半田美希を加え、LLPW内で革命を起こすのか。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA Text●SATORU KANAI
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA, NOBUKO OHATA
Back Drop●SET WORK JAPAN SET TWO

――紅夜叉&長嶋美智子組って、昨今の女子プロレスにおいて、最もコンセプチュアルなタッグ・チームって感じで。

紅　トーゼンだよバカ。

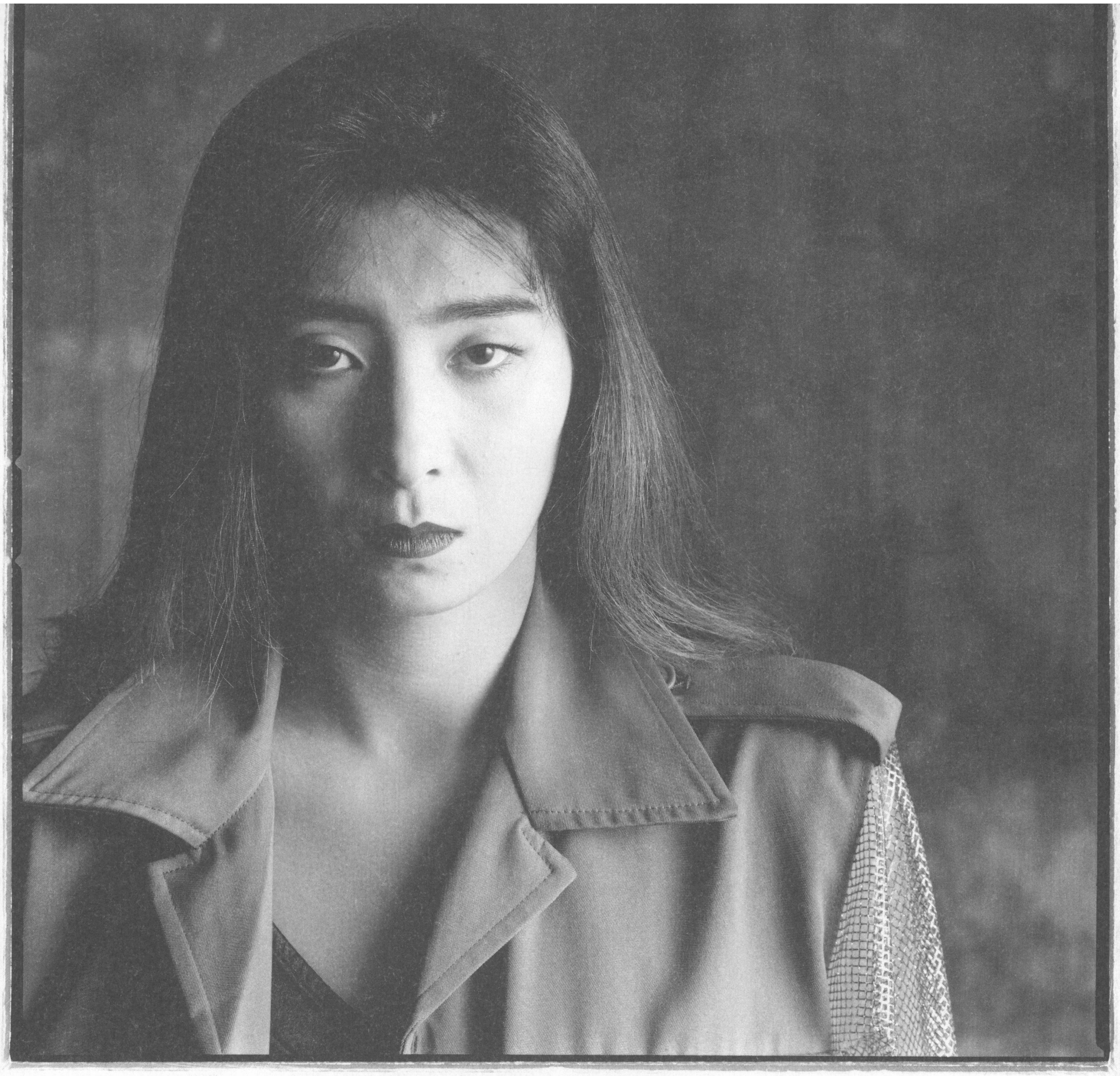
――いきなりバカと言わなくても（笑）。で、そのコンセプチュアル・タッグをもっと完成された域に近づけるにはどうしたらいいかっていうのがテーマっつーことで。いまはお互いタッグ志向なんでしょ？

紅　でもよ。今年の目標とかで「タッグで頑張るぜ」だの「長嶋とのタッグで頂点を目指す」とか口では簡単に言ってるけどよ。オレさまが欠場してよく全体を見てみっと、やっぱ長嶋の個性っつーもんも出てねーし、よく考えりゃオレさま自身、"紅夜叉"としてもう一段階踏まなきゃいけねぇってのにまだ見つけらんねぇっつーのがわかるんだよな。色が出てねぇっての？

――おお、そうかと思えば唐突にシビアなお話に。ひょっとしてトルエン吸いましたか姉御？　新宿南口あたりで買ったりして。

紅　テメ人がせっかくマジで話そうってのに茶化すなコラ。

――ままま、このやりとりもお約束ってこ



長嶋美智子

ドームが終わって一人になって、またトンネルに入ったというか。

とで。この絡みのファンも多いんですから（笑）。……じゃ、マジでいきますか。その、色が出てないことが見えてきたというのは骨折というアクシデントによって一歩引くことでわかったと。

紅　オウよ。やっぱもう一段階おいてっからタッグを目指してもいいんじゃねぇかってな。長嶋は長嶋で何かを見つけてもらって、オレさまはオレさまで違うものを手に入れて、それが上手く噛み合ってタッグで頂点目指してぇというか。最終的に、ってヤツだな。だからいまはあんま焦んねーで、タッグ組みながらもテメェのプロレスしてもらいてぇなって感じだな。オレさまもテメェのプロレスをしてぇ。

――つまり、われわれはタッグ屋でございと看板を掲げる前に、その準備をしなきゃいけない時期ってことですかい。

紅　そうだな。1年かかってもいーからよ。それにすぐタッグの頂点に行けるってもんでもねーしな、現状として。最終的にはそんな遠い話じゃねーと思うし。

――では長嶋さん。いま姉御がおっしゃった〝色がない〟というキツいご指摘、それと前回の姉御のインタビューにあった〝客に同情されるようじゃおしまいだ〟発言を受けてみてどうです？　姉御には、そういった部分でのもどかしさをお持ちなんですよ。欠場してて自分が動けない分、歯がゆくてしょうがないわけですよ。

紅　オメエ、オレさまのことちゃんとわかってんじゃねーか。どうだ？　なんかオゴってやろうか（笑）。

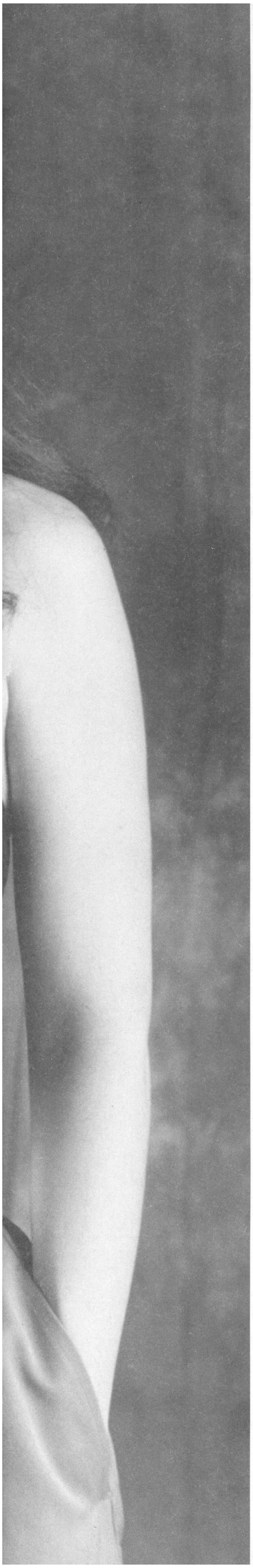
――嫌です（笑）。インタビューの邪魔をしないでくださいね。……長嶋さん、自己分析をしてください。

紅　コイツ、超ムカつく。

長嶋　（笑）……紅さんに言われてることを自分でも感じてて、ドームが終わってからまた一気に暗闇に入ったというかトンネルに入っちゃったって感じ。トンネルの明るい先は見えてるんだけど、そこまでたどり着くのにどうやってそこまで行けばいいんだって、すごくいま悩んでる。

――それで、その悩みがあるから試合で闘志が空回りしちゃって、まさに悪循環って感じなんじゃないですか？

長嶋　そう。でも、それを考えて考えて落ち込んじゃうよりは、前向きに行かないとよけいダメになるのが自分だと思うんで。



紅夜叉・長嶋美智子

最終的に目指すは、女版の邪道・外道だな。あ・うんの呼吸がバッチリじゃん。見習いてぇよ。

——なんか考えこみすぎちゃうようなタイプですよね、人間的に（笑）。

紅　ハハハハ。スマン、笑ってしまった。

長嶋　いえ、でも本当、潰れちゃいそうな感じがするんで。

——そのまま飛び降り自殺を考えたりするような（笑）。『完全自殺マニュアル』持ってたりして。

長嶋　持ってるけど……。

——持ってる（笑）!?……それはヤバいんではないかと。

紅　コイツ、ちょっとヤバイとこはあるね（笑）。

長嶋　だから、そういう迷宮に入っちゃったらもう、抜けられなくなるから。

——なんかマズいノリになってきそうなので話題変えましょうか（笑）。……じゃあですね、ここでタッグの前段階、つまり長嶋さんが姉御に弟子入りするあたりを振り返ってみましょうよ。もう1年前ほどになりますかね。やっぱ、要は自分を変えたかったってことでしょ？

長嶋　やっぱもう……まだ白い水着を着て負けて負けて負けて。全女からＬＬＰＷに来たっていうのにそのまんまというかまったく一緒で。

——ぜんぜん成長してないという。

長嶋　そう。何も変わりばえしないし、このまま負け続けてたら、もう自分は終わりだと思ってたし。そんなとき紅さんはひとりで頑張ってて、それを見たらこんな〝魂〟が自分には欠けてるんじゃないかと思って。

——そして、その欠けてるものを伝授してほしかったと。実際に姉御と共闘するようになって、変わった部分はありましたか？

長嶋　ある。プロレスもそうだけど、その魂を半分でももらったと思う。前は負けてボロボロでもう可哀相でどうしようもないって、お客さんがそう観てて。

——何もそこまで卑下しなくても（笑）。

長嶋　自分でも「ああ、また負けた」って思うだけ。「試合に出られればいいや」とまで思ってたのが、負けたら「何くそ」って思うし、ひとつやるにも堂々と、っていうか。姉御はその点どってりしてるし……。

——どってり!?　それって汚そう（笑）。

紅　ハハハハ。そりゃどっしりだろバカ。

長嶋　スイマセン（笑）。そういう貫■みたいなものも自分も持たないと何も変わらないし。どちらかというと精神的な面で、技術うんぬんじゃない、そういう気持ちを学んだという。まだまだ足りないけど。

紅　オレさまはな、こんな長嶋の気持ちがすげーわかるんだよ。紅夜叉に変わるときがやっぱ、そんな感じだったんだよな。だからさんざん土下座されてるうちに情が涌いてきてな（苦笑）。でもな、弟子入りしてから最初は突き放してたんだけど。

——いまはどうなんですか？

紅　いつも試合終わってから長嶋が聞きに来るんだけどよ、いつも言うことは同じで「やっぱ可哀相にしか見えない」。一応アドバイスはしてはいるけどな。

——姉御は、その可哀相に見える理由は何だと分析してます？

紅　やられてるときが、ベビーフェイスの長嶋美智子のときとさほど変わらねーから。

——やられるときに変身前の、いわば地に戻っちゃうというかそのまんまという。

紅　でもよ、コイツの顔つきって冷たいだろ？　その点でオレさまよりヒールの素質があると思うんだよ。だからすっげぇ羨ましいんだけどな。パッと見てオレさまと長嶋だったら、きっとコイツの方がヒールっぽく見える部分があるんじゃねぇか？

——青白くて冷血な感じ？　もっと言うと病的っつーか。

紅　だろ（笑）？

長嶋　ア、アハハハ。

——やっぱ姉御は健康そうですもん、やっぱ。ナイスバディだし（笑）。

紅　照れるぜ、って言っちゃいけねーのか（笑）。ま、だからそのへんを利用して、オレさまはドーンと突っ走れ!!～みたいなバリバリ路線で行きてぇし、一方で長嶋はこの持って生まれた冷たさを出してくれたら、タッグ・チームとして完成するんじゃねーの？

——ホント、それがいちばん理想の形だと思いますね。要するに長嶋さんは、〝ドボケた顔してバンバン〟であればいいんですよ（笑）。すごい冷たい顔して、そんなに体力使ってないように見えてやることはエゲツないという。

長嶋　ハハハハ。

——そこに行く前に、まだ精神的な弱さが表情にも出ちゃうんですよ、まだ。長嶋さんの本当の性格はどうなんですか？

長嶋　自分でもよくわかんない。なんか二面性があるというか。

紅　ピッタリじゃん、ヒールには。

——ねぇ。

長嶋　良い人かと思ったらすごく残虐な自分がいたりとか、両極端な自分が中にいるっていうのはすごくある。

——問題は、それをリング上で出すにはどうしたらいいかっていう。では、最後に理想的なタッグとは何か？　と問うならば。

紅　オレさまは、女版邪道・外道みてぇのがやりたいなと。

——ああ〝どうだい兄弟!!〟ってな感じで。

長嶋　アハハハハハ。

——〝合点だい姉御!!〟っての。なんとなくわかります。コンビネーションからルックスから全部……。

紅　コンビネーションとか、ホントにアイツらバツグンだよな。あ・うんの呼吸っての？　ウチらはまだそれがねーな。

——長嶋さんは？　先輩においしい表現を持ってかれてトンネルが遠のいた？

長嶋　女版邪道・外道は一緒なんですけど……あれ？

紅　（笑）トンネルか？

長嶋　いま浮かんだんだけど、すっかり頭の中が真っ白に（笑）。

——また遠のいてゆくーっ（笑）!!

KURENAIYASHA Profile
紅夜叉【ＬＬＰＷ】本名：安田留美。Ｓ45年4月23日生まれ。福井県小浜市出身。Ｈ元年12月にデビュー。161センチ、70キロ。

MICHIKO NAGASHIMA Profile
長嶋美智子【ＬＬＰＷ】本名：同じ。Ｓ45年9月26日生まれ。群馬県渋川市出身。Ｈ元年12月にデビュー。164センチ、57キロ。

●全日本ジュニア王者にしてJWPジュニア初代王者の大本命であるキャンディー奥津。彼女のジュニア覇者としての抱負と、いつの日か発せられるであろう“脱ジュニア宣言”への序章をここに。

キャンディー奥津。

ジュニア覇者、現在と未来のはざまで。

Photography●TAISHIN AOKI　Text●KAORI UNO　Hair&Make-up●TAKASHI KAMIYA

かわいい顔してテクニシャン。というキャッチフレーズのまま、ときにはキューティー鈴木を凌ぐほどのアイドル人気を見せ、ときには見事なジャーマンで観客の度胆を抜く。それがキャンディー奥津という選手。

本人の意志とは通じているのか、いないのか、ハタから見ると「苦労知らず」のイメージがある。

厳しいはずのプロレスの道をニコニコ笑ったまま歩いているようだ。キャンディー奥津が歩いているのは、JWPの道。その途中、団体対抗戦という大通りにぶつかる。

「対抗戦が始まったころは新鮮さもあったけど、私の場合は特にやってみたい相手がいたわけじゃないし、ライバルもいなかった」

奥津は、その大通りの中、やってくる車をうまくよけながら、全日本ジュニア王座のベルトを手に入れた。

もしかしたら、誰も気づかないところで、何度も車にひかれていたのかもしれない。しかし、奥津のベルト奪取は、多くの人に順当な出来事として受け止められた。

ベルトの争奪戦の中心となったのは全女のASARIと玉田、そして奥津本人の3人。この中で奥津がチャンピオンになったことに対して、誰も反論しなかったし、それをする必要もなかった。いまごろ、全女のジュニア勢はベルトを取り返そうと必死になっているに違いない。

「もちろん、そうですよね。もともとは、向こうにあったベルトなんだし。ただ、逃げるわけじゃないけど、自分にとっていまは対抗戦はあんまり頭にはない。ベルトもうちの下の子たち、特に矢樹あたりに挑戦してきてほしい。でも、チャンピオンとして誰の挑戦も受ける。そして、勝ちます」

対抗戦については、お祭りとして年に1度程度に押さえた方がいいのでは、という

キャンディー奥津。

ジュニア覇者、現在と未来のはざまで。

自分、いままで壁にぶつかったことがないんです。でも自分の性格上、すぐに乗り越えちゃう気がするんですね。

声も多い。奥津のように団体内に目を向けている選手が増えているようにも見える。そうすると、奥津の長期政権が続く可能性が高いのだ。が——。

「ベルトにはあまり執着してないというのが本音。ベルトを持っているのは良いことだし、自信にもつながるけど、ジュニアのベルトを長く巻いていると、いつまでもその枠から抜け出せないから」

対抗戦という大通りを過ぎたいま、彼女はまたJWPの道を歩き出した。その先に見えるもの、それはこのたび新設されることになったJWPのジュニア王座だろう。

JWPの新人たちは人数も多いし、レベルが高いともっぱらの評判。だが、当然のことながら、奥津が初代王座の大本命とされている。先輩にあたる外山も怪我から復帰した。後輩たちの急成長ぶりは、奥津本人もよく知っている。

それでも奥津はこう言いきるのだ。

「私がベルトを獲ります」

2冠王宣言とは頼もしいかぎりだ。だが、奥津の本音は先ほどの「ベルトには執着していない」の言葉にある。

「矛盾してるかもしれないけど、JWPのベルトは欲しい。本当の意味で執着を捨てられるのは、そのベルトを獲ってからかもしれない」

さて、ここで具体的な話を聞こう。狙っていると公言するJWPのジュニアのベルト。奥津の中ではどれほどの自信があるのか。

「100パーセントあります。自分はまだ人のことを言える立場じゃないけど、うちの下の子たちはまだまだ。絶対負けません。唯一、怖い存在なのが矢樹。矢樹は柔道の経験があるから、スキがない。逆に言えば自分がスキを見せたらやられてしまう。でも、そんなことは言ってられないんです。JWPの初代ジュニア王座はキャンディー奥津に決まりです」

ジュニア王座に参加する選手のうち、奥津にとっては外山以外はすべて後輩。その外山も復帰直後ということもあり、こうなってくると単に勝つだけじゃなく、その試合内容、勝ち方に視線が集まってくる。さすが奥津、といわれるような試合が要求されてくる。

そう言うと、奥津は力強くうなづいた。

わかってる。誰も文句のつけられないチャンピオンになってみせる、という無言の返事だ。

全日本のジュニアチャンピオンとして、そして、JWPのジュニアチャンピオンとなれば、奥津には確固たる実績が与えられる。もしかしたら、奥津がいちばん欲しいものはチャレピオンベルトではなくて、それなのかもしれない。

苦労もせずに、これといったライバルもいないまま、順調に歩き続けてきた奥津にとって、言葉の上だけではなく「ジュニア最強」の称号を手に入れられたら、それは大きな転機を迎える良いきっかけとなるはずだ。

大きな転機。そう、それは、上への挑戦。ひいては、上からの白星。ここで大切なのは、金星ではなく、あくまでも白星であるということ。いつまでも、ジュニアの奥津のままじゃいられないのだから。

もちろん、奥津だってそんなことは百も承知だ。いつかは、という思いは人一倍持っている。

「先輩に当たると、もちろん勝ちたいと思うけど、良いところを盗みたいと思う。負けてもいいやって思うわけじゃなく、次につなげていきたい」

いまは。と付け加えてこう話した奥津。実際のところ、現時点で奥津が上の選手から3カウント奪ったら、それは大金星になる。

JWPの道の中で、奥津のいる場所からそのすぐ前にいる選手の後ろ姿は、ようやく見えるくらいの位置にいる。後ろからはかけ足で上ってくる後輩たちの足音がどんどん近づいてきている。

奥津の目の前の道は、彼女自身にはどう見えるのだろうか。急な坂道か、それとも平坦な一本道なのか。

もしかしたら、心臓破りの坂かもしれない。思いがけないところに壁があるのかも。

「自分、いままで壁にぶつかったことがないんで、ぶつかったときが怖いなって思う。いままで順調に進んできたから、何をきっかけに壁に当たるかもわからない。でも、自分の性格上、もし壁にぶつかっても案外すぐに乗り越えちゃうような気がする」

そんなこと、壁にぶつかったことがないから言えるんだよと思われても仕方がない。だけど、苦労知らずで育ってきた奥津だからこそ、説得力が増す。技術面の壁にぶつかったのなら、練習をすればいい。坂道を上ったところで誰かにつまみあげられて、下まで転げ落ちてしまったら、また上まで上がればいいことだ。

まだ見たこともない壁について考えるのは、もっと先でいい。

奥津が超えなければいけない壁は、まずジュニアという枠だ。

「どこまでをジュニアと呼ぶのか自分にはよくわからない。簡単にいったらボリショイさんはもうジュニアじゃないけど外山さんは今度のジュニアの大会には出てくる。キャリアで分けてる部分もあるだろうけど、自分がいつまでジュニアと呼ばれるのかは、自分次第だと思ってる。実際にキャリアも浅いし、全日本のベルトもあるし、JWPのベルトも狙ってるわけだから、いまはジュニアといわれても何の問題もない。それならそれで、ジュニアの中でいちばん強くなって、それから上を目指したい。いえ、目指します」

奥津の目の前の道はこれだった。まずはジュニアの坂道の頂上に立つ。そこまでは、全速力だ。

前を歩く人たちの姿は見えないのではなく、いまはまだ見ないでいるのだ。ジュニアの頂上に立ったそのとき、奥津の目には福岡が、キューティーが、尾崎が、そして関西やデビルが飛び込んでくるだろう。

そのときに、奥津の行くJWPの道はうんと険しくなる。それでも奥津は、奥津ならばきっと何度転んでも立ち上がって歩いていくに違いない。いままでの道が明るく、安全だった分、それくらいの困難はプロレスの道にはつきものだから、と例によってニッコリ歩いてくれるはずだ。

その前に大きな頂上に立とう。

「新技をそろそろ考えたい。でも、今年はあせらず復習の年にしようと思ってる。持ち技をもっと完璧にしたい。ケガもしっかり直して、ローリングジャーマンも解禁したいし、雪崩式のノーザンライトももっと有効的に出していきたい」

きっとジュニアの2冠王になることで、初期キャンディー奥津が完成されるはず。

インタビュー中、奥津がポロッと「自分、色ってありますか?」とこぼしたけど、キャンディー奥津の色はまだ塗ってほしくない。舐めてるうちに味が変わっていくキャンディーのようにいろんな色を散りばめた不思議な色、それが奥津の色になってほしい。

ジュニアの頂上に立ったら、ゆっくりといままで歩いてきた道を振り返ってみよう。そこで最初の一色を塗ればいい。進むたびに険しくなるJWPの道に備えて、まずは明るくて力強い色を塗ろう。

もうすぐ奥津の腰に巻かれるであろう、2本目のベルトがいい色をつけてくれるはずだ。

「復習の次はとうぜん予習です。そのためにも復習はしっかりやらないと。復習し終えたキャンディー奥津は怖いですよ」

CANDY OKUTSU Profile
キャンディー奥津【JWP】本名：奥津智子。S50年1月16日生まれ。広島県広島市出身。H4年8月にデビュー。155センチ、57キロ。

堀田祐美子。

〝ラストチャンス〟とは言わせない。

●今年デビュー11年目を迎える堀田祐美子。これまでに数多くの輝かしい実績を残しながらも、未だ〝全女NO.2〟の地位に甘んじている。昨年は2度にわたりWWWAベルト奪取に失敗。しかし、堀田祐美子はまだ終わってはいない。まだまだ発展途中のはず。時代はこれからだ。

Photography●TAISHIN AOKI Text●SHINO HOJOH Hair&Make-up●YOKO TAMURA

堀田祐美子の実家は、神戸市の東灘区にある。阪神大震災において、家屋は倒壊した。幸い、御両親は軽いケガ程度で助かったが、'95年は彼女にとって波乱の幕開けとなってしまった。

「なかなか両親と直接、話ができなかったから心配だった。試合には出ていたけど、やっぱり集中できなかったかな。でも、両親も落ち込んでないし、いまはもう大丈夫。ただ、ジャガー（横田）さん、（ライオネス）飛鳥さん、チコ（長与）さん、ダンプ（松本）さんっていう先輩たちが連絡してきてくれたし、北斗（晶）もメキシコから電話してきてくれた。みんな〝足りないものがあったら言って〟とか〝住むところに困ったら言って〟とか……ホントに涙がでるほど感激した」

ふだんは連絡を取ることもなくなっていた先輩や友人からの励まし。多かれ少なかれ、全日本女子プロレスとは袂を分かち、ともすれば敵対する可能性のある人もいる。しかし、やはり根底では仲間なのだ。そして、堀田はそんなみんなの暖かさを素直に受け止め、恩義に感じている。団体が増え、それぞれの思惑がうずまく女子プロレス界においては、ちょっと良い話である。

「地震は天災だからしょうがないんだけど、やっぱり悔しさはあるし、そういう悔しさもまとめて、プロレスの方にぶつけてみようかなと（笑）」

堀田祐美子は、去年一年、いろいろとチャンスを与えられた。しかし、大一番ではハズしてしまった感が強い。東京ドームでも完全に押していたコンバット豊田戦で星を落とした。その敗因を彼女自身はこう分析する。

「やっぱり、まだ何かが欠けてるんだと思う。精神面が弱いっていうか、自分の力を出しきれないって言うか。そういうところを克服できなければ赤いベルトも取れないんじゃないかな」

堀田は強い。それはわかっている。しかし、強いけど負ける堀田を何回も見てしまった気がする。本人も〝強いけど勝てない〟というイメージが付きつつあることを自覚しており、なんとかそれを打開しようとしている。

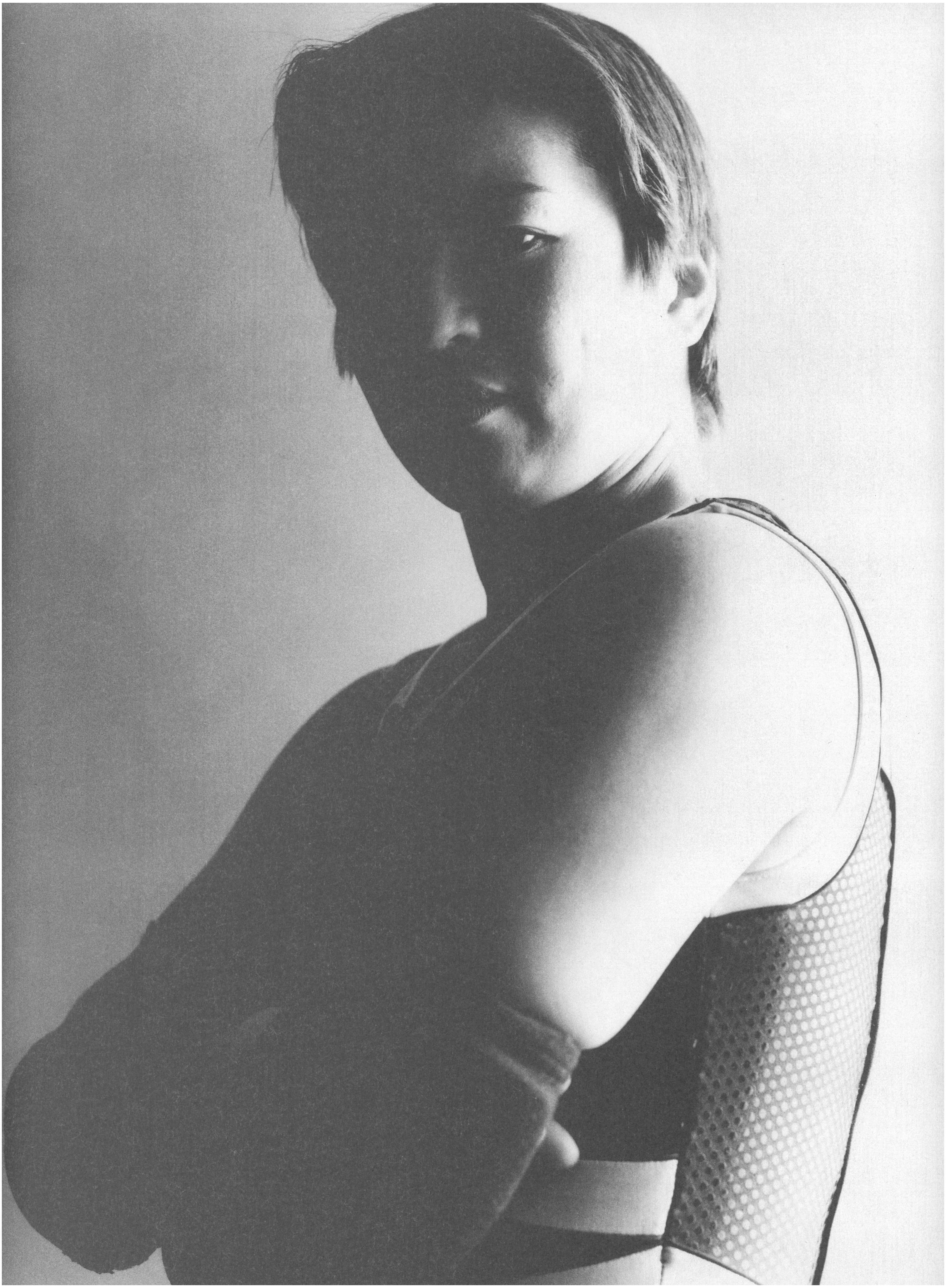
「チャンスを与えられているうちに、なんとかしないと、名前が出て来なくなったら、終わりだからね」

堀田は同期のみなみ鈴香と二人で、たびたびベテラン選手としてひとまとめに語られることがある。しかし、堀田とみなみは実際には全く別の位置にいる。みなみはプロレスの教科書と言われるほどの実力を持ちながら、現在の全日本女子プロレスのトップ争いに名前を連ねることは少ない。勝っても負けてもその評価が下がることはなく、独自の世界を展開している。一方、堀田は、次期WWWAチャンピオンの有力候補として期待されている。期待されているからこそ、負ければ失望される。光栄であると同時に、過酷でもある。

「みなみとタッグを組むのは最近は抵抗がある。みなみが嫌なんじゃなくて、そういうコンビっていう色で見られちゃうことが。ベテランとか古株とか大御所とか（笑）、言われるのはすごく腹が立つ。だって、私はベテランなんて思ってないし、まだまだこれからできると思ってるから。だから、みなみにももっと赤いベルトへの欲とかを表に出してほしいなあと思う。そうしたら、二人が組んだときのイメージも変わってくるだろうし」

堀田は自分のことをまだまだ発展途上のレスラーだと思っている。10年もやってきて何をのんきなと思わないでもないが、確かに彼女はいまだに成長し続けている。決

大御所とか言われるのは腹が立つ。自分はまだまだこれからですよ!!



“赤いベルト”を狙う気持ちはまだ強い！
でもあのベルトを巻く人は全女を支える“何か”が必要。
自分はのんびりと構えて“その何か”をものにします。

堀田祐美子

して器用な方ではない。また図太い神経も持ち合わせてはいない。悩みながら、ときには時代に流されながら、何とかここまで歩いてきたレスラーである。しかし断じて、単なるベテラン選手としてそこそこのところで構える生き方は拒否している。親愛なるみなみ選手にも、そうあってほしいと熱望している。思えば彼女たち60年組は、まず西脇充子が時代の狭間をぬってスターダムにのし上がった直後、あっさりと引退し、またここ数年は北斗晶がカリスマさえ漂わせるインパクトでブームをさらった。アクのない堀田とみなみには北斗のような芸当は無理であろう。しかし、この二人にはいまこそ“継続こそ力なり”を証明してほしい。そして“ベテラン”という言葉に、ときに込められる微かな侮辱を跳ね返してほしい。

去就が注目される北斗に関しては力強くこう語った。

「戻ってくるのも大変だと思う。でも、もしまた闘うことになったら、私は私で飛躍のチャンスにさせてもらうっていうか、もう“自分が一番”みたいなことは言わせないぞって思ってる」

もう一人のライバル、ダイナマイト関西との再戦に関しても意欲的である。

「すごく闘いたい気持ちはある。赤いベルトを狙う気持ちはもちろん強いけど、それとはまた違った意味で。関西との対戦は今年中に実現したい」

そうは入っても対抗戦は各団体とも控える方向にあるいま、ただ待っているだけではそのチャンスは来ない。

「そう赤いベルトを巻けれけば挑戦して来いって言えるんだけど…」

堀田は昨年、WWWAシングルの赤いベルトに2回挑戦し、敗(やぶ)れている。本人もこの先、続けて挑戦していくべきか、それとも少し間をおいて、機を見るべきかで悩んでいる。しかし、そうこうしているうちに、東京ドームからの流れでファンやマスコミの目は豊田真奈美に向いており、いまや豊田を次期チャンピオンに押す声は日増しに大きくなっている。

「やっぱり、やばいなっていうのはある。ただ、何て言ったらいいのかな、豊田は確かに飛んだり跳ねたりするのは凄いと思うけど、中身がないっていうか……闘っていて怖さはないんだ。うまく言えないけど彼女は変わったタイプのレスラーだからね」

ここで堀田が言うところの“中身”とは大地にどーんと根差したような地力の強さプラス精神的な度量の広さを指す。そしてその二つこそ、WWWAチャンピオンとして不可欠な要素だと堀田は言いたいのである。豊田はしがらみや伝統をスコンと飛び越して、勝利への執念のみで真っ直ぐに突き進む選手である。そしてそんなところがいまの豊田を輝かせているのだが。

「WWWAチャンピオンは強いだけでも、うまいだけでもだめだと思う。全女を支える何かがなければ。あのベルトを巻いた人はその時点での全女の代表だし、看板。彼女はまだそういう域に達していないと思う。もちろん、私もそう思われてるかもしれないけど（笑）。そういう意味では（井上）京子の方が怖い」

確かに歴代のチャンピオンたちは全日本女子プロレスの象徴となり、団体のすべてを背負ってきた感がある。まだ赤いベルトを手にしていない堀田の唯一の救いは、それらのチャンピオンが赤いベルトを巻くに相応しいレスラーだと自分自身が認められることだった。

「赤いベルトは巻いている人だけのものじゃない。そのとき頑張ってるみんなの力が全部つまってるものだから」

優しい声で、少しずつ言葉を選びながら堀田は話す。堀田のこだわりがしんしんと伝わってくる。彼女は過去に偉大な先輩たちが汗と涙の果てにそのベルトを手にしたのを見てきた。赤いベルトは彼女にとって聖域である。ただし、誤解しないでほしい。堀田は豊田のプロレスを否定しているわけではない。ただ彼女の思い描いてきたチャンピオンの像に豊田は当てはまりにくいのだ。しかし、時代が変われば、チャンピオンの定義もいつか変わっていくかもしれない。自分のこだわりを貫くのなら、堀田は自分の中の赤いベルトへの情熱のすべてを賭け、豊田に傾いた時代の流れを引き戻さなければならない。

「そう、どうにかしなくちゃいけない。今後、うちの団体は格闘技戦とかにけっこう力を入れていくと思うんだけど、自分をアピールできる相手を探してくれれば積極的にやってみたい。話題づくりになるし、ただある程度、実績や名前のある人が相手じゃないと意味はないと思う」

今年は堀田にとって“ラストチャンス”であるという声も聞かれるが……。

「うーん。私自身は焦ってないし、のんびり構えてて、別に“ラストチャンス”とは思ってない。でもそう思ってる人もたくさんいると思う。世間は甘くないしね。もし今年、赤いベルトを取れなければもう終りだって思われるのかもしれない。ただ、ベルトを取っても取れなくても、堀田はまだまだいけるぞって思わせるように持っていくのも自分次第だと思う。“ラストチャンス”だなんて言われる評価を変えてみせる」

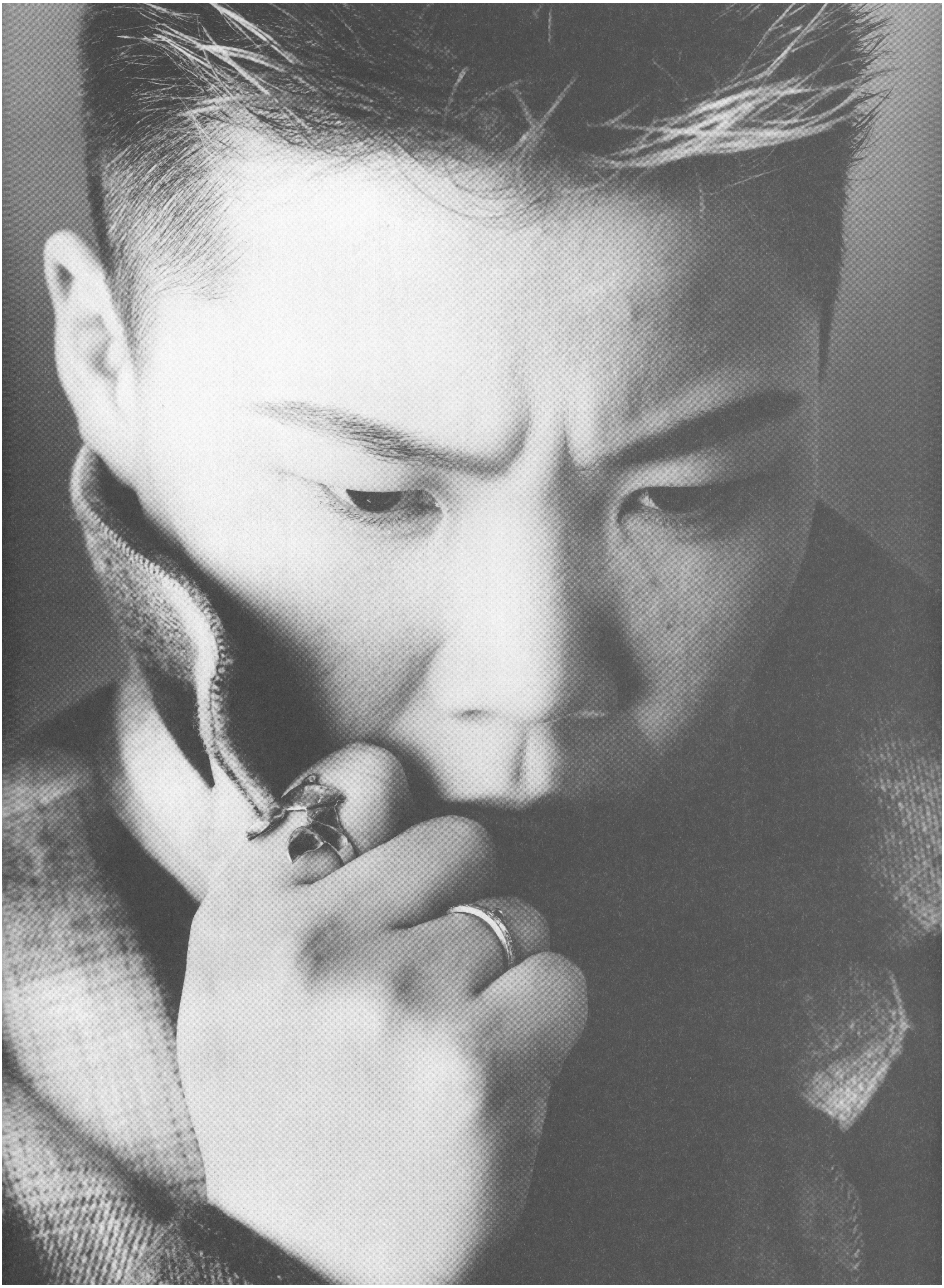
堀田はきっぱりと“ラストチャンス”という言葉をはねのけた。ダイナマイト関西、神取忍、長与千種・他団体にも対戦したい選手はまだまだたくさんいる。じっくりと自分を成長させて赤いベルトを狙っていく。

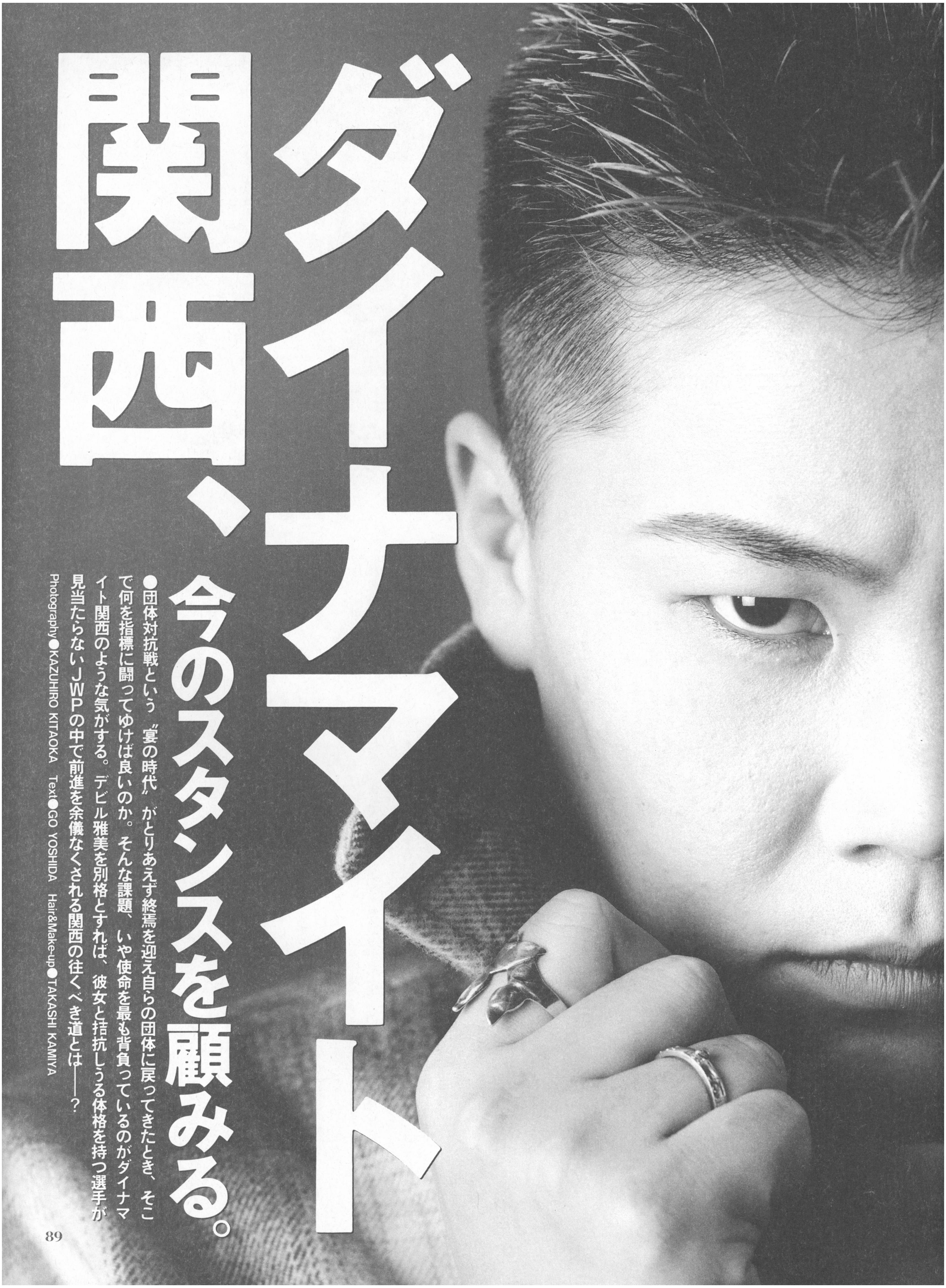
このインタビューの直後、次期WWWA挑戦権を賭けたタッグマッチが決まり、その結果、アジャ戦の切符を手に入れたのは豊田真奈美だった。

さあ、この愛すべきパワーファイター堀田祐美子の逆襲がいよいよ楽しみである。頑張れ、堀田祐美子。“ラストチャンス”とは言わせるな。

YUMIKO HOTTA Profile

堀田祐美子【全日本女子プロレス】本名：同じ。S42年1月10日生まれ。兵庫県神戸市出身。S60年6月にデビュー。168センチ、73キロ。





ダイナマイト関西、

今のスタンスを顧みる。

●団体対抗戦という〝宴の時代〟がとりあえず終焉を迎え自らの団体に戻ってきたとき、そこで何を指標に闘ってゆけば良いのか。そんな課題、いや使命を最も背負っているのがダイナマイト関西のような気がする。デビル雅美を別格とすれば、彼女と拮抗しうる体格を持つ選手が見当たらないＪＷＰの中で前進を余儀なくされる関西の往くべき道とは——？

Photography●KAZUHIRO KITAOKA　Text●GO YOSHIDA　Hair&Make-up●TAKASHI KAMIYA

ダイナマイト関西

今のスタンスを顧みる。

長与千種にも矛先を向けたい。でもJWPで個人闘争をしたい。

ジャパン女子プロレスでミスAと呼ばれていた少女は、ダイナマイト関西と名前を変えて、いまや押しも押されぬエースへと成長した。ジャパン女子崩壊によりJWPが誕生して3年になるが、彼女にとってこの3年間はジャパン女子での6年間とは比較できないほど密度が濃かったという。

「……まあ、ジャパンが終わって順調に旗揚げしたからね。ジャパンが2つに別れて、ある人はLLPWを〝かわいそう〟だとか〝苦労してる〟とか言うけども、これは正直な話、苦労したのは自分らだから。残された人間が作り上げた団体だからこそ、みんなで力を合わせて順調にここまで持ってきたわけだからね」

分裂の事情は当事者にしか知る由もない。だが、LLPWも〝自分たちは残された人間〟と発言しているのは不思議でならない。

「それは被害妄想やろ。上に立つ人間の教え方が悪いんでしょ。ズバリ言ってそれしかない。だから、下の選手がそういう考え方をしてしまうんだと思う。

自分たちは行く場所もなくて、ホンマ途方に暮れて、ホンマにもうプロレスはできへんやろなあっていうところまでいって。自分も一般の生活に戻ろうとバイトとかしてね。誘われても、ほかの団体に行く気はなかったから。そういう状況で、〝何もないけども、みんなで1つにまとまってやってみないか〟という話があって始めた団体がJWPなんですよ。向こうが〝苦労した〟とか、〝残されたからどうやこうや〟とか、〝何言うてんの?〟って感じや。ホンマに。まあいろんなこともあったけど、いまは本当に別れて良かったと思うし、本当に上手く人数が別れたなと。内面的な面でね、JWPは上手く粒が揃ったと思いますよ」

分裂後の両団体は、ジキルとハイドのごとく対照的になった。いまもかなりの緊張関係にあるかのように思われる両団体が、果して対抗戦を行う日は来るのだろうか?

「みんなやってみようという気持ちにはなってきてると思う。去年のドーム前あたりからね。対抗戦もはっきり言ってカードが詰まってる部分あるじゃないですか。やっぱりそういうのは選手がいちばんよくわかってると思うし、ウチだってずっと〝LLPWはそんな……〟とか毛嫌いしてるわけじゃないしね。福岡とかもずっとハーレーに憧れてましたから、そういう面で一度闘ってみたいっていう気持ちも、彼女にありますし。自分も〝いま、ハーレーと闘ってみたら〟っていうのもあるしね。神取さんもジャパン時代は1回もフォール取れなかったけど、いまは取れる自信付きましたし。みんなそれぞれ別れてからいろんな自信を個人で付けてきてるからね、これからやる時期だと思いますよ、自分は。

……ただ団体同士いろいろあるんだろうけど、いちばん悩んでんのはハーレーあたりじゃないかな。すごい優秀な選手だったからね。天才的や、あのレスリング・スタイルは。だから、なんでもっと幅広くできないのかなって思ってるんだけどね。自分はず~っと新人のときから一緒にやってきたからよくわかるんだけど。けっこうイーグルって何も考えてへんと思うよ。言われるがままにやってるだけや。それで、いまのイーグルがやっとでき上がったっていう」

関西が闘いたい選手として挙げたのは、ハーレー、神取、そしてイーグルだった。

「風間さんはまた別格で。まあ、キューティーあたりとやってればいいんじゃない? ウソウソ(笑)。まあ風間さんともできればもう1回、やってみたいと思いますけど」

関西がライバルとして名前を挙げるのはいつも全女のアジャであり、そして堀田である。JWP内部での闘いよりは外部の闘い、そして内部での選手育成へと、彼女の目は向いているのではないだろうか。

確かに関西は若手のコーチ役として、他団体に比べてかなりの数の新人をデビューさせた実績を持ち、JWPは若手の成長が早く、離脱者も少ないと言われている。

しかし、そうやって新人選手の成長が早い分、中堅クラスの選手が増え続けているだけという印象も拭い去れない。トップが固定されているうえ、デビルは常に一歩引いて、彼女たちを見守るだけなのだから。

「まあ1つのファミリーやったら、自分がお父さんで、デビルさんがお母さんでしょう。で、小姑ババアが尾崎、陰で〝大丈夫よ〟って慰める役がキューティーや。で、プラムはのほほ~んと、〝みんな仲良くやりや〟っていう(笑)。だからねえ、ウチら1人1人上手く分担が別れてるからいいのかもしれない。それに最近は、福岡も下の子の面倒をみてくれるようになったしね」

しかし、このファミリー内で父親の力が飛び抜けすぎているのは確かだろう。母親も強いとはいえ、めったに本気で喧嘩をしないのだから。〝お母さんも強いよ~。でも男を立てる女だね(笑)〟とほがらかに語る関西自身が、まるでジャパン女子時代のデビルを思わせるようなポジションになりつつあることも、また事実だと思われる。

「う~ん……。でも、自分もそれ守るのが精一杯なんですよね。それが守れなくなったら、もうダイナマイト関西は終わりなんですよ。だから、あとはほかの選手がいかにフォローするっちゅうかね。彼女らが関西と並べるかは、やっぱり本人たちの自覚というか意思次第だと思うから。自分自身はそんなに意識してないんだけど、最近やっぱりね、試合してて乗らないときってありますよ。〝自分は何に向かっていけばいいんだろう〟ってふと思うときがある。〝自分の目標って何やろな〟って」

下の選手は〝トップを取る〟などのテーマを見つけやすいが、長くトップの座に安住していると、テーマ不在に陥るのも無理はないだろう。ましてJWPでは、尾崎やキューティーといったメインを張れる選手たちが〝デビル、関西からフォールを奪う〟〝無差別級のベルトを取る〟などと言い続けて、はや何年という状況なのだから。

「うん。もっと自分を潰しにかけてきてもいいのになあっていう。正直なとこ、そういう気持ちありますよね」

団体内に小さい選手しかいないのはもとより承知のうえなのだろうが、関西が死に物狂いで向かっていくほどの相手というのが存在しないのは、彼女にとって問題だ。

「いまはね。たまに危ないなあいうときはありますけどね。いつもいつも危機感を持ってリングに上がるっていう気持ちは、もう忘れてますね。どこかで置き忘れてきたような気がする。去年あたりからかなあ。

やっぱり対抗戦やって、私はいろんな苦しい思いしてきたし。JWPの中で強くても、ほかへ行って強くなかったらダイナマイト関西が何のためにJWPでトップを張ってるんだって言われちゃうから。だから私は、この位置を守のが精一杯なんです。あとはほかの選手次第だと思う。それはもう個人個人が考えることであって、私は何をすることもできないですから」

そんな関西にとって長与千種というのは、ずっと憧れていた片思いの相手みたいなものだった。しかし、関西との闘いを目前にして、長与はデビルお母さんとの女の闘いに敗れ、そして関西vs長与戦は幻となってしまった。そのころ、関西は、〝この試合は夢のカードとして取っておきたい〟と語ったが、長与のLLPW参戦によって、本当に夢で終わってしまうような予感もしてきた。

「でも、今年やらなかったら、来年ファンの人が期待してくれないんじゃないかなと思う。もう絶対やらないと。だからもう今年から、ある意味ではフロント半分そっちのけで個人闘争していきたいですよ」

個人闘争。それは長与が何度も口にしているキーワードでもある。

「これからはやっぱり会社に決められたカードをするんじゃなくて、自分から本当で心底、心の底からこいつとやりたいっていう相手とやらないと。そうしないと、最初の対抗戦みたいに、いちばんテンション高い、みんなが緊張感の張り詰まった試合にするのは、この先に対抗戦を続けていっても絶対無理だと思いますよ」

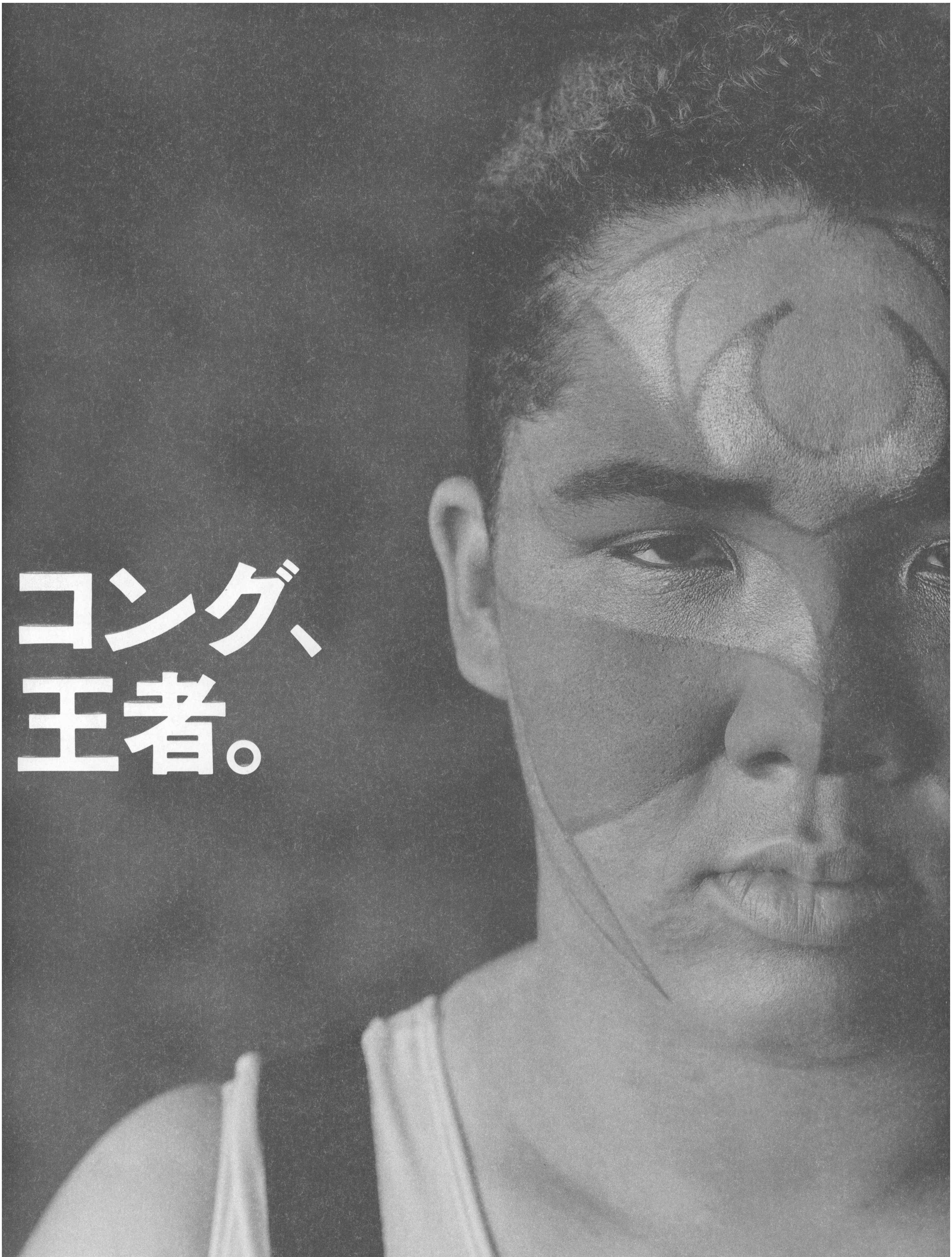
この発言は正直言って意外だった。関西は選手会長でもあるため、考え方もフロント的になっているような印象があったからだ。つまり、団体が大きくなっていく喜びや新人育成の喜びの方が、選手として闘う喜びよりも大きいのではないかという。

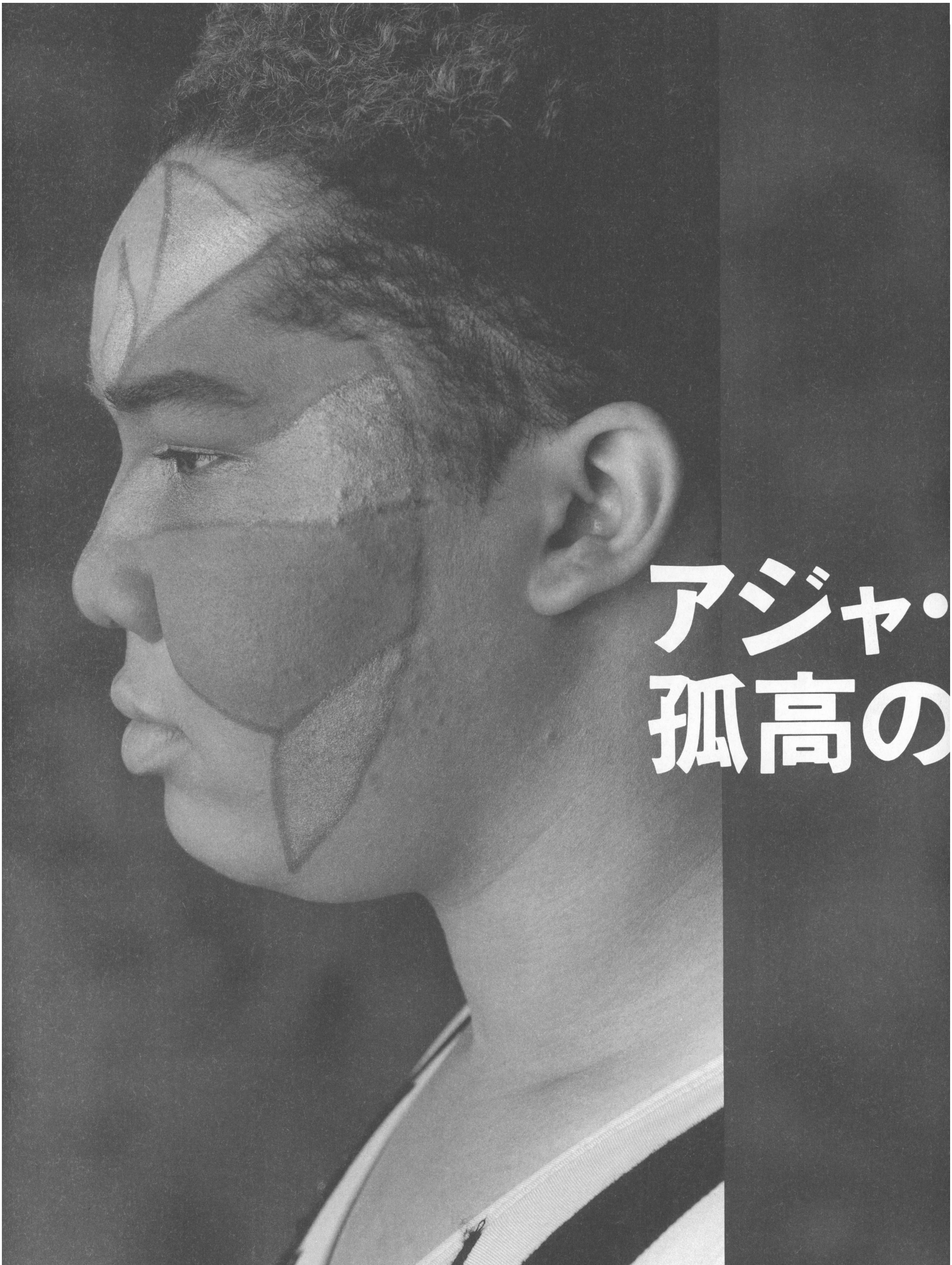
「ああ、それはあるよ。やっぱりなんとか危ないことはしないようにって思ってたからね。会社が潰れるようなことには手を出すなって(笑)。だから、選手闘争よりも守りに入ってたのかもしれないねえ。潰しちゃいけない、争っちゃいけないっていう。でもこれから先は半分守りつつ、選手が個人闘争に走っていかないと、お客さんがついてこないと思いますよ。その矛先は長与さんにも向かうし、でもやっぱりJWP内での個人闘争ができれば最高ですよね」

プロレスとはスポーツ的なもので、自分にとっては空気みたいな存在だと、関西は定義する。そういえば北斗も、〝空気や水みたいなもの〟だと言っていたが、彼女はプロレスを〝格闘技〟として認識していた。

「北斗選手もそうだと思うけど、すごく自分のプロレスを大切にしてるんだよね。だから誰にも傷付けてほしくないし、自分で守っていかなきゃいけないでしょ。生きていくためには空気が必要なのと同じぐらい、やっぱりプロレスが必要だから、自分は大切にしていきたいんです」

DYNAMITE KANSAI Profile
ダイナマイト関西【JWP】本名：鈴木智江子。S44年12月4日生まれ。京都府京都市出身。S61年8月にデビュー。172センチ、85キロ。


コング、
王者。



アジャ・
孤高の

アジャ・コング、孤高の王者。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA　Text●SHINO HOJOH
Hair&Make-up●YOKO TAMURA

●〝最強であること〟――それが女子マット界の最高峰、WWWA王者に課せられた定義だ。これまでにジャガー横田、デビル雅美、長与千種、ブル中野らが輝かしい王者時代を築いてきた。3年前からその証、赤いベルトはアジャ・コングが手中にしている。しかしいまだ〝真の時代〟は彼女の手の内にはない。彼女自身がそれを拒否しているのか、時代が彼女を置き去りにしてしまったのか――。いま、孤高の王者、アジャ・コングの心の声を聞きたい。

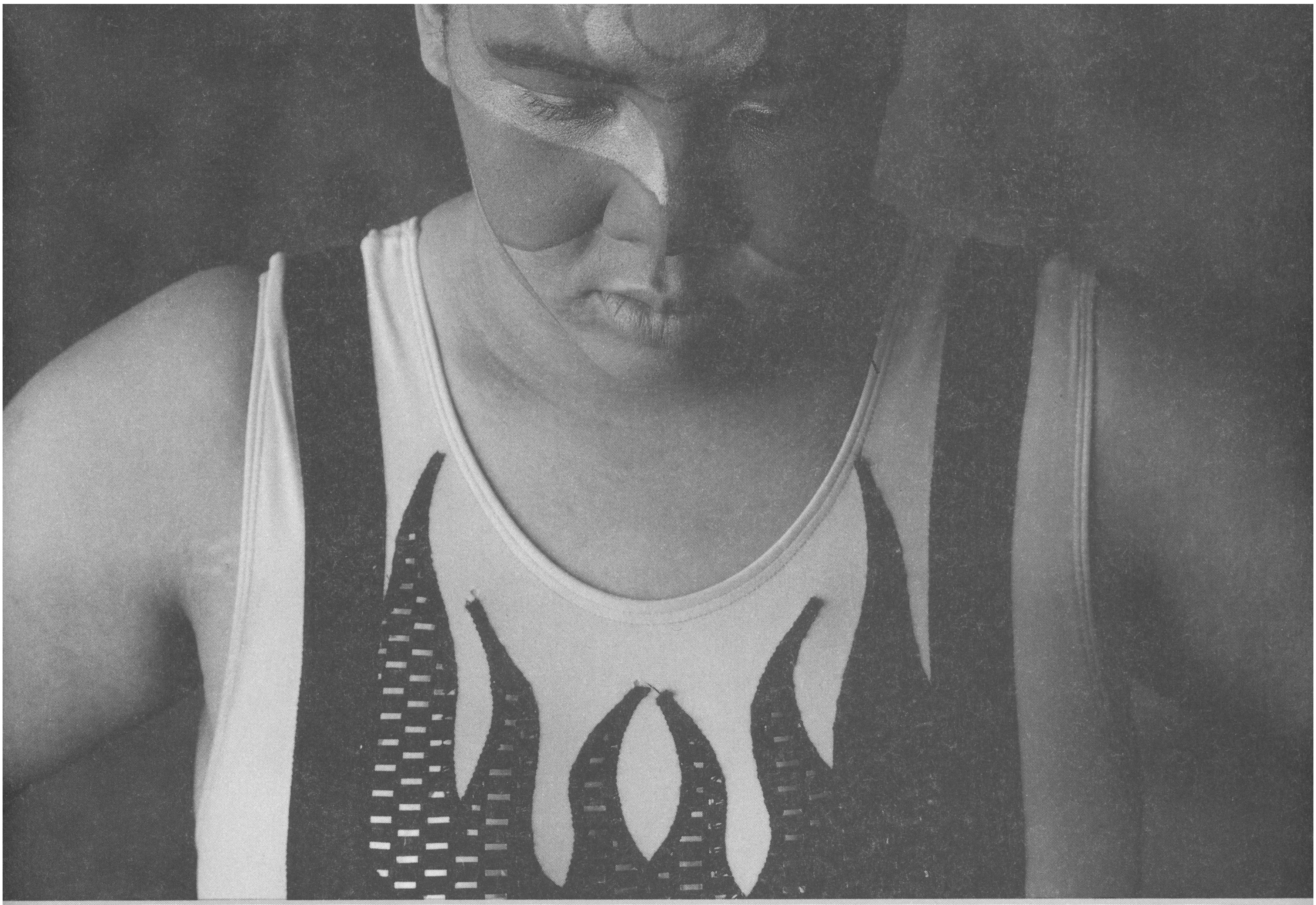
「〝ズルイなあ〟って思った。あの人が般若の面を落っことしたから、〝カッコわるーい〟って思って見てたんだけど、顔上げたら泣いてるじゃない。私は最後だとか考えないようにして、いつもあの人とやってたようなワクワクするような試合をしようって思ってたのに。あの涙を見てしまったら気持ちがメロメロになって……もうダメだった。だから、あの試合はあの時点で私の負けだったんだと思う」

アジャ・コングは、東京ドームでの北斗晶との試合をこんな風に振り返った。WWWAチャンピオンであるアジャは、『V★TOP WOMAN』トーナメントにおいて、優勝を義務づけられ、その最期を看取るという役回りをこなさなければならなかった。北斗伝説の完結編。多くのファンはそれを見るために東京ドームに足を運んだのだ。しかし、アジャはその使命を果たすことができなかった。北斗の涙に誰よりもショックを受けてしまったのはほかならぬアジャ・コングだった。〝どうして、北斗を死なせてくれなかったのか〟という非難の声はいまも少なくない。

「私自身も確かに直前まではそういう使命感に燃えてた部分もあった。でも決勝まで進んであの人といよいよ闘えるって思ったら、なんだかかえって平常心になった。私はただ、あの人といままでずっとしてきたような試合がしたくなった。でも難しかったね。うん。試合のあとファンからも手紙が来た。〝どうして叩き潰してくれなかったのか〟〝チャンピオン失格だ〟って。〝普通の試合をすること〟がいかに難しいかを思い知った感じ。特にああいう特殊な場面ではね」

もともと、アジャは北斗と対戦するためだけに、トーナメントで勝ち上がろうと思っていた。対戦できれば、ドームじゃなくてもよかったと言う。でも、状況はそれを許さなかった。多くのファンは東京ドームという大舞台でのアジャの勝利による北斗の終焉を予想し、そして思いきり泣きたかったのだと思う。しかし、アジャの描いていたシナリオは違った。

「私が勝って、〝引退なんて許さない！〟って言いたかった。だって、あんなに自分をワクワクさせてくれるモノを失いたくないじゃない。……でも、負けた私にそれを言



W.W.W.A.
WORLD CHAMPION

はっきり言って、今、プロレスやっててもつまんないのかもね。

う権利はもうないけど」

アジャがブル中野を倒し、WWWAチャンピオンになったと同時に北斗ブームは起こった。チャンピオンの自分をさしおいてのしあがっていく北斗。しかし、アジャにとってそれはある意味では我がことのように嬉しいことであった。入門当時から強い憧れをもって接してきた先輩がやっと認められた。アジャ・コング、いや宍戸絵梨花こそほかの誰より北斗晶の大ファンだったのだ。運命の皮肉な巡り合わせである。もし、それが北斗でなかっとしたら……

「うん。ほかの人だったら、そう自分が認められる人じゃなかったら、私の気持ちも違ってたと思う。それこそ、叩き潰してたんじゃないかな。一昨年、あの人がMVPを取ったときも〝やっとこの人の番が来た。やっとみんなが気がついた〟と思って、嬉しかったしね。それと、もう誰かの引退試合の相手っていうのはやりたくない。私のプロレスには当てはまらない。その人とのそれまでのいろんな歴史を全部もぎとられるような気がするし」

アジャ・コングは強いチャンピオンである前に、24才の心優しい女性である。誰かに止めをさすような闘いはもうしたくないと言う。北斗晶という大好きなレスラーの最後の試合の相手を務めなければならなかったことは、確実にアジャの心を傷つけた。それを知って、〝それでは甘い〟と思う人もいるだろう。しかし、これが彼女の偽らざる気持ちなのだ。

よく考えると、アジャの試合ぶりにも、そんな彼女の人間味は表われている。明らかに危険と思われる技は、やたらには出さない。裏拳もここぞと思うとき以外は、加減しているし、キックで顔面や後頭部は狙わない。性格的なことを考え合わせても、いわゆる〝キラー〟アジャ・コングは有り得ないのかもしれない。

「プロレスはやっぱり、受ける部分が重要。プロレスラーの体っていうのは、こんなに頑丈なんだぞ、こんなことされても平気なんだぞっていうところを見てもらいたい。でも、もしアルティメット大会みたいな格闘技戦だったら、話は別。特にほかの格闘技の選手とやるんだったらね。私はプロレスを守るためだったら何でもするから。だから相手にもそれなりの覚悟でリングに上がってほしい。そのとき、初めて〝キラー〟アジャ・コングが見られるかもしれない」

プロレスラーとしてのプライドと一人の人間としての暖かさがアジャの中で交錯する。〝強くあること〟——それが、たったひとつ、アジャ・コングに与えられた定義である。しかし、彼女の根本的な優しさはやはり北斗戦に滲み出た。だからこそ、責任感の強い彼女は、赤いベルトを返上しようとした。が、それは認められなかった。深い心の傷を抱えたまま、彼女は防衛戦にも望んだ。しかし、そのことがやはり引っ掛かっているのだろう。アジャと赤いベルトの関係はここ数か月、ギクシャクしている。

「最初にベルトを取ったとき、ただただブル中野を倒したのが嬉しかった。と同時に中野さんが巻いていたベルトを自分なんかが巻いていいのかなとも思った。でもその重みがよくわからないうちに、団体対抗戦の時代に突入しちゃった。だから、もうがむしゃらに防衛しなくちゃならなかった。去年は〝チャンピオンなんだから〟って自分に手枷足枷をはめすぎた感じ。こだわりすぎて墓穴を掘っちゃったね。自分の気持ちがベルトに縛られ過ぎた。東京ドームで負けたときは本当に返上したかった。いまはもう、そういう変なプライドはない。〝チャンピオンって言ったって、それがナンボのもんじゃい〟って思ってる。……ただやはり自分がチャンピオンなのは事実だし、そこからは逃げられないよね」

WWWAチャンピオンの話になると、アジャの口は重い。冷めた発言に終始したがるのは、彼女自身が自分にプレッシャーをかけないためだろうか。しかし、責任感とプロ意識が人一倍強い彼女が、チャンピオンであることを軽く考えられるはずはない。勝って当然の立場で、いまの女子プロレス界を生き抜くのは大変なことである。強気な発言を避けるアジャに、チャンピオンの孤独が漂う。

そしていま、全日本女子プロレスでは次期WWWAチャンピオンの座を巡る闘いが激しい。3月26日の横浜アリーナ大会では豊田真奈美の挑戦を受ける。豊田をプッシュする最近のムードは凄まじい。

「別に豊田に限らず、ほかの選手でも試合をしてて、〝こりゃアブねえなあ〟って思うことはたくさんある。ただ、赤いベルトは、力も技も気持ちも、それに運も、すべてが揃わなければ取れないと思う。私はベルトを取る数か月前にも挑戦していて、そのときは負けた。でも自分の実力はその2回とも変わらなかったと思う。だから、勝ったときはすべてがうまく揃ったんじゃないかな。そういう運を呼び込むのも実力だから。だから例えば豊田も〝私が、私が〟っていう気持ちばかり先走ってしまったら、せっかく頂上近くまできても、落ちちゃうこともあるかもしれない」

機が熟す——そんなときが来る。アジャはそう言いたいのだ。どんなに自分が焦ってもダメなときはダメ。何か自然にいいムードにすべてが向かって行くのだと。

自分を脅かす挑戦者たちのことをアジャは淡々と話す。しかし、下からの追い上げがきつい中、ここのところのアジャはなんとなく生彩を欠く。彼女はいま、プロレスを楽しんでいるのだろうか。

「はっきり言って、つまんないかな。うん、そういう手紙も多い。すごくつまんなそうな顔して試合してるって。〝楽しんで試合をするのがアジャのプロレスじゃあなかったのか〟って」

確かに勝った試合のあとでも、アジャの満足気な表情というものは長いこと見ていない。試合運びも心なしか単調に思える。

「でもね、神戸の地震のとき、そのニュースを海外で見たんだけど、不謹慎なことに最初に頭に浮かんだのは、巡業大丈夫かなとか、もし東京で起きたら、もうプロレスできなくなっちゃうかなってことだった。そのとき、私はやっぱりプロレスが好きなんだなって思った」

好きなことだから楽しくやりたい……アジャは今、新しい刺激を求めている。大好きなプロレスをもっと、もっと好きになるために。北斗晶という一つの偉大な獲物を失ったいま〝怪物〟アジャ・コングにはそれに代わる何かが必要だ。そして、それを見つけられない限り、彼女は北斗シンドロームから抜け出せない。アジャの頭の中には、いま二つの大きな目標がある。

「一つは海外に行きたい。海外で試合をしてみたい。自分を試したいし、また日本のプロレスの良さももっとわかるだろうと思うし。もう一つは他団体のリングに上がって、いろんな選手と試合がしたい。その二つのことを、できればチャンピオンのままでやってみたい。本当はチャンピオンの立場を考えたら、どちらも難しいことだけど私は常に攻める姿勢でいかないとだめになると思う。攻め続けたい」

アジャはいま〝最強〟のチャンピオンから〝最高〟のチャンピオンへの果てしない道を歩き始めた。それは〝スーパー・アジャ・コング〟の誕生を予感させる。

「えっ、スーパー・アジャ・コング!? いいねえ。それ。うん、そうだね（笑）」

そして、アジャがどんなに北斗に拘ろうと、一般世間にとって一番有名なレスラーはアジャ・コングである。アジャは〝強くて凄い奴〟の代名詞である。しかし、ペイントを施した顔は覚えやすく、テレビのバラエティー番組などで垣間見せる明るさは親しみやすいキャラクターとして、子供からお年寄りまで人気を博している。逆にプロレスファンの間では、例えば〝井上貴子だけが好き〟、あるいは〝山田敏代だけが好き〟というファンの数に比べて、アジャだけが好きと言うファンの数は極端に少ない。裏を返せば、これはアジャはいつでもみんなのアジャであるということである。悪者、ヒールであるはずのアジャは、そういう意味では究極のベビーフェイスなのである。

「よくね、アジャ・コングはゴジラだって言われる（笑）。ゴジラは地球をめちゃくちゃにする悪いやつだけど、人気者だよね。あと、私はテレビとか出ると、おもしろいところでは笑っちゃう。ダンプ（松本）さんはそんなときでもヒールのイメージを押し通したけど、自分にはそういうことはできない。もともと、長与千種みたいになりたいって思ってプロレスラーになったんだから、究極のベビーフェイス志向なんだ（笑）。テレビの仕事はけっこう好き。いろんな人に会えるし、芸能界の人と知り合うと、みんな〝今度、試合見に行くから教えて〟とか言ってくれる。だから、マメに連絡して試合の日程を教える。そのうち、また行きたいって言ってもらえるようになる。そうなったら、もうこっちのもんだから、〝会社に聞いてください〟とか言っちゃって、人に任せる（笑）」

プロレスラー以外の有名人、芸能人の口から、女子プロレスの素晴らしさを広く世間に語ってもらいたいとアジャは望んでいる。そのためにも、自分はそのとっかかりとなるべく、芸能の仕事も大切にしたいと。

またアジャは勉強家としても知られている。本もよく読む。世間の一般常識にも明るい。

「いくら、こういう特殊な世界にいるからって、自分の国の首相の名前もわからないようじゃ困るしね。世間で起こっていることはある程度、知っていたい。でも、それもプロレスがあるからだと思う。私にはプロレスがあるから、ほかのこともおもしろく感じられるんだと思う」

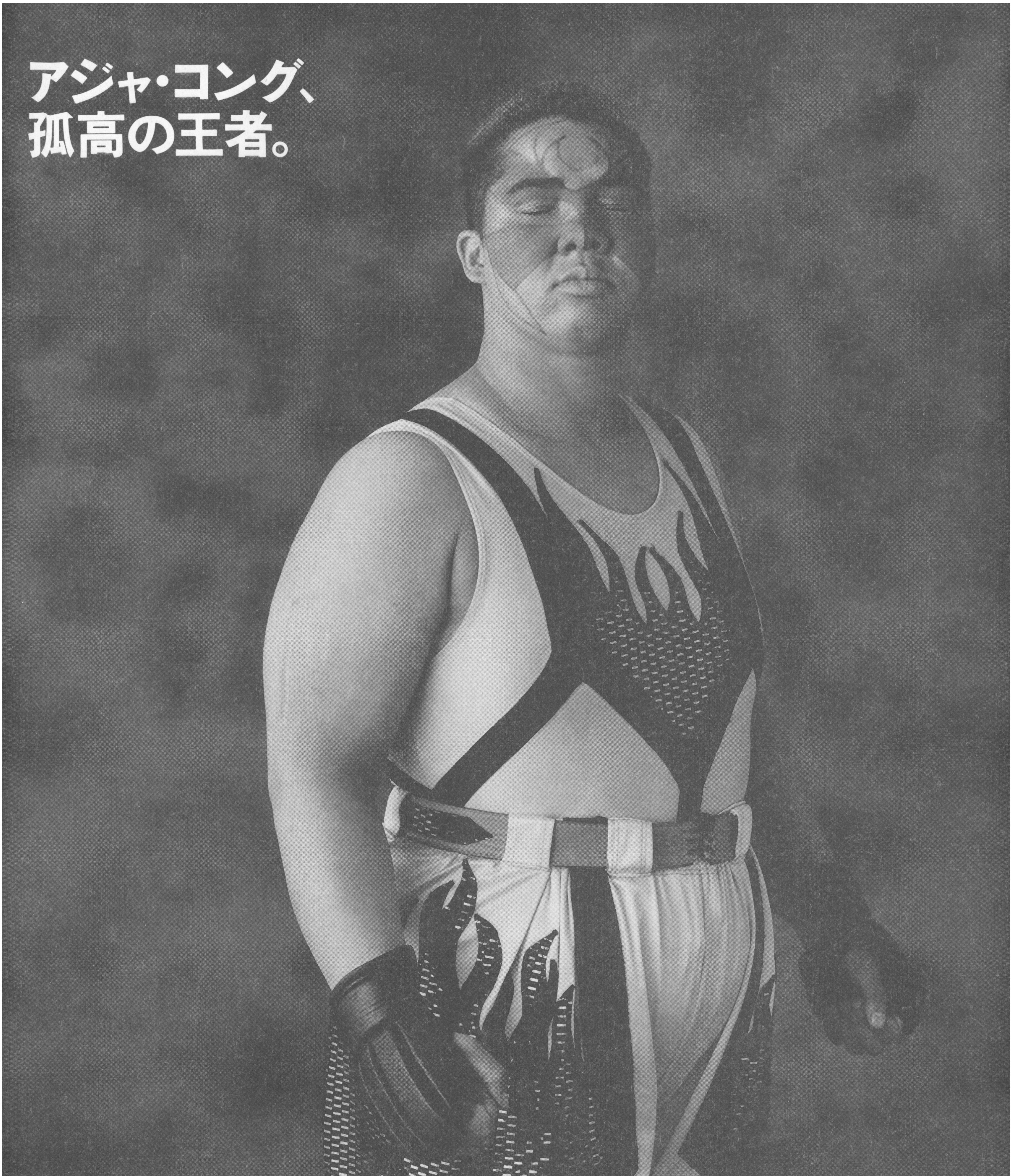
知れば知るほど、アジャは奥深い。彼女には女子プロレスラーの持つすべての喜びと悲しみと怒りがある。

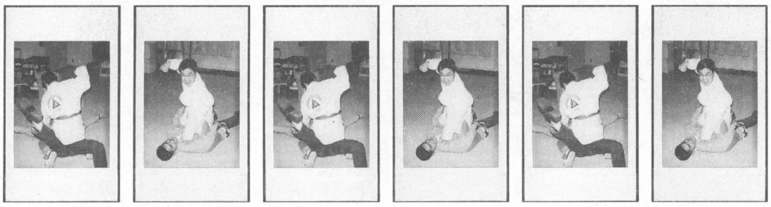
アジャはいつかWWWAチャンピオンを卒業する。かつて多くの全日本女子プロレスの選手たちは赤いベルトを巻いた直後に引退していった。しかし、時代は変わった。ブル中野の例もあるように、WWWAチャンピオンは決して最終目標ではない。

アジャ・コングがあくまでアジャ・コングであること。それがいつかチャンピオンであることを超えるのだ。その時アジャは、赤いベルトよりさらに上の、形のない〝生きざま〟という名のベルトを巻くだろう。

AJA KONG Profile
アジャ・コング【全日本女子プロレス】本名：宍戸江利花。S45年9月25日生まれ。東京都立川市出身。S61年9月にデビュー、165センチ、108キロ。

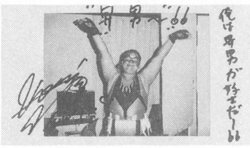
アジャ・コング、孤高の王者。





●JWPのリングアナにして流血王。それが千葉道也。趣味はAV鑑賞(裏)。そして、競技人口が異常に少ないコマンドサンボの腕を日々研鑽する、そんな男だ。本誌では、そんな千葉道也を安川達也に続くスタアにすべく、こんなコウナアを作ったわけなのよん。

バカポーズ四天王(笑)



●まずはアジャ・コング選手。ふだんレスラーというプライドを守るためか、険しい表情が多いアジャだが、プレポラとなると話は別。

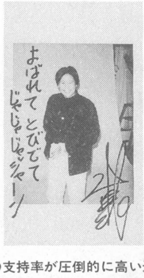
ちなみに、この写真が何を意味するのかを説明しよう。これは、今年の1月4日・東京ドームでの新日の興行で行われた保永昇男vsザ・グレート・サスケ戦で、一生懸命に保永昇男を応援していた模様を再現したもの。このポーズでピョンピョン飛び跳ねてて、周囲に止められたのだとか。

千葉「凄まじい笑顔です(笑)。でも保永マニアとは……。かなりの好事家、いや通ですねぇ(笑)」

●『女子プロレスグランプリ』で長谷川咲恵選手の取材をすると、毎回大騒ぎ。咲ちゃんのハッピーなノリが現場の空気を一挙に変えまくってしまう。

今回の取材ではなぜか、往年のディスコ・ヒット曲"ジンギスカン"の話で異常に盛り上がった。あの歌はそもそも何を歌いたかったのかといった話から、体育祭で『ジンギスカン』を踊ったなんてところまで飛躍し、最後にはそのジンギスカン踊りをみんなで思い出して踊りまくる始末。その瞬間を収めたのが、上のポラである。しかし、咲ちゃんと過ごしたあの時間は何だったのか……。

千葉「……アホだ(笑)……」



●同性の支持率が圧倒的に高い選手、といえばやっぱり山田敏代でしょう。学生時代に憧れた部活の同性の先輩のようなイメージ。そして何をやっても爽やかな印象を残す。

そんなヤマさんが自らのイメージを覆すべく!? 新機軸にチャレンジしたのがこのプレポラ。『ガンタツわいど』でも掲載したが、自分のズボンのファスナーを開けて手を出す。非常にシンプルなショットだが、あのヤマさんゆえ衝撃度は大きい。抜けきった笑顔もポイントだ。

千葉「ヤマさんはもう、何を失っても怖くないんでしょうかねぇ……。でも、やっぱり1本指にしないと甘いな(笑)」

●"プロレス巧者"ハーレー斉藤も、やるときはやる(笑)。これは、LLPWがときどき試合を行うWARで観られるアニマル浜口の意味不明なパフォーマンスのシミュレートだ。ハーレー曰く「アニマルさんが試合でよく頭突きを食らうんですよ。そのとき必ず、3回まわってこのポーズで"ワァオ、ワァオ、ワァオー!!"って絶叫するんですね(笑)。いろいろプロレスを観てきましたけど、あれだけは意味がわかんないです(笑)」

取材当日の付き人、青野敬子選手を急きょ加えてのワァオワァオ写真。照れが伺える青野選手に比べ、ハーレーのなりきりようはどうしたもんか。困った困った(©矢樹広弓)。

千葉「目が完全にイッてる……(笑)」

正しいプレポラ撮影術②

○ 良い例

× 悪い例

●鉄棒を小道具としてのプレポラ・ショットは、かなりアイドルチックな仕上がりが期待できるもの。そこで千葉道也と矢樹広弓をモデルに撮影してみた。

しかし、残念ながら矢樹広弓選手のポーズはプレポラ道(どんなだ)から観れば、あまり誉められるものではない。むしろ千葉道也の方がさすが、ポーズ写真集を書店で立ち読みするだけあって完成度が高い。さて、なぜルックス的には圧倒的に上の矢樹広弓ポーズが弱いのか?それは2つの理由がある。まず、やはり顔の角度だ。"正しいプレポラ撮影術①"のくどめのように、やはり顔を若干傾けてこそ良い味が生まれることを忘れてはならない。そしてもう1点は、足である。ポラにはほとんど写っていないが千葉道也は足を閉じ、しかも膝を曲げているのがポイント高し。ここまで気を使ってこその、プレポラ道なのだ。

おたんじょうびおめでとう♡

●まず謝る。ゴメンナサイ、職権乱用してしまいました。矢樹広弓選手のポラは取材日に誕生日を迎えたバカ編集長へのプレゼントとして頂いたものでやんす。でも、またもや困ってる(笑)。

さて本題。今号の取材では編集長を筆頭に、KAORU(GAEA)など数人が取材中にお誕生日を迎えたのだが、本誌では必ず、お誕生日プレゼントを選手に渡しているのだ。だから矢樹広弓ポラの件は許してくれよぉ。でもってプレポラでも、誕生日プレゼントの花束を持ってパチリすることも少なくないのだ。

千葉「しかし、なぜ4月20日が誕生日の高橋洋子選手までもらってるの?」

チームワーク対決①

●レスラーさまの取材を行う際、必ず新人が付き人として同行する。プレポラ撮影では、そんな付き人を駆使して撮影するのもひとつのテク(何の?)。KAORU選手の取材のときは、GAEA JAPANの新人2人が付いていたので、さっそく試合よりも前にポラでデビューを果たすこととあいなった。

当日は風邪気味だったKAORUをフォローするかのようにモデルに徹する植松・笹島のご両人。この屈託ない微笑に師弟の熱いつながりを見た(ウソ)。

千葉「ところで、なぜ新人2人は笑いながら指を差しているのか。その意味不明さが、イイ感じの写真となりましたね」

チームワーク対決②

●芸術のためなら(どこがや)スタッフも身体を張って挑む。それがプレポラの道だ。井上京子選手のプレポラ撮影のとき、本人のアイデアによって人間ピラミッドを作ることとなった。

瞬間の芸術品に駆り出されたのは編集長・安川達也副編集長・カメラマンの青木太伸、ヘアメイクの安村昭彦、そして付き人の前川久美子選手。グラビア撮影のスタジオで収められたのだが、床はタイルでメチャクチャ硬い。そこに3人分の体重が一挙にかかって泣いたよ私は。

千葉「でも、誤字での汚れがあるところはいただけませんな」

そんなつれない言葉を。

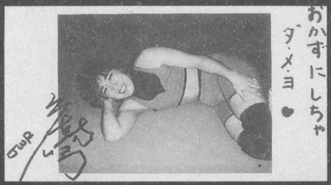
チームワーク対決③

●ダイナマイト関西選手とともに、毎回プレポラではキョーレツな作品を残す長与千種選手。だてに芸能界で活躍してたわけじゃないよと、アイデアのバリエーションが実に豊富なのだ。

今回、長与選手が編み出したのは、なんと土下座写真。しかもプロレス・デビューさえ果たしていない付き人に対してだ。上下関係のハッキリしているプロレス界では、いわばタブーな行為をアッサリやってのけてしまう長与選手、恐るべしである。

千葉「新人の顔がなりきってますね。ウチの関西もうかうかできないですわ」

究極のお色気2選♡



●先の紅夜叉選手以外にも、けっこうセクシーポーズを多数撮影した今回の取材であったが、その中でも最も強力な写真2点を紹介しよう。

まずはJWPの矢樹広弓選手。殿方の支持が圧倒的に高い彼女であるが、ちゃんとそのニーズに合わせたポラをゲットしてきましたぜダンナ。しかも、編集長+千葉道也の超絶タッグ"プレポラ・ブラザーズ"が半ば強制的に本人に書かせた(ゴメンね矢樹ちゃん♡)"おかずにしちゃダ・メ・ヨ♡"の文字がキョーレツだろう、ホレホレホーレ。

しかし、ここでもまた困ってる(笑)。この表情が、むしろイケナイ感じがよーく出てて、かなりセクシー♡

千葉「どーすかウチの矢樹は? やっぱウチの選手はやってくれますよねホント。も一他団体なんかブッチぎりでしょ♡」

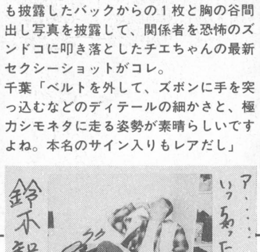
しかし、思わぬ強敵が意外なところから現れた。神取忍である。「は、背筋がつるぅ~!! は、早く撮れよ~」という神取選手の絶叫の声がとどろく中、収められたショットは、まさに凄絶のひとことに尽きる。これを、今夜のおかずとしてハッスルすることができる兄貴は、かなりのスゴ腕であるといえそうだ。どうスか、千葉さん。

千葉「……………………………………」

そして第1回プレポラ・デンジャラスクイーンは……ダイナマイト関西だ!!

●さて、いつから第1回プレポラ・デンジャラスクイーン争奪杯になったのかはわからんが(笑)、今回のあまたあるプレポラ写真で最もエゲツなく、そして爆死ものの1枚がコレ、ダイナマイト関西選手だ。Vol.3では堀田祐美子選手とのレズレズ・ツーショット、Vol.4ではリン魂でも披露したバックからの1枚と胸の谷間出し写真を披露して、関係者を恐怖のズンドコに叩き落としたチエちゃんの最新セクシーショットがコレ。

千葉「ベルトを外して、ズボンに手を突っ込むなどのディテールの細かさと、極力シモネタに走る姿勢が素晴らしいですよね。本名のサイン入りもレアだし」



正しいプレポラ撮影術③

●いくらお茶目なポーズでグラビアとのギャップを作るのがプレポラのコンセプトとはいえ、あまりにも過激すぎるポーズはいただけない。写真は、身を以てポーズ指導をする仕事熱心な千葉道也と矢樹広弓選手ではあるが、「さあ、この穴の中に入って"助けてくれ~い"と絶叫した写真を撮ろう!!」と言いながらすっかり自分の世界に入り込んでしまい「うぎゃあああ、助けてくりぃ~~~!!」と叫ぶ千葉道也に対し、矢樹選手はすっかり呆れてしまった。やはり、困っている(笑)。しかしその結果、なんかイイ感じの写真に仕上がってしまった。

あくまでも本人の拒絶する過剰なノリのものは厳禁。レスラーさまご本人のキャラクターを尊重し、そのうえでファンキーな瞬間を収める。それが、真のプレポラ道(だからそんなんあるんかっての)といえるのではなかろうか。

千葉「ウソつけ、編集長がやれって言ったんでしょ」

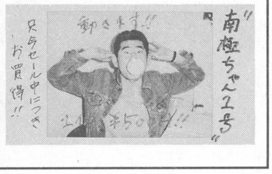
ゴメンナサイ、ウソついておりました。

おまけ♡

●下の写真は、実は先の長与千種選手のプレポラの別パターンというものが存在しており、しかしこれが付き人に見られると夜逃げされてしまう、でもおもしろいからなんとかしたい~そんな難題の解決策として、本誌副編集長・安川達也を使ってポーズ、ポラに書かれたメッセージ(!?)まで忠実に再現したものだ。

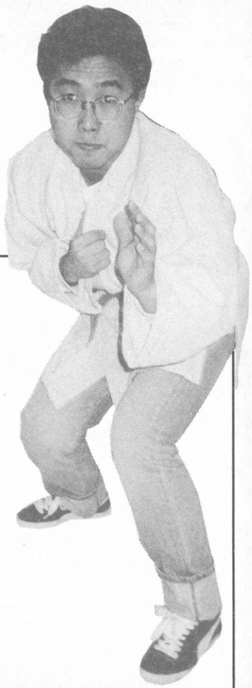
読者のみんな、このポーズを長与選手が本当にやっている絵を想像してみたまえ。社会現象をも引き起こしたスター・レスラーというものは、こんなヨゴレ系の写真など"へ"みたいなものなのだ。

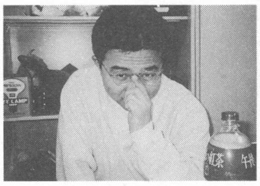
千葉「僕も問題のポラを見ましたが、すごかった……。長与千種、恐るべしです。僕も修行しなくちゃ」



プレポラ・グランプリ。

流血王・千葉道也(JWPリングアナ)の、読者プレゼントポラロイド批評



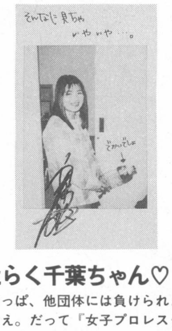


▲ポラ写真にはうるさい男・千葉道也

オーソドックス編

●『女子プロレスグランプリ』定番プレゼントとして、すっかりおなじみになったレスラーさまのサイン入りポラロイド。何せ、世界で1枚しか存在しない希少性ゆえ、プレゼント応募の人気も圧倒的だ。しかし、その中身はいままで謎のベールに包まれていた。そんな謎のプレポラを異常に愛する男・それが千葉道也だ。以降、彼のピンポイントを突くシャープな分析とともにプレポラの世界に迫る。
千葉「今回の表紙を飾った豊田真奈美選手ですね。ま、これはごくノーマルなタイプ。ポーズも普通、サイン以外に記すメッセージもごく普通ですな。ま、王道のスタイルではありますわ」

プレポラ撮影のプロセス



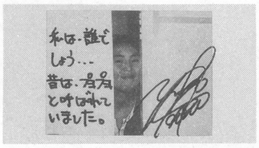
はたらく千葉ちゃん♡

●「やっぱ、他団体には負けられませんよ、ええ。だって『女子プロレスグランプリ』でおもしろいのって、このポラ撮影だけじゃないですか」〜千葉道也は、そんな男だ。よって、自分の団体の選手のプレポラ撮影となると異常に執念を燃やす。自ら先陣を切ってポーズ指導を行い、小粋なカッコで写真に収める。上はキャンディー奥津選手に過去のプレポラを見せて叱咤激励する千葉道也。そしてその結果が下の写真だ。
千葉「でもアレっすよ、これはキャンディーが自ら望んで取ったポーズですからね。僕は何も吹き込んでませんよ」
　はなはだ怪しいものだ。

アイドル3強対決!!

●女子プロレス界でもアイドル的人気を誇る選手といえば、チャパリータASARI・府川由美（以上全女）・そして大向美智子（LLPW）といったところか。そんな彼女たちのファンのニーズに合わせるためには、やっぱアイドル・ポーズでしょ、しかもいまじゃ『月刊明星』でもやらないヤツ。で、今回はこんな感じでバラエティに富ませてみた。
千葉「ASARI選手の頬づえポーズも定番ですよね。全女のドームのパンフでもパロってた。次の大向選手、この木に手を添えて顔を出すってのも昔よく載ってましたなあ。府川選手は、サインが初々しいッスね」

あんた誰？



●専門誌ではめったにやらないヘアメイクをつけることで、ふだんの姿からは窺い知れない新たなレスラーさまの魅力を引き出すことで知られる『女子プロレスグランプリ』であるが、あるイタズラを施すと、誰が誰だかわからないプレポラができあがる。それでは、ここで問題です。上の写真は誰でしょう？
千葉「これ誰ですか？　……えっ、全女の堀田祐美子選手!?　ああ、スタジオのドアで顔をはさんでるから潰れちゃってわかんないのかあ。ポラに書かれた〝プヨプヨ〞というヒントでわかる人は、けっこうな女子プロ・マニアじゃないんですかい？」

正しいプレポラ撮影術①

●ツーショットでプレポラを撮影する場合、2人が仲良しであるということをことさら強調しまくるポーズがいちばん。そのためには、両者の身体の一部を必ず接触させなければいけませんのことよ。写真は　女子プロGP　Vol.3　表紙で実現した工藤めぐみ＆尾崎魔弓の幻のツーショット・ポラ。お互いの両手をくっつけることで夢の写真というイメージを増強させている。とはいえ、同じポーズを編集長と千葉道也で取っても、全然ありがたみが感じられないのは不思議だ。

▲なお、この2枚のポラも今号のプレポラ対象品なので、キッチリ明記して応募せよ

そのまんま（笑）

●団体が増えたことで、必然的にレスラーの個性も百花繚乱の今日このごろ。とことん女っぽいレスラーさまから、どう見てもオトコ……いや失礼、性別を超える選手まで実にバラエティに富んでいる。そこで、こんなプレポラを撮る場合も。
ＪＷＰの外山寿美代選手といえば、女子プロレス界でも屈指の〝男気〞を感じさせてくれる、そんなレスラーだ。そんな彼女にはポン引きをシミュレートしてもらった。もちろん小道具のグラサンもポイントだ。
千葉「彼女、実際にしょっちゅう声かけられるそうですからね、ポーズにもリアリティがありますよ」

らくがおの美

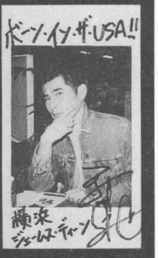
●既成の写真にイタズラ書きにして楽しむ〝らくがお〞。プレポラにこの手法を導入すると、目も当てられない惨事が発生する。そう、いわゆる〝ショック・ビジュアル〞である。
　上の写真はＪＷＰの新人3人のショット。ひとりひとりが次から次へとマジック片手に書いていくものだから、もーこんな出来上がりになってしまった。
千葉「天野のオサゲが不気味（笑）。ホントにこんなヤツが街にいたら生きてくのが嫌んなるわ。しかし、宮口の手に載った黒いモノは何でしょうかねぇ？　オハギ？　それとも、単に間違えて塗り潰したのかな？　うーんナゾだ」

ベテランの強みその①

●どんな職業でも、長いキャリアを積んでゆけばさまざまな蓄積がなされてゆく。いろんな体験を経たことで酸いも甘いも知ってるゆえに、世渡りの方法などを心得てしまうわけだ。
　そんな、ベテランならではの円熟ぶりは、もちろん女子プロレスの世界でも見受けられる。それも、ちょっとしたことで、思わぬ凄味を感じることも少なくない。
　その例としてピックアップしたのが、まず全女のみなみ鈴香選手。別に編集部から頼まれてもいないのに、サラリと〝女子プログランプリ宜しくね……買って下さい〞と記すあたり、なかなかできるもんじゃない。
千葉「プレポラで唯一、日付けを書いてるんですよね。これも長年、ファンにサインし続けた習慣なのかなあ。……なんて言うと、ものすげぇババアみたいになるな（笑）。そんなことないですよ〜」

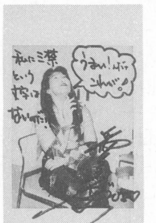
男女ジミー対決

●プロレス界でジェームス・ディーンといえば、本誌副編集長にしてマスコット・ボーイの安川達也。
　リーバイスをこよなく愛し、常にGジャンの襟を立て、自ら本名を〝横浜ジェームス・ディーン〞と言ってきかないタツヤを知ってか、知らずか、〝自称女ジェームス・ディーン〞と宣言する女子レスラーが現れた。それが、ＪＷＰ期待の新人・倉垣靖子選手だ。このプレポラを見たタツヤは悔しさのあまり「俺も撮ってほしいッス〜」とせかんでムリヤリ撮ったのが右の写真だ。
千葉「倉垣の右手の人差し指と親指の角度が、しょっちゅうこのポーズをやってることが推察されますな。でも〝キモチワラズに〞って何だ？　〝気持ち悪がらずに〞でしょ、もー。



……そしてタツヤは……バカ（笑）。何も〝ボーン・イン・ザ・ＵＳＡ!!〞と書かなくても。埼玉県生まれの横浜育ちで本籍東京のクセにねぇ（笑）。あ、確かにGジャンの襟が立ってる（笑）。なんかマヌケに見えるのはなぜ？」

ベテランの強みその②



●違った意味で、キャリアの長さをアピールするプレポラもある。写真上は、千葉道也に〝流血王〞というキャッチフレーズを与えた天敵・デビル雅美選手だ。全女〜ジャパン女子〜ＪＷＰと渡り歩き、どの団体でもトップを張ってきた。
　ああ、そんな凄味がこんなポラ写真ごときにも滲み出ているじゃありませんか。女子プロレス特有の掟・三禁に真っ向から挑むような喫煙フォト。そして、そのポーズのハマリっぷりは他の追随を許さないものがある。「いや〜、女子レスラーなんてみんな三禁守ってませんよ、私なんか全女のときからそうだったし。ワッハッハッ」と豪快に語るその口調には説得力がある。千葉さん、いかがですか。
千葉「くそ〜デビル〜。俺の美顔に傷をつけた恨みは忘れないぞ!!　俺とバーリ・トゥードで闘え!!　200％勝つ自信があ〜る!!」
　懲りない男だ。

姉御もお色気♡

●女子レスラーならではのポーズの極み、それがセクシーショットだ。レスラーといえどもひとりの女性。その女性らしさを強調するようなポーズを決めれば、世の殿方はたちまちパシーン!!　アイム・カミ〜ングってなものだ。
　だがしかーし!!　やはりセクシーポーズは、それを取ってしかるべきお方でないとどんでもないシロモノとなる。クドいようだが〝ショック・ビジュアル〞というヤツだ。
　そんな点を踏まえて、下の写真を見てほしい。紅夜叉。ヤンキーである。怖い（笑）。だがですよ（だから日本語になってないって）!!　紅の姉御は、女子プロレス界でも指折りのボインちゃん（Ｅカップ）であるのは有名な話。そして、特攻服に目を奪われてて気づかないのだが実はけっこー色っぽい部分もある。そんなセクシーとショック・ビジュアルの境目にあるのがこの写真といえるだろう。これでコーフンするか否かで、その人の女性観が見えるかもしれぬ。
千葉「でもやっぱし、本人も書いてるように欠場中でこのポーズはないですよねえ（笑）」

※このほかにもトレビア〜ン♡な写真がめじろ押しのサイン入りポラロイドをプレゼントしちゃうぞ!!　詳しくは122ページを見てちょ。

好プロレスグランプリ 出張所。

●ふつー、雑誌の読者ページって新米編集者の仕事なんだよねぇ。♪だのに〜な〜ぜ〜、編集長が〜担当な〜のか〜、教え〜てお〜く〜れ〜♪てなわけで今回もイクぞ。

読者さまの魂のほとばしりを見よ!!

○Vol.4のアンケート・カードに刻まれた読者さまの魂のほとばしり。それじゃーまずまず、前号の内容に関するリアクションからお届けするッス〜。

●表紙がスゲーかっこいい。
（広島県／藤井大樹）

●表紙の北斗の半乳だけで980円の価値があるけど、今度は咲ちゃんね♡
（静岡県／内田雅大）

●北斗晶様の表紙の胸の谷間がなんとも言えずセクシーで、思わず顔をうずめてしまった。
（宮崎県／桑原尚子）

●北斗のオッパイを見て欲情してしまった(?)人!! あなたとは気が合うかも。
（神奈川県／志村 隆元）

○けっこう非難の声が来るかな!?……と思ってた北斗晶・チチ寄せ表紙ですが、やっぱり衝撃的で好評の模様。あ〜良かった♡

●尾崎魔弓さん、皆のアイドル北斗晶のおっぱいをばかにしましたね？ そんなに言うなら、次回はあなたが……うふふ、やってみましょう。
（大分県／稲垣里夏）

○読者さまのリクエストがあまりにも多かったら、尾崎選手だろうと誰だろうと、珠玉のセクシー・ショットを実現させるぞ!! ガンガン送ってくれ〜い。

●私はこの本（Vol・4）で2冊目ですが、昔から女子プロが好きでレスラーになろうと思ったこともありました。24歳になってまた急に女子プロがブームになって昔の記憶が蘇り、本を買うようになりました。もうレスラーにはなれないので、山田さんみたいな男の人と結婚して娘に敏代と名付けるのが夢です。
（愛知県／太田友美）

●私がもし将来男の子を産んだら名前は〝晶〟と名付ける!! 女の子だったら双子を産んで、〝京子&貴子〟と名付けよう！ しかし〝美馬&英津子〟も捨てがたい……。
（東京都／山田けいこ）

○いいなあ、子どもの人権ないがしろにして。

●この手の本は、ブームに乗ってブームが終わったらなくなる可能性が高いんだけど、ドーム後も出すんですねー、よしよし。これからも出し続けてください。
（大分県／山崎昇陽）

○そのためには、読者さまの熱い応援が必要なのじゃ。ご家族ご親戚はもちろん、お友達や先生に上司に部下、さらには赤の他人にまでアッピールしてくれ〜い。

●ヤッタ!! キャンディーがポスターになってるー!! 編集部の皆さん、ありがとう。次号もガンバレー!! ファイヤー!!
（大阪府／井田武志）

●キャンディーちゃん、かわいいッス!! 最高ッス!! もう3秒でイキそうッス!! ちなみにボク、下ネタ系読者ッス!!（広島県／イチ浪）

○タツヤロ調で、エバるない。

●オイ!! オイ!! 中山香里ちゃんで遊ぶんじゃねえヨ!!
（東京都／高井昌彦）

○遊んでまーす♡ でもね最近、ちょっと浮かれすぎなのではと柄にもなく反省しつつある今日このごろ。だがしかーし!!

●おい、編集部……最高だぜっ！
（岐阜県／清水裕久）

○なーんてリアクションが来るから、つい調子に乗っちゃうんだねこれがまた。それではここで、ほとんどお約束になりつつある読者さまからレスラーさまへの求愛コウナア!! ってそんなんいつ作ったんだよ。

●美馬、プロレスやめたら結婚しようぜ！
（愛知県／鈴木八重子）

●皆がレスラーに走るので、僕はLLPWの大野成美広報に照準を絞ります。
（山口県／匿名希望）

○編集長の大学の後輩の新米LLPW広報、ワッキー枠島もよろぴくね♡

●神取、私を抱いて！
（茨城県／飯田成美）

●神取忍さん、本気で好きになりました。
（神奈川県／尚美）

●風間社長へ。近いうちに神取さまを略奪しに参りますので、お覚悟召されませ♡
（千葉県／匿名希望）

○おお、前号の関西選手に続いては神取のアニキ……いやもとい、神取忍嬢（笑）へのラブ・コールが多かったでやんす。やっぱ勇気があるよなカレ……いやもとい彼女はって、もーすっかりお約束の言い回しだね。

●伊藤薫ちゃん最高ッス、ほしいッス！ オレにくれ！
（岐阜県／高田淳）

○こりゃまたタツヤロ調。みんな、タツヤが好きなのね♡

●風間さん、シェイプUPしないでください。あなたのブクブクした体型がスゴク好きなんです！
（滋賀県／川添宏）

○キミってひょっとして……（以下自粛）。

●マリちゃん、誘拐したいくらいカワイイゼ！
（福島県／中村朋博）

○誘拐したら、三角飛びプランチャで逆襲されちゃうよ。

●福岡晶よ、今度オレと一緒に競馬に行こう！ そして夜はオレという馬に騎馬してみないか!?
（岐阜県／渡辺英樹）

○いや〜ん、おげれつぅ〜。

●美馬、僕は貴子を好きになってしまったんだ。わかってくれ……。
（佐賀県／吉田和正）

○いちいち断りを入れるたぁ、律儀なお方だ。

●皆さん、出張所もいいけど、もっといいものがあるぜー。それはめすいぬちゃんだ。次回を楽しみにしているぜ。
（秋田県／森田住己）

○今回から世界最強タッグ・トーナメント編に突入しためすいぬちゃん。世界を制するのはど

illustrations●NORIE KADOKURA

※このまんがはフィクションです

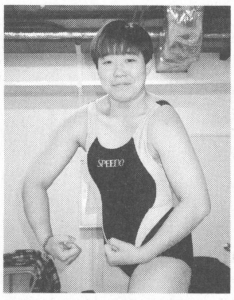
読者さまがレスラーの苦悩を救う
女子プロレスボランティア。

●前号からスタートした新コウナア、それが〝女子プロレスボランティア〟だ。今回は文化のない青野敬子選手の救援活動その後だ。

●偉大なる女子プロレスラーさまをプロレスのみに専念させるべく、恵まれない状況を僕らの力で改善していくこのコウナア。前回は、2月10日後楽園ホール興行で、晴れてデビューとあいなったLLPWの青野敬子選手に文化を!!ということで不要となったテレビ&ビデオデッキ(試合ビデオ研究用)、そして音楽鑑賞が趣味の青野選手のことを考えたCDラジカセを無償で提供してくださる奇特なお方を募集した。

実はこのコウナア、単なるバカっ話だけで決めた安直な企画だったため、読者さまのご反応を期待してなかったのが正直なところであるのだが(じゃ載せるなっての)、しかーし!! 世知辛い世の中にも、仏さまのようなお方はいるものなのだねぇ。

とりあえず埼玉県は川口市にお住まいの及川亜紀子さまからはビデオデッキ(要修理品)、栃木県佐野市にお住まいの麦倉清さまからはCDラジカセを、ほか数名の読者さまから、いずれも無償でご提供くださるというありがたーいお



▲念願のビデオ&CDデッキを手に入れた青野敬子選手が感謝のポーズ♡

手紙をいただいた。

んでもって、これらの手紙を持って青野選手に結果報告をしたところ、「あ、ぁあの実は、アレが掲載されたあと、知り合いの方からビデオとCDラジカセをいただいたんですよ」とのこと。ファッキュー!! でもま、あのコウナアを作ったからこそ、結果的に青野選手は文化を得ることができたので良かったとしよう。

なお、編集部あてにわざわざお手紙をくださった及川さまほかには、青野選手から直筆の感謝状が届く。皆様のご協力、まことにありがとうございました。ではまた次回!!

▼埼玉県の山田由美子さんが制作した猛武闘賊のジェニーちゃん&エリーちゃんバージョンだ。ブーツは彼氏に塗ってもらったんだと♡次回作も待つ!!

のチームかな?

●最近の井上貴子は何をやってもGood!! いま、井上貴子に夢中です!! 井上貴子特集を作ってくれー!! (山形県/高橋広幸)

○今回はライブ写真のみの登場でスマン。次号はタイヘン……かもしれないぞ!!

●大向さん、と――っても美しすぎる……。僕はいったいどうすれば……。今度は、ピンナップにしてください。 (静岡県/松村隆晃)

○したよ。

●矢樹ちゃんて、こんなにカワイかったのか!! 気付くのが遅かった……。次号はぜひ5ページぐらいで特集してください。できればピンナップもつけて……。 (埼玉県/中沢誠)

○したよ。

●ズバリ次号は矢樹広弓の大特集ッスよ!! だめならキヨ・ホンダの特集でもいいっスよ!! マジで(笑)。 (長野県/小林克樹)

○キミはいったいどっちがいいのじゃ。ギャップ激しすぎるぞ。

●キヨ・ホンダの特集、そりゃーええ。ごっつい濃いですなァー。〝幻のキヨ・ホンダを求めて〟とかゆータイトルでどないですか? (和歌山県/北十字)

●ずばり言おう!! キヨ・ホンダはあの〝神谷美織〟だ。 (宮城県/伊藤唯)

○まだまだ根強い人気のキヨ・ホンダ。読者アンケートの〝好きなレスラー〟チャートでも、誰とはいえないが現役選手よりも票を稼いでいるのだ。103ページも見てね。

●関西さんのヌードがみたい……。脱いでください、関西さん。 (高知県/川村奈緒美)

○キミってひょっとして…… (以下自粛)。

●Vol.5、はやくみたい。 (奈良県/東元亮人)

○いま見てるじゃん。

●頼むから月刊にしてください!! ……と、誰もが思っているのでは? (新潟県/黒崎将浩)

●女子プロレスグランプリを月刊にしてくれ!! (福岡県/矢野達也)

●週刊女子プロレスグランプリにして♡ (神奈川県/斉藤剛)

○だからぁ、そのためにはご家族ご親戚はもちろん、お友達や先生に上司に部下、さらには赤の他人にまでアッピールしてくれ~いってやっぱシツコいッスよねえ。わかっておりますよ。

●全女の皆さん、地方の試合をなめてないですか? 高いお金を出してるんだぞ。もっとちゃんと気合入れてやってくれ!! たのむぞ! (神奈川県/吉田幸)

●ばぁさんになっても後楽園ホールのベランダで観るんだァ。 (東京都/高沢恭子)

●トミー蘭、ちょっと元気がいい。 (宮城県/安藤誠)

○ホント、トミー蘭はいい味出してるにゃあ。

●豊田真奈美にぜひヨガをやらせたい。 (青森県/三上祥)

●おれは将来、今井リングアナの弟子になる! (広島県/川村裕)

●俺はVol.1から全然プレゼトが当たらねーぞ! ちくしょう! こうなったらTシャツやテレカはいらねぇから咲ちゃんの本体をくれっ!! (大阪府/稲妻信悟)

○ウチらに言われても……。

●やい! 編集部! 俺の美智子(大向)には手ェ出すなよ! (奈良県/浦田範重)

○そんなこと言われても……って、お前は手を出す気か(笑)。

●井上京子さんと大食い競争、時間無制限1本勝負をやってみたいッス。実現できたらしあわせー!! (北海道/坂野聖幸)

○でも、絶対勝てないとは思うけどなあ。

●レスラーさまに質問! 試合中、キバリすぎて〝へ〟をお出ししたことありますか? 気になって、今夜も寝られない……。どなたかお答え願います。(神奈川県/〝へ〟をされたら悲惨な技ってなんだろう)

○女子では知らないけど昔、全日の田上明選手が、天龍のパワーボムを食らったと同時にゲリ気味の〝えーへー〟をコイた(しかも音付き)という伝説があるぞ。そんな田上を熱烈に支持し、自ら〝田上っ子〟と名乗る本誌副編集長にしてマスコットボーイ、11・20東京ドームのリングにも立ってしまったスタア・安川タツヤへの意見あれこれをお届けしよう。

●安川達也!! 「がんばれタツヤ!!」なんて自分だけ楽しむコーナーは、羨ましいからもうやめろ!! (茨城県/小泉研二)

●タツヤさんも豊田の大ファンと聞いたけど、オレも豊田の大ファンです。タツヤさん、どうか先に折れてくれ!! (千葉県/諸町研二)

●安川、てめー調子にノってんじゃねーぞ、コラ!! お前に豊田は渡せねー(紅の口調で)。 (群馬県/木村誠)

●安川!! てめェー、これ以上真奈美姫に近ずくなー!! お前には×××がお似合いだい!! (新潟県/佐野幸成)

●安川達也さんがあまりにもイイ男だったので驚きました!! 次号も出てください。 (大阪府/めすいぬちゃん)

○ご期待どおり、ガンタツを増ページしてみたぞ。……マジメな読者さま、怒っちゃイヤ~ン♡

●安川、あんた最高っス。素晴らしいっス。オレと同じ名前っス。弟子にしてくれっス。山田敏代さんに「I LOVE YOU」ってボクのかわりに伝えてくれっス。 (秋田県/佐々木達也)

○おい、本気か弟子になるとは!?

●スーパーヒールのデビルさんと同盟結んで千葉リングアナをやっつけて! 編集の安川さんへ。 (埼玉県/井原桃子)

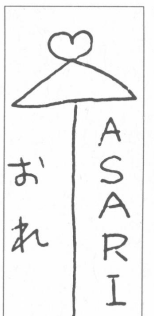
○106ページを見てくれい。

●編集の安川さんにお願いがあります。安川さんの独力で豊田真奈美写真集を作ってください。金に糸目はつけません。 (長野県/丸山章司)

○やっぱ安川くんは人気者だなあ。では、とどめのほとばしり2連発を受けてみやがれ~い!!

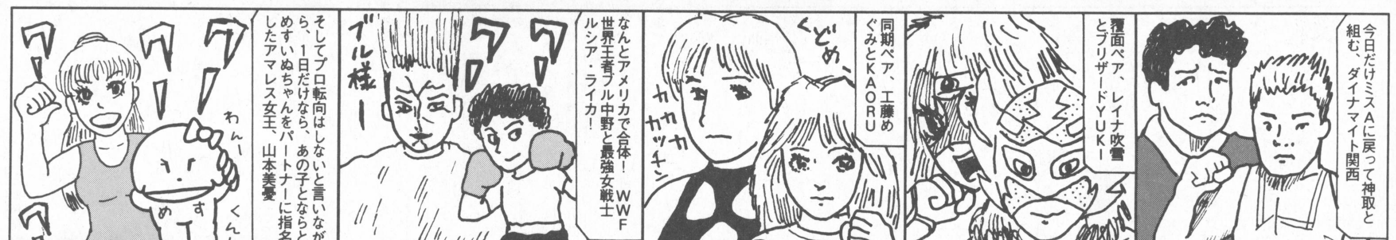
●アジャ・コングに捧げる歌を考えてみました。〝春が来た〟を変えて〝アジャが来た〟。♪アージャが来た アージャが来た どーこーにー来たー 山に来た 里に来た 野にも来たー。 (北海道/大國亜利加)

○想像するとすんげーコワ……いやなんでもないッス。



(千葉県/牧　史郎)

○すんげーストレートすぎて参った!! そいでは、また次号まで~♡ ばいばいきーん。



※山本美憂のプロレスが観られるのは『女子プロレスグランプリ』だけ(笑)

レスラーさまの、団体別

おコラム。

●イエ～イ♡　今回もおコラムの始まりだ～い。どのコラムも、なぜか動物ものが多くなってしまったので、通常の内容とまるで変わってるコウナアもあるが気にせんでくれい。次号からは団体も増えたことだし、リニューアルするのでお楽しみにしててちゃぶDIE。

キューティー鈴木の、おすすめファミコンソフト

「もう夜も眠れない」。

●今回のキューティー鈴木・特選ファミコンソフトは『スーパードンキーコング』。彼女がここ最近でもっともトライしてみたかったソフトだとか。しかし!! 企画が立ち上がった当時は品切れ店が続出し、泣くような思いでソフトをゲットしましたぜ。

※

最初は、普通のドンキーコングかと思ったんですよ。ほら、昔ゲームセンターにあった。あれだったら欲しいなあと思ってたんですけど売り切れでずっと買えなかったんですよね。だから、今回の企画には感謝してます♡

で、いままでいろんなファミコンソフトを買ったりしましたけど、これほどリアルな映像にはビックリしちゃった。立体的な絵なんだけどすごく可愛くって。

内容は、最初難しいかなあとか思ってたんですけど、慣れてくるとハマりますね。すごく考えて作ってるなーって感じ。ウラ技とかもいっぱいあるし、次はこっちをチャレンジしようって感じで、1回クリアしてもまたやりたい気になるんですよね。

▲C鈴木の愛犬メルモちゃん。意味はない（笑）

このコラムのタイトルじゃないですけど、このソフトを手に入れてからはホント寝てないですから（笑）。この面をクリアしたら寝ようと思っても、クリアしたら次の面まで……って感じで、キリがないんですよ。どんどん良いところでセーブしないとダメになっちゃうから、とにかくセーブのところまでは続けないと、ってことになってしまうんですよね。

いままで遊んだファミコン・ソフトで総合ランキングを付けるなら、画像部門では文句なく1番ですね。もちろん内容も上位の方ですけど。

▲もーこれにメロ²なの♡

全日本女子プロレス

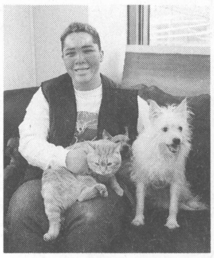
私のペット自慢。

第4回「アジャ・コングの巻」

●リングの上で最強のアジャ様。ペットの飼い方も王者級。何てったって、ペット好きのレスラー様の宝庫の全女において、その飼われているペット数は最高の4匹を誇っているのだ。さらに、犬と猫の同居をやってのけてしまっているのだから、やはりアジャ様はスゴイ！

※

1番最初に飼い始めたのがモモ（ミニチュアピンシャー犬・10歳雌）。実家から持ってきました。その次が洋太郎（雑種猫・5歳雄）で、母親の葬式のときに火葬場を歩いていたのを拾って。3番目が曙（雑種犬・3歳雄）。地方巡業先で見つけたんですが〃誰も貰い手がいないから保健所行きだ〃って言うんでかわいそうだから連れてきちゃった。最後がリキ（ミニチュアピンシャー犬・4歳雄）。だから、家での居住歴と年功序列からいってもモモには誰も逆らえませんよ。洋太郎は本当は強いんだけれど、立場をちゃんとわかっているらしく、モモには絶対に逆らわないけど、曙にはワンツー・フックを食らわしてる。私も曙で掌打の練習をしてます（笑）。リキはその曙のうっぷん晴らしにされて、ちっちゃい体をいつも転がされてますね。



◀4匹全員は暴れて撮影不可能。ゴメン

地方巡業に行くときは新人に預けちゃうんですど、2年ぐらい前かな、洋太郎が逃げ出したんですよ。新人たちは徹夜で探しても見つからず、東京に戻ってきた私に泣く泣く報告してきた。〃道場の前にエサでも置いときゃ、そのうち腹でも空かして帰ってくるよ〃って言ったら、本当に帰ってきたんですよ（笑）。

私にとってペットは、安らぎ……じゃないんですよ、これが。こいつらホントにうるさいから。でも、いなきゃいないで寂しいから、まあいた方がいいなって感じですか。

紅夜叉の

「キメるぜ」。

バカ!!

ゲスト：長嶋美智子

●紅夜叉の姉御にジャスト・フィットなヤンキー技を読者さまから募るこのコウナアではあるが、キミたち!! 投稿のクオリティが低～い!! だもんで今回は技とはぜんぜん関係なく、ペットさまのお話をテーマにお届けしたい。そしてゲストは、今回姉御とともに激シブなコンビっぷりを撮影させてもらった長嶋美智子選手だ。

――ペットといえば姉御、確かリスを飼ってましたよね、柄にもなく。

紅　殺すぞテメェ。チッチとサリーっつー名前付けてたんだけどよ、チッチは死んだぜ。……だからいまは、サリーしかいねぇ。

▲こんな2人でも寂しがり屋♡

――それはご愁傷さまで。で、姉御のペット歴はというと？

紅　ガキんころ実家でウサギとかハムスターとかヒヨコとかいろいろ飼ってたぜ。いまも、本当は犬を飼いてーんだけどよ、ペット禁止のマンションなんだよな。

――ところで、なんで女子レスラーって犬好きが多いんでしょ。

紅　やっぱり犬がいちばんなつくからじゃねーの。

長嶋　一人暮らしだと、犬で気が紛れるし。

――長嶋選手は？

長嶋　前にハムスター飼ってたけど、いまは。

――でもやっぱ、姉御たちには爬虫類をペットするとハマると思うんスけど。どうスか？

紅　あんまり好きくない。

長嶋　全然ダメ。蛇とか巻いて入場できたらいいなとは思うけど。

白蛇とか。

紅　（笑）怪奇派になってどうするよ。

工藤めぐみ絵日記。

くどめ日和。

みなさん、寒い日が続いていますが風邪などひいてグスン、グスンしてませんか!?　そんなときは早朝から素っ裸で外に出て、気合を入れて水をかぶれば――よけいにひどくなります。

さて難しい話は置いといて、私もとうとうおばさんになりました!!　というのも妹に子供が生まれたんです。結婚を先に越されたうえ、子供まで……。内心チョッピリ焦りながらもオフを利用して会いに行きました。お母さんの横の小さなベッドで寝ている姿は本当に〃小さな命誕生〃という感じ。チョコレートの小枝より細い指。雪見大福より小さなホッペ（私、お腹すいてるのかな?）。動いてるのか不思議なぐらい。ベッドに取付けてある名札を見ると〃鬼〃。「なにコレ？　へんな名前やめなよ。後藤さんじゃあるまいし」～マジに慌てる私に「〃おに〃じゃないよー。〃かい〃って言うの。漢字に自信がないからあとで調べてから書くの」～スゴイ母親……（ちなみに〃魁〃と書きます）。

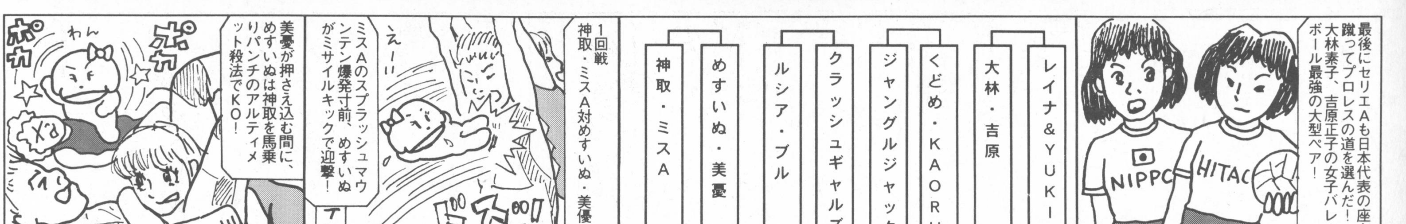
そういう私も妹に負けじと最近、ポメラニアンのお母さんになったんです。名前は〃まぁーむ〃。女の子なのに野性児で、ご飯はがっつくし、部屋で飼ってるリスのフンを見つけると嬉しそうに食べちゃうし。犬の身分を忘れて暴れまくってます。でも、しつけに厳しい私は、悪さをすると大声を出しまくり。目を見開いて恐怖のあまり固まっているまぁーむを見ると〃勝った!!〃と優越感に浸っているバカな飼い主です。でも、野性児まぁーむはやんちゃなだけでなく、たまにはいい子。予防注射はひとことも声を出さず、爪もおとなしく切らせるし。やっぱり飼い主に似るんですよね、フフフ……。

そうそう、まぁーむの得意技。それは2本足歩き。どこで覚えたのか、急に2本でトコトコ歩いたり跳ねたりしています。想像しにくい人は映画の〃キョンシー〃を思い出してもらえれば。そういえば、さっきまでチョコマカ原稿用紙に噛みついて〃遊んで遊んで〃としていたまぁーむも、いまは私の膝の上でスヤスヤお休みです。顔のまわりを撫でてあげると、どんな体勢でも催眠術にかかったように寝てしまうんです。

やんちゃなまぁーむも本当はまだまだ甘えん坊の赤ちゃん。これからも、元気に育ってね♡　寝顔をかわいいけど、女の子なのに股を広げて眠る姿がやっぱり、まぁーむだー。

Illustration●KUDOME♡

▲で、これがウワサのまぁーむだ!!　可愛いにゃあ



女子プロレス大好きアイドル・藍田真潮の

女子プロ大奥探険隊。

第3回「元女子プロ選手のお店に行く」

●4か月ぶりのごぶさたです。私、藍田真潮もこの間いろいろありました。11月27日に渋谷のオンエア・ウエストで行われたイベントも大成功。この本が出るころには高校を卒業、専門学校に進学することとなりました。もちろん、今後も仕事と両立しますし、女子プロレスもいっぱい観に行きたいと思ってます♡

さて今回は、元女子プロレスラーのお店にお邪魔することにしました。そのお店とは、昨年6月、LLPWを結婚引退した穂積詩子さんと、ダンナさまの維新力さんが開いた〝どりんくばあー 維新力の店〟です。

JR吉祥寺駅の公園出口から徒歩2分のビルの6階にあるこのお店、店内はそれほど広くないんですけど、それが逆に親しみを感じさせてくれます。店内には維新力さんのお相撲時代のまわしやプロレスのポスター、もちろん詩ちゃんのパネルも飾られていました。

料理も家庭的なものが中心。中にはスモールパッケージやファイアー豆腐、力奴(りきやっこ)など、プロレスにちなんだメニューもありました。値段もお手頃だし、やはり維新力さんや穂積の詩ちゃんと気軽にお話できるところが嬉しいんじゃないかな? レスラーもよくお客さんとして来るそうで、取材日もFMWの上田勝次選手が飲みに来ていました。LPWの選手も遊びに来るみたいですよ。

取材が終わったあと、編集長たちはそのまま飲み会を始めちゃいました。クソー、今回の取材は結局、それが目的だったのね……(怒)。

●〝どりんくばあー維新力の店〟お問い合わせ先:☎0422—45—4933(19:00~1:00・日曜定休)

◀維新力オリジナル焼酎も3千円で売ってくれる。おいおいまっしー、君は未成年だろ

◀カラオケも完備しており、詩ちゃんはデュエット担当として君の来店を待つ!!

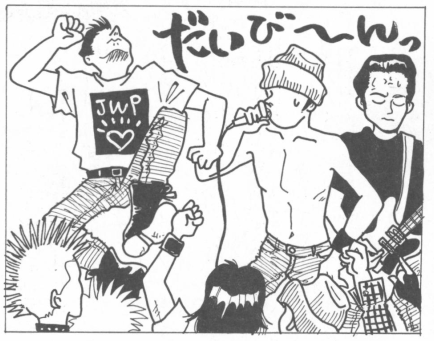
女子プロレス

ちょっとイイ話。

●街で見かけた女子プロレスに関する〝イイ感じ〟のエピソードを紹介するこのコウナア。今回は第1回ということで、ぼく編集長が出会ったちょっと小粋なお話を(どんなじゃ)。

ちょっと古い話で恐縮だが、昨年12月29日のこと。下北沢のライブハウス〝シェルター〟に出かけた。日本のラウド・ミュージックの新星・GRUBBY(グラビー)の1stCDの発売記念GIG(しかもTシャツ付き)を観るために。

当日は4バンド出演したのだが、いずれもアグレッシブな演奏でガンガン押しまくり、いよいよトリのGRUBBYの出番となった。ヘッドバンギングしてノったのだが、ふとステージの方に目を向けると、渋カジっぽい奴やパンクスに混じって、JWPのピュア・ハートTシャツを着てダイブする青年がいるではないか!! 場所が場所だけに、何かイイ感じがした1日であった。——というような、キミの女子プロレスに関するこんなイイ体験を教えてくれ~い。



キヨ・ホンダの世界

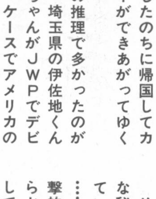
●前号からスタートしたこのコウナア、早くも読者の間からキヨ・ホンダの正体探し、もしくはチクリが寄せられてきた。

今号の〝魂ほとばしり〟にもあったように読者さまの推理で圧倒的に多かったのが、元ジャングル・ジャックの神谷美織説。92年に全女を引退し、いまは某百貨店で働いているというウワサの彼女であるが、確かに、現役末期の時代にはザ・グレート・ムタばりのペイント(緑が基調だったのが、いま考えるとプチ・グロい)を施してリングに立っていた。そして身長/体重のデータもほぼキヨ・ホンダと同じ。引退の時期と照らし合わせてみれば、全女を引退したものの、プロレスに対する夢・捨てがたく、アメリカでプロレス活動をしたのちに帰国してカタギに~というストーリーができあがってゆくわけだが……。

もうひとつ、読者さまの推理で多かったのがJWP・矢樹広弓説(笑)。埼玉県の伊佐地くんによると「あれは、矢樹ちゃんがJWPでデビュー前に、密かにテスト・ケースでアメリカのリングに上がったに違いない!! そうとでも考えないと、デビュー1年であそこまでプロレスが上達するはずがない」とゆーほとばしった推論とともに〝想像図〟と称して矢樹選手の写真にペイントを描いて送ってきた(笑)。しかしだね伊佐地くん、まず身長で10cmも違ってるんだから、これはあり得ないでしょ。でも右の想像図(ほとんど〝らくがお〟)がおかしかったので良しとする。ごめんね矢樹ちゃん。

ところで、私は最近、興味深い資料を発掘した。双葉社が92年3月に発売したムック『超プロレス』である。ダイナマイト・キッドが表紙&特集のこの本、アメリカン・プロレスに関するデータがかなり充実した、幻の雑誌であった。

そしてこの本に、キヨ・ホンダに関する重要な秘密が隠されていたのだった……。次回、衝撃的な事実が明らかに!! 刮目して待つのじゃ。



▲ムック『超プロレス』の重大な秘密が……

女子プロ・想い出のアルバム。

【文●中村絵麻】

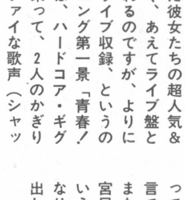
●女子プロレスの魅力といえば、日夜リングの上で繰り広げられる死闘はもちろんのこと、それを華やかに彩る衣装や歌舞音曲の類も忘れてはならない重要なポイントの一つであります。

残念なことに昨今では、試合における飛躍的な技術および質の向上につれ、芸能的側面は日増しに薄れつつありますが、その一種独特なエンタテインメント性は、昭和芸能史の一面を語るうえで欠かせない特殊なものといえましょう。

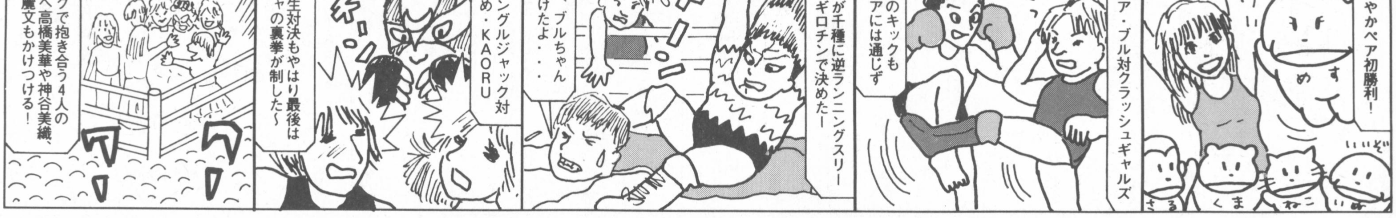
さて、この『ビューティ・ペア・ショー』はそんな女子プロレスの持つ魅力の一面を語るには最適なアルバム。77年にリリースされたこの作品は「かけめぐる青春」の大ヒットで当時、飛ぶ鳥を落とす勢いだった彼女たちの超人気&熱狂ぶりの一端を表すべく、あえてライブ盤という体裁を取ったと思われるのですが、よりによって浅草国際劇場でのライブ収録、というのがミステリアス。オープニング第一景「青春! 青春! 真っ赤な青春」では、ハードコア・ギグ顔負けの声援とコールに乗って、2人のかぎりなくダイナミックでローファイな歌声(シャッグスもびっくり!!)が聴く者の脳髄に響きます。

国家の行事を思わせる厳粛な「ジャッキーとマキの挨拶」に続いて「ビューティ・ペア・ロック・メドレー」という怒涛の14曲メドレーへと流れていくのですが、「ジェニジェニ」~「ペッパー警部」という繋ぎは、いま聴いてもかなりオルタナティヴ。第六章では「華麗! 恋の大舞踏会」と称したジャッキー侯爵とマキ姫の恋のロマンスが。ベルばらルックの2人が熱唱する「ゴッドファーザー・愛のテーマ」や「サバの女王」は、昔も今もお茶の間の多感なティーンたちの話題にマトになりうるだけの強烈なフィーリングを持っていると断言できます。

また、司会が宮尾すすむという点も、かなりいい味を出してますぞ。



▲サバービアな貴方も、ぜひこの1枚をGETしてみては!?



Video!!Video!!Video!!
女子プロレス特選ビデオ紹介

LLPW
『闘狂女伝説』『炎の謝肉祭』『女念 とどめ知らず』

●ＬＬＰＷからはドーンと３本紹介。まず①『闘狂～』は94年７月14日・東京体育館での模様を収録。②『炎の～』は11月９日後楽園ホール、③『女念～』は今年１月６日の後楽園ホールの熱闘がご家庭で楽しめるぞ。（ポニーキャニオン／①カラー120分・②③カラー各90分／①税込9800円・②③税込4980円）

ＪＷＰ
『エンジェル・ファイターズ 風と天使の街』

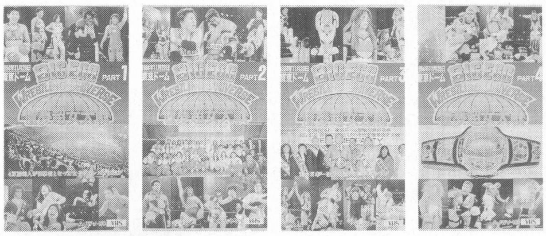
●ＪＷＰのレスラー総出演のＶシネマ。近未来の新宿で繰り広げられる果てなきバトルを描いている。ナイスミドル・篠崎社長も出演、良い味の演技をしてるのも、マニアは注目だね（笑）。（新東宝ビデオ／カラー74分／税込15450円）

FMW
『My Best Fights 工藤めぐみ』

●待望のくどめオンリービデオ。しかも本人が選ぶ、ＦＭＷでのベストバウト６戦を収録した、文字どおりのくどめのレスラーとしてのベスト作。そしてくどめがこれらのビデオを振り返るとともに自分のプロレス観を語ってくれる。（ＢＭＧビクター／カラー90分／税込5800円）

ＪＷＰ
『女子プロレスの素顔 キューティー鈴木』

●キューティー鈴木の久々のソロ・ビデオ。キューティーの秘密の私生活や練習風景などなどを一挙公開、Ｄ関西や尾崎魔弓、福岡晶などのゲスト出演も豊富な１本だ。（ＪＶＤ／カラー74分／税込9500円）



▲PART3のラストにはタツヤが（笑）

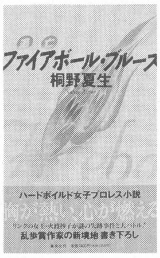
全日本女子プロレス
『憧夢超女大戦PART1～4』

●団体対抗戦の最高峰、そして女子プロレス史上最大のビッグ・イベントとなった94年11月20日の東京ドーム興行。あの10時間興行の感動が、なんと４本のビデオとなって甦る!!　もちろん全試合ノーカット。あのオール・インディア女子プロレスのエキシビジョンまで入ってるってんだからマニアックでしょ？　そのほかにもビデオ独自の企画としてドーム開催までのドキュメント（PART1）、合同記者会見（PART2）、前夜祭（PART3）、ドーム当日のドキュメント（PART4）などが収録されている。解説には週プロで活躍する菅原誠氏と斉藤文彦氏（メロコア好き）、ゲストにはヤマモ（ＪＷＰ）にみなみ鈴香、そしてロッシー小川センセーが迎えられている。特にみちのくプロレスでのロッシーの語りは要チェック♡　そしてもちろん、あのＶ★ＴＯＰ ＷＯＭＡＮを堪能しまくってちょ。（全日本プロレス興業／カラー156＋147＋168＋166分／各税込9800円・４巻セット31000円）

Books!!Books!!Books!!
よいこに捧ぐ耳よりなご本さまあれこれ

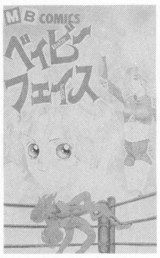
小島一志
『リアルバトロジー2 新世紀格闘技論』

●ＬＬＰＷをはじめ女子プロレス団体も格闘技路線を打ち出しはじめた今日このごろ。そこで〝格闘技〟とはいったい何であるのかをあらためて考えてみてはいかがかな？　本書はその手がかりになるはずじゃ。各派の格闘スタイルの是非と理想を提議。著者は元「月刊空手道」「月刊武道空手」編集長。（スキージャーナル／定価1500円）



桐野夏生
『ファイアボール・ブルース』

●女子プロレス版ハードボイルド小説。主人公のレスラー「火渡妙子」は身長170センチ、体重70キロ。筋肉質で男まさりの体型。低いかすれ声。レスリングは玄人受け。そして、団体のチャンピオン。そう、主人公は「神取忍」をモチーフにして描かれているのだ。気になるストーリーは見て（読んで）のお楽しみ!!（集英社／定価1400円）



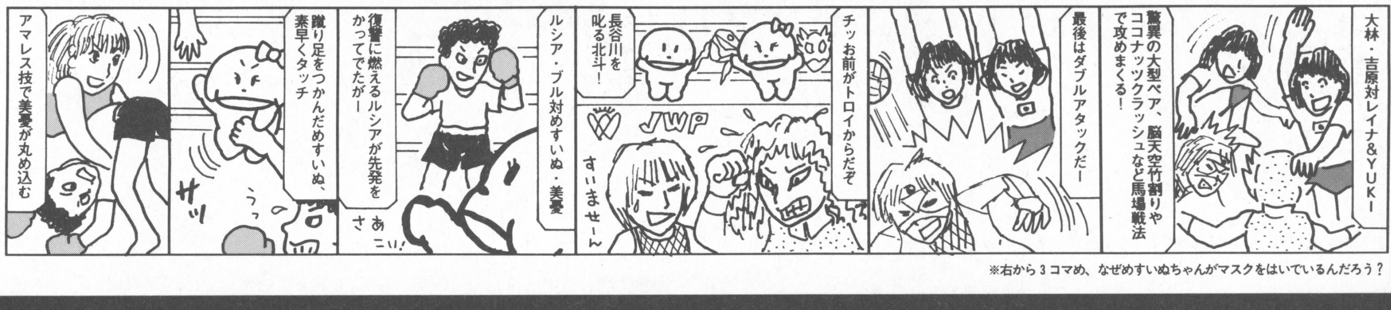
円山みやこ
『べィビーフェイス』

●本紙Vol. 2の読者ページで紹介した円山みやこ先生の女子プロレス漫画が単行本となったぞ。人気レスラーを父に持つ主人公・力葉くるりが父を亡くして10年後、ふとしたことがきっかけで女子プロレスラーを目指すという内容。ＬＬＰＷ全面協力のこの漫画、女子プロレスファン必見だ!!（実業之日本社ＭＢコミックス／定価390円）

とっておきのご本『声優グランプリvol.1』

●ハイパー・ビジュアル＆インタビュー・マガジン『女子プロレスグランプリ』が衝撃的なデビューを果して以降、プロレス・マスコミ界に多大な影響を及ぼしたことは事実。女子プロレス関連のムックは出るわ、先に出ていた専門誌にもその影響はうかがえた。例えばウチらの本を企画書として提出したり、今号においても、同じ発売日にぶつけてこようとしたり、全女のパンフにはよくパクられる（例：それゆけＡＳＡＲＩ〈笑〉）などなど。ま、女子プロレスの隆盛に協力してると思えば多少のパクリは許しましょう、ねっ田中さん♡

さて、そんな話とはまったく関係なくここに紹介するのは『声優グランプリ』なる声優アイドル雑誌。『〇〇グランプリ』なるタイトルはソニー・マガジンズの定番タイトル名なのだが、それをあえて使った主婦の友社、エラい。それだけでなく、取材対象をアイドル的だったりカッチョ良く撮るなどといった、見せる部分での本誌の方法論を堂々とパクるあたり、かなりエラい。さらに、雑誌名のロゴまでデザインをパクったものの、オリジナルである本誌に対して気を使ったのか、プチださいデザインにしたというイキな配慮と憎い心遣い、すんげーエラい。そして12月創刊・Vol. 2は５月（１日）発売という、かつてのウチらの発行月までシミュレートするとは、まさに見事としか言いようがなくてエラい。この本を〝参考に〟ウチの次号作りに役立ててみようかなあ。（オプトコミュニケーションズ発行・主婦の友社発売／定価980円）



※右から３コマめ、なぜめすいぬちゃんがマスクをはいているんだろう？

ライブ・スケジュール。March→

●団体問い合わせ:全女 03-3493-6541／JWP 03-3839-4161／LLPW 03-3945-7926／FMW 03-5496-0671／IWA JAPAN 03-3352-3366／GAEA JAPAN 03-3715-1514

☆全日本女子プロレス☆

3月15日	(水)	愛知・津島市民会館
18日	(土)	千葉・君津市民体育館
19日	(日)	東京・後楽園ホール
20日	(月)	愛知・半田市民ホール
21日	(祝)	大阪・大阪城ホール
26日	(日)	神奈川・横浜アリーナ
29日	(水)	福島・保原町体育館
30日	(木)	岩手・岩手県営体育館
31日	(金)	青森・八戸市体育館
4月1日	(土)	岩手・一関文化センター体育館
2日	(日)	東京・東京ドーム
6日	(木)	神奈川・南足柄市体育センター
8日	(土)	宮城・宮城県スポーツセンター
9日	(日)	福島・郡山セントラルホール（予定）
14日	(金)	千葉・鎌ヶ谷市民体育館
15日	(土)	埼玉・戸田市スポーツセンター
16日	(日)	東京・後楽園ホール
17日	(月)	京都・亀岡市運動公園体育館（予定）
18日	(火)	京都・福知山市三段池公園体育館
19日	(水)	島根・松江くにびきメッセ
20日	(木)	鳥取・鳥取市（予定）
21日	(金)	島根・出雲市体育館
22日	(土)	島根・益田市（予定）
23日	(日)	広島・三次（みよし）市立体育館
24日	(月)	大阪・大阪（予定）
27日	(木)	埼玉・久喜市総合体育館
28日	(金)	静岡・伊豆長岡総合体育館
29日	(祝)	群馬・富岡魚菜市場
30日	(日)	千葉・袖ヶ浦（予定）
5月2日	(火)	東京・後楽園ホール
3日	(祝)	神奈川・橋本（予定）
4日	(祝)	埼玉・川口（予定）
6日	(土)	茨城・石岡市運動公園体育館
7日	(日)	東京・後楽園ホール
12日	(金)	東京・葛飾区総合スポーツセンター
13日	(土)	静岡・浜松市体育館
15日	(月)	新潟・新潟市体育館
27日	(土)	埼玉・川越市民体育館

☆JWP☆

3月15日	(水)	広島・アステールプラザ
16日	(木)	山口・防府スポーツセンター
17日	(金)	福岡・博多スターレーン
18日	(土)	大阪・臨海スポーツセンター
21日	(祝)	東京・後楽園ホール
23日	(木)	千葉・鎌ヶ谷市民体育館
4月2日	(日)	東京・東京ドーム
14日	(金)	栃木・矢板市農業者トレーニングセンター
16日	(日)	東京・後楽園ホール
22日	(土)	岩手・一関文化センター体育館
29日	(祝)	東京・東京テレシアター
5月14日	(日)	中国・北京市
16日	(火)	中国・天津市
20日	(土)	京都・醍醐グランドーム
24日	(水)	愛知・名古屋市体育館
29日	(月)	東京・後楽園ホール
6月11日	(日)	東京・後楽園ホール
16日	(金)	東京・両国国技館
25日	(日)	秋田・秋田県産業会館

☆LLPW☆

3月17日	(金)	東京・後楽園ホール
25日	(土)	千葉・銚子市体育館
28日	(火)	岡山（WAR）
30日	(木)	名古屋（WAR）
31日	(金)	滋賀（WAR）
4月1日	(土)	岐阜・大垣（WAR）
2日	(日)	東京・東京ドーム
2日	(日)	東京・後楽園ホール（WAR）
25日	(火)	東京・後楽園ホール
28日	(金)	神奈川・川崎市体育館
5月23日	(火)	東京・後楽園ホール
6月4日	(日)	東京・後楽園ホール

☆FMW☆

3月15日	(水)	北海道・札幌中島体育センター別館
16日	(木)	北海道・室蘭市体育館
17日	(金)	青森・青森県営体育館
18日	(土)	宮城・石巻市総合体育館
19日	(日)	東京・後楽園ホール
22日	(水)	千葉・千葉公園体育館
23日	(木)	神奈川・いすゞ自動車大和工場体育館
24日	(金)	愛知・豊田市体育館
25日	(土)	愛知・春日井市総合体育館
26日	(日)	兵庫・佐用町屋外特設リング
27日	(月)	岐阜・岐阜産業会館
28日	(火)	愛知・一宮市産業体育館
29日	(水)	（3／26　佐用大会の雨天予備日）
30日	(木)	神奈川・横浜文化体育館
4月14日	(金)	群馬・館林・野鳥の森と～ぶ福寿殿駐車場特設リング
15日	(土)	東京・東京テレシアター
17日	(月)	福井・福井市体育館
18日	(火)	富山・高岡市民体育館
19日	(水)	長野・やまびこドーム
20日	(木)	新潟・新潟市体育館
21日	(金)	東京・後楽園ホール
22日	(土)	茨城・竜ヶ崎市東京ガスとなり駐車場
23日	(日)	山梨・ＪＲ甲府駅北口広場
24日	(月)	群馬・伊勢崎市民体育館
27日	(木)	埼玉・八潮市文化スポーツセンター
28日	(金)	千葉・倉形スポーツ会館
29日	(土)	埼玉・大宮スケートセンター
5月5日	(祝)	神奈川・川崎球場

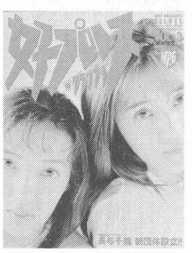
☆IWA　JAPAN☆

3月31日	(金)	新潟・新潟市民体育館
4月1日	(土)	福島・本宮町総合体育館
2日	(日)	東京・東京ドーム
3日	(月)	東京・後楽園ホール
4日	(火)	宮城・仙台市泉海洋センター
5日	(水)	福島・会津若松市鶴ヶ城体育館
6日	(木)	東京・府中競馬場前駐車場

☆GAEA　JAPAN☆

4月15日	(土)	東京・後楽園ホール
5月14日	(日)	東京・後楽園ホール

バックナンバーのお知らせ



●『女子プロGP』を買い損ねてお嘆きに貴兄にお知らせ♡　ナナナント、お近くの書店で「女子プロレスグランプリの◎号をくれ!!でも金は払う」と言えば、1～2週間であなたのお手元に届くから不思議だ。ただし創刊号は売り切れ。ほかも残部僅少なので急げ!!

まだまだ求む!!スタッフ&パシリっ娘急募!!

●てなわけで、『女子プロレスグランプリ』編集部ではまだまだ珠玉の才能を求めておるぞ。女子プロレスに対する己の魂のほとばしりを抑えられないライター・カメラマン・そして編集者は特に急募。基本的にフリーランスであれば年齢・容姿・性別は問いません。ただし、編集長のセクハラやタツヤのアメリカ&○○好き、そしてギャラの安さに耐えられることが条件(笑)。過去の仕事のサンプルを郵送or持ち込みしてくれい。さらに、前号同様ユーズ・ランナー、もしくはパシリっ娘も大募集!!　その名称がイヤなら、プロレスでいうところの新弟子、弊社で出している『GB』でいうところの〝読者スタッフ〟というとカッチョ良いかな(笑)。編集を勉強してみたい、時間的（主に昼間）に余裕のあるギャル、それが条件。経験はあるに越したことはないが、基本的には不問。ワープロなどができるとなおよろしい。そしてこちらもギャラの安さに耐えられること、ってそんなにヒドいんか(笑)。こちらは写真付き履歴書が欲しいところ。連絡先は左を見てちょ♡　次号の発売が近いので、くれぐれも急げ!!

で、投稿を待つよ

●てなわけで、これで『女子プロレスグランプリ出張所』もフィナーレ。次号は全体的にリニューアルするつもりなので、このページだけ一足先に、プチ内容を変えてみたのであった。

そしてこのページは、読者さまが作る開放区でもある。みんなでガンガン投稿してくれい!!　101ページのジェニー&エリーの猛武闘賊フィギュアみたいに、従来のコウナアにないジャンルのものを編集部に送りつけて、己の魂をほとばしらせてみるのじゃ。そのほか、読者投稿がないと成り立たない〝紅夜叉のキメるぜバカ!!〟みたいなコウナアもあるし、とにかくみんなのアイデアをこのページに注ぎ込んでほしいのじゃ!!

アンケートハガキの項目に書くだけでも良し、官製ハガキや封書で送ってくるも良し。郵便というメディアを利用して、君のソウルを送ってみるのじゃ!!　何なら電報でも良かですよ。

すべてのあて先は奥さんここ!!→〒102　東京都千代田区五番町6-2　㈱ソニー・マガジンズ『女子プロレスグランプリ』編集部・出張所係まで。なお、ペンネームもOKよん。それじゃまた次号でお会いしませう。どんもー♡

つづく

編集長の、魂のほとばしり

『僕たちは、オルタナティヴだ。』

『女子プロレスグランプリ』（以下『女子プロGP』）が創刊して5号目となる。これまではあえて、編集者の主観をハッキリと呈示することはあえてしなかったわけだが、僕が編集長となったことで今回からこういうページを用意したぞ。テーマはずばり〝『女子プロレスGP』とは何か〟だ。

僕は『女子プロレスGP』に創刊号はライターとして、以降2号目から編集に参画した。いつだかの読者ページにも書いたけど、本誌にはプロレス雑誌の経験者は皆無だった。僕も（それまでの仕事で披露した文章のスタイルから）単に〝笑える原稿が書ける人〟として起用されたにすぎなかったのだ。

だから、創刊号がどのようなコンセプト〜表紙に謳われた〝ハイパー・ビジュアル&インタビュー・マガジン〟の先にあるもの〜で立ち上がったのかを正確に記することはできない。が、3号目まで担当した初代編集長・現在バイトの祟くん（笑）に聞いた話では、取次（雑誌を配給する会社のことね）などからは女子プロレス雑誌の創刊は止めた方がいいと言われたそうだ。

確かに、プロレス専門誌を発行する出版社がかつて女子プロレス雑誌を発行していた時期はあった。そしてクラッシュギャルズ・ブームの終焉を追うように、雑誌としての使命を終えたわけだ。いわば、プロレスのプロである出版社が失敗したジャンルであるだけに、新参の出版社がそこに足を踏み入れても、成功するはずはない。そう思えるのも訳ない話ではある。

しかし、僕たち『女子プロGP』は勝利した。年4回の発行（季刊ではない〜発行ペースのムチャクチャさからもわかるでしょ〈笑〉）ではあるけれど、一応は定期刊行誌と言えなくもない。さて、なぜ僕たちプロレスの新参者が女子プロレス雑誌を続けられるのか？

僕たちはプロレス・マスコミ界で〝オルタナティヴ〟であるからだ。

オルタナティヴとは、英語で〝○○とは別の〜〟という意味合いを持つ。つまり僕たちは、旧来のプロレス専門誌とは、まるっきり異なる価値観・方法論を駆使したからこそ生き残ることを許されたのだ、と自負している。

では、異なる価値観・方法論とは何か。

それは、いまも脈々と続くプロレス・マスコミの方法論（否定はしないけど）を一切使わずに、別のものと融合させるということ。いくつかの具体例を挙げてみよう。

①ファイティング・ポーズは撮らない
②試合などのデータ的内容は掲載しない
③いわゆるプロレス畑の第一線で活躍するカメラマン／ライターなどのスタッフは使わない（初期の『女子プロGP』は除く）

——まだまだあるけど、全部は書かない。何せウチらの本を企画書として提出するプロレス雑誌の編集部があるって聞いたぞ、どことは言わないけど。でも絶対真似できないという自信はある。『声優グランプリ』でもダメだったみたいだし（笑）。

さて、話を元に戻す。確かに、専門誌の偉大なる先輩方と比べれば、僕たちは知識や経験で劣る部分は否めない。

しかし、プロレス界を支え、作り上げてゆく最も重要な人たち＝ファンとの距離感は、プロレス畑の先輩と比較しても僕たちの方が絶対に近いのだ。

そして、非プロレス・マスコミのスタッフということ。『紙プロ』の人も書いてるけれど（笑）、ミュージシャンを撮るのがメインのカメラマンや一般誌を主戦場とするライター、ファッションショーの仕事も兼ねるヘアメイク。それに編集だって、いまじゃ正社員がほとんどノータッチなのだぞ。つまり、さまざまな戦場を渡り歩いてきた傭兵たちによる外人部隊。それが、いまの『女子プロGP』なのだ。ちなみに僕も、5号目が終わったらただちに別の版元から出す単行本の執筆（テーマは現在のハードコア化したアイドル・ファンのドキュメント・ルポ）に取りかかる、ってさりげなく宣伝しちゃったーい（笑）。

閑話休題。そんないろいろな戦場を知っているからこそ、僕たちは僕たちなりの価値観には絶大なる自信がある。その自負をもって女子プロレスと接したい。そして、女子プロレスの新たなる観方・感じ方を呈示することができれば幸いである。

オルタナティヴであり続けること。それが、僕たちに課せられたテーマである。そして『女子プロGP』は、プロレス・メディアの別なるカタチへの、実験の場でもあるのだ。

（金井　覚）

▲初公開!!　これが編集長さまだ。しかし、こんだけエラソーなこと言っても、こんなヤツじゃ説得力ないね（笑）

※この写真まんがはフィクションです。ホントはちゃんと仕事してるんだから（千葉氏も含む）、誤解しちゃイヤイヤ♡

Kaoru

●4月15日、後楽園ホールでその全貌を見せる
GAEA JAPAN。そのNo.2的存在であるKAORUは、
この新団体でどんな野望を果たそうとしているのか。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●TAKAHIKO MITAKE
Hair&Make-up●TAKASHI KAMIYA

とにかくいまは4月15日の旗揚げ戦で頭がいっぱいなんです。

95年4月15日女子プロとしては5つめの団体が旗揚げする。長与千種率いるガイアジャパンである。プロレス経験者は長与を含めて3選手。ほとんどが新人の団体である。この未知なる団体のナンバー2的存在であるKAORUに旗揚げに向けての現在の心境と意気込みを聞いてみる。

——今回の旗揚げ戦は全女でのデビュー戦のときと心情的に違いますか?

KAORU　まず自分たちの団体というのが一番にあるので全然違いますね。私、旗揚げというのは初めてなんですけど、正直言ってまだ実感が沸かないんです。ただ新人も育ってきているし、ほかにない団体にしようと思って一生懸命です。

——しかし自分たちの団体という点でいろいろプレッシャーが大きいのでは?

KAORU　それなりに大きいですね。その代わり、遠慮しないで伸び伸びできるというのもありますよ。私ユニバーサルのときとかフリーでリングに上がってたとき、イマイチ中に入っていけない感じがあった、お客さんみたいな感じで、遠慮がすごくあったんです。

——現在、長与選手と一緒に新人を教えてるわけですが、自分の立場的責任を感じたりしますか?

KAORU　そうですね。でも長与選手に頼ってる部分がだいぶありますから。とにかくいまは4月15日の旗揚げ戦のことで頭がいっぱいなんです。この旗揚げ戦に新人をリングに乗せてあげることで。

——いま新人は何人いるんですか?

KAORU　12人です。

——その全員をデビューさせようと思ってるんですか?

KAORU　はい、心の中ではそう思ってるんですけど、難しいと思います。

——新人を教えるのはどうですか?

KAORU　難しいです。遠慮しないで伸び伸びやることを頭においてやってます。教えることは初めてですが、やっていてやりがいがありますよ。すごい大変なんですけど、育ってくれると一緒に嬉しいんですよ。この間もプロテストに合格した子が4人いるんです。涙流して喜んで。自分も育ってくれたってことに対してすごく嬉しかった。人を育てるということは凄い責任感がいることだけど、この嬉しさはそんなプレッシャーを跳ね返すぐらいの喜びですよ。

——現在ガイアで不便に感じることはありませんか?

KAORU　いまボンバー光が怪我をしてるんで、スパーリング相手がいないのが不便ですね。

——そうすると不安じゃありませんか、スパーリングができないと実践的な勘が鈍るでしょ。

KAORU　ええ、でもそのぶん月に1、2回JWPさんに出稽古させていただいているんです。

——話は少し古くなりますが、去年の8月24日の日本武道館での工藤めぐみ選手との試合で、リング上でマスクを取りましたよね。前からマスクを取りたいと言ってましたが、あのときの心境というのは?

KAORU　あの試合は自分ではインフェルナルKAORUとしての引退試合だったんです。ガイアではマスクを取ってやるということを決めてましたから。ただ、あの試合はマスクでやりたかった。翌日がガイアの（設立）記者会見だったんです。そこでマスクを取ることを発表するはずだった。

——ということはあの日はリング上でマスクを取る予定じゃなかった?

KAORU　そうです。あの試合が納得のいくものだったらマスクは取らなかったでしょう。ところがぜんぜん納得いくものじゃなかった。それでマスクを取って誰にも遠慮しないでやってやろうと。

——マスクのキャラクターに合わせて無理してファイトしてた部分があるんですか?

KAORU　気がつかないところであったかもしれない。それに全女のマットだったんで遠慮というのがあったと思います。

——あのときリング上で工藤選手に「もっと上がってこい!」って叫ばれましたよね、どんな気持ちでした?

KAORU　悔しかったです。でもそれは現実に自分も感じてたことなんで、同期はみんな自分より上に行っちゃってると思ってたんで、悔しかったけど本当のことだった。そのとき、それだったらいまに見てろって！　あのときはガイアに参加することは決めてましたから、意識表明した試合でもあったんです。自分の中でターニングポイント的な試合でしたね。

——マスクを付けてるときと、取ったときでは何が違いますか?

KAORU　まず視界が違いますね。あと表情です。いままでマスクのときは身体で表現しようと一生懸命だったんです。いまは身体で表現するのはもちろんですけど、顔の表情を大切にもっともっと出していこうと思ってます。

——マスクを付けてたときはルチャにこだわってきたわけですが、今後もルチャにこだわるわけですか?

KAORU　いえ、ルチャにはこだわりません。ただ、好きということで技を多用してる部分はあるんですけど、ルチャにこだわるのは辞めようと思ってます。

——KAORU選手が目指すガイアという団体は?

KAORU　自由に戦うことができる団体です。

——対抗戦とかも向こうがOKならば問題がないと。

KAORU　そうです。

——では闘いたい相手は?

KAORU　やっぱり全女時代の同期と闘いたいですね。

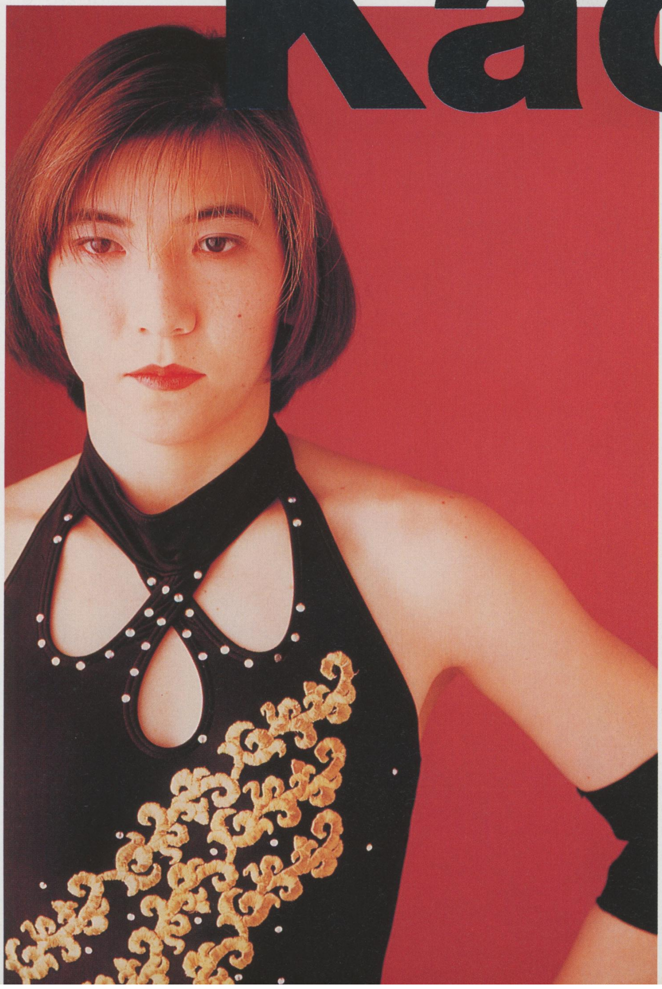
——長与選手はどうなんです?

KAORU　周りからよく言われるんですけど、いまは長与選手にたどり着く前にまだいっぱいやらなければいけないことがあるので、特に倒したいというのは心の中にはないです。でも将来的には倒さなきゃいけない相手だと思ってますけど。

——KAORU選手は全女〜ユニバーサル〜フリーと来たわけですけど、この経験が

No.2、ガイア旗揚げを語る。

Kaoru



プロレスが、いつの間にかお金儲けの手段になっていた……。

Kaoru

プラスになった点というのは？　まず全女。

KAORU　下の子に対する態度ですかね。人にしてはいけないことを学びましたね。

——ではユニバーサルを辞めた理由は単純にお金のことですか？

KAORU　そうです。もし会社がちゃんとやっていれば、あのままユニバーサルにいたかもしれません。お金がなければそれなりの態度を示していいと思うんですけど、上の方にはそれがなかった。

——ユニバーサルで学んだことって何ですかね。金の切れ目が縁の切れ目ですかね。

KAORU　でもそれは絶対にありますよ。それとユニバーサル時代はバイトをしてたんでお金の有り難みって言うのが本当にわかりましたね。

——また逆に中途半端なファイトをして、お客さんからお金を貰えないなと強く思ったりしたわけですか？

KAORU　そうですね。でもフリーになってお金のためにプロレスやってる感覚になっちゃったんですよ。この一試合に出ればお金が貰えるって感じで。好きで始めたプロレスなのに、いつの間にかお金儲けの手段になっていた。それで、ちょっとおかしいなってずっと思ってた。

——けっこうジレンマがありました？

KAORU　はい。

——それは自分のやりたいプロレスができないとか、それともコンディションが悪いのにフリーだからお金のために出なくてはいけないとか。

KAORU　両方ともありました。自分のやりたいプロレスじゃないのに、いまやってることに対してのやるせなさ、でもやらなければお金は入ってこないから。ただ会社とかも何も言わないし、これでいいんだろうなあって、投げやりにやってましたね。

——そういう気持ちはフリーになってからすぐですか？

KAORU　そうです。

——では、いまガイアにいることでその辺の問題点はクリアーになりました？

KAORU　気持ち的には解決しました。

——例えば試合で自分は納得いくファイトをしたが、お客さんは満足しなかった。また自分は納得いかないファイトだったがお客さんは満足していた。こういうギャップってありますよね。この場合どっちを取ります？

KAORU　難しいですね。とりあえずお客さんが喜んでくれる方を取ります。やっぱりお客さんあってのものだと思うんです。もっと自分に自身が持てるようになったらお客さんの気持ちを変えてあげることもできると思うんです。いまはまだ自信がないんでこれからですね。

——では試合が良かったか悪かったかを何で判断しますか？

KAORU　とりあえず、いまは自分で納得できたかどうかですね。やってる最中に楽しかったら、終わったあとも良かったと思う。また対戦相手も同じだと思うし、お客さんもそうだと思う。

——ひとまずいまの目標は4月15日の旗揚げで何人新人をデビューさせるかですか？

KAORU　そうですね。いま、そのことで頭がいっぱいです。

KAORU Profile

KAORU【ガイア　ジャパン】本名：前田薫。S44年2月9日生まれ。長崎県佐世保市出身。S61年8月にデビュー、165センチ、60キロ。

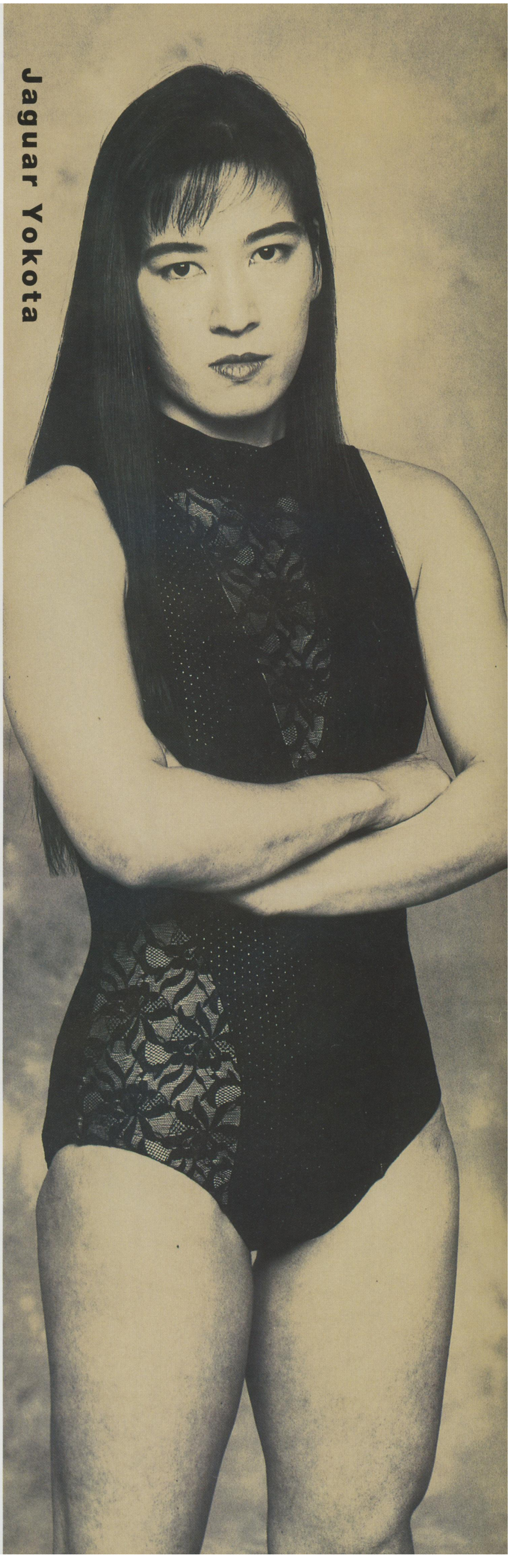
雷神隊。

ライディーン　アレイ

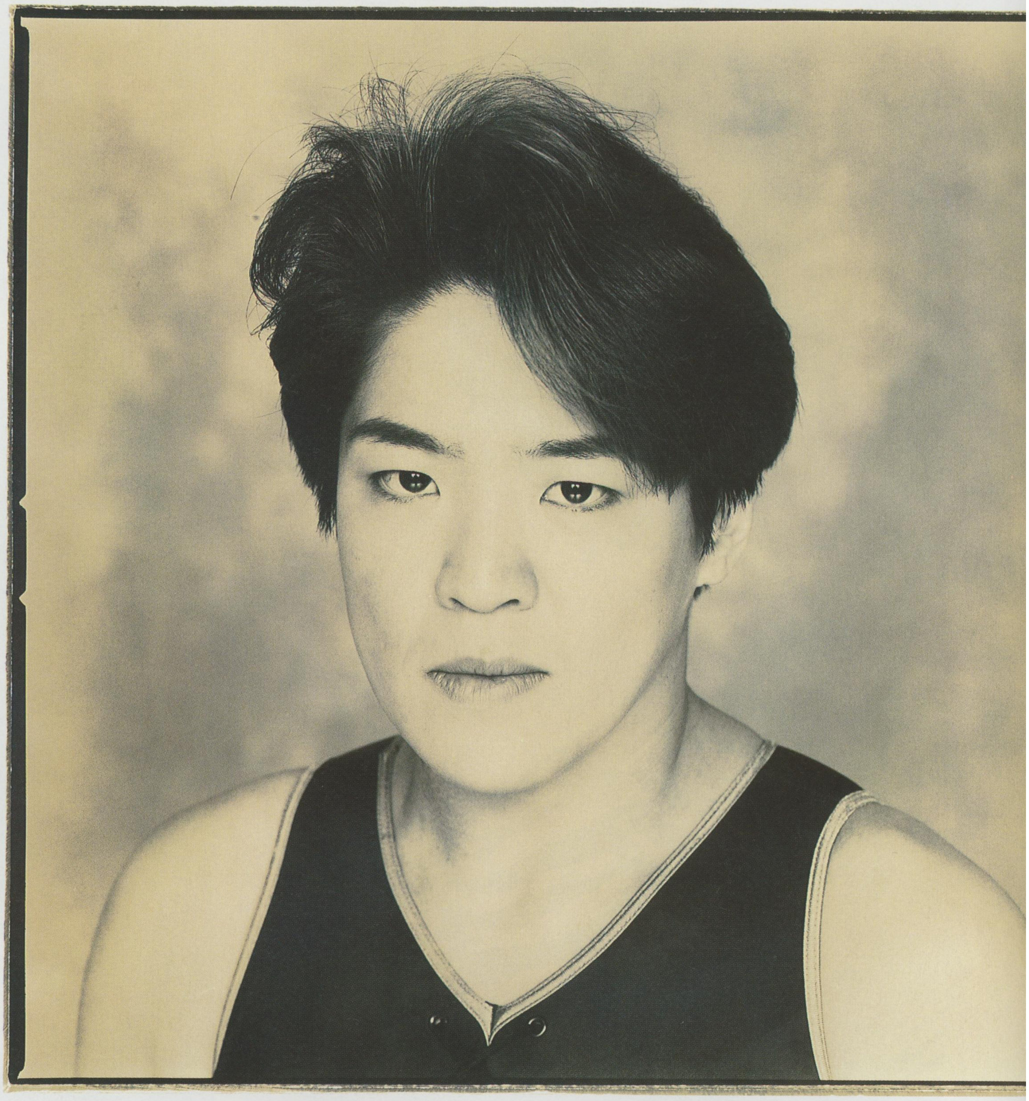
●偉大なるプロレスラー、ジャガー横田、ライオネス飛鳥、バイソン木村の3人が新チーム「雷神隊（ライディーン　アレイ）」を結成し、リングに帰ってきた。かつて女子プロレスの輝かしい一時代を築きあげた強者たちが、栄光や名声のしがらみのすべてを脱ぎ捨て、新たな挑戦に挑む——。95年、春。新しい風が吹く。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA　Text●SHINO HOJOH　Hair&Make-up●TAKASHI KAMIYA

Bison Kimura



Jaguar Yokota



ライオネス飛鳥

プロレス界が私を最も評価してくれる場所。誇りをもってまたこの道を選んだ。

復帰を決意する決め手になったのは、実はテレビの『ラスタとんねるず』なんだ。豊田真奈美と相撲対決したんだけど、私は初め、担当の人から〝ジャイアントスイングでも出してください〟って言われたし、〝まあそれなりにやるものだろう〟って思ってた。でも、豊田と手を合わせた途端、彼女がけっこう本気だっていうのがわかって、あとはもう必死だった。そのとき、自分の闘争本能が目覚めたんだと思う。私にしてみればブランクはあっても先輩だし勝ったことが当たり前かなって思ったんだど、豊田は悔し泣きしてた。それを見たとき、豊田ってハンパじゃないと思った。プロレスではなかったけど、引退して以来、初めて格闘技に近いことやって、すごく気持ちが熱くなったし楽しかった。ああいう遊びの試合でも全力投球する豊田が相手だったから、そういう気持ちになれたんだと思う。

一度、辞めた人間が戻ってくることに対してはやっぱり賛否両論があると思う。その間、いまの選手たちが頑張って女子プロレスを盛り上げてきたんだからね。ただ、一つだけ言わせてもらうなら、私も生きていかなきゃならないってことだよね。これにはいろんな意味があるんだけど……。前にやってた10年は憧れの延長で、仕事っていう意識はなかった。でもいまは〝女・32歳の北村智子〟が最も自分を輝かせてくれる仕事として、誇りを持ってプロレスを選んだっていうこと。批判もあるだろうけど、跳ね返していくしかない。

とりあえず、今後の活動は新団体というよりも、チームという形になると思う。団体発足の夢は捨てたわけじゃないけど、まずは自分たちが試合の数をこなして、プロレスラーとしての勘を取り戻し、認知されることが大事だという結論になった。幸い、古巣の全日本女子プロレスが協力してくれているし、道場も全女の選手と重ならない時間を貸してくれてる。いまはその好意に甘えながら、少しずつ手作りで新団体を目指していきたい。

（長与）千種とは連絡を取ることもない。彼女とは正反対の復帰の仕方だけど、千種も大変だったんだろうなって思う。いつかクラッシュ復活とか対決とかできるチャンスが自然に来れば自分としてはやってみたいけど、千種の方は昔を切り捨てたところからGAEA JAPANを始めたっていうこだわりがあるだろうし、難かしいかもしれない。いまはずいぶん離れちゃったけど、言葉を交わさなくてもやっぱり心のどこかで思い合える人だと思ってる。

何を見せていくのか、何を目指していくのかっていうのは本当に難しい。いまの選手たちの素晴らしさは当たったり、組んだりしてみて改めてわかったし。正式復帰の試合で井上京子と組んだんだけど、とてもやりやすかった。しみじみ京子って凄い選手だなと思った。みんなも全く遠慮なしでぶつかってくるから、油断してたら叩き潰される。甘くないよね。ただ、大技の連発は気になるかな。もっと、じっくり詰めていくようなプロレスもあった方がいいと思う。いずれにしても、私はかつて私のイメージだった〝強さ〟をいまのリングで見せていかなくちゃいけないと思ってる。

やっぱり復帰したからには赤いベルトを狙いたい気持ちもある。もちろん、過去に巻いたベルトだけど、〝いま〟の赤いベルトをこうしてリングに戻ってきた私が巻く、というのはまた違った意味があると思う。

団体が増えてそれぞれの団体で選手が育って、そして全女のフロントの考えも昔とはだいぶ変わって、団体対抗戦というものができるようになった。そういう時代になったからこそ、プロレス界全体の土壌が広がって、私たちの復帰も可能になったんだと思う。時代の巡り合わせに感謝している。

ジャガーさんは、私という可愛い後輩（笑）のために協力してくれてる。ブランクが2年しかない若い……あっ若くもないか（笑）パイソンも仲間になってくれた。これから、試合数を徐々に増やしていくつもり。やっぱり、プロレス界が最も私を評価してくれる場所。私なりにプロとして完成された試合を目指したい。そして、私の〝生きざま〟みたいなものを出していきたい。それが、もう一度引退したのちの自分の人生の糧（かて）になっていくと思う。

自分が最も自分らしく生きるためにライオネス飛鳥はリングに戻ってきた。新しい風になって。31歳。大人の女の勇気ある決断である。そう、長与千種が復帰しても、ライオネス飛鳥が復帰しても、クラッシュギャルズはもういない——。

いま、懐かしさへの過酷な挑戦が始まる。

LIONESS ASUKA Profile

ライオネス飛鳥【雷神隊】本名：北村智子。S38年7月28日生まれ。埼玉県蓮田市出身。S55年5月にデビュー。170センチ、76キロ。

ライディーン アレイ

バイソン木村

もう一度、アジャ・コングを振り向かせたい。もう一度、戦いたい。もう一度……。

東京ドームのあと、すごく悩んだ。決心がついたのは今年になってから。でも、いましかプロレスはできないなって思ったし、やらないで後悔するよりはやって後悔した方がいいなと思って。たまたまチャンスに恵まれたし、ジャガーさんも、飛鳥さんも尊敬する先輩。ちょうどジャガーさんが引退したとき入門したから、私はジャガーさんのコーチ一期生。今回、一緒に活動できることになって本当に光栄だと思う。

引退したときは、ケガももちろんあったけど、それよりも気持ちが……なんていうかもうプロレスで何をしたらいいかわからなくなって、〝悔しい〟っていう気持ちより〝どうしよう〟っていう気持ちの方が強くなっていた。下からの追い上げも怖かったし、ずっと一緒にやってきたアジャと闘って、実力差を感じたし。もちろん、今回アジャとはいろいろ話をした。やっぱりアジャのことは一番引っ掛かってたから。勝手に辞めて、勝手に戻ってきて、ほんとうに申しわけないと思う。アジャは〝手を貸すことはできないけど、待ってることはできるから〟って言ってくれた。それで私が〝ごめんね〟とか〝ありがとう〟とか言ってたら、〝もうそんなことは言わなくていい〟って。アジャも複雑な気持ちだと思う。でもアジャっていうはっきりした目標があるのは恵まれてる。2年間、休んじゃったから、差がすごく開いちゃったけど、アジャに振り向いてもらえるように頑張りたい。そして、一回でもいいから、組んだり闘ったりしたい。それが私の当面の目標。

引退してから東京ドームに上がるまでの間はほとんどプロレスを見なかった。見たいんだけど、見られなかった。辞めといて勝手なんだけど、みんながプロレスやってるのが羨ましかった。……ジェラシーかな。

東京ドーム以降、また女子プロレスを見るようになって、みんな技術が上がってきてるし、内容の濃い試合をやってるって思ったけど、あえて生意気を言わせてもらえば、なんか気持ちがあんまり伝わらないなって思った。〝本当にこの人は勝ちたいの？〟って思うこともあったし。私は不器用なんで気持ちを出していくしかない。だからよけいにそう感じたのかも。でも、みんな本当に技は奇麗。そういう選手たちとガンガン当たることで、私も現役のころに近づいていけると思う。

それと、私が辞めてすぐに団体対抗戦が始まったから、自分としては他団体の選手とも対戦したい。同期もFMWの工藤（めぐみ）、コンバット（豊田）、それにガイアにはKAORUもいるし、お互い昔とは違う立場になった今、闘ってみたい。

私の場合、幸か不幸か、ほとんど体型が変わってない。（笑）水着もメイクも、とりあえず昔のイメージで、私自身がまず〝バイソン木村〟を思い出したい。いまは不安もあるけど、もう一度プロレスができる喜びの方が大きい。辛いのははじめから当たり前だし、その辛さを頭じゃなく、身体で感じていくんだろうけど、とにかく戻って来られたんだから。

レスラーとしては致命的なケガを負って引退していった人もいる。好きでも、やりたくても、戻って来れない人もいる。プロレスのことで悩んだりできる自分は幸せなんだと思えば、これからは苦しいことがあっても耐えていけると思う。まだ胸の中には、いろいろ迷いがあるけど、試合になったらそういう気持ちは切り捨てていかないと。〝悪いな〟なんて思いながらやってたら、いまの選手たちにも辞めざるを得なかった人たちにもかえって失礼だから。

昔は、けっこうプレッシャーに弱かったけど、いまは復帰することに対してみんなが注目してくれるならやるしかないなって思う。あまり自分を追い込まないようにしたい。飾らずにありのままの自分を出していくしかない。ファンの応援や希望は前向きに受け止めたい。

ほかのことができなくて戻ってきたとは思われたくない。プロレスやりたくて戻ってきたんだから。蹴られたり、殴られたりのこんな恐ろしいところに（笑）わざわざ戻ってくるなんて本当に好きなんだってしみじみ思う。それと、結婚しなくて良かったなって思ってる。（笑）

バイソン木村にはえも言われぬ初々しさがある。プロレスに対するピュアな愛情。ジャガー、飛鳥という大先輩に対する感謝。アジャをはじめ現役選手たちへの感謝。

しかし、ひとたびリングに立てば、彼女は〝魔性の美獣・バイソン木村〟になる。

いま、終わったはずの夢の続きが始まる。

BISON KIMURA Profile

バイソン木村【雷神隊】本名：木村伸子。S42年3月9日生まれ。東京都目黒区出身。S61年9月にデビュー。170センチ、70キロ。

ジャガー横田

復帰を決めるまでに9年かかった。今の私にはリングで髪をかきあげる時間さえもったいない。

まだ一戦ごとに、自分の気持ちが変わってる状態。日々、これから自分がどういう役目を担えばいいのか考えてる。難しい。見ている人に聞きたいぐらい。とにかく、〝いま〟のレスリングを必死に探ってる。

カムバックは考えたことがなかった。あの時代は、ジャガー横田は絶対に負けちゃいけなかったし、私は強いまま引退するしかなかった。そのあとも自分の名前をずっと大切にしすぎたから、こうして復帰を決めるまでに9年もかかった。遅すぎたかもしれないけど、タイミング的なことを含めて、ジャガー横田が復帰するチャンスが巡ってくるまでに9年という月日が必要だったんだと思う。

復帰することは、もしかしたらジャガー横田の名前を汚すことかもしれない。でも、生きているうちにもう一度プロレスをやるチャンスが来たんだから、何か新しい物を自分自身で感じ取れればいい。

水着は昔のイメージから、黒、ピンク、白を用意したけど、基本的にはすっきり一色にしたい。みんなみたいにいろいろ付けてるのは私には似合わないし無理(笑)。それに〝動きやすく〟を大前提に考えていきたいし。髪もいま長くしてるけど、やっぱり邪魔で、まとめたりして試合に出てる。いまの選手って髪をかきあげるのがうまいけど、私には髪をかきあげる時間がもったいない。サポーターをしないのも、途中で下がってきたら、それを上げる時間がもったいないと思ったから。けっこうそういうところにこだわりはある。でも、それは人それぞれ。できてる人はそれでいいと思うし、もちろん人に押しつける気はない。

決してコーチとしてでなく、一レスラーとして、後輩レスラーたちがどんなレスリングを身につけたのか感じとりたい。どんなプロレスを見せていきたいかって言うと、とりあえず技をもっと大事にしてほしいかな。細かい技が忘れられがちだから。高度な技を高度に見せるには、小さな技が必要だしね。頭から落とす技なら誰でも驚くけど、もっと地味な部分でも見せていかないと行き詰まっちゃうんじゃないかな。プロレスは大技そのものより、その繋ぎが大事だと思う。単発に技だけ出すなら、素人でもできる。でもプロレスは機械相手に試合をしてるわけじゃないし、自分はこうしたいって思ってもそうなるわけじゃない。あと、自分の体の大きさに合っている技かどうか目で見たときの効果も考えないと。うん。そのあたりを自分が少しでも表現できればと思う。コーチの立場ではなかなか遠慮して言えなかった部分もあるし。

それと昔とは女子プロレスに対するマスコミの扱いがずいぶん違ってきた。街頭インタビューで〝プロレスラーと言えば?〟という質問に女子の名前が上がるようになればいいってずっと思ってたけど、いまはそれも有り得るし。世間に認められてイメージが上がってきてる。この世界に入って18年…。ずっと携わってきて良かったと思う。例えば私の試合でも一戦ごとに注目されるからいろいろと書かれる。辛いこと書かれてるけど、それでいいと思う。

復帰を決めてから、他人(ひと)はどう思うのかっていうのが凄く気になる。プロレスは自信を持ってやってきたことだからなおさらね。だいぶ鼻をへし折られて、もう飛鳥と同じくらい低くなってるけど(笑)。

ファンも男の人が増えて、本当にプロレスが好きで観に来る人が多い。観る目が厳しいから、やる方も大変だけど、いいことだと思う。そういうファンを納得させなきゃいけないんだから、小手先のごまかしは効かない。レスリングは頭を使わないとね。

私は負けることに慣れてない。初めにWWWAチャンピオンになってから、辞めるまでの5年間、毎日のように試合をしていて自分がフォールを取られたのは4回だと思う。だから〝負ける〟っていうことの衝撃は忘れてる。これからは負けるだろうけど、それを怖がってたら復帰はできない。ただ、意義ある勝ち方、意義ある負け方ができなければプロじゃない。負けたくないし、勝ちを譲るつもりもないけど、内容を重視した意義ある試合を心掛けたい。

赤いベルトはともかく、体重別を導入してもらうと有利かな(笑)。それでジュニアのベルトを狙うっていうのはどうかな。

女子プロレス史上、最も〝負け〟の似合わなかったレスラー、ジャガー横田。復帰まで9年という年月が物語る名前の重さ。彼女の視線の鋭さ、一挙手一投足にプロレスがある。それをどこまで感じとれるかプロレス者たちよ、心して観戦せよ! いま、プライドとの熾烈な闘いが始まる。

JAGUAR YOKOTA Profile
ジャガー横田(雷神隊)本名:横田利美。S36年7月25日生まれ。東京都荒川区出身。S52年5月にデビュー。159センチ、52キロ。

雷神隊。
ライディーン
アレイ
BISON

プロレスリング・グッズの店

“バディスラム”

・BODY・ ・SLAM・

新品ビデオ	T・シャツ	パンフレット
中古ビデオ	トレーナー	タ オ ル

など 他 いろいろ・こまごまあります

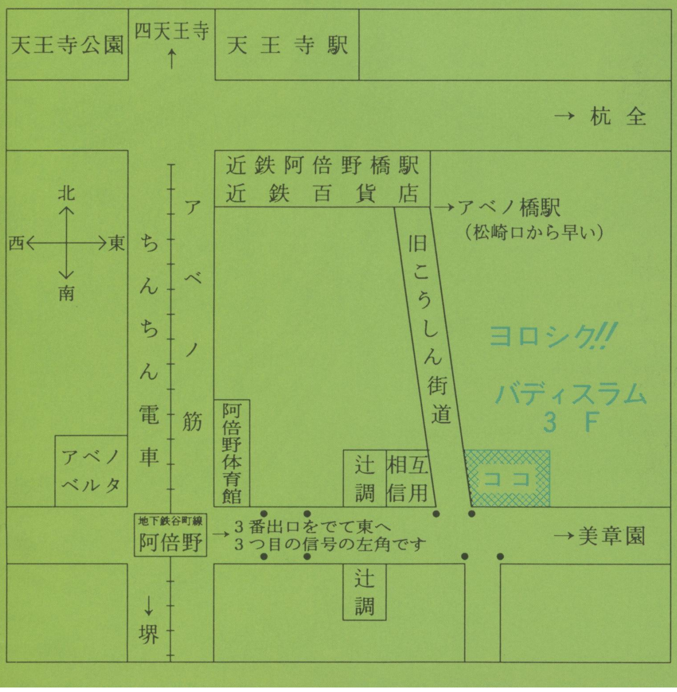
ぜひ 御来店下さい 待ってます

平成７年２月17日で、ちょうど１周年をむかえ、
２年目のバディスラムをやっております。
３月17日（金）～３月23日（木）の１週間、記念として
「なんかやらんとあかんなぁ～」という厳しい、いや、やさしいお客様の声に負け、
いや、はげまされて“抽選会”ちゅうのをやります。
お買い上げのお客様はその場で抽選やってもらいます。
尚、くじには「スカ」もありますが、１回の抽選で
３回連続「スカ」をひいた貴重なお客様にも粗品を用意しております。
えっ！「スカの粗品、なんやてか？」“なぁ～いしょ”
くやしかったら、スカひいて…。
尚、４月からは「知る人ぞ知る」バディスラムクイズも復活します。
ぜひこの機会にまだいっぺんもスラムに来たことのないお客様、
いっぺんいったけど「しゃあないなぁ～もういっぺんいったろ」というお客様、
そして数少ない「全国30人のスラムファンのお客様」もどうぞどうぞ!!
えっ！「通販のぼくはどうなんの？」 私がひきましょう!!
楽しみやなぁ～これが……。

～チケット情報～

３月18日（土）ＪＷＰ 大阪高石臨海スポーツセンター大会
３月21日（火）全日本女子プロレス 大阪城ホール大会
チケット発売中!!

（尚、バディスラム ３月28日（火）はお休みです）



開始時間

平日 AM11：00～PM8：00
日・祝日 AM10：00～PM7：00

バディスラム

TEL/FAX 06-622-3068

〒545 大阪市阿倍野区松崎町３-15-14
ジョイテル阿倍野302号

ＪＲ・地下鉄 天王寺駅・近鉄 アベノ橋駅 より10分
ＪＲ 美章園駅 西へ10分
地下鉄谷町線 阿倍野駅 ３番出口より５分

ソニー・マガジンズの本

TPD in the CASE

東京パフォーマンスドール
オフィシャル・アーティストBOOK

「ガールポップ」からTPDファンへ贈る一冊

3月22日発売

●全208ページ ●カラー120ページ ●A5判上製箱入り
定価 2.800円（税込）

TPDのぜ〜んぶが入っている
スーパーでスペシャルなBOOK

●伝説の「TPD BOX」未公開カット●米光美保、篠原涼子、市井由理ロング・インタビュー●全ディスコグラフィ徹底解説

3月8日にTPDのベスト盤「TPD COLLECTION」とリミックス盤「TPD The Remix」がリリースされたけど、これにあわせて、TPDのアーティストBOOKが、なんと「GiRL POP」から発売される。まさしく本のベスト盤＆リミックス盤。TPD歴史と現在が詰め込まれた一冊だ。ぜったいこれはゲットすべし。

篠原涼子 初めての単行本

「ピンぼけ（仮題）」

人気急上昇の涼子が自ら書いた、ファン待望の一冊。TVでは見られない素顔の涼子とプライベート写真、涼子の恋愛論、マル秘レコーディング日記、オリジナルの絵、書き下ろしの詞、涼子の部屋を紹介……。

※本の中のハガキを送ると、涼子の使ったグッズが当たるプレゼントもあるよ!!

ただいま、制作中！
ガンバレ篠原！！

4月20日発売予定
定価1.600円（税込）

ソニー・マガジンズ 〒102 東京都千代田区五番町6-2 TEL03-3234-5811

テレビでおなじみ！

プロレスグッズの王国

★年中無休★

マスク在庫豊富!!

古いマスク高価買入れします！

☆CACAO製マスク常時入荷☆

☆メキシコの帝王エル・カネック　試合用マスク¥26,000～（その他多数マスク有り）

国内外各種プロレスビデオ（新品・新古）
WWF & WCW、各レスラー特集ビデオ
メキシコ、プエルトリコ直輸入ビデオ
闘魂Vスペシャル全日女子
UWF、リングス、Uインター、藤原組、
ユニバーサル、W★ING、FMW、etc…
初代タイガーマスクあります。

メキシコ雑誌
（コロソス、ARENA、etc）

ルチャ人形（EMLL、~~AAA~~、etc）
ルチャピンバッヂ、
キーホルダー、ポスター、
Tシャツ、帽子、バッヂ、etc…

GOLD GYM、GECOK GYM
Tシャツあります。

プロレスリングウェア
（上下、各サイズ、各柄）⇩

海外グッズ常時入荷!!

☆WWF人形・WWFリング
90年、91年、92年、93年、94年版大量入荷!!

☆WCW人形
91年、92年版入荷しました。

☆WWFスタンプ（人形タイプ）
ホーガン、サベージ、ボスマン、ウォリアー

☆WCWウエストバック

☆各団体前売りチケットあります。

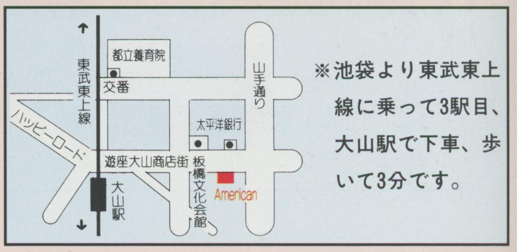
☆テレホンカード・CD、レコード

☆内外ポスター、内外プログラム、内外書籍

☆週刊誌、月刊誌、各種バックナンバー

☆絶版本（力道山時代～）多数あり!!

☆珍品・貴品、その他いろいろあります!!



☆WWF & WCW　Tシャツ & トレーナー
ホーガン、ウォーリア、サベージ、アンダーテイカー、スティング、ルガー、スタイナーズ、B・ハート、グレート・ムタ、D・B・スミス、etc…

☆WWF & WCWグッズ
ポスター、カード、マイク、ベルト、ぬいぐるみ、帽子、バンダナ、水鉄砲、各団体マガジン、etc…

マスク高価買取中!!

☆試合用マスク　¥15,000～
☆メキシコ直輸入ソンブレロ　¥12,000～
☆特製マスク　¥4,500～
☆国内国外有名レスラー・コスチューム・シューズ多数あり
（ウルティモ・ドラゴン、カネック、ソラール、ケンドー、etc…

★買い取ります★

☆買い取りをご希望される方は、売りたい物を書いて往復ハガキか封書にて、お送り下さい。
☆お探しの物がありましたら、往復ハガキに書いてお問い合わせ下さい。
☆在庫の有無を電話で先に確認して下さい。

往信ハガキ（表）：東京都板橋区大山東町24－11 アメリカン
（裏）：売りたいもの …… 探しているもの ……
返信ハガキ（表）：（貴方の住所と、お名前をご記入下さい。）
（裏）：（空白）
★往復ハガキの書き方★

プロレス・ショップ
American
OFFICIAL PRO-WRESTLING SHOP

〒173 東京都板橋区大山東町24-11
TEL&FAX 03-3962-6443
営業時間／AM11:00（チケット発売日は10:00）～PM8:00

マスク・ビデオ・テレカ・CD・etc買取ります。

※池袋より東武東上線に乗って3駅目、大山駅で下車、歩いて3分です。

ソニー・マガジンズの本

究極の「サッカー大百科」日本語版がついに出版

THE ULTIMATE ENCYCLOPEDIA OF SOCCER
サッカー大百科
［プレーヤー＆クラブ編］
［世界サッカー編］

世界各国のサッカー事情に最も精通した
スポーツライターであるラドネッジが編集。
「アルティメイト・エンサイクロペディア・オブ・サッカー」が
ハンディなA5サイズの「プレーヤー＆クラブ編」と
「世界サッカー編」の2冊で登場。

キア・ラドネッジ・著／野間けい子・訳
定価 各1800円（税込）

イラストと写真で詳解するテニス技術大全

「エンジョイ・パワーテニス」

世界無敵のアメリカン打法の第一人者・宮村宏。
この一冊で、テニスが面白くてやめられない！

●内容
PART1 テニスへの招待　PART2 テニス入門　PART3 フォアハンドグランドストローク　PART4 バックハンドグランドストローク両手打ちと片手打ち　PART5 ボレー　PART6 サーブ　PART7 スマッシュ・ロブ・アプローチショット　PART8 ゲームの戦い方　PART9 テニス基礎知識とQ&A　PART10 テニス用語

A5判／200ページ
定価2000円（税込）
好評発売中

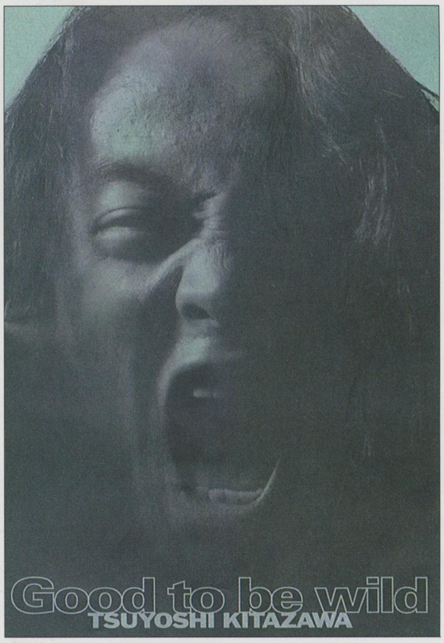
マイケル・ジョーダンが、初めて語る「成功哲学」

「挑戦せずに あきらめることはできない」
マイケル・ジョーダンのメッセージ。
I can't Accept Not Trying

マイケル・ジョーダンが、彼を成功に導いた人生の信条を自らの力強い言葉で初めて語る。
マイケル・ジョーダン：著　ラモス瑠偉：監訳
定価1000円（税込）

TSUYOSHI KITAZAWA
北澤豪 写真集
［Good to be wild］

王者・ヴェルディ川崎、日本代表の中盤のキープレイヤー北澤豪の豪華写真集。野性美溢れるエキサイティングなショットが、全ページに満載！！（未発表写真も数多く掲載）
1冊は「HYPE！TSUYOSHI KITAZAWA」
1冊は「100%WILD」の2冊セット

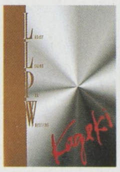


豪華ボックス入り／A4判
定価3800円（税込）
好評発売中

ソニー・マガジンズ　〒102 東京都千代田区五番町6-2　TEL03-3234-5811

Present

●トリを飾るはプレゼント・コウナア。前回は応募締切りを書かずにごめんちゃい。左のハガキでアンケートに答え、希望商品番号＋アイテム名を書いて4月30日（当日消印有効）までに送るのじゃ。待ってるわよん♡



①LLPW／パンフレット（5名様）▷華激パンフの最新版。大向美智子の水着ショットにブーするなよん。

②実業之日本社／円山みやこ『ベイビーフェイス』（5名様）▷出張所でも紹介した女子プロレスまんが。くるりちゃん可愛い。

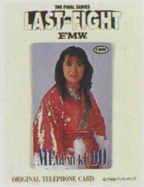
③JWP／写真集（3名様）▷試合会場でしか手に入らない1冊。流血王・千葉ちゃんの写真も載ってますぜ（笑）。

④全女／ビデオ『タッグ・リーグ・ザ・ベスト'94』（3名様）▷リーグ戦最終戦、バリ島決戦ほか収録の2本組。

⑤維新力の店／穂積詩子サイン入りコースター（2名様）▷"女子プロ大奥探険隊"取材での戦利品。お店にも行こうね♡

⑥集英社／桐野夏生『ファイアボール・ブルース』（3名様）▷乱歩賞作家が挑むハードボイルド女子プロ小説で春を待つのだ。

⑦全女／ビデオ『レッスル・マリンピアード'94 EX』（3名様）▷12月4日・横浜文化体育館大会をノーカット収録。



⑧FMW／工藤めぐみテレホンカード（3名様）▷これまた新作テレカでや～んす。あまりの美しさにアイム・カミ～ング!!

⑨FMW／工藤めぐみ＆コンバット豊田ポスター（3名様）▷2人のキャラクターが見事に対比。誰だ、美女と野獣と言うのは。

⑩キューティー鈴木／サイン入り『スーパードンキーコング』（1名様）▷レア!! C鈴木の使用済み（笑）ファミコンソフト。

⑪FMW／工藤めぐみ下敷き（3名様）▷くどめだから許されるキャラクター下敷き。最近のちびっこは下敷き使うのかなあ？

⑫掲載全選手／直筆サイン入りポラロイド写真（計88枚）▷P.98に掲載したポラも対象（流血王含む）。希望選手名を必ず明記。

⑬JWP／トレーナー（2名様）▷ピュアハート・トレーナーの黒。バックプリントには選手名が入ってるよん。

⑭豊田真奈美／直筆サイン入り試合パンフレット（5名様）▷軍団を結成してノリノリの真奈美姫からア・ナ・タに♡

⑮全女／試合ポスター（10名様）▷3月21日大阪城ホール、26日横浜アリーナ、4月16日後楽園ホールの3試合分をセットで!!

⑯LLPW／ウインドブレーカー（2名様）▷袖を通せばすっかりLLPWの関係者気分。でも不正入場はいかんのじゃー。

⑰JWP／Tシャツ（2名様）▷トレーナー同様、こちらも黒バージョン。これ着てダイブしまくってちゃぶDIE。

⑱ブリザードYUKI／Tシャツ（3名様）▷本誌登場に先がけてプレゼント。必ずグラビアやるからコレ着て待っててちょー。

プレゼント協力：全日本女子プロレス　JWPプロジェクト　LLPW　FMWクリエイティブ　集英社　実業之日本社
どりんくばあ～維新力の店　そして今回取材協力していただいたすべてのレスラーさま♡

Editor's Note

●パシーンッ!! 編集局長の加古ッス。今回初めて参加して、編集部の実態を知ってしまい、驚きを隠せない今日このごろッス。しかし、レスラーさんは本当に素晴らしいもんッスねぇ。うェッ、みぞおちに入ったッス。
Shoko Kako

●パシーンッ!! 2月で28歳になった金井ッス。今回からテーマ性がブチ強まった『女子プロGP』、次号ももっと変わり続けるので応援よろぴく♡ うェッ、どうしてアメリカに生まれなかったんスかね……。
Satoru Kanai

●去年の11月21日以降、僕はこの先なにを心の種に本誌を作っていけば良いのだろうかと悩んでいた。でも、今はもう大丈夫。その種は見つかった。思い出は心の奥にしまい込んだ。3月26日、時代も新しく変わるかもしれない。
Tatsuya Yasukawa

●パシーンッ!! 最年長のくせにバイトの祟くんッス。クビにならず第5号を作れて嬉しいッス。でも6月7日発売の次号ではいないかもしれないので、発売日を手帳に記入してほしいッス。うェッ、全財産30円ッス。
Takashi Haga

女子プロレス グランプリ
1995年（平成7年）4月20日発行
発行人／塚本忠夫
発行所／株式会社ソニー・マガジンズ
住所／〒102 東京都千代田区五番町6-2
電話／03(3234)5811〈販売〉 03(3234)5101〈広告〉
03(3234)6711〈編集〉
印刷所／凸版印刷株式会社

Ⓒ1995. Sony Magazines Inc.

定価980円（本体951円）

5
1995年(平成7年)4月20日発行第5巻第10号通巻第133号
発行所:ソニー・マガジンズ 〒102東京都千代田区五番町6の2
電話:03-3234-5811(販売)03-3234-5101(広告)03-3234-6711(編集)
印刷所:凸版印刷株式会社

私たちはファンの皆様と共に
伝統あるハワイアンジュエリーを守っています。
日本国内では唯一本格的な
ハワイアンジュエリーをお届け致しております。

ハワイアンジュエリーのお求めは
伝統・信頼・実績を誇るハワイ最大のメーカー
Classic Creations, Inc.

Hawaiian Jewelry Club Member募集中

お問い合せ・資料請求は下記まで
TEL 0473-98-2345
FAX 0473-98-2347

HAWAIIAN RINGS JAPAN CO., LTD.
TOKYO OFFICE 307, 14-1, TAKARA 1CHOME, ICHIKAWA-CITY, CHIBA 272-01, JAPAN
PHONE:0473-98-2345~46 FAX:0473-98-2347
HAWAII OFFICE 2479 AKEPA ST. PEARL CITY HAWAII 96782 PHONE:455-5386

雑誌65842-34 定価◉980円(本体951円)
T1065842340980
© 1995 Sony Magazines Inc. Printed in Japan.